樹葉針

第八號

東京商科大學一橋山岳部

美津濃の登山用品

夏山のシーズンです。キヤンピングにロツククライミングに、サンマースキーに、新しい用品總てを取揃へて御用命御待ち致して居ります。

新製のピツケル、アイゼン、登山靴、等は外國製に劣らぬ優秀さを誇るものです。

山の御用意は先づ美津濃へ

リュックサックと山靴

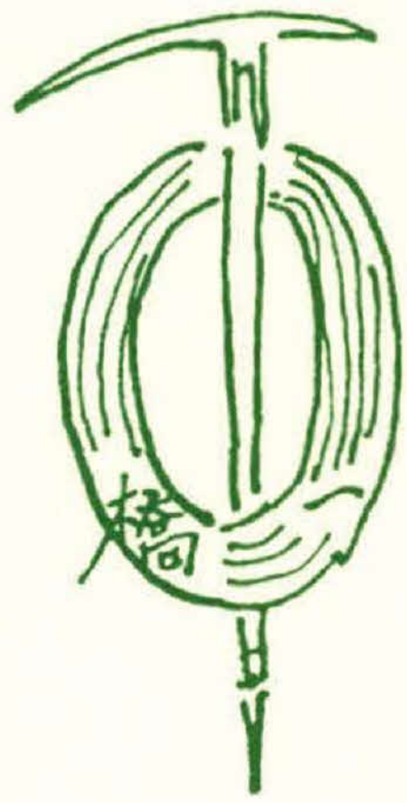
山行のプランを立てる事の大切さに比し山行の重大さは良リュックサックと良山靴を撰ぶ事です。背になじまないリュックサックと足に副はない山靴の使用は愉快な山行を完全に破壊します。愉快な山行には疲労することのない新製された美津濃リュックサックと舶來品以上の美津濃山靴を撰ぶ事が第一です。

神田區
小川町通り

美津濃

電話 神田 (25)
3570
3571
3572
3573

樹葉針



第八號

1934 —— 1935

おゝ山よ！世紀の廻はおまへの額の上をよぎりゆく。
がおまへのその足元に寄せてはかへし、かへし
ては又寄せる、はかない人間の波のうねりが、まつ
くだけはてゝしまふその時も、尚崇高く永遠の姿も
つと蹲居してゐるであらう。

シヤルル・ゴオ

針葉樹　第八號

目次

鹿島槍ケ岳東面
一、概　觀　……小谷部全一郎……八
二、東　尾　根　……鷹野雄助……一八
三、荒澤に就いて　……小谷部全助……二八
四、天狗尾根　……森脇芳之……三一
五、カクネ里　……小谷部全助……二九
檜山澤入り四月の飯豊山　……齋藤正治……四五
「マッターホルン災禍」後世の批判　……林俊介……四五
マッターホルン關係主要年表　……吉澤一郎……對九八

雜記

唐松小舍……堀岡清…一〇〇
北岳バットレス行……鷹野雄一…一〇三
園衞谷……望月達夫…一〇八
錫杖岳……小谷部全助…一一一
隨想……村尾金二…一一六
山に住む人々……小林重吉…一二三
秩父三題　一、峠……岩崎利一…一二八
二、澤……森川眞三郎…一三三
三、原生林……柿原謙一…一三七
あの頃、あの山、あの人達……磯野計藏…一四一
N君の遭難に關係して……小谷部全助…一四五

追悼

故宮川雄二郎君登山經歷……一五二

失はれし友……堀岡清……一四
記錄
樺太・北海道……一五八
東北地方……一五九
上越國境方面……一六〇
日光方面……一六五
上信國境方面……一六六
東京附近及富士山方面……一七一
秩父方面……一七九
八ケ岳・美ケ原方面……一八〇
北アルプス……二二六
南アルプス……二三二
中央アルプス……二三三
近畿方面……二三三
中國及四國方面……二三三
スキー練習……二三三
山小舎……二三一

寫眞部

寫眞說明報……二五一

朝映の雪穂……小谷部全助……口繪對頁一四

鹿島槍東北面……鷹野雄……三

鹿島槍東尾根……小谷部全助……三

荒澤奥壁……小谷部全助……八

天狗尾根よりのカクネ里・八峰キレツト……小谷部全助……一三

六月のカクネ里……小谷部全助……三〇

四月の飯豊連峰……林俊介……四二

唐松小舍よりの劍岳……堀岡清……一〇三

大樺小舍よりの北ひ……一〇六

錫杖岳前衛ピーク及び東南面……鷹野雄……一一五

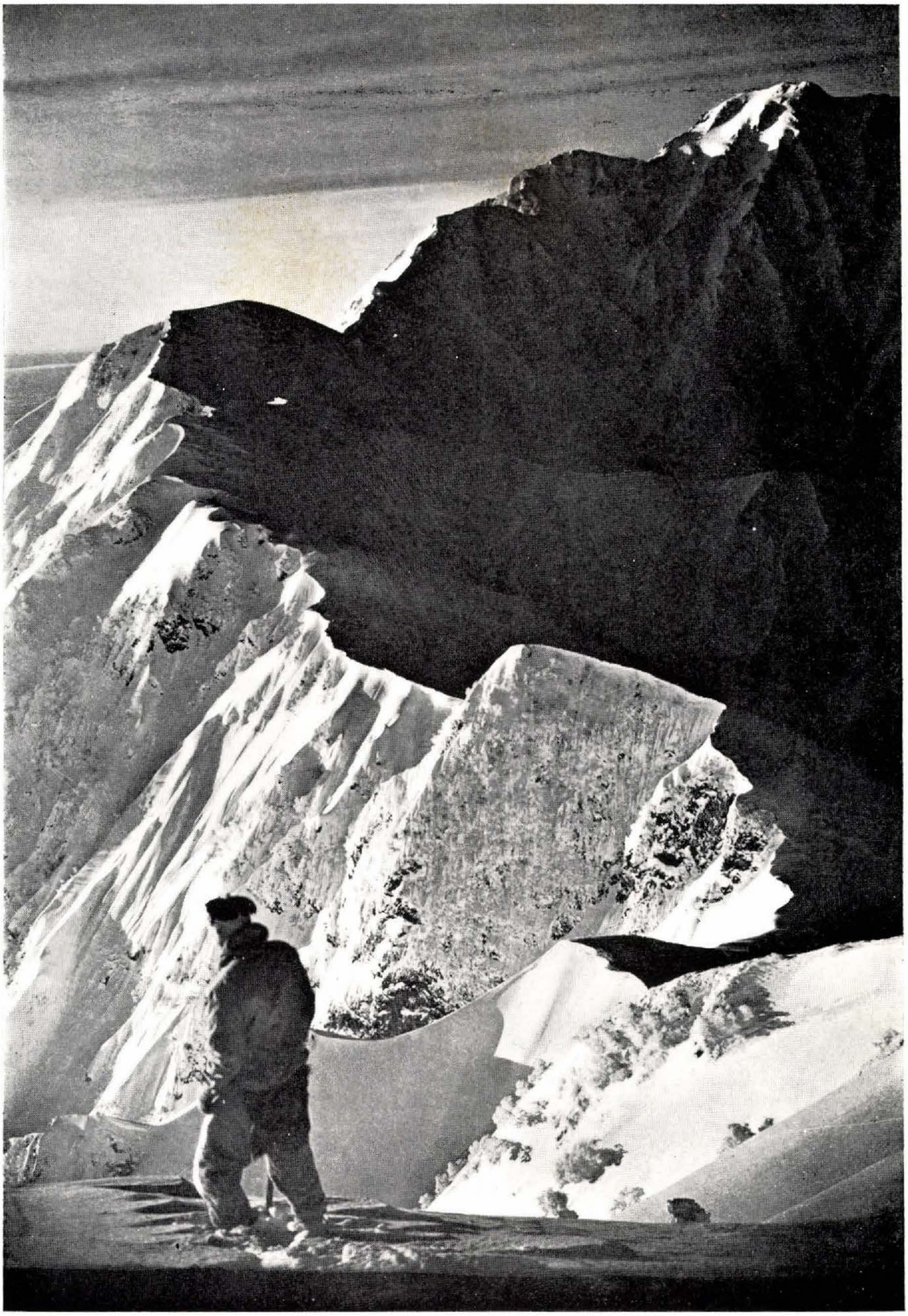
思ひ出……小谷部全助……一二四

宮川雄二郎君……磯野計藏……一四三

神ノ田圃よりの後立山……小谷部全助……一九四

附圖

鹿島槍ケ岳東面概念圖……小谷部全助…卷末
カクネ里奥壁仰角圖・カクネ里附近概念圖……小谷部全助…卷末
飯豊山檜山澤附近概念圖……齋藤正俊(林)…卷末
圖衛谷概念圖……吉澤一郎…卷末



朝映の雪稜　　小谷部全助

文記

鹿島槍ケ岳東面

一、概　　觀
二、東　尾　根
三、荒澤に就いて
四、天狗尾根
五、カクネ里

參照附圖（巻末）

1、鹿島槍ケ岳東面概念圖
2、カクネ里奥壁仰角圖・カクネ里附近概念圖

一、概観

小谷部全助

針ノ木より白馬迄、南北に延々八里。西方黒部を距て、劍の怪魁に對峙して秀麗な頂きと物凄い胸壁とを併せ連ねる後立山の山波は、一度訪れた者の腦裡に深く刻まれて、容易に忘れる事の出來ぬ大きな魅惑となる。其のほゞ中央に當つてこの連脈の代表とも云はるべき鹿島槍が、あの懐しい二つの頂きを大空に高く、立派な岩壁をいだいて最も奥深く聳立して居るのだ。

本州中部の斷層山脈によく見掛ける傾向なのであるが、後立山も大體東方に著しく傾いて居つて、西側が一帶にのんびりとした緩漫な山容であるのに反して、東側は物凄い岩壁や崩崖がそぎ落した様にかゝつて、その險絶、豪快な景觀は若きマウンテニヤーの血を湧き立たしめずには置かない。

後立山の巨豪たるこの鹿島槍も、勿論かゝる趨勢を明瞭に具現し、その東側は、所謂近代的登山意識の勃興と共に注目され始めて以來、多くの小部分を除く他、既に殆ど究められざる處の無い狀態に達して居るし、更に一層最近に至つて嚴冬期の登攀が、此の方面にも及び現在興味の中心をなしつゝある。

鹿島槍東面と云つても、鹿島川大冷澤の北俣源流以南はスキールートたる長ざゝや立派な夏路の作られた赤岩尾根、その他中岩、鎌尾根、笹喰より釣尾根に至るルート等は、ずつと以前から積雪期、無雪期にわたつて多くの記錄が殘され

鹿島槍東北面　　鷹野雄一

又可成り明細な報告が出て居る爲、こゝでは省略する事とし、私はこの內最も興味ある東尾根以北に就いて、略述して見やうと思ふ。

實際、この方面は物凄い惡場の塊の樣に見え、又割合に地味で奥深いせいもあつて、穗高、劍等の開拓された樣に太古の沈默を續けて、至る所未登攀の儘殘されて居たのであつた。此の方面ばかりは忘れられた狀態であるから、比較的に新しい方面であると云ひ得やう。だんに開拓が行はれ始め、漸く訪れる者の數が增して來たらうと思はれるのが今日尙多くの興味ある處女ルートを有し、且又それ等の幾つかは、嚴然として純潔を守つて殘るからぬものと思ふ。

でである。實に此の方面こそ、向上進步に努力する眞劍なマウンテニヤーの、絕好の舞臺として恥しをもつて笹喰に續いて居る。南槍の東側は非常に險しい岩稜を以つて極く單調に落ち込んで居る爲、到底登攀の對象にはならない。之に反して北槍は顯著な東方尾根を派して、その信州側に珍らしくも奥深い複雜な變化を與へて居る。

東尾根は大體二六〇〇米附近に第一岩峰、第二岩峰の岩場をもつてぐんと高度を低め、藪尾根を以つて一ノ澤の頭（三角點二〇〇三・九米）に至り、分散して大川澤、大冷澤に落ちて居る。

この第二岩峰の少し上部（荒澤の頭）から天狗尾根（爾後天狗ノ鼻の尾根をかく略稱す）が東々北に岐れ、天狗の鼻は大きなドームを爲して居る。之も若干の岩場を除く他、下部は猛烈な藪がはびこつて、容易に人を寄せ付けない。

大體以上の二尾根を見る時、それは餘り劃然とはして居らぬけれども、確かに日向即ち南側が穩やかで、日陰卽ち北側が險しいと言ふ傾向——むしろ感じと言つた方がよいかも知れぬ——を持つて居るのに氣付く。これは八方尾根、遠見尾根にもよく見られる。そして國境主稜の雪庇が東に突出する樣に、これ等の東方諸尾根の雪庇は必ず北に出る。

この二つの尾根を廻つて先づ、大冷澤更に上流北俣は尾根の分散せる廣い區域と、遠見尾根の南岐せる尾根との間を北に深く入り、天狗尾根に里に至つて居る。この間幾つかの枝澤を東尾根、天狗尾根の正面に刻んで居るが、その内の間を深くえぐる、荒澤なのである。この奥壁は實に凄○○米の邊で二分し、北西、五龍、白岳方面に至るものをシラタケと稱し、南西、北槍に居る様である。カクネ里と言ふのは澤の名前ではなく、源流地帯全般の地域を指すのだらうと思ふ。この分岐點を二俣と呼んで居る。

岩質は總じて氣持の良い堅岩は少く、大部分アンサウンドである、殊に笹喰上部、荒澤最上部等は特徴のある逆層のそれがひどい。

荒澤、大川澤等は河床に通過困難な難所を多く含むし、又猛烈な藪漕ぎの勞を省く意味に於いても、奥壁登攀に思を至す者は夏や秋の無雪期に苦しむよりは、春の積雪期を利用した方が遙かに便利であるし、又絶對に必要な場合も所によつてはある。

尚この方面の登攀の歴史を掲げて見やうとも思つたが、既に冠氏の「後立山連峯」等や最近に至つては、「關西學聯報告」六號等に一寸見られるから略した。

私達が興味を此處に集めたそもそもの契機とも云ふべきものは、昨夏に於ける後立山の縦走であつた。

兼ねて聞いて居た鹿島槍附近の東面の素晴しさを、極く一部分乍らも實際に見て噂に違はぬ價値を認め、色々研究

の結果其の核心を荒澤奥壁よりする北槍登攀に求めて、その年の秋も終らうと言ふ十一月、森脇と共に飛込んで行つたが、不幸にして物凄いベルグシュルンドに前進の路を斷たれて、止む無くこれも同じく其の爲に東尾根行を斷念した鷹野と合流し、唯一の路(ベルグシュルンドは此處だけ垂直に對岩に接續し、アプザイレンで降りた)を許されて遂う〳〵天狗尾根を登る結果になつて了つたのである。

この行に依つて展開された東面の魅力はもう完全に私達を執えて了ひ、更に次々この方面を訪れる動機ともなつたのである。そして今日に至り、私達の貧しい紀行により極く粗雑乍らも、此の方面の狀況は大體理解し得た積りであるからして、この際此處にまとめて見やうと思ふのである。

更に私達の心境を省みて、次の樣な事をはつきりと言ふ事が出來る。即ち私達が「東面の完了」を目指し、たと言ふ事は否いて、或ひは誤られ勝ちだと思ふから、この點をはつきりして置かうと言ふのである。かゝる誤解は決して私達の動機に就べき事とは思つて居ないし、否むしろ光榮にすら思ふ位であるが。即ち私達が「東面の完了」を目、指し、たと言ふ事は否めない事であるが、之は決して一義的な強い意味で私達に働きかけ、私達を動かして行動に至らしめたものではなく、極く二義的に、頭の片隅にかすかに湧いた願望に過ぎなかつたと言ふ事である。この種地方の完了等と言ふ事は本來、容る短期間に行ふ事は、私達として事情の許す處ではないし、又私達はあらゆる意味に於ける完了等と言ふ事は本來、容易に喋々出來ぬ性質のものである位の事はよく知る所である。私達としては寧ろ前に述べた樣に、この附近の自然景觀の素晴しい魅惑にひかされ、その結果が更に動機となつて次の結果を生むと言ふ工合にして遇然まとまつた紀行を、後からかうと氣付いてかゝる題目の下に纏め上げたのに過ぎないと言ふ方が、私達の心情のいつはらぬ告白なのである事を一言して置く。從つて更に將來に於いても同じメンバーに依る此の地方の記錄が、澤山

集るかも知れないし、又若し一層進歩した形式で纏まれば、同じ題目の下に再び現はれるかも知れない。（一九三五・九）

二、東尾根

鷹野雄一

鹿島槍ケ岳東面の中でも、最近比較的多數の登山者を有つ此の尾根に就いて、今更私輩が喋々する事は或ひは不必要の事であるかも知れない。乍併、單に私達としては、知り得た範圍の事を纏めて置くと言ふ意味に於て、強ち無意義の事でもあるまいと思はれるので、一應筆を執つて見たのではあるが、結局貧しい經驗に禍ひされて、通俗的な概念以上に了つた事は、甚だ心苦しい次第である。

東尾根の位地及び地形は附圖を參照されるのが簡單であるが、場所的に見て先づ次の三つに大別せられる。

a　忠實に尾根を辿るもの。

b　冷澤北俣より岩峯の手前に出るもの。

c　荒澤左俣を登り岩峯の下に出るもの。

以下季節的に區別せずして略述しやう。

無雪期

無雪期にaのルートを採れば、岩峯の下迄相當な籔こぎを覺悟せねばならない。一ノ澤の頭より尾根通しの方が良くて來る下方に籔の多い一ノ澤を登るのは徒な苦勞が多い。

bのルートは、此の尾根の興味が主として岩峯附近に在ると考へる時、面白いものであらうと考へる。

c即ち荒澤側よりのルートは、東尾根と言ふ以外に、荒澤の奥の瀧の手前で本谷と岐れ、東尾根に上る澤を辿るのであるが、五・六月頃ならばシュタイグアイゼンを利して比較的容易に登り得やう。併し、八月頃にはシュルンドとクレヴアスの爲め相當時間を要するであらうし、更に十月から十一月上旬にもなれば、シュルンドは非常に大となり、此の通過は相當困難で、殊に單獨行などは考へさせられる處である。

積雪期

積雪期に於ては、aのルートに比較的興味多い登高を味へる。一ノ澤の頭迄、雪量の尠い時は、造林小屋からスキーを歩む。電量が多ければ、スキーで小屋への道を少し進んだ邊から尾根に出て、大體忠實に尾根を辿るが、雪の深い時は中々樂な處ではない。此の頭から岩峯迄は單なる雪稜に過ぎないが、雪庇に注意する必要がある。此の邊は多は輪樏、春はアイゼンが用ひられる事は言ふまでもない。尚、一ノ澤の頭下約百米の地點には、良い幕營地があつて甚だ好都合である。

bのルートも採り得るが、一應雪崩を考慮する必要があらう。此の澤は略々南向であるから極く初冬の雪崩及び春の底雪崩に日光の影響を受けて早く雪の落ち着く事と、地表面の狀態から推クルステを形成する事が考へられ、又

察して、雪崩の發生率はそれ程大とは思はれぬから、決して不可能では無いであらう。

次にc即ち荒澤側であるが、之は嚴冬に於ては多少考へねばならないと思ふ。後立山は一般に山勢は東北に傾いてゐるのであり、隨つて此の東尾根に於ても、荒澤側は冷澤側に比し傾斜度が大で、勾配も斜面により四十五度を超へる樣なものもある樣に見える。地形は大體コンヴエックスで、地表面は下向きに伏した草付きである。而も、ノルマルな狀態に於ける風は、東尾根に於ては西風で、（西北風は、荒澤の頭、天狗尾根で弱まると考へられる）勢ひ此の荒澤側は風陰側となり、其の上北向で日光の影響は小であるし、此の邊の天候として冬季晴天の二日續く事は殆ど考へられぬから新雪雪崩發生の條件を完全に具へてゐる譯である。隨つて嚴冬に於いては、此のルートを採る事は勿論、荒澤に入る事それのみでも、詳細な研究を俟つた後でなければ、相當危險性があるものと思つて差支あるまい。春期に於ては、降雪降雨の後暫くが危險なる事は言ふまでもないが、さうでなくても、日中は此の北斜面に於て物凄い奴が落下するのであり、而も、デブリに依つても想像される樣に、此處で雪崩に襲はれる事は絶對致命的であるから、十二分の調査と、深重な考慮とが必要である。

次に岩峯に就いて一言し度い。別に特記する程のものでは更らさらないのだが、此の尾根の主部分とも思へるから附記する次第である。岩峯は二つ、下から數へて第一、第二岩峯と稱する。第一岩峯は二十米足らずのサウンドロツクで無雪期の岩登りの對象としてはつまらないものだが、雪が着けばホールドの雪片を拂ふ爲め矢張り多少時間を要する。第二岩峯は四、五十米、割合にアンサウンドだが岩場と言へるのは上部の四、五米位のもので、其の上は直ぐ傾斜の尾根で荒澤の頭に續く。第二岩峰の基部から荒澤の上部に亘つて帶がある。之にも中部に脆い處があるが、惡場と言ふ程のものではない。積雪期の第二岩峯に就いては、未だ試みぬ私には云々する資格は無いが、リツヂは恐らく急峻な雪稜

に化すであらうから、時間さへ掛ければ可能と思はれる。らむ事も出來る。但し此處は冬季は餘りクルステを形成せぬ樣であるから、雪質によつては登高は相當困難であらう。昨年（一九三四）十二月は雪尠く又既に濕潤新雪表層雪崩の痕跡があり、登高は可能であつた。要するに之等の岩峯は東尾根登高の中に含まれてこそ意味が有るのであるが、それのみを岩登りの對象として訪れるのはつまらない事であらう。

以上、極めて漫然と書き下したが、現在に於ては、此の尾根の登高は、既に冬季にのみ對象としての興味を見出だされるに過ぎなくなつた。此の事は別に、「より困難なる路よりの登頂」と言ふ意味ではなく、——勿論此の言葉は此處に當て嵌らぬが、——唯、冬季の惡天候の下に好機を摑んで登頂し度いと言ふ、私達の理窟の無い氣持に過ぎない。冬季が、天候的に登高を困難にする事は言ふまでもない。元來此の尾根は、岩峯の部分を除いては（aのルートに於て）別に優秀なアイスマンシップもクラグスマンシップも餘り必要ないのであり、最近迄完登記錄の無かつたのも、殆ど唯其の天候にのみ因るものと言つても差支無いのである。隨つて此の尾根を完登する爲めには、どうしても適當な地點に根據を設けて、根强く待期すると言ふ事が最も必要であらうと思はれる。とまれ東尾根は、忠實に尾根を辿る限りに於ては、小部分を除き、餘り登攀技術を云々する樣な處ではないのであり、此の點、一部の人々には、冬季のプルミエール・アツサンシオンの意味を失つた今日、——尤も、冬季岩峯を直登して北槍に達した人を私は未だ知らないが、——次に、昨冬に訪れた時の日記を載せる。天候惡く、北槍に達せずして引返した貧しい山行きの紀行である。

紀行（十二月）

吾々の此の東尾根行は、別に前々から計劃されてゐた譯ではなく、赤石、聖行の心算りが十二月變更された結果であつた。而も種々の事情で思ふ樣に準備が捗取らず、出發の日まではただしい思ひをし、足の下から鳥のたつ樣に新宿の驛へ驅けつけたのであつた。

一行は小谷部と私の二人で丁度此の日、野澤の合宿へ大勢が出掛けるので、上野驛の賑やかさを想ひつゝ、しんみりと二人で、新宿の街の灯を後にしたのを覺えてゐる。

一、ベースキヤムプまで

昭和九年十二月二十三日　雨

大町へ着くと呆れた事には雨がさん〴〵と降つてゐる。都に居た時、大町の外れからスキーだのが馬鹿らしい。それよりも、前もつて荷を送つて置かなかつたので、此の荷運びが一苦勞だ。クサツクにスキーを着けて背負つた上、大きな袋を肩にかついだり、手に振ら下げたりして雨の中が無暗に遠く思はれる。往來を辿る時、對山館

宿へ着いて、早速自動車を賴んで貰つたが、どの車も〳〵道が悪いから嫌だと言ふ。仕樣がないので、馬を一匹雇ふ事にして置いて炬燵に這入り込み、百瀨氏と四方山話に時間をつぶす。聞けば立敎の方達が、東尾根を終へて昨日歸へつたとか。宿望を果した喜びがしのばれて羨ましい。やがて馬が來る。馬子が櫻井一雄だつたのは面白い。馬を先に立

小谷部全助

鹿島槍東尾根

て僕等は傘を借りて後からブラ〳〵歩く。何時も美しい鹿島川沿ひの道も、今日はぬかるみにはねを上げて荷物の後を追ふに忙しい。やがて瀟々と降る氷雨の彼方に、なつかしい鹿島の部落が見えて來る。でも樂みにしてゐた雪は此處にも見えず、無理をして積ませたスキーは、唯馬が苦勞しただけで終つてしまつた。鹿島に着いて、早速狩野氏の宅を訪れゝば、何時もながらの嬉しいもてなしに、赤々と爐の火を見つめながら、ゆつくりと明日のプランを考へる。先づ一ノ澤まで、ポーターとして狩野氏と、川上八百吉君を賴む事にし、夜は荷物の分擔など濟ませてから、野澤の合宿へ葉書を書いて寢に就いた。

二十四日　曇

七時頃出掛ける。一行は四人。造林小屋から冷澤の道を少し進んでから尾根に出る。尾根にも雪は少なく相當數も出てゐるが、それでも一五〇〇米位から輪樏を穿いた。數日來の睡眠不足が祟つてか、私は妙に疲れて一番後からとぼ〳〵歩いた。晝頃幕營地に着く。二、三日前迄立教の方達の居た處であらう。でも美しい新雪がやんわり積んで、さだかにそれとは判らない。早速キヤムプの準備をする。先づ雪を硬く踏んでから、下の見えない位にボサを置き、其の上に疊表を敷き底附の天幕を張る。そして更に疊表を中へ敷けば、ボサがスプリングになつて、濕氣は來ず、毛皮は無くとも十分カンファタブルだ。尙天幕の保護の爲め木を截つて小屋掛をし、上を雪塊で覆へば立派なエスキモーの家になる。これで頑張りの用意も出來た。三時頃にはポーター達も返へし、後は濡物を乾しながらパイプを薫らし、無言の山の囁きに耳を傾ける。どんよりした灰色の中に、遠く猫や淺間が靜に浮んで見える。菅平は末だ褐色の草原だ。頸城の山々にも雪は少くない。合宿の連中はさぞかしくさつてゐるだらう、あんなに張り切つて居たのにと、今は遙か信濃路の友の上を思ふ頃、雪山（ユキヤマ）の夕べは靜かに〳〵訪れて來る。

二十五日　曇後雪

朝方までぐつすり寝込んで眼が覚めると、天氣は餘り感心出來ない。問はず語らず滯在と決めの家の手入れ、午後は、焼き直し、蒸し返へす話の種にもぐり込んで、枕邊の菓子をつまみながら由しなし事を話し合ふ。でも二人では限りがある。遂には四邊に人無きを幸ひに、大聲で勝手な熱を吹き合ふ中、何時の間にか夜が訪れて、外は雪となり、遠く風の音も聞えるが、明日こそはと小リユツクに、食糧・ツエルトザツク・ハーケン・ザイル等を詰込み、晴を祈つて眠りに就く。

二十六日　曇

目を覺まし、新雪が入口を半分位覆つてゐる。外を窺くと、白くなつて見える。空の半分は晴れてゐるが嫌な雲が多く、とかく逡巡する中に、夜明けと共に偵察方々行つて見様と、アイゼンの上から輪樏を穿いて出掛ける。直ぐだから案外時間が掛る。漸くにして登つたでは、相當なラツセルが此處も灰色の世界、其の灰色を押分け、二時頃尾根の稍々小高い處へ着いた。此處で時折顯れる岩峯を眺め、ルートを考へる。岩峯は斷然デイレクトに行く事にした。行けさうである。風が強いので間もなく引返へし、一ノ澤の頭で小憩、霧間を洩れた夕陽に輝る天狗の鼻のドームが妙に赤く見える。天幕に歸へつてから、明日は良からうと準備をなし、何心なく見上げる空は、先程舞つてゐた雪も霽れて凍つた様な星が寒い。

二、登行

二十七日　晴後吹雪

午前二時起床。先づ第一に、天氣は如何とパラリと天幕を開いた時、其處に見た光景を私は何と形容しよう。凍りついた様な半月の、月の光に輝いてゐる雪と雲。それは美しいと言ふには餘りにも冷い。惹かれるまゝに外へ出て、グルリと四邊を見廻せば、爺岳は月の下におぼろに霞み、天狗のドームは眞向から照り輝いてそれは人の子の訪れる事など思ひも及ばぬものゝ様に、神々しくも又非現實的である。天幕に戻り、急いで食事を濟ませ、直ぐに出掛ける。二人とも夜の神祕に聲を呑まれて、無言のまゝサツクを廻り案外早く一ノ澤の頭へ出る。と〳〵と昨日歩いた踏跡を辿り、振り仰いだ目の前に、威嚇する様な荒澤の頭がぬつと突き立ち、東尾根の岩峯は雪もとめず夜目にも黒々ときつ立つて、其の岩峯の上からは、凄じい雪煙が絶間無く渦巻き上つてゴー〳〵と言ふ音さへ聞える様だ。一息ついて見廻せば八方の尾根は月光に濡れて聖者の様に靜まり返つてゐる。後の暗い平野には遠く大町の電燈でもあらうか、人家の燈がチラ〳〵見えるのが妙に懷しい。

二人とも默りこくつて痩尾根を歩き出す。昨日は霧の中を歩いてゐたので不安もなく、稍々クラストした昨日のラツセルの跡を丹念に踏んで、雪庇は出てゐないのを確めて、ピツケルにカメラを取附けて岩峯へ〳〵と近づいて行く。五時半、ラツセルの終點へ來た。豫定より大分早いので、爺峯への月光寫眞をものにしやうとしたが、忽ち風に叩き倒されて仕舞つた。がつかりしたが諦めて、愈々深い雪に足を踏み入れる。尾根は此處から一度下りそれから岩峯への登りになるので、わけはないと思つて居だが、踏み込む割に雪は重く、輪樏のラツセルも中々樂でない。案外時間が掛つて、愈々登りになる頃には、明の明星の光も薄れて東の空はほの〳〵と明るくなる。六

時半雪の斜面に坐り込んで食事を採りながら、爺の頂が美しいピンク色に染まるのを眺めてから、又重い深い雪の中で
の奮闘を始める。が、少々々々登り、九時半岩峯の下迄痩せた急な雪稜。これを登つて小さな突起を越すと、後は
に岩峯の下へ來た。此の時、さつき迄晴れてゐた空は何時の間にか妙な雲行になつてゐる。でも
して、先づ小谷部が岩にとりつく。岩はサウンドだが、ホールドの雪片を拂ふのに中々時間が掛
上からは頻りに嫌な雲が飛び始め、荒澤の頭の方もかすんで來る。「これは叩かれるな。」と思つた。ザイルは二人の
心を結ぶとか。私の不安は友の心にも響いたのかも知れない。彼も暫く考へてゐたが、此の天氣ぢや駄目だと言ふので
刻々下りてしまふ。然しルンゼを登つたら案外早く行けるかもルートを辿り始めた。
併し一歩々々と登る中も上の方は猛烈な吹雪。私達の邊も殴る様な風と共に雪が叩き始めた。
は到底北槍迄行かれさうもない。遂に殘念乍ら戻る事にする。而も未だ一、二時間で
を抱いて、先程まで苦心して登つた跡を、吹雪に追はれ、走る様に下る。重い心に重い足をひきずりながら、でも降り
は早いもの、二時頃には一の澤の頭へ來てしまふ。そして最早何も見えなくなつた岩峯の方をもう一度試みる事にして早くから
かりして天幕に歸へり着いたのが二時半頃、流石に夜も騒ぐ氣がせず、明日晴れたらもう一度見返へり、がつ
寢に就く。夜が更けても凄まじい吹雪はゴー〳〵と雄叫びを上げ、木々を唸らし、雪を飛ばして天幕を叩く。

三、歸心

二十八日　曇後雪

目を覺まし外を窺く。嫌な天氣だ。どうしやうかと迷つたが、少々此の尾根が癪にさわつて來たので、一と思ひに下

りてしまふ事にする。

た。二時半頃、二人共でもいざ下るとなると何だか後髪を引かれる様で、出發は段々遲れ、到み、重荷と新雪に苦勞十貫餘の荷でとぼ〳〵出掛ける。大體來た道を辿つた心算りたつだのだが無いので、どうにか皷は三乘されてどうにもならない。悪い事に出發が遲かつたので到々暗くなつてしまつた。仕方が

二十九日　雪

グツスリ眠つて目が覺めると、餘り遠くない目の下に造で一層重くなつた荷を背負ひ、暫くガサ〳〵と降りて河原に出ヤレ〳〵と思ふ。然し出合から鹿〳〵呆れ果てた。一尺位積んで尙霏々として降りしきる雪の中を、輪樏を穿き十貫餘を背負つて疲れて路傍に腰を下し、荷に依りかゝつて天を仰げば、無ヒラ〳〵と落ちて來てほてつた頬や唇にひやりと當つては消え、當つては消える。時折、落葉雪が落ち、後は又何の物音もない。變りもない。何と言ふ靜な雪の日だらう。私達はやがて膝や肩が白くなつたのに氣が附いて、思ひ直した様に又とぼ〳〵と歩いて行くのだつた。

三十日　曇

治喜衛氏に頼んで馬橇を仕立てゝ貰ひ、私達二人は荷物諸共乘り込んで大町へと走る。今度は然し此の次の時は、屹度、屹度やつて見せるぞと、今は雲間の鹿島槍を、にも仕方がなかつた。

美しい鹿島川邊りの雪路を、眞白になつた林の中を、橇は音もなく滑つて行く。

（一九三五・九）

三、荒澤に就いて

小谷部全助

鹿島槍東面の雄、東尾根、天狗尾根に依つて狹ばされ乍ら、執念深く北槍の懐に喰ひ込む荒澤、それは此の方面に於いて最も登攀記錄の稀少な原始境たる事、恐らく疑の無い事實であらう。殊にこの奥の壯大なる岩壁を經てダイレクトに北槍へ攀ぢるルートを試みた者は、或ひは私の寡聞のせいかも知れないが、兎に角、曾つて一度も耳にした事が無い。その爲とは云はず、私の愚昧な判斷よりしても、恐らく荒澤本流よりのダイレクトルートは鹿島槍東面に於ける最も困難なるものではなからうかと思はれるのである。

昨年十一月、新雪の岩壁に燃える様な登攀慾を懐いて、森脇と二人、突入したが不幸、魔の口を經てそれは此の方面に於いて最も登攀記錄の稀少な原始境たる事、恐らく疑の無い事實であらう。殊にこの奥の壯大なる岩壁を經てダイレクトに北槍へ攀ぢるルートを試みた者は、或ひは私の寡聞のせいかも知れないが、兎に角、曾つて一度も耳にした事が無い。その爲とは云はず、私の愚昧な判斷よりしても、恐らく荒澤本流よりのダイレクトルートは鹿島槍東面に於ける最も困難なるものではなからうかと思はれるのである。

昨年十一月、新雪の岩壁に燃える様な登攀慾を懐いて、森脇と二人、突入したが不幸、魔の口手を阻まれて敗退。意氣込みが凄かつたゞけに落膽も甚しかつたが、一方始めて仰ぐ奥壁の餘りにも壯大、險惡な姿に半ば呑まれて了つて居たのだらうか、頭の一隅をフト過ぎる一片の安堵をどうしやうもなかつた。そして止むなく天狗尾根へ變更して了つたが、其の時の悠々焦せらぬ（？）氣分も屹つと此の反動ではなかつたらうかと思はれるのだ。この紀行に依つて私達は現今一般から殆んど顧られず、忘れられた様にとり殘されたこの荒澤と云ふ谷が、如何に興味あるかを覗ひ知る事が出來たと共に、更に進んで今後の開發を誓ひ且又大いに一般にも期待する次第である。この意味に於いて、こゝに極めて僭越乍ら、この紀行に、天狗尾根及び東尾根よりの觀察を加えて綜合した雜駁なる概念を、綴つ

荒澤奥壁　　小谷部全助

て見るのもあながち無駄な事でもないと信ずるのである。

鹿島造林小舎より大川澤を小一時間で林道が低く、流れ近くへ降る對岸に荒澤の出合を見る木林だし、水量も大して一寸これが荒澤かと不審に思ふ程に貧弱普段は大した事もないので始めて訪れる者は、一寸五、六月の溶雪期や長雨の後等は腰以上と覺悟しなければならぬ。始暗く澤を狹め、且、澤そのものが非常に屈曲に富んで居る爲に奥の方は少しも見えず、鬱々とる岩塊を踏んで登つて行かねばならない。漸て一時間程して忽ち行手は、荒澤最初の關門であしは辛いから、どうしても此の左岸を高く絡まなければいけない。やないが極めて安全に通過出來る。五月頃ならもう此の附近からそろ〳〵雪渓になる處であるくなり、荒れたガレが多くなつて行く。荒涼たる間に奥の方が見えて來始めると、それが餘りい洞穴にでも這ひ込む様な陰惨な壓迫感に堪えられない。れる。此處から兩岸を見ると、東尾根の側はひどく急な崩崖をなして登攀の困難、或ひは不可根の側は其れに較べて相當おだやかで、のんびり見える草付や灌木の粗生した所等、致る所登この二俣から天狗尾根へ可なり大きなルンゼがかゝり、此の取付きは雪崩に磨かれた滑らか可能であるから——尤も春季、單調な雪渓を利用すれば問題はないが——右岸の岩稜を攀ぢて這入らなければならない。これが十一月私達のとつたルートである。階段狀の岩場が續いて面白い登攀を味ふ事が出來た。岩は殆んど全部サウンドで氣持が良い。尙、荒澤は、東尾根第一岩峯へかゝらうと言ふコルから同尾根を一段下つた所、太い岳樺の粗生した小平地から荒澤

に向つて落ちる藪尾根に依つて右俣、左俣に岐たれ、この尾根は所々相當な岩場を交へて、居る。下から不用意に望見すると、この尾根の一部は奥壁と混同されて、これに喰込む澤が許されたとして早春ならば錯誤に陥入る恐れがあるルートであらうが、この中間尾根の登攀は、積雪期溯行が無雪期に於いては敬遠し度い様な藪であるに稱すべきもので、將來のアタツクは必ずや此處に集中せられるに相違ない。何故なら東面随一の壯大なる岩壁は實にこの尾根の奥に聳立するからである。二俣に於ける右俣の懸瀑程、かゝる奥と天狗尾根側の岩壁は、此處ばかり極度に相寄つて狭いゴルジュをいものは無い。中間尾根の間を飛瀑となつて、遙かシュルンドとの爲す暗黒の底に吸はれて、反る響きが妙にこもつて遠い。六月初旬迄なら雪渓通し樂に通れるであらうが、切れたが最後、此處の通過は絶對不可能だ。天狗尾根側も馬目。又中間尾根を越えて這入るルートも、少くとも奥壁登攀の前としては、勞が多過ぎはしても順當に這入るには、右俣はかく入口の狭い割合に奥は案外廣くなり、澤通しは割合源流地的におだやかしい。そして眉を壓する様になつたこの間、天狗尾根の平に枝澤の上部は更に二つに岐れて居て、ならば尚更である。この程度で大した事もなさゝうだが、雪渓次の澤も之より少し急な下部は相變らずの藪と岩で大した事もなく此の尾根へ出られるらしい。この中間尾根の右かりと恐しい様な壁である。殊に天狗尾根から望む時は一層誇張されて「一寸無理かな」を吐き出し度くなる。

天狗尾根と東尾根との接合點から出て第一、第二岩峯の側壁と天狗尾根との間を割つて比較的緩く落ちる磊岩の澤はやがて岩溝となり――天狗尾根から見る時は斜に喰込むチムニーの様に見える――幾何もなくまるで切つて落した様に突然物凄い岩壁となり、眞下は明らかにオーバーハングで奈落の底無理である。所が、十一月にはもう殘雪を認めなかつた。この最上部の澤は秋口頃迄雪渓をなして居るが、十一月にはもう殘雪を認めなかつた。この瀧から直かにこの溝に這入るのは下から仰いで其の右傍に可なりはつきりした岩稜が天狗尾根の小舍岩（同尾根岩場下にある顯著な四角い岩の假稱）の下邊りへ伸びて居つて、これなら何とかなりさうだ。殊に所々に見られるブツシュが相當に登攀を助けて呉れ相に思へる。瀧の左側は物凄く切立つた第一岩峰の側壁の續きで如何にも惡い。まあ辛ふじて更にダイレクトルートを求めるとするならば、瀧直下附近のテラ〳〵の壁の直ぐ左に極めて漠然乍らもいくらか稜を爲した所を選ぶ外はない。それも上に行くにつれて何時の間にか、テラツとした壁になつて了ふのだが、いくらかでも目指す岩溝に近寄れるから、その間の壁を何とかすれば好いと言ふ事になるのだ。この下部から上方相當の所迄、まばらな藪や灌木をつけて居るから、或ひは利用出來るかも知れぬ。

以上は天狗尾根からの偵察だから、或ひは惡く見え過ぎたのかも知れない。實際に下から直面すれば、今少し容易に見えるだらうと思ふ。それにしても最後の壁の登攀が、技術的に又精神的に極めて困難なる事は、何處から見ても頷ける事だらう。兎も角、この他の如何なるヴアリエーションルートに依らうとも、荒澤本流のダイレクトルートは果して可能なりや然らざるや、早く實際に確めて見たいものである。

扨、殘るは左俣である。之は直かに東尾根へ這上るもので、右俣に較べると遙かに小規模な一支渓であるが一帶に急峻で、一寸した懸瀑等もあつて相當興味ある澤らしい。更にこの左俣から中間尾根へ、鮮かに喰込む一本のガリーも面

白からう。それでも途中岩壁と言ふ様なもの無く、總て森の雪渓續きなら上迄單調な雪の蹴り、登り、尚、このルートは二、三年來關西の方々によつて既に數回登られて居る。

以上で大體甚だ不完全、不正確乍ら、私として偵察し得た範圍を述べた積りであるが、最上のコンデイションと思はれる時季に於いてさへ、未だ解決して居らぬ處へ加へて、更にこゝでそれ以上の臆測を逞ましうする元氣はない。が兎も角、次の事は云へると思ふ。即ち荒澤奥をその出合から順當にアタツクする限り、右俣へ樂に雪渓を利して這入れる季節以外には無理であらう。まあ四月下旬からせいぐ六月初旬邊りが、無難ぢやないかと思ふ。更に一月から三月四月の積雪期も考へられるが、澤に關する限り根據地の問題で行きづまつて來る。たとへ將來、運よく天候に惠まれ、ビヴアークを行つて順調に成功したとしても着實なる登山とは仲々云へまい。全に解決せぬ限り着實なアタツクは考へられ相もない。

四、天狗尾根

昭和九年十一月三日　快晴後小雨

森脇芳之紀行

天狗尾根よりのカクネ里・八峰キレツト　　小谷部全助

枯草を刈つた大きなジグザグの入つてゐる斜面を、眞直ぐに登り切つて峠の上に立つと、二人共ホッとして立ち止る。振り返へればすぐ下の林の間を、ゴツトリゴツトリ道連れの馬に頼んだ二個の荷物が、揺られながら登つて來る。先程通り抜けた中綱の部落、築場の驛、白馬行きのスキーを預けた驛前の家、其れに續いて彼方の山々が秋の澄み渡つた大氣を通して氣持良く見える。朝あれ程雲一つ無かつた空の、曇り氣味に成つて來たのを氣にしながら、荷物の登り着くのを待ち切れず、先を歩めば此の黒澤峠の兩側は開けて來て、小さい內にも整然たる感じのする高原と成つてゐる。今迄見通しの利かなかつた正面に、渦巻いた雨雲の中に頭を隱した爺子岳の岩の山肌が、仄かに新雪を纒つて、晴れた日の此の峠の景色を物語つてゐる。高原を横切つて再び兩側の道の通つてゐる所で、馬子に禮を云つて荷物を受取り、鹿島川へ向つて小川沿ひにダラダラと下つて行く。鹿島川の河原へ降り立てば、眞白い砂に反射した雲間の光りでムツと暑い。橋の無い廣い河原をあちこちと流れの狹い所を尋ね、流木を求めて橋を架けたり等して、渡るに暇取り對岸の林道へ着いたのは、正午を少し廻つて居た。明るい氣分のする此の林道を歩いて居る內に、心配してた天氣はつひに小雨と成つて降つて來た。造林小舍の前の危い一本橋を、荷物に振られながら踊る樣にして渡れば、小舍の中から白い煙が雨に咽びながら、ボーツと立つてゐる。煙に黑く燻された元氣な顏が二つ「ヨオー」と呼ぶ。東尾根へ出掛けた望月と鷹野の二人だ。連日の惡天候に患ひされて登山道を往復し、先刻歸つて來た所だと云ふ。

雨の小止みを待つて、用事の爲東京へ歸ると云ふ望月を送つた後、小谷部と二人で小舍の後の林道を進み、荒澤入口附近の偵察に行く。人通りが絶えてゐると見えて、落葉が一足毎にガサガサと音をたてる。何處迄歩いても入口と思はれるものが無い。一個所深く入つてゐる小さな澤を荒澤の出合と決めて引返へす。其の夜は、小谷部と私は荒澤を、鷹野は荒澤より東尾根へと決め、心の底に一抹の不安を感じながら、雨の止むのを祈りつゝ寢に就いた。

十一月四日　快晴

晴れた、晴れた、と云ふ小谷部の聲と共に眼を醒せば、昨夜の雨は其の名殘も無く、山の麓には朝霧が棚引いて居る。秋の空氣がピンと身に沁みるのを覺えて、昨日偵察して置いた道傳ひに、露に濡れながら荒澤の出合迄行き、出合の少し下流を水をさけながら二、三度ジヤンプして、大川澤の流れを渡り荒澤へと分け入る。「く」の字形に曲つてゐる此の澤の入口は、何處迄も其の奥の神祕を守つてゐる。奥の雪渓よりのさゝやかな流れを導いてゐる、石のゴロゴロしたこの澤を或は右に或は左に、流れを避けつゝ溯行して行く。此の谷は秋とは云へ、十時近い時刻にも拘はらず、日の光が少しも入らず、霜柱が白々と立つてゐる。小鳥の聲も疎らに、陰慘の氣が心を打つ。「く」の字の曲り角迄溯れば、初めて奥壁の新雪を粧ふた夢の樣な峯頭の、滿面に陽を受けた姿が現はれて來る。秋の紺碧の空を背景として、暗い我々の所と強烈な對照を成してゐる。山巓が見え初めてものの卅分も歩くと、荒澤の大瀧に出會ふ。瀧の兩側は共に惡く、傾斜の緩るい左岸を、少し手前で木の枝に摑まりながら四十米ばかり登り、瀧上の左岸の草付スラブを敬遠してへずつて小一時間も掛つて再び澤に降り立つ。新雪の名殘の見られる澤を、枯草を掻き分けながらガサガサ溯つて行く。此處迄來ると荒澤の奥壁も漸く其の全貌を現はし、遙るか殘雪の末端より、空に向つて延びて居る錯然とした共の峭壁の莊嚴さに、息詰る樣な威壓を感じ、三人共しばし呆然と眺める。雪渓へ掛る手前で、未だに陽光の惠みに浴さない此の谷の寒さに慄へつつ遲い晝食を濟し、カンカンに凍つてゐる綾るい雪渓を二俣の分れ迄登る。東尾根へ行くと云ふ鷹野と別れ、小谷部と二人落石を物語る汚いガレ場を右俣へと入つて行く。「オヽイ」と左俣で聲がする。振返へれば雪渓の末端迄行つた鷹野が、雪に沿ふて廻り歩いてゐる。シユルンドと逆層の爲め、對岸へ取付け無いと云ふ。小谷部が荷物を置いて行つて見たが、駄目だつたと見えて暫らくの後二人共右俣へ歸つてくる。所々長いクレヴアスの入つてゐる右俣を、兩岸がゴル

ジュをなせる懸瀑迄行けば、此處でも左俣と同じくベルグシュルンドが眞黒い口を開いて、雪溶け水を靜かに呑んでゐる。對岸迄は四、五米もあつて、何うにも取り付けない。シュルンドの緣を廻つてゐる內に、ゴルジュの下手に一個所幸ひに雪の對岸迄詰つて居る所を見出し、荒澤溯行を斷念して、三人共ルートを天狗尾根に變更する。シュルンドの雪角にザイルを引掛けて、雪の詰つてゐる所迄ステップを切り下げ、時間の都合上雪溪の橫でビヴアークすると云ふ鷹野に明日を約しながら、小谷部と二人アンザイレンして對岸の草付を登る。雪溪から眺めた氣持良さそうな此の草付も、取付きはアンサウンドの逆層へ僅かに草が生えてゐる斜面で登り憎い。落す石がゴーンゴーン暫らく鳴りながら、シュルンドの中へ吸ひ込まれて行く。今更ながらシュルンドの測り知れぬ深さに、友と顏を見合せる。悪場を過ぎて右へ卷き小尾根を一つ越した所に、小さなテラスを見付けて、懷中電燈を賴りに寢袋へ入つた頃には既に眞暗になつてゐた。「ヤツホー」と二、三度鷹野の返事を聞いた後、頭から寢袋を被つて翌日の快晴を信じながら眠りへ落ちて行つた。

十一月五日　快晴

寢袋から顏を出せば外は明るい。時計を見れば七時だ。昨夜暗闇の中で就寢した此の三角形のテラスも、明るみで見ると案外心地良い。左手の所をチヨロ水が流れてゐる。嵐の日に押し流されて來たと思はれる枯木が、所々に殘つてゐる、左手の方に岩殿山を思はせる樣な大きなスラブが、テラテラに磨かれて下へ向つて落ちてゐる。下の方でも起きたと見えて、靜かな空氣を震はして雪溪を散步する足音が聞えて來る。下へ迎へに行つた小谷部を待ちながら、一寸一寸と這ひ下つて來る日の影を焦れつゝ火を燃やす。時折、朝日に溫められて緩んだ石が、唸りながら頭上を落ちて行く。

軈て石付の取れた鷹野のピツケルと共に、二人が登り着いた頃には、此の小さな「パラダイス」にも日がポカポカと當つてゐた。小憩の後左手の流れ傳ひに登つてゆく。岩がサウンドで氣持が良い。狹いクーロワールが次第に廣まつて、

所々に中休みのテラスを持つた岩場と成つて、幾段にも上へと續いてゐる。天氣の良さにゲレンデの様な和やかな氣持で、逆層を試登したりしながら新雪に美しい東尾根の廣がつてゐる尾根が全部見え初めた這松傳ひに狭い尾根を登つて行く。見下せば、二俣から分け入り林を左に抜けて登つて行く、登るに連れて水の流れも消えて、凹みの清水となつて行く、草地を經て岳樺の林へ集まつてゐる地點へ突然出る。急に眼界が開けて、鹿島槍以北の峻峯の荒い男性的な線が眼に映る。東方より見る後立山は又と無く力強い。クレツテライに意外な時間を喰つたと見えて、一時間位で日の暮れる事を時計が知らせてゐる。這松と熊笹を掻き分けて尾根の廣まつた平坦部へ着いた時には、已に薄暗く成つてゐた。暮殘りの光の中に、荒澤の奥壁、カクネ里から五龍へ掛けての豪快な彫刻が、恐しい程ヌーツと良く見える。唯感激するのみ。南の空には富士の影が浮いて見える。這松の下の雪を掻き分けて尾根の平坦部へ着いた時には、已に薄暗く成つてゐた。暮殘りの光の中に、荒澤の奥壁、カクネ里から五龍へ掛けての豪快な彫刻が、恐しい程ヌーツと良く見える。唯感激するのみ。南の空には富士の影が浮いて見える。這松の下の雪を掻き分けて、ともすれば荒澤へ向けて滑り出しそうに成る方に大町の灯が朦朧と浮いて見える。這松の下の雪を掻き分けて、ともすれば荒澤へ向けて滑り出しそうに成るザイルのザイルに、寢苦しい黒澤峠には、炭燒の火が暖かそうに點在し、其の彼體を、ザイルとピツケルでジツヘルして寢袋へ入る。一昨日通つた黒澤峠には、炭燒の火が暖かそうに點在し、其の彼方に大町の灯が朦朧と浮いて見える。這松の下の雪を掻き分けて、ともすれば荒澤へ向けて滑り出しそうに成るザイルのザイルに、寢苦しい假眠の一夜を送つた。

十一月六日　晴後吹雪

目醒むれば、見える岩肌は皆氣持悪く朝燒けしてゐる。前も後も空虚な靜寂に充され、天狗のドームは靜かに聳えて居る。左手には鹿島川が朝日を反射して、南の彼方へ銀線を畫いて居る。藪漕ぎはビヴアークの地點からすぐ初まつた。一度降つて尾根が再び狭まり、這松が頑固な抵抗を試みる所でカクネ里の中が見えて來る。清純な新雪を被つた廣い雪渓が高まつて岩に代る所に、初めて見る透明な蒼氷の壁が二段三段と成つて、キラキラ輝いてゐる。此の谷へも一度分

け入つて見たい。小さな隆起を三つ四つ越えて、一ツのコルへ出る。僅かに、雑草と矮少な岳樺しかの岩壁が、クローズアップされてすぐ横に見える。やはり凄い。此のコルの左上のフェース等は、とても人を寄せ付けないだらう。コルから這松の繁茂した急斜面を掻き分け、遮二無二登る。先頭の小谷部の足跡が何處迄も強引に、這松の下の雪に付いて居る。振返へれば、後續の鷹野が登つてゐると思はれる邊の這松が、前後に揺れて居る。手が眞黒く松脂で染つた頃、小舎岩へ登り着いたらしい小谷部の「人が居るぞ、ヤツホー」と云ふ呼び聲がする。急いで登つて行くと、東尾根の第一岩峯の上を一人の登山者が「ヤツホー」を云ひながら、道を急いで居ると見えて、すぐ上の方へ姿を消して了つた。小憩の後小舎岩の南側を廻つて、此の尾根通し最初の岩場をリツヂ通り取付く。カクネ寄は途中逆層に成つて居るので、一個所アンサウンドな荒澤へ臨んだ所を登る。浮いた石を落せば暫らくの後、下の方で他の石を誘つてガーンガーン音を立てながら落ちて行く。第一の岩場を終ると、這松續きにすぐ第二の岩場となる。第二の岩場はサウンドで氣持良い。朝から心の隅に蹲つて居たモルゲンロートの嫌な印象が、雪の姿と成つて現はれて來た。チラチラ降る雪の中を登つて行く先頭の影が、ジツヘルしながら見て居ると、詩の様に美しい。切立つた東尾根の第一岩峰が足下に見られる頃、三人は天狗のドーム頂に立つて居た。雪は風を伴つて降つて來る。緩まつた斜面を東尾根との接合點、荒澤の頭迄行くと、夕暗が後から廻つて來た。自重して接合點の尾根上で三たびビヴアークする事に決め、再びジツヘルして寢袋へ入る。二日來と同じく、固まつたパンとチヨコレートの貧しい食事を終へて居ると、サーツと風に吹拂はれて兩槍が見えて來る。南北槍のコルの所で燈火がかすかに光つて居る。「ヤツホー」と呼べばヤツホーと答へが風に乘つて流れて來る。燈火は同じ場所を巡つて居る様に見られる。其の內又雪が一入強くなり、燈火も消えて無くなつたので、すつぽり頭から寢袋を被る。寢返りを打つ度に袋の外に積つた雪が、パサリパサリと音を立てて落ちる。濡れた

靴下を氣にしながら其れでも何時か眠つて了つた。外では雪と風が荒れ狂つて居る。

十一月七日　吹雪

此の日は、霧の彼方の眞紅な太陽と共に夜が明けた。手近の雪面、又其れに續いて浮いて居る。一夜の內に全く冬に變つて居る。尾根上なので、寢て居た儘に赤く輝いて美しい。昨日迄あれ程雪の少なかつた山々が、一夜の內に全く冬に變つて居る。尾根上なので、寢て居た所には七、八寸位しか積つて居なかつた。北槍が朦朧と霧間に、眞白い東尾根第一岩峰の岩塔が物凄く見えて來る。暖まつた寢袋に愛着を感じながら、ビヴアーク地點を出發したのは八時カクネ里の上には小さい雪庇が乘り出して居る。風とスリップを警戒して、アンザイレンして行の隅から喜悅が込み上げて來るのを、抑へる事が出來ないが識別出來ない。磁石で方向を定め、南北のコルへと向つて降りて行く。北槍へ瞬く間に着けば、頂上は霧が深くて南槍へ續く山稜が潜る。黑部側からは小止み無く强風が吹いて來る。期待して居た劍の展望も裏切られ、唯霧と雪で出來て居る白一色の世界を泳いで行く。南槍の切立つた北面がほんのり見え初める頃、黑部の方から「オーイ」と云ふ人聲が風と共に登つて來る。これが、今は亡き三高の內藤君であつた。此の後の我々の同君に對してとつた動作、及び其の後の行動に關しては「雜記」欄に小谷部が大體書いて居るし、又「記錄」のところにも相當詳細に記されて居る故に、此處では省略する。兎も角此の日我々三人は、生命がけの速力で、吹雪の中に細そ〳〵と燃える生命に後髮をひかれつつ、急を鹿島村に報じ度重なつた疲勞の爲、落ち込む樣に寢込んで了つた。

五、カクネ里

小谷部全助

1 概況觀察

昭和四、五年頃迄は極めて一部の先覺者を除く他、殆んど知る者とてなかつたカクネ里も、翌六年頃からポツ〳〵と開拓が始められて、次第に其の名も一般に知られる樣になつて來た。そして所謂北壁よりの登攀ものが、今や本邦山岳界の先鋒に立たんとする人々の最大の關心を集めつゝある現狀である。今夏になつて、俄然飛躍的に認められた結果や涸澤、劍澤等が、餘りに繁榮に過ぎる爲からでもあらう——これは今迄の夏の盛場たる上高地各學校山岳部に見られる樣になつたヤムプを設けて集中せんとする傾向が、その他關西學聯關係の山岳部がワンサと這入つたらしい。うるさ、、、、さうなのは、誠に歎かはしい次第であるがシーズン中はお互ひ樣で、何とも致し方がない。

かう言つた今日、以下の樣にクド〳〵と報告するのは、心なき登山者群の侵入に拍車をかける結果にこそなれ大して必要且、意義ある事とは、思つて居らないが、鹿島槍東面に關する知識を、一應こゝで纏めて置かうと云ふ最初の主旨に

従つて、敢えて禿筆を呵する次第である。

大體の位置や地形等に關しては、巻末の附圖を見れば一目瞭然である。この附圖は大體大したものだが、二俣岩小舎とかカクネ大瀧、口ノ澤、中ノ澤、キレツト澤、その他奥壁のルート番號等何れも便宜上の假稱に過ぎない事を一言斷つて置く。

シラタケ澤を北西に岐つて、カクネ大瀧を右岸に捲いて越すと、もう大川澤の惡場も忘れた樣と源流地のおだやかさになつて了ふ。五、六月なら大瀧も、何も彼も雪渓の下で何の苦勞もないが、天狗尾根側は一帶に淺く單純な地貌であるが、左岸は可なり深く澤の切れ込みも遙か國境尾根に達して居る。口ノ澤で一直線に國境尾根にせり上つて上部は赤い土砂のガレをなして居る。この澤の出合から奥を見ると仲々廣く立派な景觀をなして居るが大して興味ある登攀は期待されまい。次の中ノ澤は平凡。キレツト澤は八峰キのだから、かう假稱して置いたので、この奥は左から 1、2、3 の三つに岐れて居る。この附近からそろ〳〵岩壁になつて行つて奥壁に續く。奥壁のやゝ右寄りを相當の高さ迄上る顯著なルンゼを奥の澤と言つて置く。この左側一帶が所謂北槍直下の北壁をなして連衡する。尙之に就ては 4 の所で詳述する。

2 通路 こゝへ這入る路として次の三つが擧げられる。

a 大川澤溯行

a 大川澤溯行

b シラタケ下降

c キレツト澤

a **大川澤溯行** 今夏の各學校山岳部は殆んどシラタケを下降して這入つて居る樣だが八月中旬頃迄は大した困難もないから、どうせ二日費すなら此處を選んだ方が肉體的に樂ではないかと思ふ。殊に六月中旬頃迄なら雪渓が二俣下流

六月のカクネ里　　小谷部全助

の險悪な河床を蔽ひ陰して居るし、更に下流もスノーブリツヂが處々にあるので一層容易であり水時には言ふ迄もなく絶對困難だからどうしても他ルートに依らねばならぬ。鹿島造林小舎から大川澤の左岸につけられた立派な林道に從つて行くと間もなく終點と書いた立札にぶつかつて路はふつゝりと消えて了ふ。此處迄は相當な重荷でも三時間もかければ十分だらう。こゝから愈々澤傳ひの溯行を始めなければならぬ。大體始めの內は一寸位悪い所でも高廻り等しないで成可く徒渉に依つて突破した方が結局樂で早い。右、左に渡り返して進む內に澤は西方に灣曲して行き傾斜も一段と急になつてそろ〳〵悪くなり始める。やがて兩岸は險しい岩壁になつて廊下狀を呈して來て瀧や深淵の爲どうしても高廻りを餘儀なくさせられる。だが辛い高廻りと言へるものは前後二、三回位しかない。大地獄、小地獄なる名所があるさうだがよくわからない。愈々二俣近くなると左岸が非常に悪く右岸が一帶におとなしい草付となるので河床から二、三十米の上を樂に捲いて歩けるやうになる。こゝに吾々の陰れたる根據地、二俣の岩小舎があるのだ。林道終點から岩小舎迄、地圖を見ると非常に短い距離だが重荷を背負つた場合、夏月頃なら五、六時間、五、六時間はたつぷりかゝる積りで餘裕をとらねばならない。岩小舎からカクネ里は直ぐ目の先である。更に右岸の草地を二、三十間捲き岩壁にぶつかつて一旦、河原迄降り、矢張り右岸の木の生えた草付迄登れば、もう後は樂にカクネ里へ這入れるのだが、河原からこの草付へ取付く所が悪い。僅か二十米位の脆岩と泥の急斜なのであるから、輕荷なら譯はないが、重荷を脊負つては難かしい。捲て行く場合は三十分程で這入れる。それたつた三、四分も歩けばいゝのだ。

b　**シラタケ下降**　これには更に次の二つが考へられる。

Ⅰ　遠見尾根よりのルート

Ⅱ　國境主稜を迂廻して這入るもの

Ⅰ　遠見尾根、之は地圖を一見した場合、直ちに部落よりの最短ルートとして考へられるに違ひない。が而し近時、路の手入れを全然行はぬ爲、地圖上では立派な路になつて居るが、實際は小遠見へかゝる一七〇〇米邊りから上は猛烈な藪で意想外の苦勞を拂はなければならぬから、夏は避けた方が好い。だが四、五月の頃ならば殘雪は尚之等の藪をすつかり蔽ふて居るだらうから、遠見尾根は非常に樂々と歩く事が出來やう。從つて、神城からカクネ里入りは十分一日コースになり得ると思ふ。シラタケは二俣近くに一寸した瀧があるけれども、左岸を捲いてどうやら通れる。七月一杯は下迄雪渓通しだから些かの不安もない。

Ⅱ　國境迂廻ルート　夏山生活の爲、大部隊が這入る樣な場合等、一寸馬鹿々々しいが安全第一のこのルートが推される。五龍北肩の白岳頭から東寄りに一寸遠見へ下りて這入れば安全であらう。

c　**キレット澤**　この澤の三つに岐れたものゝ內、2卽ち眞中のみが通路として適當して居る。丁度、キレット小舍から北に一つの小突起を越して下つたコルから下ると此の澤になる。雪渓が切れると慣れぬ者には一寸不安だから避けた方が好いかも知れないが、普通の者なら何でもない。殊に春なればカクネ里迄何の妨害もないスピードで豪快なる一滑り登攀後の歸路としてカクネ里生活者の通常とるべき最捷路であらう。このルートは豪雨等にも可能であるから、增水でシラタケ、大川澤共に困難なる時、唯一の逃げ路となる。

3　根據地

a　二俣岩小舍

b　天幕使用

c　八峰キレット小舍

a　**二俣岩小舎**　大川澤の二俣に岩小舎があると言ふと土地の者でも小首を傾ける位だから、る者は私達の他に殆んどあるまいと思ふ。通路の大川澤の所で一寸述べた様に、二俣下流、一、左岸の惡いのに反して右岸が非常におだやかで、その上縁は急峻な崖や樹林になつて居り、草地になつて居り、又十米位は凄い岩壁であるが、その上縁は急峻な崖や樹林になつて居した丸い樹叢の下が懷かしい自然の岩小舎をなして居るのだる。この草付の區域のやゝ上流寄り床も乾燥した土で至つて居心地が好い。四人位ならたつぷり大きくコンケーブした岩は十分な泊れるが、もつと大々的に床を加工すれば七、八名は收容出來やう。この床の緣から急に二十米程の岩壁になつて直接流れに臨んで居るから、水はザイルを下げて取りに降りなければならない。ザイルの無い場合は岩小舎の後ろから草付を卷いて二、三十間行けば樂に河岸へ下れるから其處で求める。豊富な流木を引いて來れば薪には絶對不自由せぬ。炊事も岩小舎内にカマドを設けてどんな雨にも心配なく行ふ事が出來る。恐らく、非積雪期に於ける限り、此處程絶對的信頼を置ける根據地はこの方面に求められないと思ふ。次に少し缺點を擧げて見やう。それは前に述べた様に此處からカクネ里へ行くのにはどうしても一ケ所、それもほんの二十米そこ〳〵の急崖を登らなければいけない事だ。若し此處を根據にするならば二十米のザイルを一本餘計に用意しておかなければいけない事である。滯在中は常にこの崖の上から垂らして置く必要がある。それから贅澤を言ふなら、眺望がよくなり小舎の樣に居乍ら裏穗の展望に耽ける等好いものだが、此處みたいに始終對岸の殺風景な崖や下流の端尾根ばかり見てゐも仕樣がない。だがこの直ぐ下に見える噴泉の樣な瀧は立派な周壁と濃藍の瀧壺とをもつて相常に見應えがある。次に擧げられるのは河流に臨む爲うるさい事。以上である。これも眺望を除く他、五、六月なら全部雪渓が解決して吳れる。二十米の岩壁も、六月初旬に於ては厚い雪渓の爲、僅か雪渓から二、三米で岩小舎だつた。積雪期に之が使用出來る

と非常に便利だが、恐らく埋まつて了ふと思ふ。ゾムメルシーに又、奥壁登攀に、五月頃の岩小舎生活はどんなに樂しいだらう。

b　天幕の使用　カネ里の圏谷は至る所優秀なキャンプサイトを提供するが此處に長く滯在する事だが十分抗抵力のある天幕をがつしりと張らなければ安心出來ない。七月中旬位迄は一面の雪であらうからどうしても共れ迄は雪上に張らなければならぬ事も心得て置く必要がある。眺望のすぐれた事、水の近い事等好い事ずくめだが、暴風雨に對する不安と地形上、岩壁登攀に便利なる事等好い事ずくめだが、暴風雨に對する不安と地形上テント一式を運び込む厄介は免れない。

c　八峰キレツト小舍　大體積雪期の岩壁登攀の根據地として考へられるのみである。その他は、重要な避難所になると言ふ位のものであらう。

4　奥の岩壁

——巻末スケツチ參照の事——

こゝで奥の岩壁と云ふのは大體、左は天狗尾根の岩場直下邊から右はキレツト澤右岸の岩稜邊り迄を指すが、登攀の興味を多分に有つキレツト澤をも便宜上含めた。これから右、左と言ふのは總て下から見てかく稱するからその積りで讀んで戴き度い。私はこれ等の中でも北槍を中心とした最も興味あるルートを觀察して左から(1)、(2)、(3)、と(7)に至るルートを數へて見たからこの順で述べやうと思ふ。尙私はこれ等の登攀が決して岩登りとして非常に好適であるとは言はない。何故なら此の岩壁の中心地帶は餘りにも急峻に過ぎ、而も岩質及びホールドがよくないからである。從つてルートとして選んだものの中間の純粋な岩ばかりの壁やクラツクは殆んど藪を付けた稜角であり、それとても考へられさうにないのである。岩壁の上部は大抵這松叢をなして北槍へ續いて居るから、其處迄登れば後は簡單であらう。

(1)……奥壁の左寄りにすぐ目に立つルンゼがある（奥の澤ではない）オーバーハングを交へた赤茶けた岩壁で中頃に顯著な岩洞が見られるから直ちに見當がつく。五、六月には雪で岩洞は判らない。この右側の稜が藪傳ひで極めて容易である。上部は一寸左寄りの溝に這入つても良し又その儘稜角の這松を漕がうまあこゝが問題と言へば言へやう。尚、(1)の中程から上半の岩壁の基部に沿ふて樂に天狗尾根へ續くバンドが見られる。(1)のルートは五月頃なら距離も非常に短くなつて了ふが、私としては確信をもつてルートには取れない。(2)(3)は一帶に傾斜も急であるが藪が續いて居るから不安は無い。多期の登攀としても可能性が多い。

(4)……(3)(4)の間は一寸したルンゼだが上部はテラ〳〵の壁で手がつきさうもない。その中間の一本だけはどうやら上へ續きさうだ。これと次のチムニーは惜しい事に餘り外に開きその中間の一本だけはどうやら上へ續いて居るから何とかを少し付けた稜的のものが三つ並んで浮彫の様に出て居る。(5)が所謂北壁の最もダイレクトなルートで困難も亦隨一であらう。右へ一つ越すと(5)である。これと次のチムニーは惜しい事に餘り外に開きすぎて大きい事と上部でからりと開いてテラ〳〵の壁になつて了ふ爲登攀は難かしい。

(5)……北壁の内で最も惡場の距離が長い。五十米程もあらうか。上迄、極くまばら乍らも藪をつけては居るが、非常に急でアンカレツヂ皆無であるからハーケンの使用を考へなくてはなるまい。岩質もさう信頼の置ける程堅くはないし兎も角相當困難を伴はう。

(6)……奥壁を二つに岐ける顯著なルンゼ奥の澤よりのルートである。これは八月以降はクレヴアスの亂開で不可能となるからどうしても時季の早い事を必要條件とする。奥の澤は下から望むと平凡なルンゼの様に見えるが、這入ると相

當錯雜した物凄い景觀を呈して來る。(7)の物凄い第二岩峰側壁や、正面國境東側面の懸崖。そして北槍へ續く岩壁である。(6)としては奥の澤から北槍方面へ如何なる岩壁、ルンゼを登つても差支えない譯だが、私が六月に登つたルートを最も可能なるものとして此處に代表させて述べる。これを詰めると先は國境東側面の凄い壁に突あたつて雪渓は左に曲り一つの稜上のアンカレツヂに出る。この稜の下部は垂直だが小枝が案外しつかりしてるので懸垂、連續で大した事もない。

(7)……今迄の樣な稜ではなく立派な尾根とも言へる。雪の最も少い頃眞下から取付くと二十米程は岩が面白い。後は簡單な木登り草登りだ。二つの岩峰があつて下の方はリツヂ通り登ると面白い。上のは四、五十米もある側壁を物凄くかけて居るが、この右は木の生えた平凡なリツヂでつまらない。冬でも容易なルートである。

キレツト澤　この出合は側堆積が土手の樣に大雪渓と平行に生じて一風變つた地形を示して居る。少し登ると澤は左から1、2、3の三つに岐れる。1は最も深く切込み兩岸は物凄い岩壁が倒れかゝらん許りである。八峰キレツトへ通ずるものだけあつて其の險惡さは相當なものである。この右岸の尾根は大きな斜め逆の傾向を示して居るが岩は堅さうだしホールドも格好いので之も相當興味がある。3は平凡。2、3の間、2寄りの所から岩登りに極く適した岩稜が逆層だが傾斜が急でなおとなしくて通路として非常に便利。伸び上つて一寸した岩峯を國境へ突立たせて居るが、この岩峯は非常にサウンドで多種なフエースを有して居るから態々練習に來る程の甲斐がある所だ。キレツト小舍に泊る縱走者も一度カクネ側から此の岩峯を登つて見る價値がある。

5　積雪期に就いて

昭和八年春、立教の方達に依つて奥壁試登が始めてなされたがこの時は、はつきり判らぬが多を一寸偵察されたものらしい。(「立教山岳部々報五號」參照)その翌る年の春は同志社及び早大が之も成功しなかつたさうである。更に「關西學聯報告六號」に依れば、今春、三月から四月にかけて早大、浪高、大阪藥專の方々が這入つたさうで、其の結果浪高パーテイによつて右へ入るルンゼ——奥の澤だらうと思ふ——から北壁の右の部分を登るルートが完成された云々と記してあり花々しい悲壯極まる報告が載せてあるが。其れがどの部分だかはつきり私には判らないが、若し(6)のルートで私の登つた稜の左側のルンゼだとすれば北槍へのダイレクトルートとして誠に立派なものであり非積雪期ですら私は躊躇した程の所だから本當に驚異的登攀である。殊にホールドの悪い——ルンゼの中程にどうやつてつかまつて居たか知らないが屢々雪崩に洗はれ乍ら頑張つた由、特筆ものだ。

扨、積雪期に於ける根據地としては白岳下のベースキヤムプにも求める事が出來るが之は岩歸還に不自由だから矢張りキレット小舍が一番好い。尚二俣の岩小舍は恐らく埋つて了ふだらうと思はれるが若し之が使えるならば非常に便利である。

通路としてのキレット澤2も雪崩に對して非常な要心を必要とする。この時季として大體可(3)(7)位のものだらう。奥の澤から右手、第二岩峰下のルンゼを登つて(7)を行くものは極めて簡單で、他ルートが失敗に歸して、キレット小舍へ戻る場合のルートとして、雪崩の條件が悪い時等キレット澤を上るよりも安全ではなからうかとさへ思はれる。雪崩に對してはよく〳〵注意すべき事をこゝに繰返して言ふ。尚之に關する大體の傾向は前述の地形概況から推察し得る事と思ふから革めて述べない。

私は六月に於ける奥壁、(6)よりする單獨登攀と八月末に鷹野、森川と共に岩小舍生活をした時の(7)の登攀と前後二回這入つて居るが、後者は連日の雨にたゝられて大した所も登つて居らぬから此處では前回の紀行だけを記す。尚後者は「記錄」の方に大體書いて置いた。

昭和十年六月六日　晴　下界はもう夏と變らない樣な暑さだが、車窓から眺める後立山の峰々は未だ〳〵白い衣をぬぎかねて驚く程白く青空を限つて居る。神城驛前の雜貨屋で色々話すと、其處の主人は眞顏になつて、「遠見は此頃路を直さないからとても駄目ですよ。去年の夏も三人連が二日もかゝつて登つたがとう〳〵あきらめて戻つて來た程です」としきりに止めるが、兎に角地圖に路があるんだからと頑强に押切つて十時出發。天幕にザイルそれから六日分の食糧がいやに肩へ喰込む。冬を限りなく懷かしみ乍ら高ケ入スキー場を通り、汗、一斗の難行苦行が始まる。愈々尾根へ出ると殘雪が出て來て大分涼しくなりやゝ機嫌が直つた。白馬、唐松、八方尾根の展望が實に好い。今年の正月、鷹野と痛快なシュスファーレンを飛ばしたのはあの邊だつたかしらとか、齋藤氏が片スキーを危く谷へ落しさうにしたのはどの邊かなとか何とか、樣々な嬉しい曾遊の思出にくれ乍ら休み始めると、仲々尻が上らない。それでもどうやらはかどつて漸く地圖の濕地の記しへ着く。のんびりとした丘陵の樣な地勢で眺望もよく、此處に今冬からスキー小舍が開かれる相だが本當に好い所だ。其の芝生の樣な所に一人寢ころがつて、霞がかつた山麓の森や畑、人家などの織りなす模樣を見て居るのが堪らなく良い。こゝから少し登つて愈々小遠見山へかゝると今迄はつきりしてた小路は急に不明瞭になつて、そろ〳〵藪の攻撃が始まつて來る。何分重荷なので藪がえらく苦手だ。大分肉體的にへばつて來たし、時間も

四時を廻つたので小遠見の頂上で泊る事に決心。一頑張りすると待望の鹿島槍がぬつと飛出して來る。小遠見の奥壁は此處から眺めるんだ。晩雪が多かつたせいか鹿島槍も意外に白い。カクネ里は實に大きな雪の圈谷である。こと到底登れさうもない樣に、物凄く突立つて見える。大丈夫かな……ともうかすかに壓倒され氣味だ。五龍の東面も誠に立派である。一人旅ではとかく面倒臭いので碌に炊事もせず、テントの中で本等よみ乍ら、有り合せのものをほうばつて簡單に夕飯を片付けて了ふ。天氣が氣になつて何度も顏を出して觀測したが、何時の間にか深く寢入つて了つた。

六月七日　曇　どうも香しからぬ空模樣だ。雨でも降つたらこの儘何處かへ縱走して歸つて了はうかなとも思つたが、まあ〳〵と言ふ譯でやおら天幕をしまひ、シュラフザツクをリュツクに突込んで又、藪の中へ突入。時に八時半。バサ〳〵ゴソ〳〵、實際えらい藪だ。殊に密生した所が一番頑固だ。多ならばこんな苦勞はあるまいに。いやはや愚痴ばかり出る。それでも大遠見を越すとずーつと殘雪が尾根の上にもべつとり有つて地勢もスキー向きに小廣く、至極樂になつた樣なもんだと言ふので急に氣分がのんびりして、事々に休憩を貪る。白岳の雪溪が眞下に見えて來たので、好い加減の所からグリセードで一滑りする。氣持よくスピードが出て瞬時にして雪溪に這入つて了つた。こゝからは雪崩のデブリ等でグリセードもよく出來ないが、半分駈け足で下りたので思つたよりも早く出合の二俣に出る、十二時。先づ重荷を下ろして雨の來ぬ間に天幕でも張らうと、カクネ里の方へ偵察に出掛けたが、非常に殘雪が多くて何處も彼處も雪ばかり、どうしても雪上に張らなければならないかと思つて、些さかうんざりして戻る。だが念の爲にと思つて下流へ偵察に入つて見ると、一丁餘りも下つた所、右岸に巨岩がぬつと突出て居る。これはと思つてわく〳〵し乍ら三、四米の崖を飛上つて見ると、果してまるで誂へた樣な立派な岩小舍ではないか。すつかり喜んで荷物を運び込む。するともう忽ち雨降らば降れと言ふ落

付いた氣分になつて了ふ。水が得られないので雪を溶して暖いお茶を入れ、晝食にした。食後、薪採集を兼ねて奥の方へ偵察に行く。雪に滿された圈谷の眞中をトボ〳〵とたつた一人登る氣持。如何に危險であり合法的でないと批難され様とも到底私はやめる事が出來ない。危險なる誘惑。實際單獨行ほど、山が、大自然がしみ〴〵と親身に囁き迫るものはない。かゝる程度の山に馴染み、淋しさや恐しさに痲痺して了つた私だからかも知れない。純白の氷雪に包まれた八千米のたゞ中に於いても尙私はたつた一人でかゝる心境になつて、冷いそして死せる處女の様に潔い壁を心ゆく迄打眺めて居たい。些かの不安もなく、焦慮もなく。マンメリー主義もそれのみならば私にとつては技術の進歩、征服慾の滿足以外大して價値あるものとは思はない。私の終局の理想としてあこがれるのはカンチエンジユンガでもない、エベレストでもない。あらゆる、あらゆる山々に一人喰入つて尙且深い自然の囁きに思ふ様胸を躍らせ得る山岳詩人の心境になりたい事なのだ。それは餘りにも遙かなもの、現實と離れた空想かも知れない。私は時々このお伽噺の様な光景を夢見る、フユーラー達の屯する最後の根據地——それは氷洞だつた——から一人ヨーデルを口ずさみ乍ら恰も羽の生えた様に頂きへ向ふ私を……。

實際問題として兎に角、私は先づ第一に個人として十分立派なマウンテニヤーの資格を飽く迄獲得したい。それすら容易ならぬ事なのに近時、恰も立派な完成者にでもなり了せた様な積りで若い連中がよくシステムを口にして先端ぶつて居るが、彼等は徒らに血氣にはやる輕はずみな、そしていざと言ふ時實に賴りにならぬ個體で組織された所謂、有機的登山システム程下らないものは無いと言ふ事に氣付かないのだらうか。言はゞ其れは片輪の病人にも等しい。かゝる必要を認めぬ區々たる日本の山でシステムがどうのと熱病患者の譫言みたいに猫も杓子も騒ぐのは笑止の至りだ。有機的システムが登山の最高形式なる事は今更騒がないでも既に明瞭な事で、こんな事は誰でも意識して居る所に相違な

い。だが結局、其のあらゆる重要肢體はどれ一つとして其れ自せざるものはない。從つて日本に於いては、殊に吾々若い學生き個體の完成に邁進すべきが本當ではなからうか。實際としてとは單に體力、技術の完成のみではない、情操、人格をも同列い自由の芽を強いて壓し曲げて迄貴重な時日を割いてシステムには毫もない。のみならず反つて、こましやくれた片輪を作る人達の集合は、僅かの頭腦に依るのみで、直ちに素晴しく立だ。

又、他方、日本の登山界は行詰つた等とよく言ふが、少くも登山に對して正しい。本然の態度を有する者にとつて何で行詰りがあらう。低ければ低いなり、高ければ高いなりに。のカクネ里へ筆を返さう。

大體のプランを決めて戻る頃、霧の色がオレンヂを帶びて明日の晴れを知らせる樣だつた。大いに夕飯を頑張つて氣持よく寢袋へもぐり込む。厚い雪渓の下を流れる川の響きが遠く聞えて何時の間にか甘い眠りへと誘ひ込む。

六月八日　晴、霧多し、東に向いて居る爲か岩小舍の朝は實に早い。天氣が好いから(4)か(5)をやらうと決心して極く輕裝で行く、五時。五龍寄りの山巓は待望の朝日で紅々と映えて、深い青空と共に何時も乍らの美しい山の朝を織りなす。雪渓には未だ日が射して來ないので青空が映えて、何だか一面に青い樣な感じがすが〳〵しくて堪らなく好い。う

すら寒い雪渓風しがザワ〳〵と邊りの灌木叢をしきりに波立たせる。北壁のモルゲンロートの素晴しさはもう何とも言ひ様がない。だが惜しいことに岩壁の中段邊りにからみ付いた霧がどうしても霽れず、段々と量も増して來るやうだ。朝日は次第に岩壁から下へと雪渓迄侵略して來る。何だか寒い様なので一刻も早くあの日の當るのだと一途に登つて行つたが、その内に岩壁は殆んど霧に蔽はれて了ふし、その餘波が東に飛んな陽に浴したい希望も駄目になつて了つた。思ひ出した様にさーつと霧が割れて物凄い岩壁の一な空模様だ。こんな日に未知の岩壁を而も一人で攀ぢるのは明へ這入る事にした。ぐつと急になつて來るのでアイゼンを付けらかに無謀である。とう〳〵正面せて居る。この雪渓へ這入ると直ぐ右手の岩稜の下がえぐれてどうなつてるか判らないが、少くとも六月の今は十分泊れる。で狭いので何だか上から壓へ付けられる様な息苦しさを感ずる周りが物凄い岩壁だらけなのと、ツケを利かせてぐん〳〵と邊り一直線に登りつめると國境東面の二十言つて見ればカクネ最奥のルンゼ上部をなす十米足らずこのルンゼ上部をなす十米足らずンドの岩場を攀ぢる、冷や〳〵し乍ら一つの難場を細い枝を頼りに乗り越すと、北槍寄りの國境落ちる険しい稜の途中、一つのアンカレッヂに出る。十時。ホ補給する。霧の霽間に下を覗くと五、六十米眞下に龜裂だらけの雪渓が物凄く波打つて居るのに上部は直ぐに殆んど垂直な稜が霧の中に沒して後は一面濛々とわからない。兎に角こゝ迄登も此の稜以外考へられさうもないので勇を鼓して愈々登攀を始める、殆んど全行程約三十米、垂直だが、所々の小さな

枝が案外役に立つて大した事もなく、大きな雪塊を不安定に載せた第二のアンカレツヂ着。ホルドが悪い爲、機械體操懸垂式が多く、流石に腕がだるくなつて了つた。あんなに細い枝へよくも全體重をかけられたものだ。考へても冷や〳〵する。若しぷすりと抜けたら直下百米。明らかにハイ左様ならである。こゝ迄來た以上何とも致し方ない。だが此處から上は、しつかりした岳樺があるのでもう安全である。一ケ所、オーバーハングの岩を越す時だけザイルで荷を殘し、後から引上げた。やがて傾斜も五十度弱になり密生した藪を漕いで樂に國境へ出た。單獨行なので流石に早い、十一時四十五分。國境へ出たら劍を眺め乍らふんぞり返らうと思つて居たが無情の霧は一瞬、三ノ窓邊りの雪渓をちらりと見せただけ。後は又漠々とした灰色に閉されて了つた。それでも一ルートを終へた喜びに滿ちて、國境につけられた夏路を京濱國道の樣にも感じ乍ら辿り、十分程で北槍着。霧又霧で唯頂上の標識を見守るばかりなんこわい所を降らなければならないかとうんざりした事と、大川澤下りにも自信が無く、一應下から溯つて見やうと言ふ氣もあつて、其儘釣尾根から笹喰へ下る事にする。手頃なザラメなので素的なグリセードを滿喫する。急停止して見上げると雪庇の樣に突出た一端から氣持の好い一直線がずつと引かれ、崩された雪が後から追付いて、ザーツと膝の上迄も埋めて過ぎる。この邊の岩は全部規則正しい斜め逆の層で非常に印象的な景觀で迫る。下へ着いた頃から皮肉にも霧が霽れ始めて暑い樣な日當りが永く續く樣になつて了つた。冷澤二俣の一寸上迄で雪渓は切れて無くなる。長ザクも悲しいスキー小舍を出合には壘々たるデブリの山が築かれて居た。去年の思出に寒い。過ぎて、むせ返る樣な新綠の中を造林小舍へ向ふ。

六月九日　晴　昨日岩小舍へ殘した荷物をとりに行く。案外樂だつた。暇さへ有つたらもつと此處に滯在して居たか

つたがどうにも仕方がない。こんな好い天氣なのに歸るなんて……、本當に名殘惜しくて堪らない。二俣でしみ〴〵奥壁を打眺めてから再び徒渉又徒渉の大川澤を下り造林小舍へ向ふ。

（一九三五、九、記）

檜山澤入り四月の飯豊山

まへがき

齋藤正治介

古くから拓かれてゐる日本の山々の多くのものと同じく、飯豊も亦信仰の山であり宗教の道場である。併し乍ら秋も十月尚盛夏此の山に遊ぶ登山者は皆その白衣姿の意外に數多きに驚かされ、又苦しめられるに違ひない。雪と變化に豊んだ氣象とを持つてゐる頃となれば、廣大な飯豊の峰々はすべて我々の山となり、次の春も終る六月までの長い積雪期の飯豊は、高度こそ二千米とは云ふものゝ、その惠まれた地理的位置によつて、三千米の山々に匹敵する豊良な降離されてゐたことゝ相俟つて、今日に於てさへ尚未登攀の澤を多く殘させたのに他ならない。我々の抱く興奮に半ば駈られて、その反面に長者原地方の獵人達の生活を垣間見る興味を胸にして、飯豊も人の餘り好まぬ檜山澤入りを試みたのである。

飯豊の登山道は會津側（表口）に一ノ木(川入)口と彌平四郎口、西に赤谷口、北に小國より到る玉川口、東に中津川

（米澤）口がある。そしてこれ等を除いては澤は皆悪くはその様な困難は無いけれども、地勢は絶えず雪崩を以て我々の登山を妨げる。これがためか、五、六月の頃の記録は容易に求められるに反して、十一月から四月に到る降雪期の記録は甚だ少い。その中で主なるものに田中三晴氏達の彌平四郎より疣岩山に行かれたもの（昭和二年三、四月、岳に露營、「登高行」）、本郷常幸氏達の彌平四郎より三國岳に到り大日岳に登られたもの（大正十四年一月スキー使用、「登高行」）、二高パーティが檜山澤より飯豊山頂へスキーで登られたもの（昭和六年三月）山高、安西氏、ケナード氏達の米澤より大日杉の小舎を根據として地藏岳より本山に往かれたもの（昭和八年三、四月）、又越後山岳會員の疣岩山雪中キャンプより三國岳まで行かれたもの（昭和十年一月）などがある。

總じて積雪期に於ける飯豊への試みは、吹雪と雪崩と良い根據地のないために著しく困難となる。特に嚴冬に於る荒天はその困難を不可能へと絶えず押し進める。赤谷口、實川口、玉川口は悲しくも上述の三條件を具備し僅かに彌平四郎口、川入口、及び中津川口が我々に許されてゐる。これとても他の三つと同樣に根據地に乏しく、そして山稜に吹雪き續ける西の强風は、既に述べた種々の困難と共に、この山に向ふ登山者達の充分な關心と注意と準備とを要求してゐる。

×

雪の飯豊には以前から憧憬れてゐた。續けて二夏もこの山に遊んだ私の心には、眞白の姿となつた飯豊の峯々が絶えず浮び上るのだつた。去年の夏、檜山澤がスキーで登れることを聞いた。勿論私は果してあの悪い檜山澤が、全部埋つてしまつてスキーで飛ばせるとは信じなかつた。併し長者原の渡邊善三郎へ問合はせると、「三月末には澤は埋つてスキーで登れる。尤も不動瀧あたり一、二ケ所へつる必要があるだらう。一月はとても覺束ない。」と

四月の飯豊連峰

林　　俊　　介

言つた様な返事。これだけ聞けばもう躊躇することはない。三月下旬ヌクミ平のシ、小舎と、出來れば頂上の本社とを使つて、飯豊山、大日岳を目指して一週間から十日位の山行きのプランを立てた。併し三月の試験が終つてすぐ私が肩の骨を傷めた爲、決行は約一月も遲れて四月になつてしまつた。一行は齋藤、林、鷹野の三人、人夫は善三郎を賴んだ。

紀行

昭和十年四月十日　曇小雨　前夜上野發——越後金丸(一、三〇——一一、〇〇)——玉川(二、一〇)——長者原(六、〇〇)

何と言ひ樣もない程荷は重かつた。丸一週間分の食糧にピツケル、アイゼン等の山道具、シュラーフサツクからジヤケツまでの防寒具、おまけに七尺近いスキー二本がぎゆつとその上にいはき付けられたキスリングは、肩に喰入り、米坂西線越後金丸驛で下車してすぐ向つた僅か二百米ほどのだらだら登りの金丸峠を越しただけで三人はすつかり參つて仕舞つた。道をとぎれとぎれにうめる雪には、唯さへ苦しい足どりをいやが上にもおそくさせられて、玉川の邑まで三時間もかゝつてしまふ。昨夜發つた都の花は眞盛り、そして又今朝車窓より見た加治川堤は一分咲き、その花もいつの間にか消えて、今や目前には眞白の連嶺が僅かにその裾をのみ密雲より現して三人を迎へる。我々の想ひは早くも雪の山懷ろへと走らんとするけれども、足は相變らず遲々としか進んで呉れない。一里餘、山崎のあたりで迎への善三郎に會ふ。地獄で佛とも言ふのだらう。早速荷を分けて道を急ぐ。泉岡からスキーを穿く。玉川を横切る橋を渡れば長者原で、雪は二米に近く、村の人は堆肥運びに忙しい。見渡す限り打續く雪原のあちらこちらに直徑一間位の穴が地面まで掘られ、その穴へ家々の庭先の堆肥を不恰好な樋にのせて運びこむのである。運ぶ人はすべて考人婦女子

その姿には見るに傷ましいものがある。此處長者原は戸數約三十、農家ではあるが四、五月の雪崩がやんだ頃には男子は皆隊を結んで檜山澤を中心に山と言はず谷と言はず熊を追ひに行く。飯豊の獵人の話は餘りにも有名である。今年は檜山澤に未だ雪切れが來ず熊が出遊ばないからと言つて胎内の方へ行つてしまつたとか。樂しみにして來た我々はそれを聞いて非常に殘念に思つた。

四月十一日　雨　長者原（一〇、三〇）——薊（あざみ）ハギ（一一、三〇）——一、〇〇——大フタガリ澤（一、五〇）——（三、〇〇）——湯ノ境（五、〇〇）——ヌクミ平シシ小舍（七、〇〇）——泥子（でいこ）ノヘつり上部——湯澤出合（六、〇〇）——一、〇〇——湯澤出合（六、〇〇）——ヌクミ平シシ小舍（七、〇〇）

温身平まで澤道か山道か何れも一長一短、澤道はへつりを覺悟しなければならないし、山道は温身平の徒渉がある。降りつゞいた雨後、玉川は增水してゐるだらうと澤道即ち玉川沿ひの夏道を採る。スキーを着けて川入まで平地滑走、此處に注ぐ西俣澤を溯り縣境尾根を越し大石川東俣から杁差（いぶりざし）岳まで樂に一日で往復出來ると言ふ。この邊りから玉川は次第に峽谷となり、積雪期に於ては夏道は到る處雪崩の危險に曝されてゐる。我々は先づ上桑畑澤でスキーを脫がされスキーを片手に川に落込む雪の急斜面をへつり、なければならなかつた。次の清水澤を右に折れて登り、大フタガリの惡場は高く卷き、へタモノ澤、境ノ澤は物凄いデブリの間を分けて滑る。いつしか降り出した雨は次第に激しく、泥子のへつりは尾根へ登り、そこから旭又までの急斜面はブッシュひどくスキーを擔いで下る。次のフカワタ澤のヘツリも亦、地神から來る長尾根へ緩い小澤を求めてキツクターンを繰り返す。一時間半、登り切つたこの湯の境の尾根からは、飯豊本山より地神に續く雪嶺が今はその半ばのみ密雲の下から望まれる。湯の澤は完全に雪で埋つて、地神まで樂に行けさうに見えた。向ひの梶川の頭のあたりから物凄い雪崩が白雲となつて落ち續ける。急斜を湯の澤まで斜滑降、落口まで快く滑降できた。出合に懸る怪しげな針金によつて澤を渡り、こゝからヌクミ平までは何の苦勞もなく、薄暗く

なつた山毛欅の原生林の中をしばらく進むと、梅花皮(かいらぎ)澤の谷が右へ分れる近くにヌクミ平のシ、小舎は半ば雪に埋れて眠つてゐる。殆ど全部が丸太の柱と麥藁の壁、中は三室に分れ一番奥に圍爐裏がある。流石飯豊の獵人の作つただけに、煙に困しむ樣なこともなく寒風の吹きこむこともない。疲れて濡物を乾かす氣も起らず、夕餉をすませてすぐシュラーフザツクへもぐりこんでしまつた。明日も亦雨らしい。

四月十二日　快晴　滯在

意外にも今朝は快晴となつたけれども仕度が何もしてゐないので殘念ながら滯在することに決し、少しく檜山澤を偵察してみることにした。梅花皮澤は二本の針金で作られてゐる危險極まる釣橋によつて渡り、スキーを着けて檜山澤へ入る。やがて大又澤がほゞ同樣の水量を以て流れ込んでくる。谷は再び次第に狹ばつて、時々スキーを脫いで崖を高廻りしたり、藪をくゞつたりしなければならなくなる。澤の雪はどこまで行つても切れてゐるらしい。白瀧の少し下の左岸の雪崩の來ない樣な山毛欅林の中にスキーを置いて歸る。後ろからは絕えず底雪崩の音が遠雷の如く響いて來る。小舎に歸れば、梅花皮澤の奥に烏帽子、石コロミ頭あたりが夕燒の空に盛に雪煙を上げてゐる。檜山澤の雪の狀態の惡いのを不安に思ひつゝも充分に仕度して寢についた。

四月十三日　快晴　小舎(六、三〇)——白瀧手前(七、二〇)——大倉澤出合(一二、五〇)——一、〇〇〇——ノゾミ平(四、〇〇)——本山、寶珠山一、七六〇米鞍部(六、〇〇)——飯豊山五王子三角點——四王子本社小舎(八、〇〇)

星の降る樣な朝、三時半起床、何かと手間取つて二日分の食糧と寢具を持つて小舎を出たのは朝日が谷間に射しこむ頃だつた。雪が堅く氷つてゐるのでアイゼンを穿く。スキーを昨日置いて來て良かつた。間もなくデポへ着き、こゝか

らスキーを着ける。檜山澤は大又澤の出合から大倉澤の出合までは左岸の方が鋸尾根の右岸より緩傾斜であり、所々に平地さへある。大倉澤出合から上は兩岸とも絕壁をなしてゐるが、右岸の方に幾分緩斜面の所がある。我々は左岸を進み、白瀧のあたりは非常な苦しみにあがきつゝ長いスキーを背に擔いで大高廻りをする。谷は依然として奔湍をなして、處々埋つてゐるが皆雪崩の押出したデブリによるものばかり。やがて十文字の瀧の少し上のあたりで澤へ戻る。澤は左へ急カーブをなして曲る。雪は再び切れて左岸の雪の急斜面を行く。右岸は見上げ切れぬ程の垂直な岩壁が續き、澤を覗けば何處も皆瀧らしい。この邊を熊落ちと言ふ。左岸も亦急斜な崖となり、幸に雪崩で埋つてゐる澤に下りて、壘々たる大雪塊の間を分けて進む。やがて右からマミ澤が美事な雪溪をなして落ちこんで來る。檜山澤は相變らず切れてゐるのでマミ澤に取付きたかつたけれども、善三郎が大倉澤から上は大丈夫と主張するので、あと少しの我慢と再び右岸を思ひ切り大きく高く卷く。時は既に十二時、横切る雪溪は一寸の衝動ですぐ雪崩落ちそうにゆるんでゐる。戰々恐々、もし雪崩れゝば遙か下に奔騰する檜山澤まで止りつこない。併しまもなく大倉澤の出合の少し下から雪はつまつて、安心して爪先上りの雪溪をスキーで登つてゆくことが出來た。出合は大雪田となつてゐるが恐らく兩澤とも瀧となつて落合ふらしい地貌をなしてゐる。大倉澤はこゝより尾根迄、完全に埋つてゐる。檜山澤は先にも述べた如くこゝより左岸が絕壁狀となり、積雪期に於ては右岸寄りに進まなければならなくなる。カゴの澤も過ぎ、下の方から常に望めた見事なドームをなしてゐる寶珠がいつしか見えなくなると、もう望ミ平の澤の出合である。檜山澤はこゝから僅かの間、四五間の狹い廊下、しかも急な雪溪となつて左に曲る。この下は恐らく瀧らしい。不動瀧らしいところ、雪が切れて居るので右岸へ又高く卷く。スキーを持つてのこの登攀は、下に憂欝な穴があいてゐるだけに苦しい登りだつた。これから上は完全に雪がつまつてゐて、右岸寄りにスキーを進ませればすぐに駒形澤出合の大雪田に着く。我々は此處で

第何回目かの晝食をした。こゝが大きな瀧壺の上であつたとは、そのとき誰も氣付かなかつた。時は雪崩の音はしきりと山中に響き渡る。既に難場は過ぎたりとは言へ未だ一、〇〇〇米近くの登りが殘されてゐる。我々は距離の最も近い駒形澤を採りスキーで登り始めた。左り手に廣いノゾミ平が展開されて來たのをく三人はノゾミ平を經てゆくことにした。無限大のキックターン、自分の踏跡、大きなノゾミ平なその向ひに高く白銀に輝く烏帽子の連嶺は幾度打仰いでも目を樂しませてくれた。雪面は美事なフして、耳を打つのは唯スキーがそれを破る音だけだつた。四時、既に雪崩も止んだらしい。寶珠と辿り着いたのは六時で、こゝから頂上まで北面の斜面の雪は氷の如く堅かつた。も彈かれる。アイゼンは善三郎と一緒に駒形澤を登つてしまつた。仕方なくスキーを手近かな這松愼重にステップを切り乍ら登る。處々風のためか夏道が出て居て呉れる。めと言つてはパンを出して食べる。風がひどくなつて來たけれども十日餘りの月を持つ星月夜なのて登つて行く。「善三郎はもう小舍に着いてゐるだらう。迎へに來て呉れてゐるかも知れない」。「ホー。」返事はない。まさか未だ駒形澤に居るのではあるまい一抹の不安は我々の胸頂上に達する。人の影はおろか堅い雪の上にはアイゼンの跡さへない。不安は愈々增大する。我々ゝ强風吹き荒ぶ尾根の上を本社へと向つた。善三郎は本社の前の小舍の中で今や煙と惡戰苦闘の眞も雪がつまつて、今夜の塒も小舍の中とは言へ雪の床、雪の壁である。火は遂に燃えず、コツヘルて夕食とし、三人はウイインドヤツケのまゝシユラフザツクに入り、善三郎は得意の羚羊の一枚皮を

四月十四日　晴　本社小舍（九、三〇）——三角點（九、四〇）——一〇、〇〇〇）——デポ（一〇、三〇）——ノゾミ平の澤出合（一一、三

朝は一面の霧、七時頃から晴れ上る。目前の本山より左へ緩かな白雪の廣尾根は（御）西ケ岳へと續き、大日に到つて急に起伏を越し、牛首、櫛ケ峯と急角度をなして實川（さねがは）谷に落込んでゐる。大日はベツトリと雪衣をつけて我々を魅惑する。右には烏帽子、北俣、地神と雪嶺は連り遠く杁差まで起伏を續ける。北より東へ、朝日、藏王、磐梯、上越等の山は霞みの中に望まれる。流石に飯豊は我々の期待に背かなかつた。併し大日岳まで往復することは歸路澤にかゝる時刻が雪崩の最も危険な二時から四時頃になること、あと頂上に一泊す可く天候は安定しておらず、食糧乏しく、且小舍が不完全であることなどのために惜しくも見捨てなければならなかつた。本岳頂上より北へ昨夜の道を鋸尾根の寶珠山（駒形澤）から來たが今日は左手のノゾミ平の澤へ下る。細い狹い急な雪溪であるため、スキーの我々は隨分苦しんだ。技は如何に拙くとも、降りと言へば文句なしに行程は進む、本社から二時間で大倉澤出合に着いてしまつた。こゝで雪崩の時間をやり過すため長い休憩を取つて、飯を充分に食べた。往きはこゝからマミ澤の間非常な大高廻りをしたが、其後に雪崩が落ちたらしく澤雪にが大分具合良く結つてゐるので右岸をからみ左岸に渡つて低く少し卷いてマミ澤へ出た。こゝからは殆ど往きと同じコースを取つたが、その僅か二時程の間に見た雪崩は十に止らなかつた。白瀧のあたりでは土砂樹木を交へて落下する雪崩を目前にして一同呆然としたことさへあつた。大又澤の出合ふあたりからは氣ものんびりと夕餉の樂しみを胸に懷しの古巢ヌクミ平小舍へとスキーを滑らせた。夜、雨しらすが盛に飛んでゐた。

（一二、〇〇）——大倉澤出合（一二、〇〇）——二、三〇）——マミ澤（三、三〇）——白瀧（五、二〇）——ヌクミ平ノ小舍（六、三〇）

四月十五日　雨　小舎（七、三〇）――檜山澤徒渉（八、二〇）――アシナメクラ（峠）（九、〇〇）――九、一〇）――小玉川（一二、三〇）――長者原（一、〇〇）

雨。併し我々は徒渉することに一決した。長者原とヌクミ平との間の先日の苦しみは、この雨後の増水した玉川徒渉より遙かにつらいものであると思ひ、又善三郎が倉手山（九五二、五）と九〇八米との鞍部を越へれば長者原までは一滑りだと云ふ言を信じて。併し苦しみは同じだつた。雨の中、腰上に到る深さの徒渉、そのまゝで二百米の登攀、其處から小玉川までは泣きの涙だつた。ユワナ澤はてんでスキーは全く使へず、僅かに小玉川から長者原までの平地で用ひることが出來たゞけであつた。長者原は一時だつたが既に金丸の終列車に間に合はず、且又全身ずぶ濡れであるため今夜は再び善三郎の家へ厄介になることになつた。夜は大勢の子供達が我々の目、や耳、を充分に樂しまさせて呉れた。善三郎は、鶏をひねり、濁酒を暖めて我々を歡待して呉れた。

四月十六日　曇　長者原（九、二〇）――玉川（一、三〇）――金丸（二、二〇）――新發田

雨は小止み、今や我々は善三郎に、その子供達に、長者原に、そして飯豊に別れを告げなければならなかつた。殆んど始めから終りまでスキーを擔いで藪くゞりばかりやつてゐた檜山澤とも別れる時が來た。苦しい、困難と危險に豊んだ登山だつた。併し乍ら我々は苦しみが強い登山程いつまでもいつまでも消えぬ懐しい思ひ出となることを知つてゐる。この行も亦その一つに加へらる可きものであると信じる。それにも増して我々を感激させたことがあつた。善三郎が我々に要求したもの、それは我々が推算したもの〻三分の一にも滿たないものであつた。我々は彼の言ふ額の約倍のものを彼に與へて別れた。併し皆は仲々受取つて呉れず、その上善三郎は鷹巣に用事があるからと言つて態々金丸驛までスキーを擔いで來て呉れた。

長い吹雪、續く凶作。しかし裏日本も殊に奥まつたこゝ玉川沿ひの部落の人達は今や灰色の冬から覺めて燦々と降る春の太陽の下で忙しげに働いてゐる。何の不平も不安もないらしい。長者原には未だ昔の儘の姿がある。昔のまゝの村の中に、まだ昔のまゝの素直さと純朴さを持つた人々が居るのを見て我々は非常に嬉んだ。かつて秩父の人達は皆こんな氣持の人達ばかりだつたのだ。長者原でもいつかは電氣と自働車がその様な美しさを壊してしまふことだらう。金丸峠へかゝる邊りか飯豊に別れを告げ様と振返つて見たけれども、密雪は低く垂れて望み得べくもなかつた。飯豊の山も同じことを悲しんでゐるのかも知れない。

× × ×

飯豊は根據地、雪崩、吹雪の點に困難があり、これが嚴冬未登頂なる所以であらう。しかし五、六月頃なれば殘雪を踏んで峯から峯へと何の苦勞も不安もなく歩けると思はれる。裏日本に於て最も晴天の續くのもその頃である。立山などへ行くに一寸困つた様なとき、ゾンメルと天幕を擔いで飯豊を訪ねたらよい。其の意外に豊富な殘雪と廣大な山稜の高原、その上アルプスには求めたくも求め得られぬ山そのもの〻親しさと其處に住む人の心の純朴さ温さとは、すべて言ふに言はれぬ山の味となつて、訪れ來る登山者達を心から嬉ばせるに違ひない。

『マッターホルン災禍（アクシデント）』に對する後世の批判

吉澤一郎

爰にマツターホルン、アクシデントと云ふのは表題に括弧を施した通り、特に一八六五年に於けるウインパー一行のそれを、意味してゐるのである。今更ら恁んな問題を掲げて、貴重な紙面を汚すのも怎うかとは思つたが、是非何か變つたものを書けといふ編輯氏の註文もあつたので、仕方なく日本山岳會の會報に色々マツターホルンに關する古臭い史實を書いてゐる時分、怪しげな英語及び獨逸語の知識を以て譯して置いた原稿を、改めて整理し讀者諸士の話の種にでもなればと勿怪の幸といふ圖々しい望みを抱いて、此處に憶面もなく發表させて載く事にした。文章の下手な上に誤譯も隨分ある事と思ふから、可なり讀み悪いし、譯のわからぬ點もあると思ふが、其の節は原本を左に記して置くから山岳會へでも行つた序に、よく研究して戴き度いと思ふ。

參考文献

1. “Zum Matterhornunglück vom 14. Juli 1865” von Heinrich Düibi & Paul Montandon……“Die Alpen” vol. 5, 1929

2: “Report of the Official Enquiry into the Accident on the Mont Cervin in July 1865.”

by John Percy Farrar……"Alpine Journal" vol. 33, 1920

3. "Days of Long Ago (Charles Hudson, the Prototype of the Mountaineer of Today)"
by J. P. Farrar……"A. J." vol. 32, 1918

次に、ディュビー及びモンタンドンの使用した参考文献は、二十二の項目に分れてゐるが、其の内件に關する第二回目の筆に宛て、書かれたものゝ全文を次に掲げて置かふと思ふ。但し之はウインパーとしては、其の事後「タイムス紙」主筆になるものであつて、最初の最も記憶の新しい時に書かれたものに、エルレンベルクに宛てた書翰（一八六五年七月二十六日附）と、マツターホルン災禍に關しウインパーが最初に英語で書いたものとがあるが、之は割愛して置く。之等は今も瑞西山岳會ベルン支部圖書室にあつて、永久保存物となつてゐるとの事である。

×　×　×

ハスルミーアにて、一八六五年八月七日

エドワード・ウインパー

マツターホルンの災禍

山岳會長（註、アルフレッド・ウイルス）及び貴殿より、マツターホルンに於ける經過を發表する樣にとの懇切なる御奬めにより、私も最早今となつては沈默する事の不可能なるを感じ、簡略乍ら災禍其のもの及び前後の事情に就て公表する事に致しました。

七月十二日、水曜日の朝、フランシス・ダグラス卿と私はツエルマットにて案内者を求める爲めに、越へました。北側の雪渓を離れてから吾々は氷河の根元を迂廻し、フルツケン氷河を横斷し天幕、網其の他の品をラツク・ヌワールの禮拜堂に置きツエルマットに下りました。其處でペーター・タウグワルダーを傭ひ、且つ彼にガイド選定の許可を與へました。夕方、ハドソン卿がハドウ氏を連れホテルに這入つて來ましたが、或る人の質問に對して明朝マツターホルンに向ふ旨を述べたのであります。二つの隊が同じ目的を持ち、同時刻に同じ山に向ふ事は好ましからぬ事であるといふ點に於て、ダグラス卿と私の意見が一致した結果、ハドソン氏を招じ同行を奬めた所、心よく吾々の提言に讃同されたのでありました。所で私はハドウ氏を隊員とする前に、氏のアルプスに於ける經驗を尋ねました所、記憶の存する限りハドソン氏の答へは「ハドウ氏は誰人よりも短時間にてモン・ブランをやつた」との事でありました。そして尙私には未知の色々の旅行を述べ、最後に「兎に角吾々と同行する資格は充分ある」と結んだのであります。之は一流の登山家の言葉でありますから、立派な證言でありませう。從つてそれ以上の質問はなく、ハドウ氏は一行に參加する事となつたのであります。

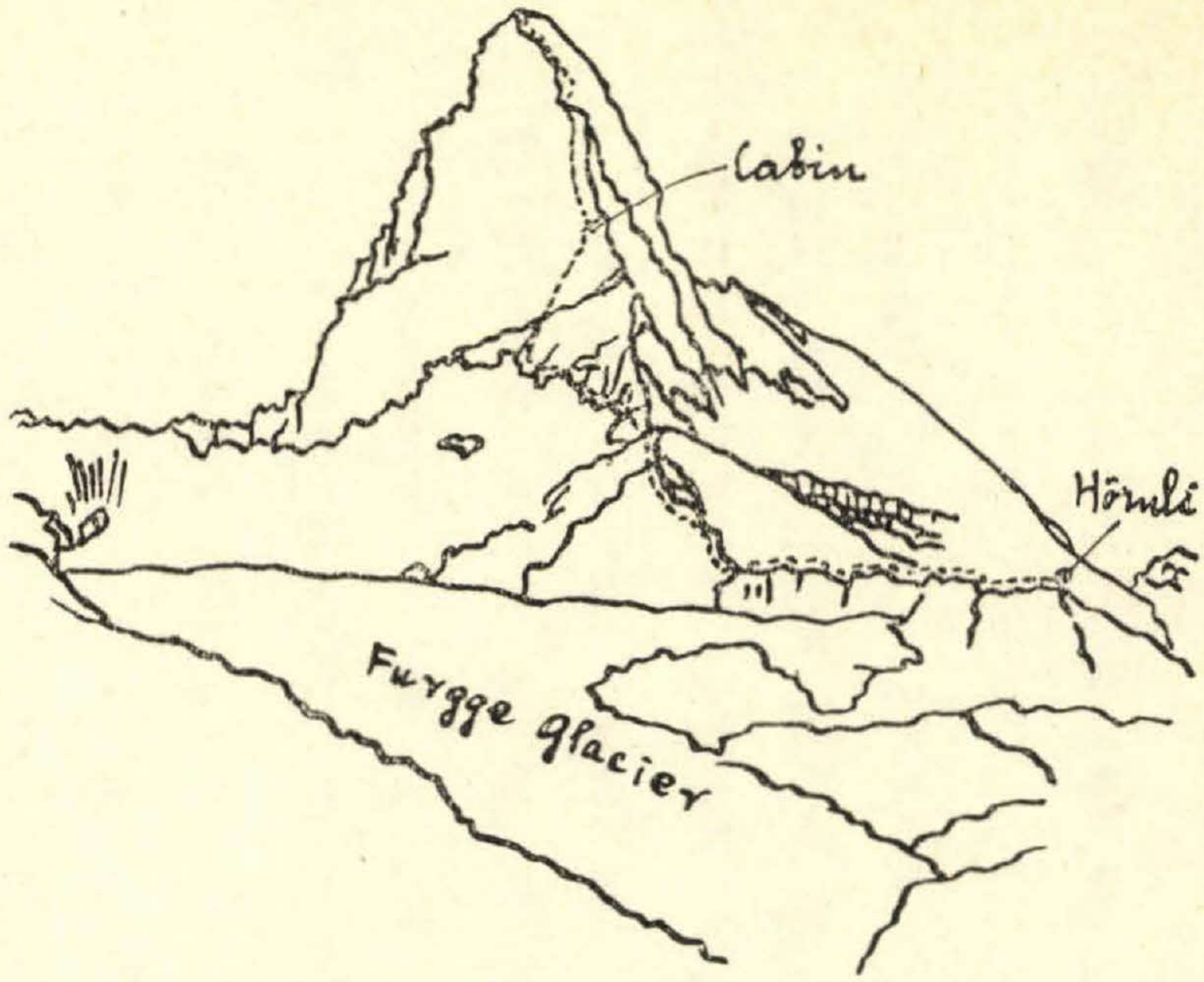
次に吾々はガイドの問題に移りました。ミツシエル・クローがハドウ及ハドソン兩氏と共に居り、ハドソン氏はペーター・タウグワルダーが行く以上、他の者の必要はないと考へました。其處で之を一同に諮つた所、異議を申立てる人も無かつた譯であります。

吾々は木曜の朝、五時三十五分ツエルマットを出發しました。其の時タウグワルダーの希望により、其の息子を二人伴つたのであります。彼等は全隊員三日分の充分な食料を運びました。豫期以上の困難に遭遇するのを、懸念しての上でありました。又綱は充分あるので、ツエルマットからは持參致しませんでした。「ハドソン氏のツエルマットに持つて來

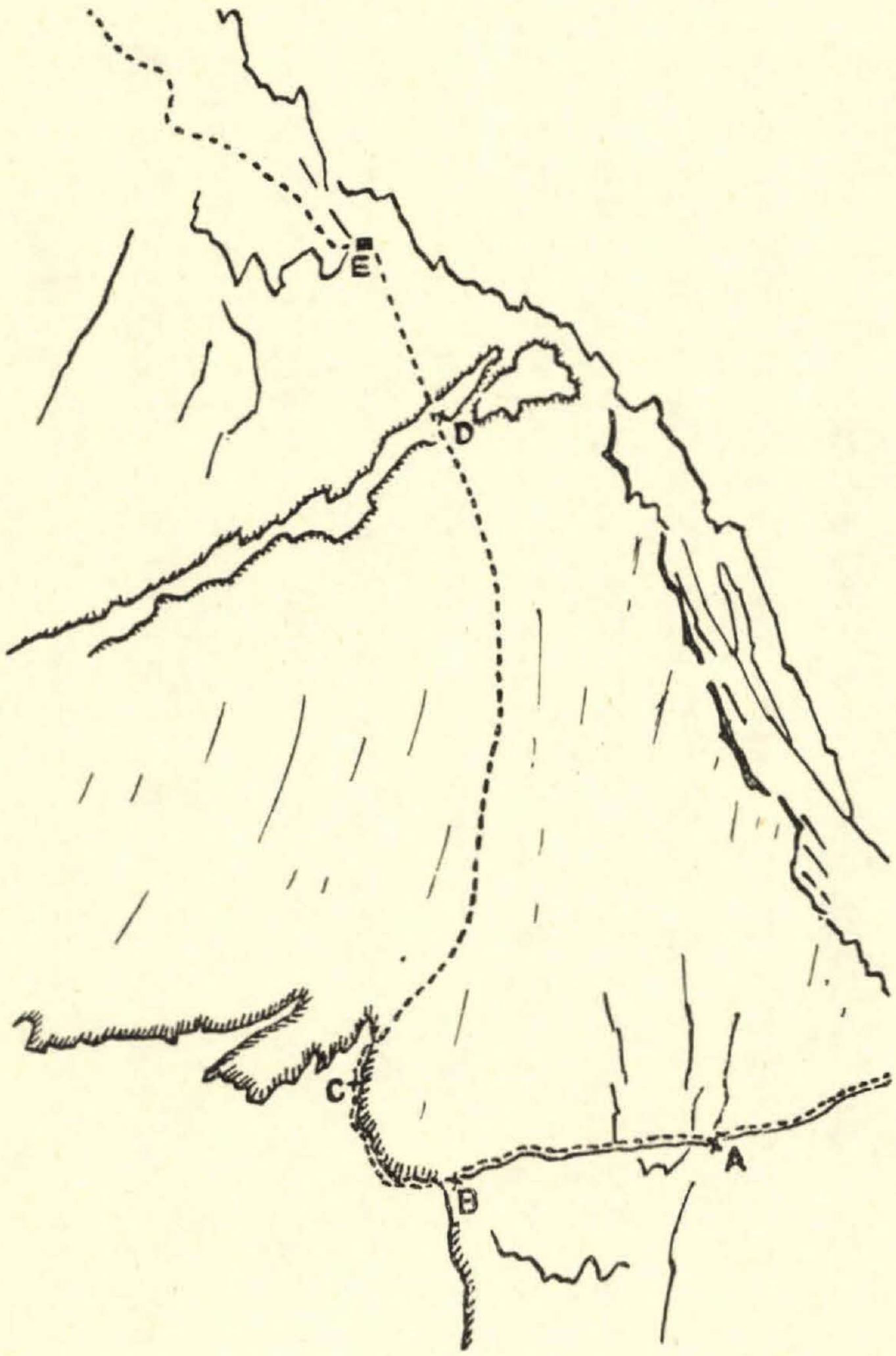
た針金入の綱を、怎うして持つて行かなかつたのか」とは屢々受ける質問でありますが、私はソン氏はそれを口にした事もなく、又私はそれを眼にもしませんでした。此の登攀に於ては、私の綱のみが使用せられたのであります。即ち（註、都合上原文の儘掲げる）

First, about 200 feet of a lighter and weaker Alpine Club rope; second, about 150 feet of a kind I believe to be stronger than the first; third, more than 200 feet of a lighter and weaker rope than the first, of a kind used by myself until the Club rope was produced.（註、合計三本とは書いてない所に注意の事）

吾々がツエルマツトを出る際には、實際にマツターホルンを攻撃する意圖でありました。——多くの人々が云ふが如く、決して偵察でも試みでもなかつたのであります。斯くして吾々は長い經驗によつて得た知識によつて、最も困難なる山岳登攀に必要なる用具は、總て準備して居たのであります。然し乍ら最初の日は無理に高所に到らうとは考へず適當の場所に天幕を張る積りで居りました。從つて歩行は緩く、ラツク・ヌワールを出たのは八時二十分、次に山頂とヘルンリイを結ぶ山稜を傳はり途中屢々立停りなどして、午前十一時二十分山體の下に到着致しました。其處から山稜を離れ左方へ、東北面を攀じたのであります。十二時少し前吾々は約一一、〇〇〇呎の地點に、格好の幕營地を發見致しました。併し乍らクローとタウグワルダーの息子（兄）の二人は翌日の時間節約の爲に尚先の部分を偵察に參りました。殘りの者は幕營の準備をなし、二人の歸へる時分にはそれが略々出來上つたのであります。彼等の報告によれば、此の先には何等困難な場所なく今からでも全隊山頂に登り、下山する事も容易であるとの事でありました。吾々はその午後を或る者は陽向ボツコに或者はスケツチに、又蒐集に過し、翌朝の輝かしい約束を殘しつゝ陽が落ちて行つてから漸く吾々はテントに戻つて夜の仕事を致しました。ハドソンは茶を私はコーヒーを沸かし、それから各自の毛布袋に潜



The Matterhorn from the North-East (A. J. vol. iv)



瑞西側ルートの初めの部分

(Theodor Wuudt "Das matterhorn und seine Geschichte"より)

A. 初登攀隊の幕營地
(Lagerplatz der ersten Bergsteiger)

B. 氷河への移り目
(Einstieg auf dem Gletscher)

C. 氷河の舌端
(Gletscher Zunge)

D. 大雪渓
(Grosse Schneerinne)

E. 上の少屋
(Alte obere Hütte)

り込んだのであります。タウグワルダー親子、ダグラス卿及び私は天幕に入り、他は自ら好んで外に寝る事となりました。然し夜の帳が下りてからも、上方の絶壁には吾々の笑聲やガイドの歌が反響して居りました。天幕の中では皆愉快にそして悲慘事の事などは、夢にも思つた者は居りませんでした。

吾々は十四日の朝未明に結束し、出發致しましたが登山には差支へぬ程度であります。然し（弟の方）は其の場に殘して參りました。六時二十分一二、八〇〇呎の地點に達し、三十分の休憩の後、九時五十五分迄は何等の障害もなく五十分の休憩をとりました。此處迄は東北面を辿つたのであります。大部分綱を使用せず、或時も一ケ所として困難な場所はありませんでした。大部分綱を使用せず、或時はハドソンが、或時はタウグワルダーの息子は私が先頭を務めたのであります。斯くして吾々はツニルマツトからは、垂直或はオーバーハングに見ゆる部分の下に到達致しました。そして此處からは最早同じ面を登る事は、不可能となつたのであります。一同マツトに下るアレートを暫く辿り、次で右手即ち北面に移つたのであります。此の前に隊員の順位を變更致しました。第一にクロー、次に私は最後となりました。此の變更は一時登攀の困難となつた事、及び注意を要する點を考慮しての上の事であります。第三にハドソン。ハドウ及び老ペータは最後となりました。此の變更は一時登攀の困難となつた事、及び注意を要する點を考慮しての上の事であります。先頭に行く者は、スリップの心配のない者を必要としたのであります。此の部分の大體の傾斜は四十度以下で、從つて殘雪は多量にあり一面に凹凸なき斜面で、唯所々に岩角が露れてゐるのであります。時には上ものが夜の內に凍り、薄い氷層を形成してゐる部分もありました。然し相當の登山家には、何等危惧に値する所ではありません。然し乍らハドウ氏のみは、斯くの如き場所に不慣れと見え屢々助力を必要と致しました。然し誰も氏を停ませ樣といふ者はなく、結局頂上まで引き上げられた譯であります。此の部分に於てハドウ氏に經驗せられた困難なる

ものは決して疲勞或は憶病に原因するものではなく單に、且つ全く經驗不足に依據するものであると爲すのは、强ち穩當でないとは、云へない事であると思はれます。私に續いた私の知る限り全登攀中如何なる場合にも、他からの助力を絕對に受けなかつたと記憶して居ります。私がクローの手をかり又は綱を引張つて貰つた後、同樣な事をハドソン氏にしやうとした時に、氏はいつも之を不必要と云つて斷つて居ります。それが過ぎてからは傾斜もの惡場は大した距離ではなく、三〇〇呎は越へなかつたと思ひます。綾くなり、頂に近づく頃には綱を外してクローと私は山頂に馳け登つた程でありました。二人の登頂は一時四十分で十分後には他の人々も山頂に立つ事が出來ました。

私は特に山頂に於ける隊員の狀態を、述べる樣に云はれて居ります。誰にも疲勞の色は見えませんでした。疲れたか怎うかを聞いた時に、クローは私に笑ひかけたのを憶へて居ります。吾々の行動は十時間にも足らず、其の中二時間といふものは休憩に費されて居ります。唯私はクローの口より危險の暗示の樣なものを聞きましたが、然しそれは遇然であり或は何の意味もなかつたものと思つて居ります。彼は私が「吾々は可なり緩つくり登つたものだね」と云つた後で「全くです。他の人々と一緒になるより私は旦那と、も一人のガイドと三人で下り度いものだと考へて居ります。」と云つて居りました。吾々自身の事に就て云へば、その夜ツエルマットへ歸へる時に、必要な用意をして居たのだといふ事が出來ませう。

山頂には約一時間居りました。其の間ハドソンと私は例によつて、パーティの最良の最も安全な編成に就て相談致しました。そして最も强力なクローを先頭に、ハドウを次位に、ガイドと其の足取りに於て殆ど變る所なきハドソンは第三位を欲しました。次にダグラスが置かれ、殘りの最强力者老ペーターが之に續きました。私は

ゝつた時には綱を岩に固定させてから、それを補助として下りさうせねばならぬと決定した譯ではありませんでした。

隊は私が山頂のスケツチを描いてゐる内に、前記の樣に編成されました。そして私が自分の場所に結ばれるのを、待つて居りました。その時誰かゞ壜の中に吾々の名前を入れるのを忘れた事を憶ひ出し、一同は私にそれを依頼し、私がそれをしてゐる間に下降が始まつたのであります。數分後私はタウグワルダー（子）と綱を結び合ひ、彼等の後を追ひ將に前記の難場の下降を始めやうとした時に、一行に追ひ付きました。其の時は愼重な注意が拂はれて居り、一人が確保してから次が進むといふ具合に、一時に一人づゝ行動して居たのであります。各隊員の間隔は約二十呎でありましたろう。然し彼等は補助綱を岩に固定せず、且つそれに就て誰も口にするものはありませんでした。此の提言はハドウ氏の爲に行つたもので、それが再び私に提言されたか怎うかは確かでありません。

前述の通り私は一行から離れた儘、先行者に續いたのであります。

場合老ペーターだけでは自分を支へる事が出來ぬから綱を結んでくれと云ひました。之が爲されたのは炎禍前十分程でありましたろう。斯く疑ひもなくタウグワルダーは、危いを助かつた譯であります。

私の知る限りアクシデントの瞬間には、誰も動いては居なかつたと思ひます。然し之は前方の二人は岩角に遮られて一部分しか見えませんでしたから、タウグワルダー親子にしても瞭りした事は云へないかも知れません。哀れなクローは彼の氷斧を傍に置き、ハドウ氏により以上の安定を與へる爲に、その足を片方づゝ適當な位置に持つて行つてやつたものと想像されます。然しその肩の動きから察すると、クロー氏は前記の樣にしてから向きを換へて一二歩下りやうとしたのでせう。此の時ハドウ氏はスリツプして彼の上に落ち、彼を轉ばして了つたのであります。私はクローの驚愕の叫

びを聞き、次に彼とハドウ氏が墜落するのを見ました。續いてハドウ氏は足場を奪はれ、直ぐダグラス卿が引きづられました。之等總ては一瞬の出來事であります。然しクローの叫びを聞くや私とタウグワルダーの間で、切斷して了ひました。二、三分間の間、噛みつきました。吾々の間の綱は張つて居りました。從つて衝撃は一人に來たかの樣に感じられました。然し遂に綱はダグラス卿とタウグワルダーの間で、切斷して了ひました。二、三分間の間、背を下にして滑落して行くのを見ました。そして一人一人斷崖から斷崖へと、四千呎下のマツターホルン氷河へと消えて了つたのであります。綱の斷れた瞬間から彼等を救ふ手段はないのでありました。

凡そ三十分といふもの、吾々は身じろぎもせず現場に殘つて居りました。恐怖に半狂亂となつたのであります。自分等も亦他の人々の樣な運命になるのだと云つた風に打震へて居りました。

安全な場所に下りてから、直ぐ私は斷れた綱を出させました所が實に驚いた事には、それこそ三つの綱の中最も弱いものであつたのであります。最初の五人が結び合つてゐる時に私はスケツチをして居たものでありますから、何れの綱が使用せられたかは知りませんでした。然し之は彼等が他のものよりよいとして、使つたものと思へないのであります。それは空中に於て切斷されたのであります。然し此の場合は違ひます。それは岩との摩擦によつて切れたと云はれます。然し此の場合は違ひません。

二時間以上も經つてから私は、いつも次は私の番であるのだと思ひ續けて居りました。といふのはタウグワルダー親子は全く喪心して助力を與へる所か、何時二人の內一人がスリップするかといふ事が、保證し得なかつたからであります。殊に息子の方は一層恐怖に襲はれて了ひ、實際私はその場合安全な所へさへ下れば、何も起らなかつたかの樣に笑ふ事も、煙草を吸ふ事も、食べる事も出來るのだからと云つてやるのでありました。下降に就て之以上云ふべき事はあ

りません。不幸な友の跡を求めましたが勿論無駄でありました。一三、〇〇〇呎の地點で既に夜となり、ツエルマツトに着いたのは翌日の午前十時半であります。

ツエルマツトに着くや直ちに村長の所へ使を出し出來るだけの人數を集め、四人の落下地點を望み得る場所まで出掛けて貰ふ樣依頼しましたが、多くの人が出かけました。そして六時間後に戻りその死體は發見したが、其の日は現場まで行けぬとの事でありました。彼等は日曜(十六日)の夕方出發、月曜の未明に死體に達しやうと提議して來ましたが私とマツコーミツク卿は一瞬も愚圖々々する事は出來ないので、日曜の朝出發する事に決めました。ツエルマツトのガイドは日曜の朝の彌撒(マッス)に出ねば破門されるといふので誰も從ふものがありませんでした。然し之は多くの者にとつて酷い苦痛であつたろうと信じます。それは前記の理由以外には彼等の足を停める何ものもないのです、と涙と共に語つたガイド達を見れば解る事であります。ロバートソン卿、フイルポツツ氏は自分のガイドのみでなく自らも之に參加し、ブラー氏はロツホマツター兄弟を、シヤモニイ・ガイドのペエオ、及びテエラは進んで參加して吳れました。

吾々は日曜の午前二時に出發、ヘルンリイを過ぎてから右方マツターホルン氷河のセラツクスを横切り、八時半その上の臺地に着きました。友が横はつてゐると想像される一隅は、直ぐ近くにありました。吾々は或る陽燒けのした人が望遠鏡によつて探索してゐるに、ふいと突然顏面蒼白となり言葉もなく他の人に之を渡したのを見て、總ての希望は去つたと思ひました。吾々は進みました。一行は落下の順序に列んで居りました。クローが少し許り離れハドウは其の近くにそしてハドソンは少し離れて後に、然しダグラス卿のみは見當りません。驚いた事には此の三人が山岳會の、即ち第二の丈夫な綱を使つて居りまして唯一の連接部——タウグワルダーとダグラスの間——のみに一番弱いのを使つてあつた事であります。

マツコーミツク卿の手紙によつて、其の後の經過に就ては貴下は御存知の事と思ひます。ヴァ二十一名のガイドは、此の二十一名のガイドは、此の死體をツエルマツトに運びました。英人は總て此の貴い勞力――危險と困難の――に對して感謝せねばなりませんでした。

ダグラス卿の死體は、彼等も亦見ませんでした。それは多分岩壁の何處かに引懸つてゐる事と、ダグラス氏を失つた悲痛は、誰人よりも以上のものでありました。若いとは云ひ乍ら彼は最も完成された登山家であり少しの助力をも必要としなかつたのみでなく、一度のスリツプをも致しませんでした。氏は私と遇ふ數日前マツターホルンよりも一層困難と信ずべき、ガーベルホルンに登攀してゐるのであります。

私は七月二十二日迄ツエルマツトに停り、その筋の審問を待ちました。私は最初に訊問せられ對して爲さるべき質問を私が綱に關して發見した事實が、腑に落ちなかつたからであります。其の質問は私が綱に關して發見した事實が、腑に落ちなかつたからであ法廷に手交致しました。それは拘はらず未だ私の手許に參つては居りません。解答せられた相でありますが、約束に

貴下よ、これで私の悲慘なる物語りは了ります。單なるスリツプ、或は單なる不注意の一歩が此の恐るべき災禍の全原因であります。此の悲慘事は決して忘れられる事はありますまひ。私は之に對して唯一つの觀察を持つて居ります。若し綱が斷れなかつたならば、此の手紙を貴下は御讀みになる事は出來なかつたろうと思ひます。それは四人が落下しその衝撃が一時に來た場合吾々は到底之を支持する事は出來なかつたと、信ずるからであります。然し又同時に四人の者の間の綱が、私とタウグワルダーとの間の樣に緊張して居たならば、あの災禍は生じなかつたのではないかとも信じます。綱はそれが適當に使用せられた場合、非常に大きな防衛物となります。然し岩上と云はず雪或は氷河の上にせ

よ、若し二人が互ひに近づき綱がたるんだ場合には、全隊員が危険に陥入つてゐる時であります。何となれば一人がスリップ或は落下した場合には機勢を得て、其の爲めに一人々々が次々と引摺られ全員墜落といふ結果になるからであります。然し綱さへ緊張して居れば敍上の事はまづ起り得ないものでありませう。

× × ×

扨て私はいよ〳〵前記の三文献に從つて、右の登攀及び災禍についての記述を行ふ事になつた。

敍述は左の如き順序である。

（A）前　書　き
（B）登攀準備に就いて
（C）◎登攀隊と各員の能力
（D）①旅　行　者
（E）②案　内　者
（A）登攀の處理と實行
（B）下降に於ける順位綱、結合、災禍

以　上

前　書

一、一八六五年七月十三日、午前五時、旅行者四名、案内者三名よりなる一隊がツエルマットを出發、マツターホル

ン登攀へと向つた。

二、同日夕刻、山體の基部に幕營。

三、七月十四日午前三時四十分頃同所發、午後一時四十分山頂に達す。

四、登路を下降路とし、其の順位左の如し。

（下）ータウグワルダー（上）

⑦ タウグワルダー（子）

⑥ ウインパー

⑤ タウグワルダー（父）

④ ダグラス

③ ハドソン

② ハドウ

① クロー

五、斯くて山頂下約三〇〇〇呎の地點、雪を被る足場惡き岩場に達す。

六、此の難所通過に際しハドウはスリップを爲し、クローを轉落せしむ。

七、二人の重量はハドソンを、次でダグラスを引落す。

八、此の瞬間に上方のものは足場を固め、其の目的は達せられしもダダグラスとタウグワルダー（父）の間の綱の切斷により災禍となる。

九、殘存者は最善の注意を拂ひつゝ下山、途中約一三、〇〇〇呎の地點にある岩棚に露營、翌十五日午前十時半ツエルマットに歸着す。

右に依れば其の間犯罪的事實はなく、災禍の原因はハドウグワルダーにあり且つ責任或は罪の歸すべきは隊員はないといふ事になる。

ウインパーは七月二十一日、其の筋の審問に應へ、且つタウグワルダーに對する數條に亘る質問事項を判事に手交してから、ツエルマツトを去りインターラーケンに向つた。其處で彼はオーベル經營の旅宿に泊り、書翰を書いた。之は當時新聞紙上に現はれた誤報の眞相を述べたものである。此の手紙が即刻發表せられなかつた理由は、一九一一年十二月十五日附の「アルピナ」誌に書いてある。此の當時フエレンベルクはオーバーランド地方に居り、ラウターブルンネンのブライトホルン及びグロース・グリユーンホルンの登攀を行つて居た爲め、此の書翰を眼にしたのは漸くグリンデルワルトに戻つた八月十日の事であつた。斯くして獨譯のものが最初に「ゾンタークスポスト」に現はれたのである。トはその後の號に於て、「ジユールナル・ド・ジユネーヴ」に宛てられた佛譯のものは結局公表せられず、又「ゾンタークスポスト」主筆ローウインパーは其の後英國に歸り、山岳會長及びタイムス主筆の奬めにより、前揭の加き眞相を發表した。一八七一年から彼の晩年に至るまで世に現はれた彼の諸著作中に於てそれを檢討する事は興味ある研究ではあるが、此處ではそれを略す事にする。

一八九五年五月、ジユール・モノとの會見記、それはモノ・ド・ツエルマツト」八月號に「セルヴアンの初登攀。未發表の詳細」と題して出したものであるが之に就てハインリツヒ・デイユービーは瑞西山岳會誌第四七卷に次の如く云つてゐる。

――此の話は、彼が尙未だ記憶の新しく風評の影響なき時に書かれた、インターラーケンの「原手記」よりも遙かに

優れたものであつて、殊に其の中には使用せられた綱、及びせられたものとの間に矛盾のあるのは當然であらう——と。

（B）登攀準備に就いて

（ハドソン、ハドウ、クロー）
（ダグラス、タウグワルダー、父と子）
（ウインパー）

の三隊がそして四人の旅行者が何等の前約なくツエルマットに集り、共同登攀を行つた事は單なる偶然事に過ぎないが、各隊は已に其れ以前別箇にその登攀を決意し且つ準備を行つて居た。

即ちウインパーにとつては全體として第九回目の試登になり、東面に於ては最初のものである。攀の計畫を持つて居た。それは當時彼に傭はれてゐた老ペーターが東北部の可能性を見極め、ダグラスと共にブルイユに行つた（此の目的は不明）息子にその事を傭主に告げしめてゐるからである。ハドソンは——ハドウは彼にとつて偶然の同伴者に過ぎない——夙に此の計畫を持ち、その爲に針金入りの綱までも用意して居る。但しこれは餘計なものとして登攀の際にはツエルマットの英國牧師ジョセフ・マツコーミツク卿と同登攀を爲す計畫をしたが、卿の職務上の都合で實現しなかつた。最後に彼は前冬、此の登攀を行ふ爲にケネデイを訪問してゐる。

◉ 登攀隊と各員の能力

三隊の結合によつて、茲に七人からなる大登攀隊が出來上つた。これは數に於て多過ぎるのは言ふまでもない事である。從つて致命的となるべき運命は、已に此の內に存してゐたのである。之は誰しも認める所であつて、瑞西人では最初にアブラハム・ロート後にデイユビー、英國人では特にフアーラー及びフレツシユフイルドが之を非難してゐる。——斯くの如き大部隊に於ては、假令各員が相當の經驗家であるとしても、誤られた過剩の安全感を惹起し勝ちのものであつて、餘程考へなければならない問題である。注意の行き屆かぬ事は勿論あるし、殊に此の場合の如く誰が隊長であるかの判然しない時もある。從つて責任を持つべきものが定まらぬ。クローは優れた經驗家の居る他の二隊の結合した以上、何れにも屬する從臣と云つた立場に置かれて了つた。故に困難なる登攀に於ては、可なり人數の制限を行ふべきは云ふ迄もない。岩場に於ては墜石の危險といふものがあり、隊員を假に十人として先頭のものが落した石は、殿りの者に達した時非常な勢を持ち、或はそれを死に到らしめる場合がなきにしも非ずである。ウインパーの記述に從へば、總ての大部隊に共通のある偶然事が存在してゐる。それが下降に際して、直ちに致命的事件となる危險要素となつたのである。外面的に見て一致的行動を爲すものゝ如く思はれても、各員不識の內に却つてその反對の方向に向つてゐた事は明らかであつて、殊にウインパーは實際には殆ど獨逸語を知らず、山でよく使はれる schmell, langsam（速い、緩つくり）の如きものしか解さなかつた。且つ佛蘭西語も大して出來るといふ程ではなかつた。老ペーターの佛語の知識もウインパーの獨逸語と同樣なものであつた。但し息子のペーターの方はヴオー州に務めて居た事があつて、佛語は可なり了解の行く方であつたらしい。此等の事はガイドと旅行者との間の不一致のある點を、

説明してゐるものに他ならぬ。——

以上はフアーラーの言葉を綜合した彼の意見であつて、此の他にも色々あるが總體的のものとしては之で充分であらうと思ふ。

1　旅行者

Rev. Charles Hudson (1828－1865)

當時三十七歳でありし一、チヤールス・ハドソン、四人の内での最年長者であつた。英國山岳會員となつたのは一八五九年以來であつたが、困難なる登山經驗は十二年以上に亘り、當時は精神的にも肉體的にも最も完成せる一流の登山家であつた。その大體の登山經驗は左の通りである。

・一八五五年、エーモン・ブランに於けるガイドレスの初登頂を爲す。

・一八五六年、アラリンズリー、ケネデイ、スマイスと共にモン・ブランの新登頂を爲す。

・一八五九年、メルヒオール・アンデルエツク其の他を伴ひ、ポツス・デイユ・ドロマデールを越へモン・ブランの

・一八六五年、ケネデイ、ホツキンソン等と共にヴエルトン峯の新登路よりの第二登頂を爲し（七月五日）同七日ケネデイ、ハドウと共にモン・ブランに大速力の登山を爲す。

彼は此の他、冬期に於いても身體の鍛錬を怠らず、レツスリイ・ステイヴンの如きは「彼は自分の遇つた中で最も強

力な進取的登山家であつた」と云つて居る程である。尙ケネディはヴエルト峯よりの下山を叙述する際に、彼の事を次の様に書いてゐる。「……クローは悪場の總てに於て先頭をきり、ハドソンは最後位にあつた。人から助力をうける事を非常に嫌つて居たらしく、而も其れを多くの場合手際よくやつて退けてゐた事は、他の英國人の間には見られぬ現象であり、全く彼はガイドと同等な實力を持つて居た。」と。

従つて彼はウインパーに對しては、最も危険な競爭相手であつた。然しその登攀に際しては道徳的態度を持し、友誼的な完全無缺な人間であつた。

尙彼はガイドレス・クライミングに對して一紀元を劃する一書を、ケネデイと共著にて世に贈つてゐる。

"Where there's a Will there's a Way: An Ascent of Mont Blanc, by a new route and without guides" と云ふ書名であつて、第二版（一八五六年）の方には尙「モンテ・ローザの二つの登攀」が附け加へられてある。

二、エドワード・ウインパー

Edward Whymper (1840—1911)

彼は當時二十五歳の青年であつた。其の登攀技能に關しては、誤謬もあるかも知れぬが、に於ては、本來何等の證明をも得られない。然し乍ら吾々は、優れたるガイドと共に四、五回の夏季休暇に於ける大旅行及び重要なる登山を認める事は出來る。グランド・ジョラツス、コル・ドラン、ヴエルト峯、ペルヴー、バール・デゼクラン、グラン・コルニエ、リユイネツト、モーミング・パス等は其の中の特記すべきものである。

ブルイユ側よりのマツターホルン試登、——困難にして複雑なる登攀ルートたる事は疑ひない——八回あり。殊に一

八六二年七月の第四回に當る單獨登攀は、固定ザイルなき當時として「クラヴアツト」近く迄達したるは特記すべきであろう。それは彼の能力を充分に證明し得る。此の能力を以て瑞西山稜に當つたならば、假令單獨登攀としても「肩」は勿論、或は又山頂まで達する事が出來得たかも知れぬ。然し乍ら彼が此の外見上恐怖すべき山稜を、一度も試みなかつた點は特記すべきものである。一八六四年に至つて漸くアダムス・レイリイと此の方面の攻撃を目論んだ事は、カレルの獨斷的感化より離脫する事となつた證據である。故にウインパーは全く銀鍊經驗を經た登攀家である事には疑ひなく、殊に彼は岩場を好んだ事がその著書より察せられるのである。又マツターホルンの最上部の惡場に於て、彼はクローの手を屢々借りた事をも謙讓に公表してゐるが「肩」まではハドソンと交代にて先頭を切つてゐる。斯くして彼も亦其の年配にあつては、色々の意味に於て優れたる登山家であつた事は事實である。

左に其の登山經歷を略記する。

一八六〇年　最初のアルプス旅行。(Lauterbrunnen——Kandersteg——Gemmipass——Saastal——Zermatt——Rhone——Eggischhorn——Grimselpass——Interlaken——Gr. St. Bernhard——Chamonix——Mont Cenis etc.)

一八六一年　Mont Pelvoux に英國人として最初の登頂を爲す。マツターホルン第一回試登。

一八六二年　マツターホルン（第二回——第五回）、モンテ・ローザ

一八六三年　Cimes Blanches, Breuiljoch, West Furggenjoch, Grand Tournalin. マツターホルン第六回目試登。

一八六四年　Col des Aiguilles d'Arve, Aig. de la Sausse, Breche de la Meije, Barre des Ecrins, Col de Triolet, Mont Dolent, Aig. de Trelatête, Aig. d'Argentière, Moming Pass.

一八六五年　Grand Cornier, Grandes Jorasse West Peak, Col Dolent, Aig. Verte, Ruinette, マツターホルン——七

回目及び八回目（登頂）——

一八六六年　Tete de Valpelline。

一八六七年　グリーンランドの探険。

一八七一年「アルプス旅行記」出づ。

一八七二年　グリーンランドの第二回探険。

一八七四年　マッターホルン。

一八七九年——一八八〇年　ジヤン・アントアヌ・カレル及びルイ・カレルを伴ひアンデスの探険を行ひチンボラゾー其の他の初登頂を爲す。

一八九二年　モンテ・ブランの山頂に露營す。

一八九四年　同山頂に五日間を送る。

一八九五年　マッターホルン。

一九〇一年　第一回カナデイアンロツキー遠征。

一九〇四年　第二回カナデイアンロツキー達征。

一九〇九年　カナデイアンロツキーに遊ぶ。

一九一一年　シヤモニーに於て急死す。

彼は當時十八歳にして、フランシス・ダグラス
Lord Francis Douglas（1847－1865）
か過ぎず、全隊員中に於ても最年少者であつた。長身痩軀ではあつたが、
固なる意志の所有者であつたらしい。彼はその以前二、三シーズンの登山經驗を持つて居た。
彼は老ペーター、ヴインパーに遇ふ以前よりオーベルガーベルホルン新登
優れたる業績である。登攀中にあつては他の助力を全く必要とせず、足取りにも全く危
代にあつた」と云つてゐる。登攀中にあつては他の助力を全く必要とせず、足取りにも全く危
ンパーに遇ふ以前よりオーベルガーベルホルン新登
と云つてゐるが、あのフアーラーは彼を以て活動的な英國青年であり、經驗者と従へば何處へでも行ける人間であつた
ユレよりモン・ブランと共にグラン・ミ
し乍ら彼は之がはじめてのアルプス旅行であり、何等價値ある登攀を行つて居ないのである。
登山的技能といふものは或る點に於て精神及び肉體的自然の要素に依るものであつて、人によりその程度には非常な

當時十九歳である。

る懸隔があるものである。相當な經驗者が時に初心者を伴ひ、その者が案外確實に、或かに登攀するのを見て驚く事はよくある。然し乍ら斯くの如きは寧ろ例外であつて、ハドウの場合し常に助力を必要とし、又其の助力の方法を見る時、彼が決して天分ある登山家であつたとは承け老ペーターも判事の前で「ハドウは決して巧妙な登山家ではなかつた」と述べてゐる。凡そ之に類した缺陷は、唯長い經驗によつてのみ除去し得るものである。然も亦他に於ける同樣に天分を持つものに比し、其れなきものにあつては相當狹い制限を設ける必要があり、即ち長い經驗によつても中々除去し得ぬものが往々にしてあるものである。

然し乍ら少く共山麓に止まらなかつた事に對して相當な熱望を持つた此の青年に對し、彼が其の指導者たるハドソンと分し、ウインパーに向ひ次の日（即ち十三日）登攀を行ふ旨を告げてゐる。ハドソン自身にしろ、其の岩場にあつて甚だ厄介な荷物となるべき事を知らなかつた經驗不足者を、同行したといふ事は理であり亂暴極まるものであるとは、明確に云ひ得ぬ節があつて、確實性を高めるものであると考へたに相違ない。若しハドソン、ハドウ、クローの三人のみにては クローが最後の位置を占めたならば、假令ハドウに經驗不足はあつたとしてもまづ災禍の如きものは起らずに濟み得たかも知れないのである。ハドソンのハドウに對する批判的言葉即ち「彼は吾々と同行し得る充ふ」は、ハドウソンより遙かに年配若きウインパーにとつては、決定的なものであつたろう。又ウイの參加を理由に、已れの計畫を放棄する事は恐らく出來なかつたに違ひない。

恐怖を以て見られホルンに於て、如何なる困難が登攀を阻止するかに就ては誰も知らなかつたマツター

一人として豫知するものなかつたかゝる探險的登攀に、若き初心者の參加の不適當なる事は多言を要せぬ所である。

然し乍ら困難は漸く「肩」の上部に於て、はじめて現はれたのみであつた。が「誰も手足纏ひのなかつた」とウインパーは述べてゐる。ハドウが若しタウグワルダー（の息子）と共に「肩」に居なかつたに違ひない。

せやうと提言するものはあつたに違ひない。

待つ事ならば、殘りの青年を推奬した事實は、非難せぬ譯には行かぬのである。

兎もあれ經驗あるハドソンが、單なる頑張りのみを以て此身を以て之を償ふべき結果となつてしまつた。

る。それによつてハドソンは災禍の間接の原因となり、彼は最後にハドウはハドソンの弟子であり、其の面倒を見ねばならぬ立場にあつたとはよく云はれる事である。

之には一八六五年七月十六日の「タイムス」に次の樣な手紙が揭載されてゐる。

主筆殿

最近のマツターホルンに關し、國內及大陸に於ける英國人間に信じられてゐる事實に相違ある事を、申述べ度ひと思ひます。それは、實に輕卒であるといふ事であります。丁度私は其の時直ぐ近くに居りまして又總ての事情も知つて居りますが、あの二人とハドソンとの間には、普通の旅行者關係以外のものは見られませんでした。自らの、及び他の貴重なる生命を犧牲とした彼の行爲が、愼重なりや輕卒なりやといふ事に就ての彼の責任は、不當に誇張せらるべきものではないと思ひます。

私は此の同僚にして賢明なる敎父であり、同時に古い學友に對し貴殿の御同情と御助力をお願ひしたいのであります。

七月二十一日

2 案内者

シヤモニー、ロイヤル・ホテルにて

J・W・チヤールトン

ミツシエル・クロー

Michel Croz (1830—1865)

彼は三十五歳でありました。當時アルプスを通じての最も優れたる案内者であり、自身としても最も働き盛りの時代であつた。數多くの輝しき初登頂の記錄を持ち、ウインパーの記述にあるかのモーミング・パス通過の際の技術を以てしても如何に彼が當代稀に見る名登攀者たるかを示すものである。而も彼の特異の力、氷雪に關する教養と共に單なる山に於けるガイドたるに止まらず、最も良き意味に於ける指導者であつた。

「數ある案内者中クローこそは多くの場合、心の友であつた」とウインパーは述懐して居る程である。

ケネデイはハドソンとの一八六五年七月のモン・ブラン登攀の際に於けるクローを評して

——山頂を踏みたるガイドの中の最たるもの、……嘗つて眼にした何れよりも勇猛なる登攀振りを見せた——

と云つて居る。

ペーター・タウグワルダー（父）

Peter Taugwalder (père) (1820—1888)

當時四十五歳であつた。假令クロー、カレル或はアルマー等と同等であつたとは云へぬ迄も、者としての資格能力を持つてゐた事には疑ひない。

フアーラーは云ふ。

――私の考へでは彼はあの災禍によつて不當に評價、誤解をされてゐると思ふ。彼はアルプスに於ける優れたるガイドの一人であり、且つ恐らくツエルマットでは最優秀のものであつたろう。――と。

特に彼はモンテ・ローザ初期の登攀によつて名を知られ、その事からハドソンとは個人的に知り合つて居た。その他にもタケツト、ケネディ、ダグラス其の他多くの著名なる登山家に從ひ、その能力は衆知の事實であつた。

彼及びカレルこそは、殊にアルマーがウインパーよりツエルマットからの可能性を云々した時に、之を笑つて相手にならなかつた唯二人の案内者であつた。かのオーベルガーベルホルンからマウンテラツクスを觀た者は（ダグラスとタケツトにないだれ落ちるが如き氷雪セラツクスを觀た者は（ダグラスとタウグワルダーは之を越へて該峯の新登頂をしてゐる）此のガイドの進取的氣性、能力、人柄（此の事につきフアーラーは彼は素直にして單純なる頭の持ち主であつたろうと云つてゐる）に高き尊敬の念を拂はざるを得ない。ダグラスも亦彼を尊敬して居た事は云ふ迄もない事である。

――ペーター・タウグワルダーは此の登攀を立派にやつて退け、一流ガイドたる事を示した。

彼こそは當時の人々の間に考へられてゐた、少數者の一人であつた。――となつてゐる。

三、ペーター・タウグワルダー（子）

Peter Taugwalder (fils) (1843—1923)

マツターホルン登攀當時彼は假令二十二歳の若冠であつたとしても、彼の父はポーターとしてブリコラよりのダン・ブランシュ其の他の大登攀の經驗を既に持たせてゐたのであつた。マしその父が彼を最後に置いた事も、其の息子に信頼を持つてゐたればこそである。墜落發生の際遙かに離れた場所にあつた爲め、審問の席には出て居らぬ。

彼は災禍後一ケ月以内の裡にドームへのルートの初登攀に際し、英國山岳會の有名なメンバーデイスグラツイアの資格は充分にあり、あの登攀時に於ても單なるポーター以上のものであり、又同時に有用なるメンバーであつた事は否めぬ事である。其の後一八七一年より晩年に至る迄凡そ一二〇回のマツターホルン登山を爲し、遂には「マツターホルンのペーター」といふ別名までも持つ樣になつた。而も一度として事故を起した事はない。

（C）登攀の處理と實行

ウインパーとハドソンの二人が、此の登攀の指導を行つた事は妥當であつた。事の發端は二人にあつてガイドの側にはなかつたのである。ハドウは唯從つて行つたに過ぎない。

ガイド問題はハドソンにより處理され、その考へによつてふ事になつた。タウグワルダー（子・兄）は事實十五日の朝となつて漸く案内者兼ポーターとしての位置に居たに過ぎない。

最初の日、ハドソン及びウインパーはヘルンリイグラートに於ては交代にて先頭をきり、足場を改めたのは最も確實なものを先頭に置くべからざる助力を、與へる事が出來るとの四日も「肩」迄は二人が先頭となつた。ザイルは殆ど使用されて居らぬ。北面に移つて隊員の順位は一時間二十分で休憩は一時間足らずの間に殆ど二時間の休憩をとつたとも謂はれてゐる。然しウインパーの書翰に依れば疲勞者はなかつた樣である。

登攀速度の緩徐は、ハドウの爲めのみではなかつた樣である。實際の登攀時間十時間に對し、あつた。此の悠長な登攀は、クローとウインパーとの間に懸念せられた。又夜營地より山頂に至る十時間足らずの間に

（D）下降に於ける順位

下降に於ける順位はハドソン、ウインパーの相談の結果であり、且つガイドの三人も之に同意してゐるものであるらしい。クローが先頭となつたのは最強力者といふ意味もあり、強いて利益とする所は登攀の際に先頭となつてゐたのであるから、下降に於てもそのルートの最善を期する點にあつた。而して彼は斯くしてハドウに、下方からその足場の世話が出來たのであつた。

然し乍ら今日から見ると、斯くの如き方法は實に不合理極まるものである。今日では斯かる原始的登攀補助方法は全く過去のものとなつて居り、一般には上方から之を與へて居る。然し當時にあつては旅行者も案内者も——メルヒオー

ル・アンデルエツクの流派は例外として――無條件に案内者に登攀にも下降にも先頭となるものと居た。譬へば「アルパイン・ジャーナル」第一巻三十八頁にダン・ブランシュ登攀の事が出てゐるが、クローの兄にして事實上の指導者であつたジャン・バプテイスト・クローは先頭の下降に際して先頭となり、二人の旅行者及び一人の子供が之に續き何等の支障を來して居ない。ヴエルト峰の下降に於ても六人が同一の綱に結ばれてゐるが、クローは先頭となり最後は旅行者であつたジャン・バプテイスト・クローはその

として第五番にクローの居る事はハドソンに注意を與へる事も出來、ハドウの確保も出來るものと考へてゐる。然し

又一隊とする場合

Ⓐ

3 ○ クロー(最後)
2 ○ ハドウ
1 ○ ハドソン(先頭)

Ⓑ

7 ○ 老ペーター(最後)
6 ○ ダグラス
5 ○ ペーター(子)
4 ○ ウインパー(先頭)

Ⓒ

7 ○ 老ペーター(最後)
6 ○ ウインパー
5 ○ クロー
4 ○ ハドウ
3 ○ ペーター(子)
2 ○ ダグラス
1 ○ ハドソン(先頭)

乍らデイユービー、モンタンドンの之に對する見解は少しく異つてゐる。斯くする事によつてハドウは上下に案内者を擁し、殊に上位のものは當時の直接のガイドであり、ハドウとしては不必要であつたかも知れぬがクローの位置から事も多少知つてゐるクローである。然し乍らそれはいゝとして、これではクローが先頭より少し離れ過ぎてゐる。ハらは先頭を指揮し得ぬ立場となつてゐる。

次にデイユービー、モンタンドン二人の意見を述べやう。

Ⓓ

第一隊（先に降る隊）

4 ○ 老ペーター（最後）
3 ○ ダグラス
2 ○ ペーター（子）
1 ○ ウインパー（先頭）
↓

Ⓔ

此の場合、古い習慣によつて先頭はガイドでなければならぬと主張されたならば、第二段として次の方法も考へられる。

3 ○ クロー（最後）
2 ○ ハドウ
1 ○ ペーター（子）（先頭）
↓

第二隊（後から降る隊）

Ⓕ

4 ○ 老ペーター（最後）

3 ○ ダグラス

2 ○ ハドソン

1 ○ ウインパー（先頭）

↓

或は右のE、Fを其の儘結合して

Ⓖ

ペーター（子）	●	7 ○ 老ペーター（最後）
ウインパー	●	6 ○ ダグラス
老ペーター	●	5 ○ ハドソン
ダグラス	●	4 ○ ウインパー
ハドソン	●	3 ○ クロー
ハドウ	●	2 ○ ハドウ
クロー	●	1 ○ ペーター（子）（先頭）

↓

（實際に行はれた順位）

としてゐる。但しFの場合、先頭の三人は總て旅行者のみで、ガイドは最後に一人しか居らぬといふ反對が生ずるかも知れぬ。然し之には1及び2は無條件に確實な登攀者であり、而も其の上ウインパーが先頭に居り、第一隊の殿りたるクローと接近してゐるといふ優れた點があるのである。

×　　×　　×

山頂からの出發は、隊員の多勢な事が原因となつて慌たゞし過ぎた觀がある。ウインパーは己れと結び合つてゐたタて初めて先隊の最後のもの、即ち老ペーターと一つ綱に結び合つてゐる。

又實際行はれた下降順位は、確かに妥當なものではないが、若し旅行者と案内者との關係が不均衡ではないかと判事より一般的規則に對する過誤を指適せられた場合、タウグワルダー（父）は次の如く答へて差支へないものと思ふ。

――先頭はクロー、次にハドウ、續いて自らも案内者と同等に考へて居たハドソン、それからダグラス、次に私、ウインパー、最後に息子の順序でありまして、（若し判事がハドソンをガイドと同等視する事を是認すれば）つまりはガイドの間に、一人づゝの旅行者が挾まつてゐると同じ結果になりませう――と。

次に總ての報告には、其の時の天候は何等責むべき要素でないといふ事に、一致してゐる樣である。その結果、「肩」と平滑なる北面には三、四日前の荒天の際に降つた新雪が薄層となつて岩面を被ひ、それを突き出て岩角が又正午附近に於ても、動々ともすれば氷化した尖角と變つてゐるといふ事實を除外し、岩山たるマツターホルンの狀態が登攀に何等差支へないものであつたとなつてゐる。然し乍ら之も相當考慮すべき問題であつたと考へる。

「肩」以下の部分に於ては困難といふべき場所はなかつたとしても、最も問題となる「肩」以上の地點、幅二〇〇呎

高さ三〇〇呎の範圍内にあつては最も注意が拂はれて然るべきであつた。ウインパーの之に對する言明は色々であり、又此の問題の起る毎に隊員の能力殊にハドウのそれを引合ひに出して居る。彼のインターラーケンの手紙には恁ふあるハドウが下降に際して感じた困難なるものは、何等の不安なく確實に通過し得る場所である。――又「タイムス」紙の分には――と。

災禍の起つた斜面は一八六八年八月四日三人の案内者を伴ひ、フォースター氏が通つてゐるがその報告を左に引用しやう。

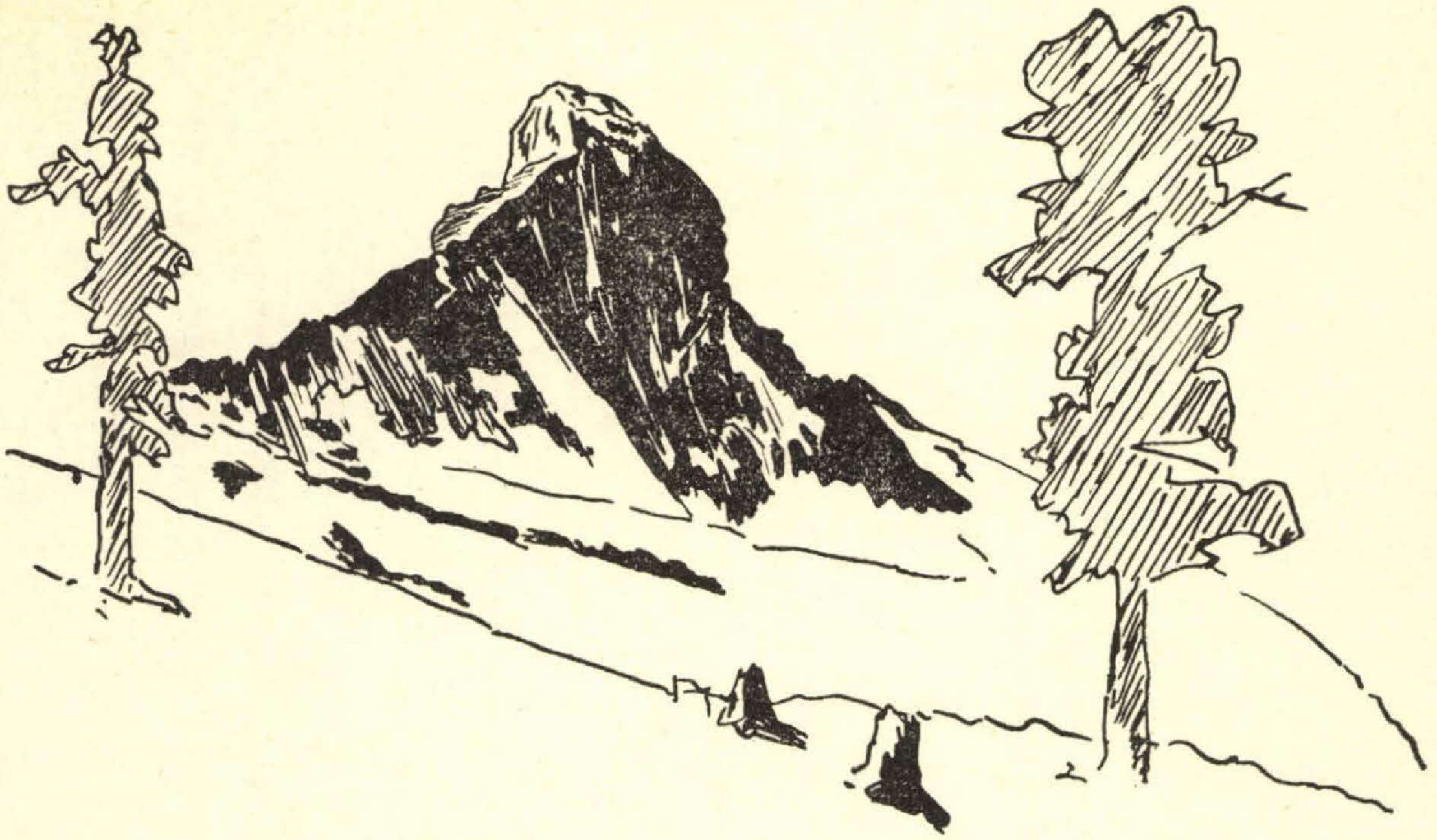
×　×　×

●古い上方の小屋から山頂まで二時間半、

此の部分の岩場は非常に急峻ではあつたが、足場もあり本來の意味から云つて困難な場所ではない。最上の部分は下降には危險要素となる深雪が被覆して居た。

●山頂より小屋までは三時間半、

山頂より「肩」までは登りよりも相當に惡い。然しアルプスの他の場所で經驗したものよりも、困難であつたとは云へぬと思ふ。……私はこれがシュレツクホルンよりも困難であるとは信じない。然し「肩」までの下降は可なりの注意を要するものであつて、一度滑落したならばそれを止める事は不可能であろう。此のルート（但し現在はこれを通る者はない）は其の時の狀態によつて、困難の程度が非常に異るものである。ウインパーが三十五度――四十度としたのは殆ど正確に近いものと思はれる。



Riffelalp ヨリ見タル Matterhorn（瑞西山稜ノ傾斜ヲ示ス）

判つた最後にハドウのスリツプが災禍直接の原因である事は、公に定まつた事實であるが、各隊員の行動が實際怎ふして居る譯ではない。又ウインパーの報告も臆測に過ぎない。彼には下位のもの丶肩以外には見えなかつた——それが又如何に疑點の存するのも亦止むを得ぬ事であろう。老ペーターにしても瞬間的の事件であるから確實な意見は持てぬ道理であり、息子に至つては想像も許されぬ立場にある。從つて證據として認められるべきものは、一つも殘つて居ないのである。息子のペーターが六十年後の高齡となつて、與味ある事實を確證あるもの丶如くに述べた事があるが、吾々にとつて何等耳を藉すべき性質のものでない事は云ふ迄もない。

(E) 綱、結合、災禍

ウインパー及びタウグワルダー（子）が暫時山頂に殘つて居た時に、結び、他の五人の者は丈夫な方の綱の一つに一同の意見通りの順位で結合つた。從つてクローは先頭となりタウグワルダー（父）は、

時的に最後位、即ち最上に位置する事となつた。彼とダグラスとの間が、他の綱で結ばれた事は注意しなければならない。

ウインパーに從へば（前記「タイムス」への書翰參照）、綱は三つに分れてゐる。

第一、新しい英國製マニラロープで山岳會用のもの、二〇〇呎

第二、同樣のもの、但し幾分前者より丈夫なもの約一五〇呎

第三、細い古い補助綱、二〇〇呎以上（釣紐樣のものである）

彼の著書及び寫眞等によつて判斷すると、各綱の比較上の太さは大約次の如くなる。

第一——$3\frac{1}{2}$

第二——$3\frac{1}{4}$

第三——2

併し乍らウインパーは、「第二」のものを「第一」よりも太く且つ丈夫であると云つてゐる。玆に研究者にとり非常に重要な問題がある。それは何かといふと、丈夫な方の綱の總長三五〇呎が、怎ふいふ風になつて居たかである。即ち

A
- 二〇〇呎……一本
- 一五〇呎……一本

B
- 第一の綱——一〇〇呎及び一〇〇呎……二本
- 第二の綱——七五呎及七五呎……二本

A の場合

若しウインパーが云ふ如く、遭難者各人の間が二〇呎であり、ダグラスの所では少く共七〇呎の綱が之を已れに結び得ないと云ふ五呎と考へるならば、老ペーターが弱い方の補助綱を解き前に居るダグラスに之事は起らぬ譯である。若し餘裕があつたものとするならば、を結んだといふ事は、確かに理由の解らぬ而も疑問視すべきものとなる。然し乍ら老ペーターは審問の席上判事への答へには、其の餘地がなかつたと云つて居る。然る時は各人の間には六〇―四五呎の綱の長さがあつた事になり、之はあり得ぬ事である。當時及び其の以後に於てしさう考へなければ、綱の殘部が何處にあつたかゞ云へぬ事とならう。（尤も今日相當困難な登攀にはさへ、四人に對しては八〇呎が一般に適當とせられてゐた。）必要とする事もある。それはヨリ、安全な足場を得る爲に、各人の間の距離を餘裕あらしめる爲である。）

然し乍ら老ペーター！彼の答へが不充分であるとしても、彼のダグラスといふ彼にとつては直接の傭主であり、それに數多くの旅行にも供をしてゐるパトロンをば、故意に遭難せしめる考へは起りやうがないと思へるからである。恁ふなると問題はいよ〳〵複雑して來るより他はない。

次にタウグワルダーによれば、四人を結んだのはクローであつたといふ。然しクローは最後のタウグワルダーが身體を結ぶべき餘りがないといふ時に、又等しく丈夫な綱と結ぶ爲にも、殘りの大部分を自身の肩に捲きつけて置く筈もない。彼が長い餘りを持つて居なかつたといふ想像は、墜落後の慘死體の互ひに接近した位置を以ても證明し得る。若し彼が長い部分を持つて居たとしたならば、事態はもつと變化して居なければならない譯である。

然らばその綱は一體幾つに分れて居たかといふ事が、可なり現實的に重大な問題となると思はれるが、此の疑問は誰も解決してゐる者がない。之に就ては相當多くの檢討あつて然るべきにも拘はらず、ウインパーにも老ペーターにも又記憶の生々しかつたタウグワルダー（子）にも此の疑問は質されて居らぬ。

又綱は一體誰が持つて行つたのかも、解決されては居ない。マンガーフアーラーは、ガイドが一人一本づゝ携へたものと想像してゐる。然し乍ら吾々は玆に二つの決定的、眞に近き言明をばする事が出來る。

第一、タウグワルダー（父）はダグラスに餘りがなかつた爲め、自分の持つて居た補助綱を彼に結びつけた事。

第二、ウインパーの言明であつて、彼は「アツセント」の二九二頁——に丈夫な方の綱で使用せられて居らぬものがまだ二五〇呎以上殘つてゐた——とある事實である。

然し乍ら彼の言明は、Aの場合には當嵌らぬのである。何故ならば他の二本の內一本は一番上のタウグワルダー（子）と彼の間にあり、他の一つは老ペーターによれば、前の四人に使用せられて居たからである。

此の二五〇といふ數字が又不思議である、第一の綱たる二〇〇呎及び第二のものたる一五〇呎の敷に該當せぬ。從つて此の二五〇といふものは、二つ以上のものから成り立つてゐると考へなければならない。

夫な綱があつたのである、といふ結論になる譯なのである、

〔ウインパーが「三本の綱」といふ場合には使用された綱を意味するのである。彼が携行した綱を數へる時には前記「タイムス」宛ての書翰の如くであつて、之が若し單に三種類（單位）の事を意味するものならば、次の如く云はなければならないと思ふ。（There was an A. C. rope of about 200 ft.……）〕

B の場合

二〇〇呎（凡そ六〇米突）、一五〇呎（凡そ四五米突）く二つの丈夫な種類のものを例へば一〇〇呎二本、七五呎二本づゝ合計四本といふ事になる。

此の假定を基礎として、且つ四人が此の内二五米突か三三米突のものを以て各自を結んだものとを二〇呎或はそれを少し越へたとして、老ペーターの爲に餘りがなかつたといふ事は、二五米突あり三三米突の方を使用したとしても考へられぬ事ではない。

クローが七五呎のものを使用したとすれば、間隔二〇呎をとつて了つたのでは、タウグワルダー、ダグラスに結んだといふ事になる常に短い。仍て老ペーターは自分の持つて居た弱い補助綱を前で、此の綱がその目的の爲には充分の強さを持つてゐたものと考へたと主張してゐる。此の返答はウインパーの「その綱は斯くの如き目的の爲に使用する爲に持つて來たものではなかつた」といふ言葉と一致してゐない。然し乍ら此の斷れた綱が補助のものであるといふ事は、ウインパーは老ペーターには話してなかつた。從つてこれが普通の目的に使用さるべきものでなかつたのは無理のない事である。以上の如き理由から假令その弱い綱を使へば萬一の場合彼に有利となるとしても、ダグラスには老ペーターを結ぶべき殘りがなかつたといふ彼の陳述に對して、誰も之を疑ふ權利も根據もないといふ事にならう。

然らば他の綱は一體何處にあつたのか。四本の内一本はクローと三人の旅行者に使はれてゐる。第二はウインパーとタウグワルダー（子）に用ひられ、後に又その父が之に結ばれてゐる。老ペーターは一番弱い綱を一本持つて居た。ウインパーが未だ殘つてゐたと述べてゐる丈夫な方の綱（二捲きとする）の二五〇呎を持つてゐたのは、誰であつたか。

之は明らかである。綱は確かに配分されてゐた、怎んな風にといふ事はウインパーは全く知らなかつたかも知れぬが、血氣盛りであり第三ガイドであり同時にポーターであつたタウグワルダー（子）が過重のものを持つてゐたであろう事は、想像に難くない。若し老ペーターが自身丈夫な方の殘りをもつてゐたものとすれば、かの弱い綱を使つたといふ事は第三者的立場より疑惑的に見られても仕方がないが、此の持つてゐたといふ事を證明すべきものは一つもないのである。反對に彼が補助綱の二〇〇呎全部を持つて居た事は明らかである。尙彼に對して絶對的に斷言し得る事は、後に殘つた二人のものが一緒になつてからダグラスとの間の綱を弱いものと取換へては居らぬ事、或は又それを二重にして持つて居たものでないといふ事である。それを取換へてゐる閑暇はなかつた。又弱いのを二重にして居た行者は其の時已に惡場にかゝつて居たのであるから、それを取換へるのは一層困難である。タウグワルダーは次の瞬間に於てそんな大事が起ろうとは夢にも考へて居なかつたし（之は一ガイドの遁辭では決してない）、又その反對に無意識の內に大部隊といふ事に對して安全である事を疑はなかつたに相違ない。彼は又假令その綱が輕い方のものであつたとしても、萬一の場合自分直接の主人たるダグラスを確保するには、充分であると考へて居た。

定評あつた優れた勇者タウグワルダーに對して、彼が危機一髮の際に綱を切斷したのだといふ彼の同僚達の間、或は好奇癖ある文筆者流等による疑惑は、何等根據なき皮相な曲解にしか過ぎない。之はウインパー自身も、後にファーラーも顧みるに足らぬ愚論として居る。總ては瞬時の出來事であつて刃物を出したり、又それを開いたりしてゐる閑暇はなかつたのであつて、かゝる事を云ふならばウインパーにしても、手近のピツケルを以て綱を打つたのではないかと疑へない事もない。又老ペーターは事變の起る以前に、豫め綱を切斷してゐたのだろうといふ非難もウインパーの證言——

斷れた綱にそんな形跡は全然見られぬ——といふ事實によつて、明らかに粉碎する事が出來る。

× × ×

悲慘事の瞬間に於ては、前の三人は一所にかたまつてゐた。然もハドウの滑落點は比較的容易な地點であつて、其の直後に殘りの三人は無事に通過してゐる。激動をうけた殘存者さへも其處を困難とは感じて居ない。又ハドウの居た所には手の屆く所にいゝ手懸りもあり、從つて今少し彼に經驗さへあれば其處で身を支へる事が、出來たかも知れぬのである。彼のスリツプと墜落は、下に居たクローがハドウの足を安全な場所に置いた直後の、突發的な烈しいものであつた。ハドウはその前に、自分が未だ不安定であるとは一言も云つて居なかつた。ウインパーが、ハドウはその足をクローにぶつけその脊を轉がし次で落して了つたのであると云つてゐるのは、確かに正當であらうと思ふ。

墜激は大して大きなものである事を要しない。ハドソンはその時スリツプに具へる爲の最良の足場を求め樣として居たもので、足場は決して良くなかつたのである。此の接近を以てウインパーは「二人の間の綱が緊張して居なかつた」として非難してゐるが、經驗ある一流の登山家として認められ、且つ單なるガイドの追蹤者でなかつたハドソンが、自分に責任のあるハドウとの間に綱をたるませて居たとは考へられぬ。ウインパーがインターラーケンで書いた手紙には次の文句がある。「墜死者の間の綱が私とタウダワルダーとの間の樣に緊張してゐたならば、と思はざるを得ない」と、ハドソンは手に餘裕を持つて居た——フアーラーもさう考へてゐる——さもなければハドウが前進出來ないからである。一時に一人しか進めぬ所で各自の間の綱が張り切つてゐるといふ事は、考へられぬ事柄である。而もハドソンの脊はウインパーに向つて居たとすれば、前方の事はウインパーには解らぬ筈である。ハドソンは確かに、今日吾々が同樣な場合に行ふ樣に、綱を短くし、緊張せしめて居たに違

ひない。

滑落したハドウだけならば、此の場合ハドソンは之を留め得たかも知れない。然し仰向けになつては不可能であつた。二人の重量（その間の綱はたるんで居たかも知れぬ）は假令がつしりした登山家或はガイドであつても、上にはたつた十八歳のダグラスがほんの僅かな確保しか爲し得なかつた狀態では、ハドソンには確かに荷が勝ち過ぎてゐた。

併し乍ら敍上の事がハドウに起り得るものとしたならば、他の者は之を完全な場所に運ぶ迄手をとつて之を保護しなければならない。未熟の而も神經質な登攀者の直ぐ近くに居る事は、ガイドにとつても同行者にとつても常に危險であるといふ事を充分に注意しなかつた事は、一つの缺陷であつた事には疑ひない。

ウインパーに從へば、最初の二人が一〇——一二呎墜落した時にハドソンは二人よりの激しいショツクを受け、綱は手から離れ同時に身體も引摺られて了つた。たとへハドソンの居た惡い足場（約四十度の傾斜）にガイドが居たとしても、二人の落下體を支へ得たかは疑問である。その上ダグラスとの間の綱は、緊張してゐたが足場は矢張り惡かつた。從つて三人の重みは譯もなく此の青年を引落して了つた。綱はダグラスとタウグワルダー（父）との間で切れた。此の綱が切れなかつたならば、自分とクローとが一行を救へたかも知れぬと、ウインパーは云つてゐるが、何の助力も出來ない狀態にあつたクローには、望み得ぬ事であつたろう。然しハドソンならば若し上の四人が頑强に確保し得たなら、下の二人を支へる事は出來たかも知れぬ。

×　×　×

衝撃が來るや次に續くタウグワルダーは、大きな岩の下の足場の確りした場所に居た爲、兩手でそれを摑んだ。——

（「アツセント」二八六頁、但しウインパーは「タイムス」）への書翰中には此の事を書いて居ない）――彼に從へばダグラスから最後の者迄の綱は張つてゐたらしい。然るにタウグワルダーは判事の前で恁ふ云つてゐる。

――私は身を確保する爲に身體を山側に轉向させ、ウインパー（之は恐らくダグラスの事を云ふのであろう）との間の綱が張り切つて居なかつたので、それを岩の突起に捲き付けました。――と。

此のウインパーと彼との間の綱が緊張してゐなかつたといふ陳述に對して、ファーラーは――「私はこれを強ち認めはしない、若し事實とすれば、ウインパーよりもガイドたるタウグワルダーの責に歸すべきものだ。何となればこれは手近かの岩に捲きつけ得たといふ事實を說明する爲に、はじめて云はれた事に過ぎないから。又事實此の附近にはそんな都合のいゝ場所はない」――と云つてゐる。

然し乍らそれは遠くから判然せぬ程の突起でも充分であろう。而も災禍後殘存者は下山の際に、實際にさう云つた突起を確保に利用してゐるのである。

又――顚落の瞬間に綱は緊張して居たかどうか――といふ訊問に對しタウグワルダーは張り切つて居りました――と答へてゐるが、之は恐らく部分的にであろうと考へられる。又他の場所では、次の樣に答へてゐる所もある。――三人（四人の誤りであろう）の重さと墜落の力を支へるには、怎んな頑丈な綱でも駄目でせう――と。

假に前記タウグワルダーの陳述、「ウインパー云々」を原文通りに解釋すれば彼が上の丈夫な綱を岩に捲くといふ事は普通行はれるものではない。實際は次の樣に假定し得ると思ふ。――タウグワルダーは弱い方の綱（下）を普通やる

やうに岩に捲き、それを自分の場所から支へた。斯くして岩が最初に、そして大部分の烈しい衝空中で切れた。（普通の綱であつたら切れるのが當然である撃をうけた時にタウグワルダーは身體（肋骨）に苦痛をのと思へる。

綱を捲いたといふ事に就て、ウインパーは何處にも書いてく、一八六五年七月十八日發行の「ジュールナル・ド・ジユネーヴ」はツエルマットよりの通信としてその事を掲載して居るのである。

× × ×

斯くして四人の運命も定まり、周知の如く最早彼等を引留める事は出來なかつた。若しタウグワルダーと四人の間に丈夫な綱が用ひられたものとしたならば、殘存者三人も結局運命を共にした事であろう。

マツターホルン氷河の上に發見せられた死體の有樣は、見るも無慘なものであり、靴、着衣その他は目茶々々に裂かれクローはその髮によつて判別し得た程であつた。

ダグラスの死體は今日に至る迄發見せられて居ない。或は懸崖の一角に引懸つたのではないかと想像するものもあつたが、あの岩壁の平滑さと、墜落時の重量を考へる時斯かる事はあり得ないものと思ふ。それに當時既に遠近四方から種々捜索が行はれてゐたには拘はらず、之を發見する事は出來なかつた。結局下のベルグシュルンドか、或は他の三人より遙か離れたクレヴアスの中に陷ち込んでゐるのではないかといふのが、最も眞に近い想像であろう。

×

以上稍々詳細に亘つて、彼等の登攀を檢討して見た。文中ウインパーに對する非難がましきは之は敢へて彼の光輝ある業績を蔑視するが爲のものではない。唯不實の疑惑に苦しめられ、悲慘なる後生涯を送つた老タウグワルダーの爲に世の迷妄を打破らんが爲の試みに過ぎない。萬一此の企てが成功したとするならば、筆者の喜びも亦之に過ぐるものはないであろう。

×　　×

高價なる犧牲の許に、マツターホルンの呪ひも破れた。それは古い時代の最後のものであつた。然し乍らその征服の教訓は徐々にではあつたが洋々たる近世アルピニズムの大原則へと發展して行つた。ソシユール・アルピニズムの時代へと這入つて行つたのである。モダーン・アルピニズムの初以て發祥とする近世科學的登山も玆にマツターホルンの初登頂を一轉期とし、いよ〳〵

×　　×

最後に本稿を草するに當つて、金田、高橋兩君が原文の筆記を手傳つて下さつた事に對し、厚く感謝の意を表します。

尙附錄「マツターホルン關係主要年表」は主としてヴアルター・シユミツトクンツ編になる「アルピーネン・ハンドブーフ」によるものであるが、日本山岳會發行「山岳」第二十八年第一號一〇一頁（一八七九―一九三二）の分も序に參照して戴き度いと思ふ。

（終）

マツターホルン關係主要年表

（吉澤一郎作成）

高度はSiegfriedの地圖による
Théo. は Théoduleの略
Br. は Breuil
Zer. は Zermatt
S.A.C. は 瑞西山岳會
C.A.I. は伊太利山岳會

年代	月日	場所	高度	登山者	案内者	備考
1792	14/viii	Theodulhorn (Corno S. Theodulo)	3472m.	H. B. de Saussure	J. Marie Couttet	
1800		Théo. 峠越へ	3322m.	George Cade		Br. より Zer. へ。最初の英人なり。
1838		Zermatt	1608m.			Zer. の牧師の家に訪問者 12名 と記入せらる。
1839		〃		Dr. Lauber		Dr. Lauber 初めて Zer. に旅宿を開業す。寢臺 3 個。
1851		Théo. 峠		J. P. Meynet		峠の上に最初の質素なる避難小舍を建つ。"Hotel Bouquetin"
1852		Zermatt		Seiler		はじめて Hotel を造る。
1854		Riffelberg (Zer.)	2569m.	Seiler		"Riffelhaus" の建設。
1857		Tête du Lion (Testa del Leone)	3723m.	J. A. Carrel 他		Matterhorn 登攀の最初の試み。
1863	10/vii	Matterjoch (Colle della Forca)	3268m.	F. Morshed	Pierre Perren Moritz Andermatten	Zer. より Br. へ。
〃	3/viii	Br. joch (Furggenjoch)	3357m.	E. Whymper	J. A. Carrel Luc Meynet	Br. より Zer. へ。
〃				J. D. Forbes John Ball		Matterhorn を登攀不可能なりと言明す。
1864	28/ii	Haut de Cry	2951m.	J. J. Bennen		登山者を案内し登攀中雪崩の爲めに壓死す。
〃	24/viii	Col Tournanche	3468m.	J. A. Hudson F. W. Jacomb		Zer. より Br. へ。
1865	14/vii	Matterhorn	ca.4482m. (東峯)	E. Whymper 其の他	M. Croz 其の他	瑞西側よりの初登頂。
〃	17/vii	〃	ca.4480.9m. (西峯)	J. A. Carrel 其の他		伊太利側よりの初登頂。
1867	12/ix	〃		J. J. Maquignaz 其の他		眞の伊太利山稜登攀。女性 Félicité Carrel は途中までなれど最初の女性登攀者なり。
〃		Cravate	4122m.			Matterhorn に於ける最初の小屋。
1868		瑞西山稜	3818m.			瑞西側に於ける最初の小屋。Alte 或は Obere 或は Whymper Hütte といふ。
〃	8/viii	Matterhorn		Paul Güssfeldt	J.M.Lochmatter N. & P. Knubel	獨逸人として最初の登頂者。
〃	27/vii	〃		J. Tyndall	J.& P. Maquignaz 其の他	最初の横斷。
1871	22/vii	〃		F. Gardiner F. Walker Lucy Walker	P. Perrn M. Anderegg 其の他	Lucy は最初の女性登頂者。
〃	15/ix	〃		Miss Brevoort W.A.B. Coolidge	Ch.& Ulr. Almer P. Knubel	Zer. より Br. へ。Miss Brevoort は女性として最初の横斷。
1874	21/viii	〃		E. Whymper	J.A. Carrel J.B. Bich J.M. Lochmatter	Whymper 第二回目。寫眞撮影の爲めの登山にして Zer. 側の小屋に二泊す。
1875	12/v	最初の「冬期的」登頂		Guiseppe Corona 他一名	J.J.& J.P.Maquignaz J.A. Carrel Luc Meynet	可憐（?）なる佝僂 Meynet の宿望達せらる。
1876	22/vii	最初の「Guideless」		Cust Colgrove Cawood		
1877	21/viii	Furgg Grat	3498m. (最高點)	J. C. Leman		Furggenjoch より Théo. 峠まで。
1879	3/ix	西壁		W. Penhall	F. Imseng L. Zurbriggen	
〃	〃	Z'mutt Grat		A. F. Mummery	A. Burgener J. Petrus Gentinetta	
1880		Hörnli 小屋	3298m.			S.A.C.「Mônte Rosa」支部により建設せられ"Untere Hütte"と云はる。
〃	6/vij	Col du Lion	3586m.	A. F. Mummery	A. Burgener B. Venetz	Stockje より Br. へ越ゆ。
〃	19/vii	Furggengrat		〃	〃	「肩」まで。
1881	2/vii	Col du Lion		Paul Güssfeldt	A. Burgener	南より北へと越ゆ。
〃	7/viii	Tête du Lion		J. H. Wicks		Stockje 側より登頂。
〃		Matterhorn		F. Gardiner Pilkington		Zer. より一日で往復す。
1882	17/v	最初の冬期横斷。		Vittorio Sella	J. A. Carrel L. 〃 J. B. 〃	同年2月に2回試み伊太利小屋まで達せり。本回は Br. より Zer. へ越す。
1884		最初の案内者なしの横斷。		Purtscheller Zsigmondy 兄弟		Zer. より Br. へ。
1885		伊太利側第二の小屋。「大岩塔」の下。	3890m.			C. A. I. により建設せらる。
1887	13/iii			Quintino Sella死す		C. A. I. の創立者の一人。
1890		Furggengrat		Guido Rey	Dan. & Ant. Maquignaz	Rey の最初の試み。
〃	25/viii	Tête du Lion の側面。		J. A. Carrel 死す		最後迄己が責務を果して悲愴なる死を遂げたり。
1893	4/xii			J. Tyndall 死す。		London に於て。
1899		Hörnli 小屋				S. A. C. により再建せらる。
〃	24－28/viii	Furggengrat		Guido Rey	D., A., & Ai. Maquignaz 其の他	リレー式登攀。尙1893年には3回行ひ失敗せり。
1905		第三伊太利小屋。	3840m.			"Rifugio Luigi Amedeo" といふ。C. A. I. の建設なり。
1906	10－11/viii	Pic Tyndall	4245m.	Ugo De A. Ferraris Augusto 〃		S. S. W. buttress のガイドレス登攀。
1911	31/i	冬期登攀		C. F. Meade	J. Pollinger J. Lochmatter	瑞西山稜。
〃	4/ix	Furggengrat		M. Piacenza	J. Carrel J. Gaspard	「肩」より南面に出で「鼻」の上より背稜を傳ひ登頂す。
〃	16/ix			E. Whymper死す。		Chamonix にて。
1915		Matterhorn 小屋				Hörnli 小屋の再建。
1916		Solvay 小屋	ca.4000m.			瑞西山稜。ベルギイ人 Solvay の寄附による。營業小屋に非ず眞の避難小屋なり。
1920	10/ii	冬期登攀		Marcel Kurz	J. Knubel	冬期第五回目。
1925		Z'muttgrat		De Bruyne	Aufdenblatten Gentinetta	Matterhorn 氷河より山稜にとりつく。
1929	17/vii ?	西壁		Fritz Herrmann		單獨。詳細不明。
1930	2/ix	Furggengrat		E. Benedetti	Louis Carrel Maurice Bich	「鼻」の直ぐ傍にある大クーロワールを登つた。從つて Piacenza のルートより背稜に近い。
1931	31/vii－3/viii	Nordwand		Franz Schmid Toni Schmid		案内者なし。
〃	15/x	Südwand		E. Benedetti	Louis Carrel Maurice Bich	
1932	18－19/ix	Ostwand		E. Benedetti G. Mazzotti	Louis Lucien Carrel Maurice Bich Antoine Gaspard	「肩」の高さから山頂まで約 300m. に11時間を費す。

雜記

唐松小舍まで

小舍まで

「行けなかつたら歸るとして、出掛けませう」「よからう」てな事で、チラ〳〵降つてゐる中を登りにかゝつた。所が黒菱の上ノ平を過ぎた頃から、俄然晴れ出して、暫くすると素晴しいお天氣になつてしまつた。風は相當あるが、却つて涼しくてよい位。耳を二本突立てた鹿島槍は、五龍に壓せられてか氣の毒な位小ぢんまりしてゐる。此處から眺めた五龍は全く立派で、見違へる樣だ。

出掛けは天氣が惡かつたんで、「うるさ」型連の御出動がなく靜かな氣持を掻き亂されず、非常に助かつた。何時もの癖で、昨日四谷を出たのが正午過ぎでどうでも一羽締めて行かにやならぬと言ふんで、喜榮さんが細野をかけずり廻つて晝れてゐる間に、一時間も油を賣り、そんな事で黒菱へ着いたのがもう眞暗だつたから、八時に近かつたに違ひない。それでも黒菱まで來られたのが幸で、已れの家へ一寸でいゝから寄つてつて晝れ、と言ふ喜榮さんの好意を容れ樣ものなら細野泊りになつてしまつてゐたゞらう。黒菱の小舍は、八方尾根もそろ〳〵森林の茂くなる所にあるんで、少し位吹雪いてもスキーの練習が出來るし、下るのも譯ないし、それに暖いし、良い小舍だ。だが樂に入れる丈に「うるさ型」の多いのは心棒せねばならぬ。

此の日も夜の十二時までも、變な聲を出して騷いで居た一團があつたとか。幸に數日來、飯ノ種の事や、何やで疲れてゐたんで寢込んでゐたから詳しい事は知らぬが、大阪のさる高等學校の合宿の連中だと言ふ事で、若しそうだとすれば、理論的に鋭い關西の御仁に似合はしからぬ事と寒心した次第である。

堀岡　清

小舍にて

それで、うるさい小舍に長居は無用と出掛けたのが、此の天氣になつたんだから、矢張り後生は良くして置くものだ。此の尾根は、登つたり下つたりと言ふスキーは出來ないけれど、上ノ樺邊から一氣に小舍まで下り切りに下るのは一寸惡くないない。溫泉スキーを一週間もやつた人達ならどん〳〵行くべし。但しスキーを流さない用心が肝要である。兎角スキーと言ふものは、人間樣が上に乘つかつて居らぬと、非常にうまく滑り、止る所を知らずと言ふ調子で飛んで行くから、大事なスキーをなくする恐が多分にある。所で八方尾根には兩側に惡い所が澤山あり、時に依ると雪崩さへ出る所があるから、此の注意だけは忘れない方がよい。

風は强かつたが雪を交えず、まず〳〵樂々と小舍入りが出來た。立教の人達が今日下つたんで、唐松小舍は我々丈である。矢張り自分達の仲間丈で遠慮の無いのが一番よろしい。久方振りで雪の附いた劍一帶を拜んだんが小さい〳〵と思つたのは何故だつたらうか。四年前、種池の小舍に籠城した時には、もつと〳〵立派に見えた筈だつたが——。

心掛けの良いのは全くつらい。いゝ氣持で、長くなつてゐると「どうやら持ちそうです、出掛けたら如何です」と來た。山へ登りに來て登らぬ譯にも行かぬので、飯をゆつくり食つて、出掛ける事にした。午前中は靜かなどんよりした天氣だつたが、それでも時々薄日は差して吳れて寫眞を取るに不便はなかつた。大黑の下りは何時でも雪の深い所だが、夏道がまる出しになつてゐる今年でも腰迄はある。昨日行つたんだらう、立教の人達のラッセルが殘つてゐるんで大分樂をした。五龍の登りになる頃から天氣が崩れ出して、吹雪いて來たが、今更引返す手もないので、兎に角頂上までは行つたが、結局小便たれに行つた丈で、五龍が何ち向いてゐるんだか、てんで分らず寫眞など思ひもよらなかつた。

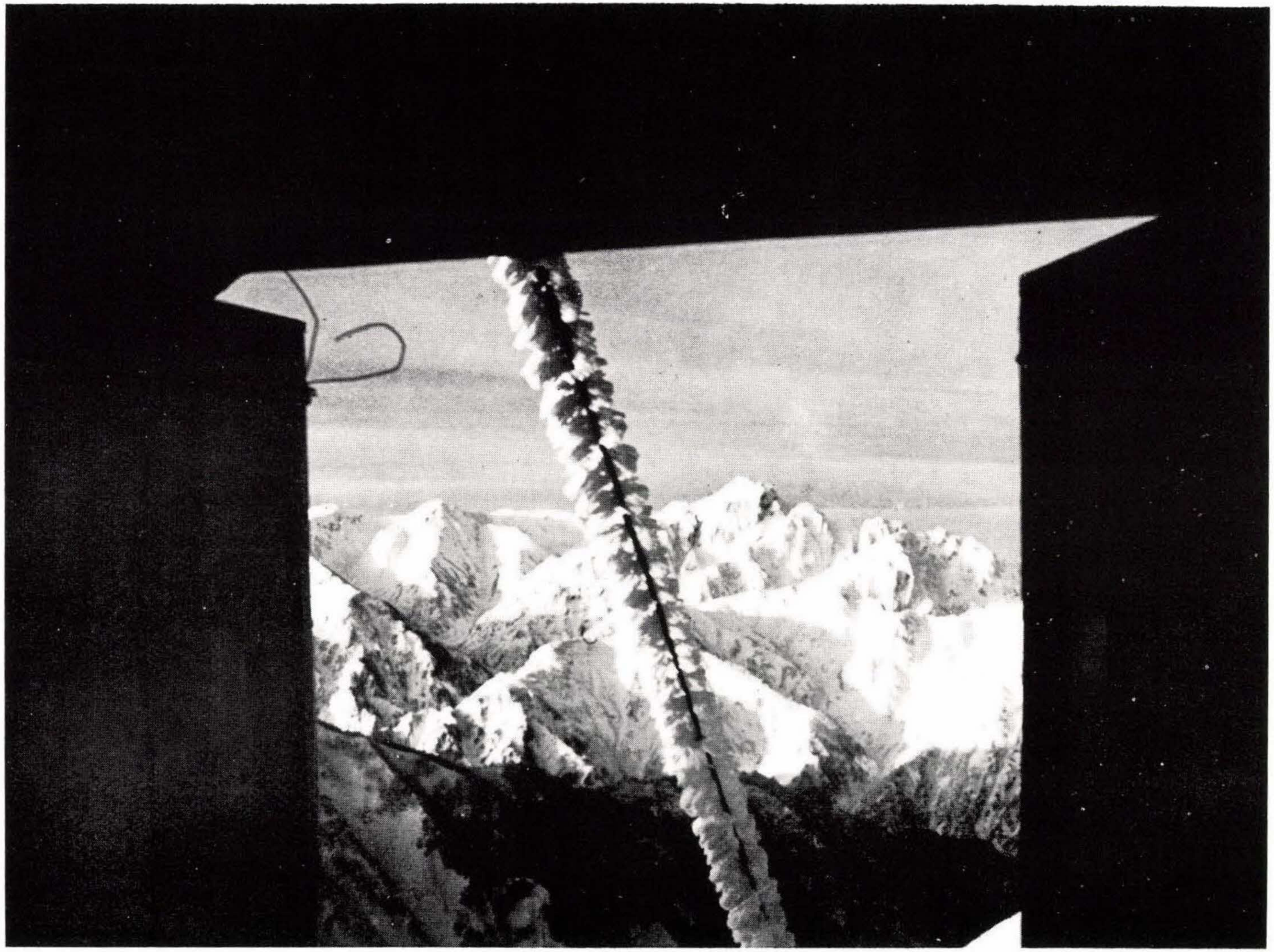
今日は大阪のピーシュミツク工業事務所のラーン氏一行、それについて來た太田、鄕津、橫川等大勢登つて來たでの小舍は賑になつた。炬燵を圍んで、その昔我等の敬愛する先輩諸氏白馬雪中初登攀後日談の一節を聞き得たのは、全く以て幸運であつた。輪樏はスキーより斷然早いといふ命題の樹立せられた話、Kさんが人一倍大きい股を八の字に擴げて岩に抱き附き、大事な處を痛めて

しばし起き上れなかつた話など、手眞似、足眞似、微に入り細に亘り、針葉樹會に於ても、あゝ言ふ話は到底聞けない。それが又此の邊の連中は、スキーをTさんに教はつた連中である。我々の先輩とは親しい間柄である。「何故學校を出ると來て呉れないのかね。來年來る時連れ來て下さいよ。」金と暇とを何時でも持ち合はせてゐる様に、事もなげに、言はれるんで、出て來れない譯を説明するんだが「そうですかね、だが一邊位はね」と不思議相に、分つた様な分らない様な顔をしてゐるが、いづくんぞ知らん、今年から自分が不思議がられる身分に昇進するんかと思へば、つく〳〵情けなくなる。太田の奴「H さん、未だ〳〵學校でしよう」と、お世辭の様な馬鹿にされた様な、此の言葉も、全く情けない。がそんな事はどうでもいゝ。白馬登攀のメンバー方々よ、未だに健在の筈である、それこそ一度位は昔懐し古戰場へ行つて御覽なさい。村の連中がうんと喜びますから。

明くれば元旦丁度良い工合に吹雪で骨休みが出來る。昨日澤山登つて來たのにつられて、天氣が悪いにも拘らず、陸續として攀つて來る、總勢二十四名、斷然關西辯が他を壓し、搗てゝ加へて獨逸語と來てゐる。惱まされる事甚だしい。二日の朝ひよつくり助公とエチ公とがやつて來る。若いとは言へ元氣なもんで、何時に黒菱を出たか知らないが、十時一寸過ぎに上つて來た。山の中で知人に會ふのは、腹のへつた時の飯の様にうれしい。殊にそれが自分達の仲間となると一層うれしい。

猛者を二枚加へて我々の方も多少元氣づいたが、どうしても大阪辯にはかなはなかつた。

三日はからつと晴れた。昨日登つて來た二人は一番先に五龍へ飛び出して行つた。我々は豫定通りゆつくりとして置いて、一峯との鞍部まで行つて行返して來たんだが、ザイルを引掛けて置いてよい事をした。そうでなければ此奴を登るに手古ずつた事だらうと思つた。不歸も二峰を下つてしまへば、唐松へ歸るよりも白馬へ行つた方が樂だ。小舍へ歸つたら四時、五龍へ行つた二人は三時に黒菱へ下つたから、もうそろ〳〵着いてる時分だ。



唐松小舎よりの劔岳　　堀岡　清

我々も下りやうかと思つたが、明日も天氣だつたら遠見尾根を下らうと言ふんで泊る事にしたが、それがそもそも間違の源で、その中に來るわ〳〵、あの小舍に客丈で五十人餘、全く以て凄い光景で、日本の登山の隆盛さの縮圖を此處で見せて貰つた。樂々と寢てゐるであらう黑菱の奴等がうらめしくなる。人夫衆も寢場所と布團を取られて有難迷惑の體だつた。

一番早くにと言ふんで入口に寢た甲斐もなく、天氣は惡い。白馬へ拔ける筈だつたラーン氏達も黑菱へ下つた。我々も安心して下つた。濃いガスの中を强引にスキーを飛ばして來たが樂じやない。眼鏡が曇るんで、五度の眼でも寧ろ素眼の方がよく分る位である。スキーが新調で氣になるので行く先の岩を見定めてから行くんだが、そんなのが見えよう筈が無い。黑いものと氣を張りながら、手探りみたいな恰好で滑るのは氣骨が折れる事甚だしい。眼の惡いのは三割も四割も損だ。

此の行は昭和十年元旦を中心として、增山、齋藤兩君と一緒になされたものである。唐松小舍を中心としての山歩きは一度は行つてよい處であらう。簡單に入れる事、簡單に逃げて歸れる事が出來るので勤め人に向く。又冬山に入る練習にもよい。天氣の良い日呑氣にスキーを樂しむのは又格別であらう。敢て八方尾根の爲に提灯を持つ。但し人の混み合はぬ時を撰ばねばならぬ。此の點、春が一層よいであらう。

北岳バットレス行

大樺池まで

六月中旬、ふとバットレス行きの話が出、OとM、それに私の三人はそれから數日後の十八日、例によつて新宿發の夜行で飛び出した。驛のホームで思ひ掛けなく、高島屋の講演會に招ねかれたとか言ふ上條孫人に會ひ、

鷹野雄一

車中の話も賑やかに、うと〳〵とする餘暇もなく短夜は明けて韮崎へ着く。ねむい眼をこすつてホームに降り大きな荷物をゴタ〳〵してゐる中に、到々バスは出てしまつた。仕方がないのでハイヤーを庸つてとばす。涼しい初夏の朝風に吹かれてドライブする心地はまた格別で、此の儘バツトレスの下迄行き、車の中からアンザイレンして岩に登れるんだといゝなと思つてゐる中に、忽ち祖母石へ來、釜無川を渡つて終點へ着いてしまつた。もう何時までも乘つて居る譯にも行かぬので車を棄て、重いリユツクサツクをゆすり〳〵歩き出したが、先づ發電所裏の九十九折で存分に汗をしぼられ、これで北御室まで行けるかと思ふ程參つてしまつた。併し、文句を言ひ言ひ歩く中に鷹ノ田も過ぎ鳥居峠も越えて、下るとも見えぬダラ〳〵坂を辿ればもう青木の鑛泉に來る。相憎主人が近所へ出掛けて留守なので、滯在のお客にお茶を入れさせたりして持參の辨當を食ひ、愈々暑い盛りにドンドコ澤を溯り出す。ウンスラ〳〵と登つて、最初高い處に見えてゐた南精進の瀧も過ぎ白糸の瀧を見物する頃には、皆昨夜の睡眠不足もあらうが、すつかりアゴを出してしまふ。併し休憩に休憩を重ねてついに五色の瀧に辿りつき之をグルツと卷いて北御室の小屋へ辿りついた時は、先づやれ〳〵と思つた。そしていゝ氣になつて一度にコーヒーシロツプを全部飲んでしまひ、暫くコーヒーを飲みたくない樣な氣になつた。夜は火をどん〳〵燃して氣持のいゝ第一夜を過す。

明くれば二十日、天氣は曇である。日が照らないのが何より有難い。十時頃出發し今日は大樺池迄と歩き出す。良い路をブラ〳〵登つて賽の河原へ來たが何も見えない、高嶺まで霧の旅を續けてさて一擧に降り出す。どん〳〵降りて白鳳峠で一服し更に降る。ガレを降り林を降つていゝかげん降りたと思ふ頃棧道が出、又降りて膝がガク〳〵する頃谷底が見えもうどうしたつて降るのは嫌だと考へる頃、漸く野呂川の川原へ出た。河原を辿つて廣河原の小屋へ着き、水を飲んでパンを食ふ。もう自分は此處で泊り度いと思つたが、OとMがいやに張り切つて行かうと言ふので、仕方がない、俺も男だと見えがくれに跡をつける。せい〳〵と登る中、どうも無性に咽喉が乾いて都の飲料が馬鹿に戀しくなる。路はやがて等高線に卷き出して、小さな澤を一つ渡ると、意外に近く大樺池の小屋へ來てしまつた。

次の日は雨であつた。目が覺めるとジャー〳〵と屋根にあさましい音がしてゐる。これぢや全然文句はない。終日イモムシの樣なシュラフザックが三つ、小屋の中をゴロ〳〵して時々歌など唄つてゐた。

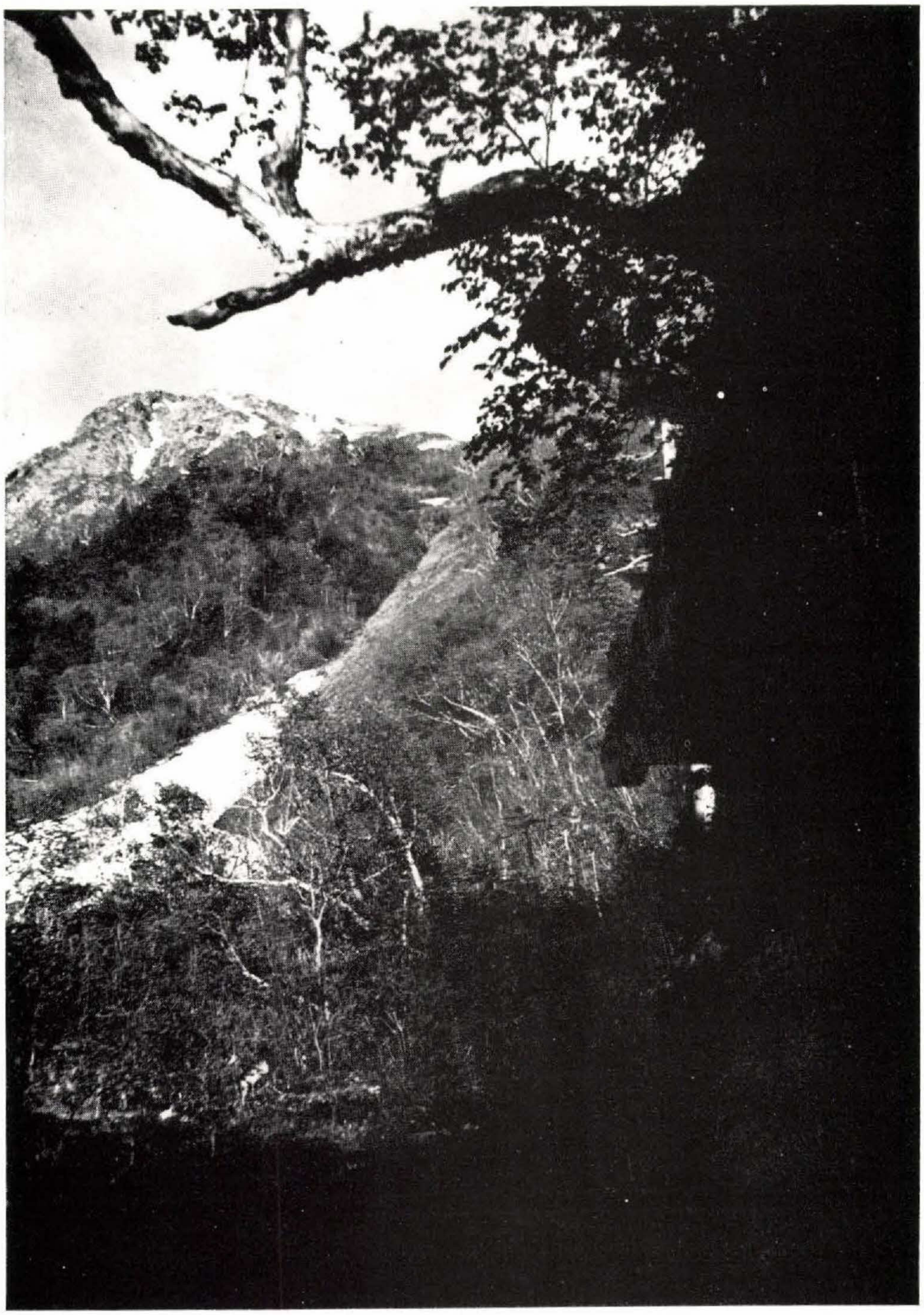
さて次の日、午前四時頃だつたと思ふがMが小便にでも起きたのだらう、外で「いゝ天氣だ起きろ〳〵」と言ふ。占めた、と飛び起きて外に出ると成る程素晴しい天氣だ。月が皎々と輝いて、バットレスの「燐寸箱」尾根が黑々ともり上つて居る。「凄え」と先づ感心してから仕度をしてゐると、知らぬ中に段々霧が湧いて北岳は全然見えなくなつてしまつた。でもその中には晴れるだらうと六時頃出掛ける。

小屋から殆ど等高線に、栂や樺の林をぬけて大樺澤の雪渓に出ると、岩小屋はまだ雪が多く無理に使つてもカンフアタブルではなさうだ。天氣は相變らず霧多く、東北尾根の下の方だけぼんやり見える。雪渓は中程から上に灰色の濃霧が立ちこめ、果は沓として天に續いてゐる。ゆつくり〳〵登つて行く中に、吾々も其の灰色の中に包まれてしまふ。一度包まれると、後は幾ら登つてもたゞひた押しの灰色で、見廻す世界に變りが無い何處まで登つても同じである。天まで登らねばをさまらないかの樣に見える。これでは仕方がない。仕方がないから横手の雪渓でグリセードしたり、岩を遊んだりして霧の霽れるのを待つて見たがそれでも駄目である。いつそ雪渓をつめて尾根から頂上へ行かうとも思つたが、それも餘りに興が無いので到々諦めて小屋に戻つてしまつた。小屋の邊りへ來ると霧は無く空が見える。鳳凰の方はよく見えるぼんやり仰向いてゐると晴しらすが出る。占めたと思ふと雨しらすが出る。其の中に兩方一緒に出たりして氣をもませる事甚だしい。間もなく日が暮れてしまつた。

バットレスへ

未だ夜中だと思つてゐると年寄の樣に早起きのMが、又、天氣だ〳〵と言つてゐる。うつかり起きると昨日の樣に、三文の得どころかえらい損をするから暫く自重してタヌキ寢をしてゐた。然し餘り叫ぶのでゴモ〳〵と顏を出すと、あけつぱなしの戸口から月夜の景色がよく見える。やを起き上つて火を起し、飯を食つて出掛けたのが六時半。林をぬけて雪渓へ出るとゆつたりした大樺

澤が豊かな六月の殘雪に、如何にも南らしくのんびりしてゐる。傾斜はゆるいが時間を節約する爲めアイゼンをつけて、さつさと登つて間もなくバツトレス全景の見える處へ來た。此處へアイゼンや二、三の品を置いてからバツトレスに向つて更に登り、大分岩に近づいた處でルートを決める。（5）のルート（以下「關西學聯報告、一號」の名稱による）はつまらなさうだし、第4尾根も登られてしまつたさうだし、（3）へ行き度いが其の眞下はちよつと無理だし、（2）のガリーは廻つて見ない事には判らないから、結局近い處で第4尾根の下からとつゝいて第3尾根へ出る事にする。此處に淺い溝があるので先づ其處を登る。五、六ピツチだが相當面白い處だ。登りきると二、三、樺があり、更に一枚岩を這ふと濕つた溝が第4尾根の逆層のリツヂへ出やうとOが頻りに試みたが、トラバースして、リツヂへ出る事にする。此處で右にハーケンでも無いとちよつと無理だ。そこで戻り氣味に左へ移り岩角を廻つて十四、五米トラバースし、更に（5）のルートを左下に見ながら三十米一つぱい左上にトラバースする。硬い岩で愉快な處だつた。然し、其處から右に歩いて五、六米登ると草附きの帶に出、之を辿ると簡單に（3）、（4）間の雪溪に出てしまふ。然し下の方で手間取つたので未だ三分の一も登つてゐないのに、此の時既に十一時半であり、又、盛んに霧が卷き出したので多少決心がにぶり、（5）へ出て早く登頂しやうかとも思つたが、Mが頻りに（3）を主張するので其のまゝ行く事にした。一息入れてから急な雪溪を登り第3尾根の末端にとりつく。若し冬、此のルートを採るとすれば、（3）、（4）間のガリーの雪の狀態に注意をしなければならない。それからごつ〳〵した岩を步いて、少し這松の急斜を攀ると、十六、七米の垂直な岩峰にぶつかる。此處は左を卷いても行けさうだが吾々は岩峰の眞中にあるクラツクを登つて見た。此のクラツクは下の雪溪からも見えるもので、ちよつと面白い。之を越し岩の瘦尾根を辿ると、右手の霧の中にルート（2）の陰鬱なガリーが見え、左には第4尾根の「燐寸箱」のフエイスが隱顯して、面白さうな岩肌がしきりに登高欲をそゝる。更に登ると尾根は廣くなつて面白見は減るが霧で見通しが効かぬし、エレガントな岩場があるさうだから、樂しみにしたり心配したりして行く。やがてちよつとしたテラスがあつたので飯を食ひ、尙も登ると岩は段々つまらなくなつ



大樺小舎よりの北岳　　鷹野雄一

てもう頂上も近い様だ。エレガントも何時の間にか過ぎたと見える。ザイルをはづしてせつせと登るとやがて頂上だ。流石に嬉しくなつて、兩俣からの道は疲れるの、間の岳の雪渓はグリセードにいゝのと、指差しながらおしやべりをして菓子を食つて、煙草を吸つて、さて今日中に廣河原迄下るのだと走る様に道を下る。釣尾根の上でバットレスの寫眞をねらつたが、遂に顔を見せぬので諦め雪渓をドン〳〵飛ばして下る。傾斜の割にスピードが出て愉快だつた。途中、殘して置いた荷を取り、更に雪渓を馳け降りて林をぬけて小屋へ歸へると、ホツとした氣がして廣河原まで行くのが嫌になつた。穩やかな心地のいゝ夕方である。これでも吾々だけで二、三日暮した小屋、なごりを惜んで今日も此處に泊る事に決めた。

夜、頻りに狼の聲が聞える。さう言へば今日の晝、Mが熊の足音を聞いたとか。戸を閉めて豪勢に火を燃して、天井のチラ〳〵するのを見ながら眠つてしまつた。

歸路

夜が明けると豪雨である。さあ弱つたがもう食糧は全つたく無いし、是が非でも歸らなけりやならない。それで、昨日迄行く心算りでゐた赤薙澤は止めて來た道を歸へる事にする。怎んな雨に雨具は無役だ。廣河原へ來た時はもうグツショリ。篠つく雨に洗はれながら河原を步いて例の丸木橋へ來る。下は增水した野呂川、鉈目も無いつる〳〵に濡れてゐる丸太を鋲靴で渡るのだから始末が惡い。一糎づゝ足を運んで漸く對岸へ着いた。バットレスよりづつとこわい。それから白鳳峠の登りだが、雨の日は樂なものでノンストツプで峠へ來る。此處まで來ると風も相當ひどく、何しろ寒くてたまらないので着換への毛のものを全部着て、さあ來いと烈風の中を步き出す。後から吹いてくれゝばよいものを、横から吹くので步き憎くて仕樣がない。雨は勿論下から降る。ひどい暴風雨だ。尾根へ出たらひどいだらうと思つて居たが、出て見ると案外である。風は卷き上つてしまふものらしい。空腹を角砂糖でごまかし〳〵地藏へ來、どん〳〵走つて北御室へ着き、ちよつと小屋をのぞいて見たら相當雨が漏つてゐる、いゝ小屋だのにと思つたが此處に居ても仕方がない、爪先を痛くしてドンドコ澤の下りだ。どの瀧も〳〵水が多くて素晴しい、が、それよりも胃の腑の方が氣になる。南精進ケ瀧を過ぎても、空腹に下りは中々長

い。足に任せてガクン〳〵と下りて行く中道はやつと平になつたが、此の平が又いやに長くまだか〳〵と思つてもやつぱりまだで、もうどうでも勝手にしろと思ふ頃、漸く道は曲つて鑛泉宿の庭先に這入つてゐる。義理でも此處を素通りには出來ない。先づ飯を註文してから上り込んで湯に入り、色々のものを乾す中に泊らうかなんて軟化説も出たが、一蹴されて五時半頃、八時の汽車に間に合ふ樣にと出發する。

鳥居峠からはどんん〳〵走り息せき切つて發電所に飛び込んで、電話をかけてくれ韮崎へ〳〵、と言つたが發電所の電話は韮崎へ通じない。まだバスに間に合ふだらうと言ふ聲を背中で受けて、又一走り祖母石まで、でもいくらも行かぬ中に、遙か遠くの街道にバスらしい燈が通るる。仕舞つた、と思つたら急ぐのが嫌になり、尚も走る0の後姿が闇の中に白く浮んで小さくなつて行くのを妙な氣持で見送つてゐた。祖母石へ來ると案の上今行つたばかり、而もそれが最終との話に腹の立て樣もない。これで今日中に歸ると云ふ望みも消えた。仕方なく夜の街道に螢を賞しつゝ、韮崎の驛に着いた時は流石に足の裏が痛かつた。

（一九三五・九・二〇）

團　衞　谷　望　月　達　夫

久し振りで東京に歸つて來られた、吉澤一郎氏等に誘はれて、七月中旬燕より團衞谷を下つた。出發前から村尾金二氏より相當面白い谷だらうとは聞かされて居たがそれ程凄いとはつゆ思はず、日頃の無精で何の豫備知識もなくお伴した次第である。

此の行に關しては、吉澤氏が相當詳細に「山岳」へ發表される豫定なので、私は同氏より拜借した概念圖（卷末にあり）を基とし、大體谷の樣子を述べる事とする。

私の解りにくい文章も、同氏の地圖により少しは救はれたかもしれない。

燕山莊から高瀬の谷を俯瞰すれば、直ぐ眼前に針葉樹や濶葉樹に包まれた深い谷が、眞直ぐに西走して居るのに氣づく。これが圜衛谷である。新らしい陸測、五萬分の一の地圖にも圜惠とあるが圜衛が正しいらしく、又圜衛谷を別に川九里澤と稱する樣に記入してあるが、川九里澤とは、高瀬出合より約十町ばかり上流にて、圜衛合流する蛙岩あたりから出てゐる澤を云ふのが、正しい樣である。そして圜衛と川九里とを比較するなら（少し遠方より見た爲、はつきりした事は云へないが）、谷そのものゝ形狀から、又水量から云つて前者が矢張り本流であり、川九里は圜衛の一支流と見た方が妥當であらう。

燕山莊のすぐ前のザラ〳〵を降り、這松をわけても下れ相ではあつたが、幾らかこの谷を知つてゐる有明の下川の案內で、燕岳三角點北側の鞍部からコージ澤へ下る道（コージ澤と圜衛谷とを分つ尾根の道）をしばらく下り圜衛峰（等高線二四二〇米突の頭、吉澤氏による假稱、以下同樣）の東側の鞍部より、南側の小澤を下り圜衛の本谷（左俣）へ合す。この小澤を假りに兎澤と呼ぶ。この澤は大體上部は左岸の草付を下り、下部は澤通し下れば樂である。鞍部（兎澤の）より本谷まで三十分。本谷と兎澤の出合すぐ上に小瀧が五つ程かゝつて居る（五段ノ瀧）。其處からよごれた殘雪の側を暫く谷通し下り得る。右岸より一寸目立つ白い岩床の澤が落ちて居る（平滑澤）。小瀧二つを右にまき、一度河原に下りて此度は左岸をまく。左俣、右俣を分つ尾根は相當顯著で、兩俣の落ち口は等しく瀧となつて合して居るが、左俣の方が幾分水量も多いらしい。

出合ひよりは左岸をからみ、水のシヤア〳〵落ちてゐる小澤を一つこへて一寸した樂な處に出た。目印しとなる岳樺が右岸にある。兎澤の出合より此處迄一時間半。此のすぐ下に、非常に大きな瀧（中ノ大瀧）がかゝつて居る。これは、谷中でも一番大きなもので、中々堂々たる瀧である。圜衛谷は、この中ノ大瀧を境として斷然形相を異にする。今迄の處は大した事もなくこれから下流が惡い。その序曲は既にはじまつて居る。兩俣あたりから谷には倒木多く、これがほとんど下まで見られた。

中ノ大瀧、及びそれに連續する幾つかの瀧を、左岸を大廻りし小尾根をこしてまく。右岸はおそらく非常に高

くまかない限り、不可能であらう。小尾根をからむ時、登りに一度、下りに一度ザイルを用ふ。登りに用ひた處は、特徴ある一寸した岩場であるからすぐ解る。ガラ場より殘雪のある河原（小廣河原）まで、一時間四十分を費す。下りた處は「小廣河原」と名附けた如く、瀧又瀧のこの谷の中でもホツと一息つける處だ。再び下方は瀧があるらしいので、此度は右岸をからむ。この邊は兩岸とも相當な岩場で、傾斜も非常に急である。小尾根からは高瀬の貯水池が見える。再び原河に下りた處は、約三十米突ばかりの「スダレの瀧」の直ぐ下である。この瀧は今迄の中で一番巾の廣いものである。小廣河原からこゝまで一時間。再び右手をからむ。岩は非常につる〳〵で、河原に下るあたりは全くの一枚岩、けれ共傾斜の比較的ゆるい處をザイルなしで下りられる。今からんだ瀧を「奥ノ瀧」と呼び、大きさはさ程大きくはないが、美しい瀧だ。これをからむに一時間一寸を要す。この河原の直ぐ下は目立つた滑をなし、まだまだ瀧のある事を思はせるが、左岸の尾根を越えた向ふには、相當大きな澤が一つ入つて居ることが明瞭となり、これは勿論川九里澤であるから、高瀬も、もう近いことを知る。滑のすぐ上で左岸の尾根（圓衛、川九里をわかつ、）の途中迄上ると、圓衛谷が一際南方にぐるつとまがつて、兩岸が垂直に近い岩壁であるに氣づく。尾根からからくも岩場を川面へ向つて懸垂で下り、徒渉して右岸へ渡る。この徒渉は相當ビク〳〵ものだ。上下の瀧と瀧との間のわづかな處を横切るのだから、然乍此の場合、川九里と圓衛との間の尾根をへて川九里澤に合しても、その落口は細長い瀧であり、更にその少し下には大瀧が物凄い勢でおちてゐるから、澤通しには下れず、如何しても左岸をまかなければならなくなる。してみると非常に時間もかゝるし、又つらいことゝ思ふ。前記の徒渉は全く唯一の門みたいな處だ。此度は右岸をまき再び貯水池を見て、屏風の大岩壁の端を二十五米突の懸垂で河原に下る。前の滑ある河原から此處まで約一時間四十分。下りた地點から二町位上方には川九里と圓衛が出合ひ、共に落口は瀧をなしてゐるが、勿論圓衛の方が遙かに素晴らしく、この谷の中、中ノ大瀧に次いで大きなもので、瀧そのものはむしろこの方が美事であつた。此處から高瀬まではゆるやかな河原で、ものゝ十五分もあれば充分出られる。

私達のからんだり、まいたりしたのは、大體羚羊等の

かすかな足跡に従つたもので、勿論踏跡等はない。

ザイルは、三十米突と二十米突とを用意の爲に持參したが、二本を同時に用ひたのは屛風澤の側を下る懸垂の時だけで、三十米突のが一本あれば大體こと足りると思ふ。

歸京してから暫くして、これも吉澤氏に敎へられて、「ベルグハイル、3」と「わらぢ、一九二七」に圍衛の記事のあることを知つた。で前者のものは大したことはないが、後者の方は一寸參考になるし、且又案內した故中山彦一？の稱する瀧の名稱が記してあつて、一概に假稱のみ用ふるも如何かと思ひ、後から想像するので詳細にはわからないが、大體該當するのを記してをかう。「わらぢ」の中に見える岩壁瀑と云ふのはおそらく私達の云ふ五段ノ瀧の上方にあるらしい。かなり長く且又急な雪溪が、樹間に見られたから、或はその附近か。獅子瀑は中の大瀧及びその下の幾つかの瀧の云ひで、四、四、十六あると云ふのも數の多いことから來たのであらう。神樂ノ瀑と云ふのがスダレノ瀧にあたり、日暮瀑と云ふのが、圍衛の大瀧にあたる。又「わらぢ」第三號、一九二九にも、圍衛に關する相當詳細な紀行文がのつて居る。想像して居たよりもこの谷は遙かに手ごわく、燕山莊から湯俣溫泉迄、直距離にして一里に滿たない澤下りに十二時間も要した。然乍、面白い澤下りだつたと喜んでゐる次第である。（一九三五・八・二五）

錫杖岳

飛驒よりの凉風を胸に中尾峠の草原にたゝずんで、先づ登山者が目を見張るのは、笠連峰の悠々迫らぬ明朗な姿であるに違ひない。そして其の南下するなだらかなスカイラインの階調を、僅かに破る一小突起等に注目する

小谷部全助

者は、恐らく一人もあるまいと思ふ。だがこの二千米そこ〳〵の貧弱な突起こそ、アルプスの高い峰々を向ふに廻して、毫もひけを取らぬ優れた岩場を隠す錫杖なのである。確かに錫杖を始めて訪れんとする者は、峠からの外貌が餘りにも映えぬのに淡い失望すら覺える。アルプスの豪華から三ツ峠や六甲のロツクガーデンに舞ひ下る馬鹿らしさに、もう飛驒への降りさへ憂鬱になつて來るのだ。殊に眞夏の快晴續き、薄靄で一面青い山肌が何の變化も見せて呉れぬ時など、廻れ右をして殘雪の穗高にでも足を返し度くなつて了ふ。一層の事、霧にでも隱されてその懷深く喰入る迄、否、中尾の部落迄でもの間視野の外にあつて欲しい。それが一度び低い中尾の部落から仰ぎ見る時、もう峠の上からの樣に笠、拔戸の山々に壓されしぐれと河原のせゝらぎが子守唄の樣にやさしく響く。

冬には一寸寒いだらうと思はれるこゝの湯も夏は丁度よく、ゆるりと手足を伸し乍ら、紫煙を上げる氣分は又となく好い。居ながらにして、はるか上流の槍の姿に接する事が出來るのも、其の名の通り特典の一つであらう。萬山錦繡をまとふて燃える樣な晩秋の幾日かを、ゆつくりと滯在して、靜かに忍び寄る冬の歩みを見つめて暮したい所である。

るると云ふよりも、寧ろロマンチツクな傳說の存在を想はせる程に不思議な山容なのである。もう中尾峠の失望は完全に消えて、今は一刻も早く訪れて、その神祕の扉を開き度い衝動にかられて來る。

錫杖に至るには、中尾から蒲田川を釣橋で右岸に渡つた上流、一、二丁の所にある槍見温泉から裏山に開かれた笠への小路を辿ればよい。こゝは宿屋とは思はれぬ小さな一軒屋ではあるが、簡單な物資位は調達出來るし、又歸途の汗流しには十分な温泉場らしさは、全然ない下の浴槽を滿して居る。飛驒の訛もゆかしい山の乙女の素朴なサービスを受け乍ら、ゴロリ寢ころぶ耳もとに、蟬靜かな山の湯である。

此處から急なヂグザグは、日中は避けたい様な闊葉の疎林をくぐつて登るが、間もなくクリヤ谷の右岸に沿ふ様になつて、やゝ清涼の氣が漲る。クリヤ谷の此邊一帶は急で瀧等もあり、相當變化に富むが眺望は一切無く、唯ひたむきに汗を絞る許りである。そうして丸木の掛けた橋をもつて左岸に移り、やがて再び右岸に戻つてから間もなく、本流が巨岩の積み重なりで目前にもり上つた様になつた所の上、左側から急なガラ石の錫杖澤が合流して居る。そして怪奇な前衛ピーク、スリーテイースの岩塔が、右奥に威嚇するかの様に突き立ち、錫杖岳の序曲を奏でて居る。此處からもまだ〳〵謎の懐を覗く事は出來ぬだけに、もう吾々の心は焦々する程の遊志で一杯になり、如何なる重荷も疲れも忘れて前進し、上を振仰ぐのだ。クリヤ谷と別れてからは、四、五十分程で樂に根據地たる岩小舍に這入る事が出來る。それは、南澤と本澤のはさむ鋭角の頂點に頭を突出す巨岩の下、奥行二間間口三間餘もあらうか。たつぷりした岩の庇は、如何なる豪雨にも絶對安全である。水は云ふ迄もなく直ぐ側だし、焚木は豊富。それに何と云つても一番嬉しいのは、寢乍らにして裏穂高の素晴しい眺望に耽る事が出來る點だ。

此處からも本峰は未だ〳〵望めないが、スリーテイースの岩峰は見上る空にぐんと聳えて眉を壓する。霧の立込めた朝等新鮮な日光の射し初めると共に湯氣の様に薄れて現はれて來る岩峰の、想像もせぬ威大さに全く打たれて了ふ。この岩峰を登り切れば更にその上段たる烏帽子岩に取付く事が出來るが、未だ成功した者を聞かない。アルプス名所の岩場とは違つて、本當に緊張した眞險な登攀を望む者に對して、錫杖は至る所人ずれのせぬ立派な、そして恐しい様な岩壁をもつて十分な滿足を與へて呉れる。比較的に規模の小な上に、全山の傾斜が極めて急で直ちに岩壁をかけて居る爲、錫杖の各峰への登攀はこの岩小舍を根據にすれば、普通のコースなら一日行程には十分過ぎる程である。そして此處から分れて、各峰に喰込む南澤、本澤、北澤のガリーは辛い藪こぎを省き立派な自然の登山道として大いに役立つ。錫杖は大體、本峰、烏帽子岩及び南峰より成り、本峰は三つの頭を持つ東方尾根、及び五つの頭をもつ南方尾根を派生して中心をなし、其の東南面は物凄い岩壁が數段にかゝり、本澤右俣、北澤右岸の草地に落ちて居る。東方尾根の末端には、

錫杖の特色を一つに集めた怪峰、烏帽子岩が掉尾の勢を示し、本峰に對峙していさゝかも遜色が無い。南峰は綠草に彩られたなごやかな山容で、烈しい錫杖の味とは全然變つて居る。どうしても登攀の興味の中心を爲すものはスリーティースから烏帽子岩及び本峰であらう。本峰も東方、南方の二尾根のリツヂは藪が相當まぢつて興味を減殺するから、どうしても東南のフェースと云ふ事になつて來る。だがこの岩壁は實に物凄くて容易に近寄り難い。兎も角そうとすれば登攀者にとつて重要性を多分に持つのは北澤と本澤右俣の二つに限定されるわけだ。本澤右俣も、此のフェース登攀の目的に對して大いに利用されるが、現在では中岳や、或ひは南峰と本峰との最低鞍部へ至る比較的おとなしいルート以外、あまり問題となつては居らぬ樣だ。尤も錫杖へ訪れる登山者そのものも極く稀らしいが。ガラ石を踏んで北澤を暫く登ると、巨大なスリーティースと中岳の岩壁が双方から迫つて來て狹い門の樣になり、三段のチムニーを型造つて溯行を妨げる。右岸の岩壁をからんで越すのだが、あまり高巻きせぬ樣よく〳〵注意せぬと、ルートを失つて上へ上へと中岳へ出て了ふ結果になり勝である。中岳の中腹岩壁もサウンドで、規模も相當あり仲々興味ある登攀が出來る。北澤の難所であるこのチムニー附近の景觀は、錫杖のあらゆる澤の內で一番だと思ふ。とても登攀の對象にはならぬ樣な、そぎ落した岩壁がぐつと谷を狹め、上流は烏帽子岩に至る岩又岩の連續だ。そして下を望めば相寄る岩壁の狹い間から、なごやかな中尾の部落が、この烈しい岩と面白い對照をなして展開して居る。此のチムニー狀の瀧は極く小量乍らも常に水を垂らして居るし、又大きなチョックストンを懷くから登降は非常に困難である。吾々が下つた時は、幸ひ水が殆ど無かつたのでアブザイレンで樂に降つたが、最後（下）のチムニーはビレイイングピンが全然無く、漸く見付けた僅かな割れ目にピトンをぶち込んで這々の態で降つた。此處から上流は岩場になるが傾斜が大して急でないので、容易に烏帽子岩の西肩、或ひは東肩に達する事が出來る。中岳の上部は藪をなして居り、第一峰から一つのギヤップを下り左（上流に向つて）に捲いて溝を登り藪を越すと、身は忽ち短少な草に被はれた公園の樣な臺地に飛び出る。それがずつと上迄伸びて又急にあの凄い本峰東南面の岩壁になるのだ。恐らくこの草の臺地程錫杖、殊に

鍋杖岳前衛ピーク

鍋杖岳　東南面

小谷部全助

烏帽子岩の展望に適した所は絶對に無いと思ふ。中尾峠から望んで少しでも輕蔑の心を起したのが、濟まない様に感ずる。この美しい草原に横たはつて、神の手になる奇しき彫刻の數々を眺め暮らす氣分。區々たる人間社會を超越した仙者の氣分とはこんなものだらうか。太古より文明の今日、更に永劫の果迄、みどり兒がその母を慕ふて止まぬ如く、大自然の懐をなつかしんで彷徨する山男に下らぬ屁理屈は要らない。そして困難が加れば加る程、母の懐がそれだけ一層深刻な慕しいものになつて來るのだ。其處にあらゆる研究が生じ、進歩が促される。おだやかな綠草のテラスは物凄い岩壁を帶の様に取巻いて、垂直の壁を數段に劃し、何とも云はれぬ魅力を與へると共に、良き道を爲して居る。新雪がこのテラスを埋める頃の錫杖は、どんをに素晴らしい事だらう。だがあの岩小舍は、雪崩の爲全然使えなくなるさうだから、何處か他に根據地を作らなければならぬ。それにしても非常に困難な登攀だらうと思ふ。さて烏帽子岩にもこの中岳から續く草地を捲いて樂に達する事が出來る。

烏帽子岩登攀。これは錫杖に於ける最も興味ある登攀である、と言つても決して過言ではない。東方尾根から見る時は、はるかに槍穗高をバックにして如何にも細い鋭い牙であるが、之を南方、中岳から望む時は案外横幅があり、烏帽子岩と云ふ名の所以がうなづかれる。

登攀のルートとして撰ばれて居るのは現今では東肩からのみであらうと思ふ。西肩から東肩迄は立派な棚があつて樂に卷ける。この棚の西肩寄りは、一寸した岩小舍になつて雨露を凌ぐ事が出來る。そして北澤を百米も下れば點滴位得られるから、不時の場合等利用出來る。東肩から小槍のリツヂを思はせる様な岩を攀ぢて大きなアンカレヂに達すると、上は手掛りのない垂直な稜角になるから、そこで北面をからむ。木のはえた土の棚で大手を振つて歩ける所だ。一寸下つて又登ると二段のチムニーにぶつかる。此處は相當の難場だが下が極く安全な爲、思ひ切つた動作が出來て大した事もない。唯、上の方のチムニーは開きが廣いのとチョックストンが大きいので、一寸困難と云へば云へる。腕力の少いものは肩等を利用しなければならぬだろう。この上に向つて左側の岩に、足場としてハーケンが打ち込まれてあるが、體の向を變へてチョックストンに喰り付く時便利だ。それからは樂に藪の間を歩き、大きな岩の裂目の間を通つて頂上

に出る。此處から見た錫杖本峰、遠くに槍穗高、燒等の素晴しさは改めて述べる迄もない。この他、ルートと目されて居るのに、西肩の南傍から上に切れ込んだチムニーがあるが、普通のネールドブーツでは甚だしく困難だと思ふ。それから南面にも登れさうな所があるけれども、更に一層困難だ。何しろ北澤のはるか下迄何のさへぎるものもなく、隨分落ち甲斐のある所だけに殘念乍ら手足が思ふ樣に働かないのだ。氣が合つて技の揃つたパーテイで岩小舍にこもり、そして毎日をかゝる處女岩壁に滿身の努力を以つてぶつかつて送る生活。それは想ふだに樂しい事ではないか。心地よく汗して戻る岩小舍には、苦勞して運び上げた御馳走が吾々を待つて居る。ごろりとシュラフザツクに寢ころんで食後のパイプをくゆらす頃、夕陽は裏穗連峰を赤々と染めて、唯もう山男は歡喜にむせぶばかりである。

隨想

村尾金二

「寫眞」

私は寫眞を撮れない。撮れない事はないが唯うまく撮れないのである。

それなのに「寫眞」に就いて何か云ふのは面はゆい氣もするが、考へて見れば映畫の批評をするのは、俳優でもなければ監督でもなし、撮影技師でもない人である事を思へば、寫眞が撮れなくても少し位勝手な熱を吹いたつて（と言つて映畫批評家が勝手な熱を吹いてゐると云ふのではない）差支へはないだらう。

寫眞がとれないからと云つて、撮らない譯には行かない。矢張り賴まれゝばシヤッターも推さねばならぬ。新

雪の上地高に二人で入つて、徳本峠を越して歸つた。峠の上で型の通り紀念撮影をする。

「此處を覗いて、此の出つ張りを押せば好いんだから」

そう云つてカメラを私に渡した友人は、二間半ばかり離れた適當な所に、他所行きの顏をして立つた。

私は見なれないファインダーの中に、豆粒の様な人影を見てシヤツターを切つた。歸つてから出來上つたのを見たら、可哀そうに友人は片腕と片脚位しか寫つてゐないで、二三尺離れて雪の中に立ててあつたピツケルが、此奴が却つて他所行きの顏をして寫つてゐた。友人には濟まないと思つたが、日頃から大事にしてたピツケルの事だから、靈魂此處にのり移つて、私が友人の姿と思つて見たのは彼の靈魂で、實はピツケルであつたのかも知れない。そうすれば此の寫眞を英國心靈研究學會の、サー・オリバー・ロツヂ氏邊りが見たら喜んだものだつたらう。此の寫眞に

「白晝、大天の下、大地の上、何等詐術を施す餘地無き時に撮れる靈魂の存在を證明する寫眞を余は貴會に提出するの光榮を有す」

と云つた様なことを書き添へて送つてやつたら好かつた。然しそのまゝ送らずに、到頭提出するの光榮を有しなかつたのは、英語の手紙を書くのが面倒であつたばかりでなく、實はその時のレンズが確かに人間の方を向いてゐたと云ふ事を、斷言する丈けの自信がなかつたからである。

稀には餘り秀逸で自分でも呆れるのが撮れる事がある。

此頃のスキー場は鐵道省の宣傳よく行屆いて、相當華やかなのが多い。夫々服裝丈けは尖端的で、帽子と襟巻とジヤケツとズボンとノルウェイバンドと色が皆違つてゐる。中には水際立つてうまく滑つてゐるのもある。それを寫眞に收めようとカメラを向けたら、もうスツと前を通りすぎてしまつた。今度こそはと、滑り出したのを下で愼重にかまへてカメラを向ける。程よい所でシヤツターを切る。歸つて現像して見た所が、寫つてるのを見ると、少し早すぎたのか、眞白な雪の斜面とスキーの尖端丈けしか見えない。そこで私は文字通り尖端的スキー寫眞を撮影したことになる。餘り自慢にもならない失敗である。

一番よくやる失敗はフイルムを捲くのを忘れてやる二重撮影だ。映畫ならばトリツクの爲にわざ〳〵やる手もあるが、槍澤の雪渓の裾に槍ケ岳が聳えてゐたり、明神池の中に霞澤岳が瞰れたりするのは矢張りどうも香ばしくない。ダブるのが殊に景色の好い場所と來るから猶助からない。

此の場合の損害はどれ位だと思ふ？

一寸考へると簡單な樣で、場合によつて違ふので相當面倒だ。

「失策つた。ダブッちやつた」

と氣がついた時が、始めの一枚目の場所と同じか、餘り遠くない所だつたら、もう二枚パチリパチリとやつて一枚のフィルムを無駄にすれば濟む。

それが現像して見て

「おや、ダブッてら」

と氣がついた時はもう遲い。一枚のフィルムと二枚の景色が無駄になつてゐるのだ。その二枚の景色が無駄に置ではそんな憂は絶對にないと教へてくれた。この裝を發明した人は相當苦い經驗があつたのだらう。彼の愛人と、ブルドツクをダブらしたことでもあつたのかも知れない。

寫眞は下手だが他人の寫眞を讃める位の事は心得てゐる。何しろ山の連中と來たら相當強氣で「高山深谷」の一冊位なら、自分一人の寫眞丈けで充分出來る位に氣負つてるのだから、こちらも氣を確かにしてかゝらねば對抗出來ない。

先づ最初に、

「大分澤山寫つてる樣だが何本位フィルムを駄目にしたい？」

と確かめてをく。

それから

「好く撮れてるね。餘程お天氣が好かつたんだね」

とお天氣と仲が好かつた好運を祝福してをいて、たまには一枚二枚とり出して

「これなぞうまいものだな。昔の「山岳」の寫眞の樣だ」

とヤンワリ喜ばしてやる。

そして最後に

「實に好いね。近頃のフィルムの進歩と來たら本當に素晴らしいもんだね。」

とスッカリ感心してやれば好い。

お寫眞拜見の外交辭令もなか〳〵細かく氣を使ふものだ。

ある夏の夕方、近頃山へ登つたと云ふ人と話をした事がある。聞いて見ると登つた山の名は知つてるが何處をどう登つたのか分らない。懷から寫眞をとり出して

「餘りよく撮れませんでしたが」

とシホらしいことを云つて、見せてくれた。成程餘りよく撮れてゐるとは云へない代物だ。仕方がないから

「麓は割によく晴れてる樣だが、頂上は大分お天氣が惡かつた樣だね」

處が彼の言ふ所によると麓よりも頂上の方がズツとよく晴れてゐたんだそうだ。

「そうかね。寫眞ぢやそう見えないが。でもこの雲なんか面白く撮れてるよ。」

それが雲ぢやなくて雪渓なのだそうだ。

「それぢや君の寫眞機は餘程好いんだぜ、きつと。」

だがよく聞いて見ると彼の手に負へない位上等の器械でもない。

そこで私はこう云つて慰めてやる。

「山へ行くのは寫眞をとる爲に行くんぢやない。面白く登れゝば好いので、寫眞もよくとれゝばそれに越した事はないが、それが登山の目的ぢやないのだから。」

すると彼は一向分らない樣な顏をして

「實は私は山に登つても苦しいばかりで一寸も面白いとも思つた事がないし、唯寫眞を撮り度い爲に登つてるんですが」

私は唇が寒くなる思ひがした。八里の道を歩くよりこんな人の相手をする方が餘程草臥れる樣な氣がして、そのまゝその人の顏を見つめて默つてしまつた。

「夢」

私は餘り夢を見ない。が稀に見るのは山のが多い。外のは忘れてしまふのかも知れない。

雪の急傾斜面でめる。山毛欅か楢か何かそう云つたものの林で樹の影が黑く雪の上に落ちてゐた。雪が青白い感じで月の好い晩らしい。其處を一人の男がスキーで滑

つて來る。それが私なのである。自分が何かしてるのが見えるのは鏡の中位だが、此の時は私は私の滑つてるのを見た。樹の間を巧みに縫つて下りて來る。うまいなあと思つた。夜が明けてから成程スキーの下手な男の見そうな夢だなと一人可笑しかつた。

こんな夢も見た。

何處か町外れの野原に立つて居る。城跡の樣な高さ五六尺の石垣でそれがずつと向ふ迄續いてゐる。その上に立つと遠く白銀の山脈が見える。白馬から後立山へ續く連嶺の樣に思はれた。私の立つてゐるすぐ前に一本柳の木がある。それが邪魔で一番高い處が見えない。右に廻つても左に廻つても矢張り見えない。不思議な木だなと思つたら眼がさめた。私の經驗では不思議な氣持がしたり、何か考へようとしたりすると眼が醒める。

今度のもそうだつた。極く近頃のことである。誘はれて岩登りに行く。出かけようとしたらいつも一緒の太つたKの姿が見えない。自分で誘つておきながらスツポかすのはひどいと思つた。弟をつれて行く。弟は六年前になくなつたのだが別に變だとは思はなかつた。山も近くなつて小高い丘の上のあるお邸に入つて朝食をとつた。食事は濟んだが一向出かけようとしない。太陽は段々高く上る。一體どの山に登るのだらう。弟が見えないから探したら、丘の上に腰を下してスケッチしてゐる。どの山に登るんだと聞いたら、あれだと云ふ。指さす方を見たら、丘の下の方に瓦斯タンクの樣なものがあつて、それと並んでそれよりも低い山のガレた斜面が見える。何だ、あんな山か、つまらないから歸ろうと、お邸の主人には用事が出來たから歸ると云つて出た。山に來ながら登らずに用事が出來たからも、ないもんだ。それにしてもあんな山に誘つたKも變な奴だ。今日は日曜だから家にゐるだらう、一つ文句を云つてやろうと。だけど一體何と云ふ山だつたかしらと考へてる中に眼が醒めた。

夢物語りなんて實に他愛のないものだ。書く方でも氣がひける。

それに山で見たのと來たら殊に甚しい。太陽は段々高東北の朝日岳へ登る時、キリタチ澤の小屋では、私の身體に水素瓦斯の樣なものが入つてフワフワ空中に浮き上つて、その小屋の梁につかまつて下りようとしたがどうしても下りられないで困つた。翌朝起きてから思ひ出してあんな所でフワ〳〵してたら第一煙くつて困つたらう

と思つた。

劍へ登る時、眞砂澤の出合近くにテントを張つた時だつた。私の身寄りが一人死んで行つて、叔父がたつた一人生き殘つてると云ふのを見て氣持が悪かつた。誰かゞ寢てて足でも私の心臟の上にをいたので、苦しまぎれに見たのかも知れない。何だか緣起が悪くつて明日の劍へ登るのはどうしようかと思つたが、夜が明けて、小鳥が鳴いて、日が照り出すとそんな心配なんか朝霧よりも淡く消えてしまつて、また皆と冗談なんか云ひながら元氣よく出かけたものだつた。

もつと現實的なのもある。

三人で黒部の東澤へ入つて、それから右に好い加減の澤を一筋に赤牛岳へと登つて行く時だつた。その澤も下の方は水があつたがやがて無くなると、今度は唯藪の斜面をモゾ〳〵登つて、赤牛の尾根へ着かぬ中に日が暮れてしまつた。

急な斜面の藪の中で相當太そうな木を二三本伐り倒して上から綱で吊つて、その上に三人腰を下して小鳥の樣に夜を過した。何しろ水が無くて午後からずつと飲まず、夕御飯もたけず、咽喉が渇いて困つた時だつた。その夜私は大きな水筒に口をつけて、飲みほした夢を見たのである。翌朝その話をしたら友人もそんなのを見たさうだ。然し彼のは可哀そうに他人が飲んでゐる所で、而もガブ〳〵云ふ音まで聞こえて、癪にさわつて殴つてやろうかと思つたんだそうである。彼がその時本當に殴らうもなら、私は止り木から叩き落されて、成程、澤の水のある所までは行つただらうが生命の程は覺束なかつたらう。夢は普通、色彩も音響も、ないものだそうだが、夢は現實に壓迫されてそれに反抗して、或潜在性の意識が解放を求めて見るものだそうである。すると現實には何一つ思ふ通りにならない私の生活では、想ふ事、考へる事が皆夢の樣なものである。

夢の樣な話ならいくらでもあるんだが。

立山に埋藏金があると云ふ傳說を人夫から聞いたり、本で讀んだりして地圖を擴げて色々評定した。埋めた人が佐々成政だらうが誰だらうが問題ではない。その場所が大事なので結局この邊に金の延棒があるだらうと云ふ事にきまつて、一度皆で行つて見る事になつてゐる。そ

して一人丈けで抜け駈けにその方面へ足を踏み入れない事と云ふ紳士協約さへ結ばれてゐる。この夢は延棒が發見されて何に使ふかと云ふ所までは、まだ發展してゐない。唯それが發見された時その輝く山吹色に目が眩み失神狀態になり頭が變になるか、それきり口がきけなくなつてしまふだらうと云ふ說と、寶の山を一人占めをしたくなつて同行者に殺意を生じて延棒の前が修羅場と化するだらうと云ふ說とがある。どちらにしても物凄い夢である。

エベレストへ行き度いなと云ふ夢は可成り久しい。然しこれは經濟的事情が許さねば六ヶ敷しい。この困難を問題外にして、西藏の佛樣と政治的交涉をやつたり、色んなプランを立てて見るのも好いが矢張り先立つものが、先立たないと氣乘がしないし、第一他人樣が相手にしてくれない。所が資金を調べると云ふ事はそう簡單に行くものではないから、先づこちらの方を第一の夢としなければならない。所が可笑しなことには前の埋藏金のヒマラヤの山へ登ると云ふのは第二段の夢としてゐる。これなどは一生醒める事のない夢かも知れない。夢を食つて生きてる貘と云ふ獸の樣に、私はこんな夢を何度も何度も反芻して樂しんでゐるのだ。

昔の人は人生五十年を夢と觀じた。人生を夢と見た古人は、自分の五十年の人生を床の間に置いて、別の自分が三尺離れて坐つて、人生が夢であるか無いかをつくづく眺めて見る丈けの餘裕があつた。

今の人生は實にめまぐるしい。激しい勢で廻轉する盤の上で生活してる樣だ。ウツカリして居樣ものなら忽ち經濟圈外に拋り出されてしまふから、摑めるものなら何でも獅噛みつく。それこそ自分の生活丈けで夢中である。夢の中に在つては迚も自分の生活を檢討する丈けの餘裕もないだらうし、又そんな事をしても腹の足しにもなるまいから。

こんな御時勢にあつて痴人白晝に夢を說く。說いた夢が活字になつて、讀む人を惱ます事を思ふと或はこの緊張した人生の何處かにも空氣の洩れる穴があるのかも知れない。

山に住む人々

秋

小林重吉

木曾の製板所のこと

秋の山の細々とした靜けさと、澄み透つたコバルトの空と、新雪のうるはしさが、煙ほこりの多い都會の秋の雲の明るさから偲ばれると、矢も楯もたまらなくなつて友を語らつて木曾の駒ケ岳へと志した。

そして十月も半ば過ぎた或る早朝、夜行の寢不足の眼をこすりながら、伊那電鐵の宮田の驛長さんと空を指さしながら盛んに議論をしてゐたと言ふ事に成つたのである。だが驛長さんの心配を押し切つて、怪しげな空模樣に不安を感じながらも、重いリュックをかついで登つて行つた。薄暗い空に氣味の悪い黑雲が、後から後からと非常な速さで動いてゐたのを覺えてゐる。然し時には雲が切れて空が明るく成る、と又急に暗くなつて雨が激しく降り出すと云ふ天氣だつた。秋によくある颱風の前知らせだつたのだ。そして止むを得ずその日の到頂を斷念して中腹にある製板所の小舍を訪れた。

小舍は確か四合目より少し上の風當りの少い谷間に在つて、四、五軒の粗末な小舍の圍りには製板された板が澤山置いて在つた。びしよ濡れの體を乾かして、焚火にあたれた時には全くほつとした。確かに暴風雨は一段と猛威を加へたらしく、谿あいでさへもその咆哮のすさまじさには脅かされる程だつた。その時吾々はたしかに闖入者ではあつたが、その小舍の人達は山人の人懷つこしさで、久し振りに歸つて來た家族でもあるかの樣に、心置きなくもてなして呉れた。

小舍には年取つた老人夫婦と、三十位の若い男と、もう一人誰か居たやうだつたが、はつきり思ひ出せない。そ

れから二晩風と雨の音を聞いて暮した。小舎の人達も仕事には出られない。一緒に一つ鍋で飯を食つて、圍爐裏の傍で焚火を見つめてねたのだ。私等はその老人に色々な話を聞いたのだつた。その人達は十一月の末、雪が積るまでは里には下りないそうな。

老人は冬の山の恐ろしさを語つて、「昔或る大工が雪の峠を越えて來た。そして尾根をたどるよりは谷に里にもう一息といふ處まで苦しみながらたどりついて、そして尾根をたどるよりは谷に下る方が早いと考へたらしく、彼の足跡は谷へ向つてゐた。途中に大きな岩の雪の上に出てゐる處まで來ると、彼はほつとばかり重い大工道具を石の上に置いて一休みをしたが——。そしてそのまゝ、二度と立ち上ることなく、あの世へ旅立つてしまつた。」と。その峠の名前も聞かなければ、大工の名も分らなかつた。恐らく田舎から田舎へとさすらひ歩く渡り者だつたかも知れない。彼にも鄉里に遺した親も、或ひは妻子もあつたかしらん。そして遺族は今でも彼がその様な死方をしたのを知らず、はかなく彼の歸りを待つてゐるかも知れぬ。かく想像すれば一編の小説でも生れてくるやうな氣がする。

それから熊打の話だとか、雪の精の話だとか、それからそれへと盡きなかつた。老人の一番得意だつたのは、日露戰爭出征の時の話だつた。今でこそ山の中にくすぶつてゐるが、嘗ては若くして華やかに凱旋した事もあつたのだらう。その時分の日本の大砲は情なくて、彈が皆敵に屆かないで落ちてしまつたとか、自分の圍りが殆んど傷ついて二人位で大砲を打つたとか、日本が勝つてゐるんだか負けてゐるんだか分らなかつたなど。

彼の話しには誇張もあつたゞらう、しかしそれは彼の思ひ出の中に生きる、唯一の誇りには違ひない。私等はほんの行きづりの旅人として、その質素な平和な生活に三日目に分れを告げた。

冬　乘鞍の百姓家のこと

信州の野澤温泉から、乘鞍へとスキーにやつてきたのは、十二月も押しせまつた末近い頃だつた。そして位ケ原の粉雪に惠まれて、冷泉小舎から鈴蘭小舎へと下つて來たのは三十日の夕方だつた。然し鈴蘭小舎が一杯で泊れないので、例の一軒の百姓家へ泊めて貰つた。

小い家に夫婦と、十二、三の男の子を頭にして二人も小さい乳飲子を抱へた暮しは、樂でないに違ひない。親

父さんはスキーの修繕をやつてゐるとか、姿が見えなかつた。それでも山國の家の常として中には爐が切つてあり自在が掛つてゐた。お內儀さんはモンペをはいて、家で盛んに山葵漬を造つてゐる。聞くと此處ら邊では名物ださうだ。

私等は三人で火にあたつてゐると、突然戸が開いて若い、スキー服を着た女が入つてきた。「この手袋と上衣乾かしておいて貰ひますわ、鈴蘭の方は混んでて嫌だから」と云ふ。その家の人とは馴染みらしい。聞くと毎年來るてから、總領の男の子に「あの人はスキー上手かい」と聞いて見た。「上手くなんかねえよ、轉んでばかりゐるだ。俺の方が餘程上手い。」と自慢する、可愛らしい顔をした悧口さうな子だ。母親の手傳いをしたり、妹や弟の世話をしたり仲々感心だ。「大きく成つたら何になる」と聞くと、「山が好きだから案內になる」と言つた。「立派な案內になれるよ」と云ふと、母親が嬉しさうな顏をした。

母親は柔しい顏立ちをした丈夫さうな女だ。連の一人がスキーを折つたのを、直してくれるかと云ふと、今晚家の人に言つて直しておきませうと言ふ。

晚飯は味噌汁だけだ、何處の山の人達でも大概三度々々、味噌汁と漬物だけで暮してゐる。それでも白米を食べるのは好い方なのださうだ。稗や粟だけで生きてゐる人々などは、病氣になつても白米の粥を食はせるとそれだけで病が直ると言ふ。都會の人が考へたら、まるで夢の樣な話だ。私達が持つて來たビスケツトや、チヨコレートを子供達にやつて呉れと言ふと、母親は幾度も禮を言ひながら受け取つた。大きな子供はそれでも遠慮してゐたが、四つ位になる男の子は、兩手に一ぱい把んでほゝばつてゐる。母親が、「一ぺんに食ふんぢや、ねえぞ、あとは明日の目覺ましにするから」と云ふと惜しさうな顏をした。

我々の食ひ殘りの菓子が、こんなにまで山の人々を悅ばせる事が出來るなら、幾ら持つてきても惜しくはない樣な氣がした。その晚は雪がキシキシ云ふ程寒かつた。そして遲くまで外でコトコトと云ふスキーを直す音がしてゐた。

春

丹澤と大菩薩の麓

四月と云ふ聲を聞くと、近郊の山々はすつかり春の雰

圍氣に包まれてしまふ。去年の四月丹澤を縱走して、塔ケ岳から大倉と云ふ部落へ下りてきた時の氣分は、實に良かつた。天氣はうら〳〵と輝いてゐるし、ふんわりとした綿雲はのびやかに浮んでゐるし、麓は櫻の花の滿開と云ふ美しさだつた。

喉が乾いたので、一軒の農家へ水を貰いに入つた。だが此處いらの人は恐ろしく不愛想だ。飲みたけりや勝手に飲めと云ふ樣な態度で、默つて仕事をしてゐる。同じ近郊でも、秩父の人達のやうな親切さと素朴さは少しもない。東京に近いために、人間が功利的に出來てゐるのだらう。

然し子供達は實に元氣だ。十位の女の子が、大きな二つの水桶へ一杯水を入れて、かついで行く。それでゐて顏立ちの美しい、可愛いゝ子供なのだ、一體に此處いらの女の子供等は綺麗だつた。恐らくコーカサス人種みたいに、美人系統なのかも知れない。だが彼等の言葉使ひには、訛りが强かつた。道を尋ねてもはつきり意味が分らない時があつたから。

同じ今年の四月大菩薩峠を訪れた時の感じは、かなり異つてゐた。麓の番屋附近は、廣々とした草原と河などと云ふ牧歌的情調は、丹澤よりも乏しいが人々は親切だつた。東京邊りから大勢變な登山者が入り込むにしては氣分が淳朴だ。

山を下りて來る途中、一人の樵夫に會つた。車に一ぱい薪を積んでゐる。馬が來ないらしい。馬に會はなかつたかと云ふ。會はなかつた、と云ふと、今、上の方は雪で大變でせう、一人で登るのは偉ひこつたと感心してゐる。そんな事はないと言はうと思つたが、これでその山人が如何に山を尙んでゐるかゞ感じられて、氣持が良かつた。

夏

信濃四谷のこと

田植えの頃、信濃の初夏は、菅笠や、手拭いをかぶつた娘たちの赤いたすきや單衣物を、新綠にからませて、道行く旅人の心情を明るい風景や水田の草の香りに惹き寄せて行く。

六月の晴れた一日、吾々二人は四谷の驛の前の食堂で、先程二股までお客を乘せて行つたと云ふハイヤーを、初夏らしい伸んびりして氣持で、歸るのを待つてゐた。ゾンメルシーを持つて來たし、この暑い日盛りに平地を步

いて行く氣は、ちよつとしなかつた。その家は未だ造りの新しい、旅屋と飯屋を兼ねてゐる家で、その前から雪がべつとりつまつた白馬の大雪渓や、白馬鑓の方へ續く尾根が雲の間から現はれたり消えたりしてゐた。その食堂の片隅で一人の男が、吾々が入つて行つた時から酒を飲んでゐる。大分景氣の良さそうな顔付で、干物を肴にしてもう地酒の德利が二、三本前に並んでゐる。そこのお內儀さんは未だ若い、おつとりした顔付の人で、酔つぱらいのお相手は嫌とばかり、德利を持つてくると早々引つ込んでしまふので、勢ひ相手欲しやの酒飲みの鋒先はこちらに向つて來る。

「あなた方は全く好い時にやつて來たねえ、昨日だつたら霧が深くてえらい事だつた。今日はどちら迄お登りなさる」と文切形にやつてきたので、酔つぱらい相手は迷惑至極と感じたが、返事をしない譯にも行かない。白馬尻の小舍まで行かうと思ふと言ふと、それは無理だらう、白馬溫泉泊りにした方がいいと勸める。こちらは大きに御世話とばかり、碌に返事もしないでゐると、益々好い氣に成つて話し掛けて來る。そして自分の前にある菜漬を、喰へ〳〵と盛んに進めるには參つた。蠅が盛んにたかつてゐる奴だから、未だ人里にゐるうちには手が出ないのも無理はない。話の樣子では、大町あたりに住んでゐる人らしい。年の頃は五十位だ。

「もう今月二度白馬へ登つたが、山は今が一番好いね、雪は澤山あるし花は咲いてゐるし、雪また花、雪また花だからね。全く好いですよ」と獨りで好い氣なものだ。これにはすつかり瞞された。登つた時成程雪は澤山あつたが、お花畑らしいものには殘念ながら一つもぶつからなかつた。そのうち漸く驛の方へ出て行つたと思つたら、切符を買つて又戻つてきた。こつちが外へ出てゐると、向ふも外へ出てくる、そして大雪渓はあれで、白馬溫泉はあそこ邊と仲々得意だ。

そのうち驛長さんが、汽車が出ますようと、大きな聲で注意したので、そのよつゝあんもさすがに慌てゝ飛んで行つた。私はほつとしながらも、何となく微笑ましい氣持でその後姿を眺めてゐた。

（一九三五・九）

秩父三題

一、峠

岩崎利一

秩父を心の山としてゐる人は多數にある。たしかに秩父から受ける印象はいつでも温和な、靜穩なものである。そして秩父を歩く時には必らず温い人の心を感ずる。一つには北アルプスの如く營利的な山小屋が僅少なる爲めかも知れないが、然し私は左樣に思ひ度くない。我々が秩父に這入つて二日歩けば必らずどこかの峠を越す、それ程秩父には峠が多い。從つて人の往來も相當有る。峠越し、それに又其處の素朴な山人と交はす他愛ない會話こそ我が心を温めてくれる糧なのであらう。

將監峠はいゝ峠であつた。雲取からの林道を前夜の睡眠不足に些か茫然としながら歩いて、あの曲折の多い徑にいゝ加減うんざりした頃、パッつと開けた井戸澤源頭の高原はぼんやりしてゐた頭腦を明快にし、眼を覺醒させるに充分すぎる位美しかつた。もう九月に程近い頃なので、この附近の植物の殆ど全部が花の盛りを過ぎて、今や散り初めやうとしてゐる。何となくうら悲しい樣な景色であつた。草の或物は他にさきがけてもう霜枯れて居たが、この時の花の美しさと、源頭の水の冷たかつたことは未だに忘れない。

再びあの長い柳澤峠の道を辿つて、こゝを目指して歩いたのは、今年の六月のことであつた。靴が足に合はず、止むなく落合でゴム足袋に替へた。ゴム足袋は始めてだつたが、相當に便利なものだと思つた。然し栃本へ出る時、途中二里ばかりがトロの軌道で、その枕木の上を歩

かねばならなかつた時には堪らない位痛かつた。兎に角、秩父あたりの山の中を歩くには實に氣持が良いものだ。此の時には未だ峠の原に、花が咲いてゐなかつたが、カンバの新綠が美しかつた。秩父の紅葉も美はしい、然し新綠のそれは尚ほ美はしいと思はれた。晩秋の紅葉はやがて散らんとする死出の晴着を飾つてゐるものとすれば、新綠は將に開かんとする希望に滿ちた門出にも比すべきものだ。

此の時は將監の小舍が混雜するらしいので笠取まで行くことにした。前に來た時も砂防工事の人夫と同宿したので落ちついて山を眺めることも出來なかつたし、今度も駄目だつたが、何時かは又こゝに來てゆつくりと、この高原の花に目を遊ばせ度い。

峠までは小舍から直ぐだ。ルックを下して和名倉の方や大洞の谷などに喜びの目を遣る。唐松尾山が眼前に突き立つてゐる。この山も何時か行つて見たい。その名の如く唐松が鬱々としてゐるのを見て前にも幾度か登らうと思つたが、今迄についい行けなかつた。

將監峠は秩父的である點に於ては、他の如何なる峠よりも勝つてゐると思ふ。他の要素については如何だか知らぬが、如何にも秩父らしいといふ點ではこの峠を措いてこの右に出るものが有るとは思はれない。亭々として聳える唐松の原生林、黝く〳〵落ち込んでゐる大洞の溪谷、前に峙立する唐松尾の秀峰、確かにこの峠は秩父の持つ美はしさの大部分を兼ね備へてゐる。こゝの小笹が霜枯れて黄ばんだ頃、然も小春日和の長閑な午前頃に身を横たへて空を眺めたら、愉快なことだらう。こゝには最近、小舍が出來たと聞く。それは山ノ神から和名倉への尾根を十分程行つた所である。今迄の小舍は殆ど一年中人夫が居て都合が悪いし、もう相當古くなつてゐたりするから、此度の武州側の小舍は大に有効である。いつか是非その小舍に泊つて見たいものだ。

將監から笠取までの林道も實に氣持が良い。恐らく秩父では一番愉快な道ではあるまいか。氣も心も輕やかに足が氣持よく進む。景色はどん〳〵變る。共の上この附近には高峠狀に濶けた所がとても多くて甚だ見晴しが良い。

雁峠は峠らしい峠。雁ならでも腹をくつゝけて日向ぼつこをしたくなる樣な峠である。將監が秩父的で第一位にあるとすれば、こゝは峠らしい點では正に秩父の各峠

中の最たるものである。

笠取山のなだらかなスロープと古禮山からの急な山稜との交點にする落着いた地域を占めるこの峠からは、西南に南アルプスの連嶺を、東北に和名倉山を望むことが出來る。殊にこの峠に美しさを加へるものはその附近にある針葉樹林である。峠は高原狀を爲した地域の低い所にあり、その遠近には針葉樹の生えた小さい丘が點在して、この上も無い調和の美を添へてゐる。秩父で最もスキーをエンジョイ出來る可能性の多いのがこゝである。

凡そこの峠と反對の印象を與へるのが雁坂峠。峠と言つてもあまりその感じの出ない峠である。これでは全く雁も越え惱むであらうと思はれる。このともすれば絕えて行つたことであらう。勝なる道を古人は嘗て屢々越えて行つたことであらう。

峠の上に茶屋があつたなどゝは今にして見れば夢想だにも出來ない。この雁坂峠程甲州と秩父との兩側の差が甚だしい所はあるまい。甲州側は一面に茅戸で、四五百米も下の方まで見渡せる位に廣濶なのに反し、秩父側は晝猶ほ暗い深林である。こゝにも今年小舍が出來たといふことを聞いた。それは甲州廣瀨の方から栃本に向つて峠を越して、黑岩尾根（峠から東に向つてゐる尾根で小徑のしるしがある。）を約十分程行つた所、水も割合に近いとのことである。雁坂峠には最近迄小舍が無かつた。それで甚だ不便でもあり、相當難儀をせねばならないこともあつた。それだから栃本から瀧川谷を經て、甲武信方面などに行く場合には實に有用な小舍が出來た譯だ。それに冬期のことを考へると堀立小舍程度のものと異なり大にその價値が認められる。殊にこゝに小舍があると冬期一日でこゝから甲武信小舍に達することが出來、冬でも露營の必要が無くなる。實際便利で有難いことである。

この峠より更に峠らしく無いものに十文字峠がある。十文字峠こそは原生林有つての峠であり、又原生林を價値付けた點に於て、立體的ならしめた點に於て、峠有つての原生林であると言ひ得るだらう。

それは十一月も末の頃であつた。やがて師走の風も吹きまくるであらうといふ南佐久の高原には何となく新開地的な慌だしさが忍んでゐた。戰場ケ原、八町ケ原の疎林も、冬枯の色に包まれかけ、白樺ばかりが貴公子の如き氣品を拂つてゐた。美しい白樺。今年有峰の里で見た白樺はその大きさに於て多少優れてゐたけれども、こゝのいつとも無しに峠の頂を

過ぎて深い深い針葉樹林から遠く北アルプスの山々を、近く八ケ嶽を望む時、心は異樣な時めきを覺えるのだつた。新雪に彩られた八ケ嶽の威容は此の時以來私の腦裏に深く刻まれてゐる。兩神山もすぐ眼近に眺めることが出來た。標高の割に高く見える山だなと考へた。

十文字峠は始めの中は中々其の眞價を認められないものである。然し他の山を歩き、時が經つにつれて次第々々に深く心の奥にしみこんで行く力强さを持つてゐる。私にとつて、この十文字峠は忘れられぬ存在となつてしまつた。

今年上高地から歸つてから、秩父を歩かうと考へた。それであれやこれやと考へたけれども、結局秩父の峠と澤とを主とすることになつてしまつた。私もそれが秩父の最も美しい所だと思つてゐる。

私は先づ奥多摩から入つて行かうと思ふ。これは別に理由は無いが割合に入り易いからである。そして甚助小舍に一泊、こゝは私が最初に泊つた山小舍なので殊に懷しい氣がする。更にこゝから三條ノ湯小舍へ行く。どんな所か行つて見てお風呂に入り度いからである。そこから笠取小舍へ泊り、瀧川谷を下つて栃本へ一泊する。翌日十文字峠へ行き、小舍に二、三日滯在してのんびりして下つて信洲澤との出合まで行つて一泊、翌日國師岳に登つて大弛小舍に泊り、その翌日梓山へ。そこの白木屋へ一泊して此度は三國山を越え、神流川沿ひの濱平鑛泉へ。それから附近の部落を通り、色々な峠を越えて最後に八町峠へ出る。出來れば二子山へも行き度い。八町峠から尾根傳ひに、兩神山へ出て日向大谷、小鹿野などを通つて秩父へ出る。この通りに行けば大體二十日位になる。八月の下旬から出かけるつもりが終に駄目になつてしまつた。來年の六月頃、新綠の旅は是非この行程を、例へそれが幾分の一であつても實行して見たいと思つてゐる。

（一〇・九・一三）

二、澤

森川眞三郎

澤にもそれ〴〵顏付があると云つたら笑ふ人があるかも知れない。

一體吾が國の山岳地方を流れる河には一つの型がある樣に思はれる。即ち下流から中流にかけては傾斜は殆ど無く概ね廣い河原を持つて居る。流域と云ふ言葉の含む意味がよく之を現して居る。更に溯ると河幅は急に狹くなり、謂所廊下狀となり瀧と釜の連續となる。峽谷と言はれるものは之である。傾斜はまだ問題にならないが、其の深度には驚く可きものがある。そして、止めの瀧とか、魚止の瀧とか呼ばれる大瀧を最後として、それから先は、もう源流地である。河幅は又開け、山體は屏風の樣に前面に連つて、其の底部は盆地狀をなして居る。水流は扇狀に分岐して、殘雪或は岩屑の下に潛入し、靜寂神祕の境となる。傾斜は此の盆地の底部から急激に上昇しやがて山背に達するのである。土地の狹少な吾が國の河川が殆ど橫谷に限られ、然も三千米級の高地から、直に海洋に注ぐ關係上此の樣な特徵を有するに到つたのである。

併しこれから述べる秩父の澤には一、二の例外を除いて其の形成は殆ど見られない。源流地は總て、險惡な岩壁でもなければ、洛漠たる磧でもない。

熊笹が一面に密生し其の上に眞黑な針葉樹が鬱蒼と生ひ茂つて居る。水晶の樣な水は、苔蒸した河原の石の間をちよろ〳〵流れて、じめ〳〵した、其處ら一面は厚ぼつたい枯葉の絨氈で覆はれて居る。天然の貯水池とも云ふ可き北の絨氈の內を流れる水は、比較的急傾斜を持つ尾根筋を離れるまで澤の形を取つて居ない。それは一定の水路を生ずる程の急激な水量の增加が無いからである。

之等の水が相集つて一つの谷を造る頃にはもう傾斜は緩になつて、水流は累々たる倒木の間をさら〳〵と縫つて行く。針葉樹の間には、樺、櫟、榛、欅、楓等の濶葉樹が漸く増えて來るのである。それからは河幅の急激な増減も無ければ、河床の變化も無い。例へ樣の無い程美しい、原生林の間をうねり〳〵と流れて居るのである。私達は之を秩父的なる澤と云ふ言葉で表現してゐる。

此等の同じ型を取つた秩父の澤を、一つ一つ仔細に見渡した時、各々又其の差異を認める事が出來る。荒川のあくまで清く、どにまでも奥深いのに對し、多摩川は常に明るく朗らかに、如何にも輕快である。千曲川は最も秩父的な澤である。うらぶれた寂しさの中に、切々たる、哀調を波打せて居る。物のさびと云ふ言葉が、これ程ぴつたり當嵌る所はあるまい。最後に、陰慘な笛吹川の存在は他に比を見ない獨特のものである。其のアルプス的、險惡な地形に配するのに、秩父に於ても首位に置かれる、壯大な原生林を以てし、其の神祕的崇嚴な溪谷美は他に見る事の出來ぬものである。

荒川の谷は三峰の麓の落合の部落で二分し、中津川を出して居る。遠く三國山に源を出す此の谷は、水量が豊かで悠々と流れて居る。兩岸には、楓が多く、紅葉の頃は水面を眞紅に染める。景色は大滑、小滑の林道の邊りが最も優れて居る。中津峽の名で知られて居る所である。其の奥にある、中津、中双里の部落は訪れる人も稀れで、純朴な昔ながらの姿を、その儘に殘して居る。

本流は二瀨で更に大洞川を出して居る。此處もあまり人に知られない澤である。水は瀅青色を帶び、大部分は針葉樹林に覆はれて居るが、それ程暗い感じは無い。惣小屋を中心として、荒澤、井戸澤、惣小屋澤を川と入川に分れる。入川も柳小屋澤を過ぎて川又に到り、瀧歩いたら、興味深い事だろう。岩魚を釣るに最もよい所である。本流は、中尾、栃本の里を過ぎては平凡な谷であるが、此處から、更に二分して、股ノ澤と眞ノ澤に分れると、俄然其の特異な容貌を現すのである。十文字峠から出る、股澤は、千古を經た濶葉樹の巨木に圍まれて悠久そのものの樣な姿である。小屋から二丁程して道を左に取れば眞ノ澤である。黑々とした針葉樹林は鬱蒼と生ひ茂つて、白日の下に尚薄暗い影を漂はせて居る。倒木は無慘に打倒されて行手を阻み樹間にこだまする瀑流の響は蓼々として人を脅かす。木の間を通して隱

見する破風の勇ましい風貌は懐しいものである。どこまでも深い〳〵此の澤は暗黒の中に閉ぢ籠つて深刻な冥想を續けて居る。

川又で別れた瀧川は比較的、開けた長閑な谷で、それだけ又物寂しい、頽廢した所である。黄ばんで甚だ威勢のよくない茅戸が、一面に生えた坊主山に、ひよろ長い赤松が二三本ぽつんと立つて居る。そこ、こゝの山間ひから炭燒の煙がなよ〳〵と、たなびいて、邊りを、靄然たる雰圍氣の中に包んで居る。時折、遠くの方から伐採の音が、聞えて來る。憂々と云ふ、其の澄んだ響が此の靜かな空氣を振動させる。豆燒澤の水は大洞川の色に似て居る。本流は、更に黒岩尾根と、和名倉との間に深く切れ込んで居る。濶葉樹が比較的に多い樣である。河原には、大小の石が無恰好に轉つて、其の間を、無味、無感想な水が平凡に流れる。此處の水位そつけないものはない。一寸見ると澄んで居る樣だが、どこか白い濁りが見られ、味もまづい。金山澤はじめ〳〵して居る。槇の澤、枝澤、葡萄澤、古禮澤はどれも、熊笹が密生し、苔蒸したぼろ〳〵の石がころ〳〵してゐる寂しい所だ。八月の暑い頃、釣橋小屋に滯在して、之等の澤を草鞋がけでじやぶ〳〵涉き廻るのは愉快である。岩魚は殆ど釣れない。腕のせいにもよる事であらう。

これで荒川の谷々は一通り述べたが、初夏の候栃本から十文字を越えられる方があつたら、白泰の覗岩の上に登つて見られるとよい。一望の中に荒川の全貌を見る事が出來るのであらう。新緑滴る樣な、大原生林に守られ、靜かに而も、美しく流れる之等の谷々は、大自然の持つ崇嚴な、然も、沈痛な、思索的な姿である。

多摩川は日原川の奥にある唐松谷の比較的、陰鬱な河相を除いては、青岩谷、龍バミ谷、本谷等總べて、明るく輕快である。東京市の水源地として、上流は到る所植林が行はれ、下刈された眞直な木が縱横に行儀よく並んで居る。少しく下流の一面に茅戸の生えた邊りには、點々と濶葉樹の村木立が立つて居てもう武藏野の面影が覗いて見える。水は水晶の樣に美しく、きら〳〵と光つて、何とも云へないうまい味がする。雲取から笠取への林道は到る所此の水が流れて居て、いつも、それも一つ〳〵味はひながら過ぎるのを樂しみとして居る。

千曲川は全體として女性的である。纖細なそして、秀麗なその肢體を、うね〳〵と佐久の高原にくねらせて

流れ、やがて秩父の盟峰、甲武信、國師、金峰等の深い山懐に姿を消すのである。

八ケ岳の高原を後に見て板橋、桶澤、御所平と過ぎて行く部落は夢の下に眠つて居る。蒼く澄んだ水の色や、白くどこまでも續く河沿ひの道や、古風な木橋や火見櫓と云つた様なものが渾然として一枚の畫幅を描いて居る。がたん、ぎー、がたん、と軌む水車だけが僅に、此の村里にも、生業の營がある事を告げて居る。それさへも、遠ざかるに連れて又、風景畫の中に、とけ込んで了ふ。エンガデインの Val Fex がどんなに優美であつたにしても、此の長閑な、夢の様な千曲の流れには及ばない様な氣がする。秋山、梓山の紅葉は昔から知られて居る。一帯に濶葉樹が多い。川端下川は、秋山の手前から別れ、川端下の里を過ぎて東股、西股に分れる。此の邊から國境尾根へかけての廣大な原生林は吾が國でも屈指の密林である。唐松、白檜、唐檜等の針葉樹重なり合ひ、倒木は累々として横たはり、千古斧鉞を知らぬ。人跡未踏の地とは此處を云ふのであらう。梓山からは梓川が分れる。川中島で相合する犀川の上流は、神河内を流れるあの梓川である事を思ひ合せる時、何か不思議な、自然のめぐり合せと云ふ様なものが感じられる。河沿ひのトロ道はひどく破壊して唯、茨とかやとが一面に生ひ茂つて居る。溯るに從つて水流は河底に潜り、柔かな、腐植土と、角の取れた綺麗な石が多くなる。兩岸には、灌木がまばらに生えて居るだけで陰氣ではないが、何となく、うらぶれた、物寂しい氣が漂つて居る。水は全く無色透明である。

本流は、三國山と五郎山の持つ、あの、なだらかな山體の間を靜かに行く。やがて千丈ケ原である。白樺や、落葉松の森の美しさは、此處を訪れた者でなくては判らない。一度訪れた者は必ず、又來やうと思ふに違ひない。其の美しさは秋の候が最もよい。赤、黄、褐色と取り〳〵に紅葉した中に、くつきりと浮んで居る白樺の林の美麗しさ。梢の邊に黄ばんだ木の葉をつけてぼんやり、佇む落葉松の林のあはれさ。そして、其の間を楚々と、流れる水は冷ややかな、清淨さの中に、總明な理智のひらめきを見せながら而も亦人に訴へる様な、迫る様な切々たる情を祕めて居る。千丈ケ原を過ぎても尚、此の明るいけれど寂しい澤は、物悲しい歩みを續け、やがて、甲武信岳の奥深い、併し、慈愛の籠つた山懐に

抱かれて了ふのである。

笛吹川は、又の名を子酉川と云ふ。廣瀬の部落までは、立派なトロ道が河沿に通つて居る。雁坂から出るクド澤筋一帯と雁峠から廣瀬へ注ぐ廣河谷は平風な谷である。多摩川程の明るさもないし、又、千曲川の様な寂しさもない。廣瀬を出はずれて、暫く行き、往還から左へ新しい軌道に沿つて、本流を溯るに連れて、周圍は、段々陰鬱さを增して行く、此處の針葉樹林の黒さは又特別である。軌道は二股で終る。東澤への道は左岸寄りに「ホラノ貝」の上をへつゝて山の神の邊りで消えて了ふ。「ホラノ貝」では兩岸が著しく迫り谷は廊下狀となつて居る。上からは厚壯な原生林が覆ひかゝり、その全容を窺ふ事は許されないが、時折、樹間に現れる、河面は永遠の神祕を湛えて幽玄の氣を漂はせて居る。とさか澤の出合から遙に見える、鷄冠山の黒ずんだ岩肌の悽慘な面影は、決して、氣味のよいものではない。Vale of Devil — 私は自分でこんな名をつけて見た。東澤小屋邊りから、暫くは、惡魔も影をひそめるが、麹岩邊りから、又釜と瀧が連續する。石塔澤、金山澤、信州澤は、こゝから分れ、どれも深い〳〵密林の中に其の姿を消して居る。樹間に濛々と立ちこめる霧の中を行くときは、何とも云へぬ香がする、私は之を、霧の香ひだと思つて居る。秩父で懷しいものゝ一つである。釜澤も、兩門瀧で最後の飛躍を終えると、もう、水は幾つにも分流して、河床の下にもぐり、一面に厚ぼつたい枯葉の褥が敷かれて居る。邊りは一帶の濶葉樹林で紅葉の頃には絢爛たる錦を展開する。國境尾根へは、甲武信直下のガレへ出るものを除いて、何處を通つても行けさうである。甲武信小屋の水場は相當登つて、險惡な澤で、道は、石塔尾根を相當登つて、又澤へ下つて居る。西澤の絶景は二股から、此處らまでの谷で、瀧は激湍に奔騰し、釜は底知れぬ深淵に永遠の謎を宿して居る。山肌は抉れ、倒木は散亂して、慘憺たる光景は、目をそむけさせるものがある。澤通しに行く者で無くては、味はふ事は出來ない。京ノ澤も深い〳〵針葉樹に包まれた、暗黑の中を行くのである。

曠漠たる大森林に、源を發し、こんな名をつけて見た。東澤小屋邊りから、麹岩邊りから、又釜と百千の谷々を、仔細に述べる事は許されない。生活に疲れ、或は烈しいアルプスの、アルバイトに、うんだ時私は、いつも、秩父を訪れるのである。此の乏しい、山旅

の合間々々にも谷々にまつはる傳説と口碑を數多く聞き知つた。又折にふれ、時によつての、愉快な旅の思ひ出も多い。谷と共に起き、谷と共に眠る麓の村里にも、懷しいあれこれの家や、人の面影が思ひ出されるのであるが、これ等を述べる事は次の機會に、讓りたい。

三、原生林

柿原謙一

秩父の山々の中、原生林の比較的多いのは金峰から國師・甲武信に至る國境尾根、甲武信・三寶・十文字の武信國境、そして東澤や眞ノ澤に次いでは、雲取から將監・唐松尾・古禮・雁坂に至る甲武國境の秩父側を擧げることが出來るであらう。栂や白檜が密生して黝い陰影を投じてゐるこの原生林、その懷に在る時も、或は又山巓や峠から見下す時にも、平和なる秩父の奥の章（しるし）として人の心の奥深く止るこの原生林は、中部日本の山歩きを好む人にとつて既に忘れ難いものとなつてゐる。

この原生林の中の山歩きに適した時季は、早春三月から六月の初め、そして十月から十一月の末に至る晩秋の頃であらう。私は此の頃の秩父の山歩きがこの上なく幸福なものであることを信じてゐる一人だ。早春の訪れと共に、眞ノ澤の雪解けの水が和名倉山の裾を洗つて滔々として流れ初め、赤木澤や矢竹澤のあちこちから炭燒きの煙が和やかな春と共に眞直に立登る樣になると、懷しい栃本の部落、そこの大村さんの庭から若々しい破風の姿を眺めることも出來るその栃本の部落では、力强い營みが始まる。針葉樹の森が、私をじつとして置かしめなくなるのは其頃だ。

この頃大村さんの家で爐を圍む山行の人達は、きつとアノお婆さんの口から甲武信の山開きのことや、十文字峠の深い雪と戰ひ乍ら此處に辿り着いた旅人のことなどを聞くに相違ない。秩父の谷に、そうした中にも春は次第に濃くなつて、眞ノ澤の原生林には、いち早く石楠花が薄紅色の花瓣を飾る樣になる。積つてゐた雪はなくなり、苔むした徑が去年の姿をとりもどし、小鳥の囀る聲が聞かれる。そうして創生の力が泰然と蹲居する山々の隅々迄も滿ち溢れて溪谷のざわめきに、小鳥の囀りに、植物どもの芽生えに、針葉樹林の深さは馥郁として醸成されて行くのだ。この明朗な栂や白檜の密林の中に透徹せしめずんば止まない程に眞直の音を送るのが鶯だ。その聲は針の樣に鋭い木々の葉の間を漂つてゐる春の空氣を、心快い程に振動させて吳れる。濶葉樹や針葉樹に蔽はれた白泰ののぞき岩が霞む頃、その向ふには兩神山の鋸の齒の樣な姿が烟る。破風の頂きに殘つてゐた雪も、かくて次第々々にあの黑い木賊澤の中に吹込まれ、秩父側を捲いてゐる袴腰、古禮、燕山附近の山徑も、原生林の苔むす間を縫つて進み乍ら時々石楠花の堅い蕾を見せて吳れる。

總じてこの春の原生林では、萌え出ずる萬有の生氣がひし〳〵と身に迫るのを感ずることだ。未だ冬の名殘を止めてゐる將監峠に針葉樹の枯木が兀として立つてゐるのを眺め、その向ふ和名倉山の黑い姿に目を馳せても、或は又白岩から天目の徑に山歩きを樂しんでも、春の生氣はひしと感じられる。おほらかな夏の日に見る原生林の勇ましさはなくとも、靜かな山歩きには相應しい季節なのだ。

夏の暑い日盛り、雁坂の長い尾根徑を辿る時に孫四郎峠にかゝるのは嬉しいことだ。こゝには十文字峠を思はせるに足る黑い原生林がある。だがその黑い樹々の幹を通して眺められる破風・甲武信・三寶がグインと擡げる山脈（やまなみ）や、その下に大きく深く落込む眞ノ澤、股ノ澤の一面に靑黝い原生林が大海原をなしてる有樣は、一寸他所では見られない。この飽く迄も濃い森の中は又素派らしく涼しいが、驟雨の後など殊に好い。さし込む太陽の光も、栂の葉や幹を素朴なタッチで包んでゐるのは捨てられない。今年の夏の霧の旅でと共に一變した新鮮な色彩が、摑み難い幽邃な感を與えて吳れたのは此處だ。霧藻を誘ふ樣

に霧が流れて行くと、その流れを別ける様に栂の木が立つてゐる。苦むす徑が重い。霧の香りは捨て難いものだ。

武州白岩小舍の前に腰掛えて、大洞谷が本流と落合ふ彼方、兩神山が肉色に染つた鱗狀の夕燒雲の眞下に黑い容姿を落す大觀を眺め、後には暗く影を落す栂の森の冷氣を感ずる一時、その時は Im Abendsonnenschein に終るローレライを唄ふに相應しい夕べだ。相向ふ和名倉山は餘燼で灼(やや)いてゐる。その中には柔らかい草原と栂の林と苔ふかい小徑が、いみじくも調和され乍ら優雅な繪をなして續いてゐるのだ。その三角點は、茫漠とした山容に比して全く淋しい。天の河もそろ〳〵無くなる頃、澄み切つた夏の夜の星數をこの暗い秩父奥の森の中で眺めてゐるのも私には嬉しいことだ。既に幾年か前のこと、このゲハイムニスフオールな印象を齎して吳れる星辰への仰ぎを私が覺えたのは。それは雲取小舍前の空に聳える枯木を不圖見上げた瞬間から、もう捨られない山歩きの仕事の一つとなつてゐる。

夏私が秩父の山を訪れるのは何時も八月の末に近い頃で、既に秋風の涼しさを身に感ずる頃だ。登山のシーズンも終つて、尾根徑にも溪谷にも、人間の臭味のしばし止絶えた頃だ。原生林を拔けて茅戸に出る時には、盆花がうらぶれて咲いてゐる頃だ。中津川から大峠を通つて白井差(シライザス)に出る徑など、全くこの八月の末の山歩きに好いし、白岩を越してお經平に出る旅もその一つだ。

秋の訪れと共に私は十文字峠を、中津の里を、そして血の滴る樣な紅葉を飾る兩神山を想ふ。秋が深くなればなるだけ私が秩父を戀ふる感じは强まるのであつて、冬に近い十一月の末などの山歩きには汲んでも盡きない喜びを見出す。戰場ケ原の秋もいゝ、栃本の秋もいゝ、そして甲州側の茅戸の秋もいゝが、原生林にさまよふ秋の山歩きも亦確かに好い。錦繡の紅葉を誇るのとは異つて、その原生林には謙遜した秋の紅葉を見るからだらう。忘れられないのは十文字峠の想出だ——戰場ケ原で三寶・甲武信・國師に連る國境尾根の勁い姿に目を馳せ乍ら、八丁坂の霜柱を踏んで十文字の森暗き峠に腰下す頃には、つるべ落しの秋の日がもう西に傾いて蕭條たる秋の夕暮れ時が迫つて來る。この峠に密生する栂の木は古代ギリシヤの建築を表象するあの圓柱の樣に均整された美しさを持つて苔深い尾根に突立つてゐるが、それを透

して晝尚暗い原生林を有つ國師が、なだらかな線を畫いて巨鯨の樣に横たはり、その背景は山火事でもあるのか、金色の茜雲が輝り反つてゐるのも眺められる。國師嶽の線が次第に空の色に同化して來る頃になると、鈍重な秋の足摺が夜と共に身をつゝんでゐるのを知るだらう。そしてこの原生林の空氣は堅く凍つて煙草を燻す手も痛い。苔深い徑を一散に走つて十文字小舍に焚火を圍む頃、訪ふ人も稀なこの晩秋の山は枯枝の落ちる度毎に冷い秋が孤り深まるのを想はせる。

秋晴れの午後、甲州側から秩父側に入るのは又確かに心快いことだ。絢爛の錦が、その次の一歩と共に忽ちにして謙虚な原生林の秋に一變するのは七ツ石からブナ坂を通つて雲取へ出る旅に、三ノ瀬から將監峠雁峠越しに秩父に入るときに、或は又廣瀬から雁坂越しをする時などに深く感ずることだらう。山ノ神の紅葉も美しく、七ツ石小舍の寒い十三夜のお月さんも美しかつたが、ブナ坂に黄色く色づいた白樺、アカ樺を眺め乍ら雲取より三峰に向つた時、一足秩父側に踏み込むと、其處には深い暗い寂しい栂や白檜の秋が澄み透る紺碧の空の下に漂つてゐるのを知つた。その平和なる秩父の秋の壯麗な安寧、自由、充實の一日には確かに heilige Stille とも言はれるものが棲んでゐるのだらう、既に白雪を載く甲斐駒、それに新雪の來てゐる八ケ嶽などが山脈の果てる彼方に浮んでも、まだ秩父の山には平明な秋が續いて行くのだ。

だが冬にはこの美しい原生林が何と言ふ空虚なものとなつてしまふのだらう。冬は雪と共に死の樣な沈默を秩父の山に齎し、南や北の連峰が白皚々として鋭い裝をこらし、そして奥日光や上越の山々に白妙の衣が纏はれる時に、この秩父の山ばかりは凋落した樣な淋しさに蔽はれてしまふ。尾根にも溪谷にも峠にも雪は來るけれども、原生林はこれを蔽ひ穩して見榮えのしない山肌にしてしまふのだ。それは正に塑像の樣に堅い沈默を守るのみなのだ。

冬の秩父は訪れるべき山ではないかも知れない。私は昨年の冬そんな感じを持ち乍ら雲取を下つたことがあつた。だが取り殘されてゐる甲武信よ、「通り魔」が棲むと信じられてゐる冬の甲武信よ、私はお前を忘れることが出來ない。何時か行くぞ、と何時も心懸けてゐるのだが。そして苔むした徑に積り、原生林に踊る雪に對して、私の情熱をそゝぎかけてやるぞ、と言はずには居られない。

あの頃、あの山、あの人達

磯野計藏

丁度、本科二年から三年になる春休みだから、あはれ昭和五年の春だつた。浦松、中島兩君と三人で中山彦一と佐伯宗作を連れて劍へ行つた。三月の末から四月へかけてだつたと思ふ。毎日々々天氣がよく、立山の所謂箭雪のよさを心行くばかり味つた山だつた。彌陀ケ原の夕べ、フイルム・クラストを破つて滑つたり、風一つない劍の岩の上で靴の音ばかり高く、山も谷も春の晝下りの太陽に抱かれてけむり、岩間にかぢりついた氷からさへ、ポタ〳〵と水がしたゝり落ちて居たりした。眠くなる樣なのどかな春の劍だつた。

冬の山のつらさに比べて、あまりにも樂しく、美しく思出される立山だつた。しかもその時の五人の中、今生残つて居のるは僕だけ、あとの三人は、最早やこの世の人でない。思出るまゝに、あの時の事を書綴つて見やう。

先ず芦峅で、丁度その冬劍澤で死んだ兵治の墓へ、兄貴の宗作の案内で參つた事を今でもはつきり思出す。中島や彦一や宗作が墓の前でおぢぎをした姿が目に見える。あの時は誰も自分が死ぬ事などとは露思はず、ひたすら氣の毒な兵治の死をいたむだ事だつたらう。人の世のはかなさをしみ〴〵感じて、感慨無量と云ふか外に云ふ可き言葉を知らない。

途中弘法小屋に一泊して、室堂に着いたのは未だ日の高い頃であつた。宗作と彦一とが室堂を掘つて居る間に、庇迄雪に埋つた、觀測所の屋根で紅茶を沸したり、晝寢をしたり、やがて次第に夕づいて紅に燃えて來る立山の、大岩根をあほいで心もそゞろ、山の喜びに胸が一ぱいだつた。室堂の棟木に澤山の雷鳥が群れて居たのを、彦一

が宗作の鐵砲を借りて追廻はして居たのも覺えて居る。あの笑顏は、忘れ樣としても忘れる事が出來ない。心に一點の邪心のない笑顏、酒を飮むでテカ〳〵したおでこを、圍爐裏の粗朶火に光らせた時の笑顏、難場へかゝつて一かばちかと云ふ時に見せる嬉しさうな笑顏、彦一の悲觀した顏や怒つた顏等思出さうとしても思出せない。思へば、偉い奴だつた。へツピリ腰をして鐵砲を斜にかまへ、子供の樣に雷鳥を追掛け廻して居た時の顏、逃げられた時の顏がやはりその彼一流のワツハツハだつた。

翌日は風が强かつたが思切つて劍へ行つた。雷鳥澤を滑つて別山乘越にスキーを殘し、アイゼンの音も氣持よく鶴ケ御前をヘツツテ行つた頃、風はすつかりなくなつて仕舞つた。自分はこのひと時の劍程滿ち足りた山の思出を、數多く持たない。胸をおしつぶす樣に垂れ下つた雪雲の下に汗を下したり、天氣がよければよいで骨のシン迄しみ通る樣な寒風にさらされたり、遠い〳〵小屋への歸り路を案じて美しい眺めも目に入らなかつたり、初めての山で豫定の時間を過ぎても、目的の頂が遙か向ふに見えるだけで仲々近付けないでイラ〳〵したり。それ等の不安を全て忘れ、唯々その岩その氷だけに精神を集中して、聊かも危げなく着々と頂上に近付いて行く氣輕さ。一點の雲もない大空は、後立の白銀の山々に對して黑い迄に青く、こんな所にどうして生きて行くかと疑ふ羽虫の音が唯この日、この時を樂むが如く、時々耳をかすめたりした。厚着をした背中はポカ〳〵として汗ばむ位だつた。こゝに載せた寫眞は平藏の頭で一休みした時のもの、窓から大日を望み、のどかな日指しの中に雪も岩も、そして人も、おだやかにとけ込んで居る。この寫眞を見る度に自分の胸ははずむ。

歸りは平藏を下つて劍澤の小屋を見舞つた。谷底へ吹飛ばされたものと思つたのに反し屋根も柱もそのまゝ、グシヤツと潰れて居たのは不思議だつた。何んとも云ひ樣もない感じだつた。日は既に鶴ケ御前の向ふにかげり、あたりは已に忍び寄る黃昏の色に暗く、單り劍の岩峰のみ金光にかゞやき出した。あの頂上に居た時とこの谷に居る時とその氣持の餘りの違ひは何んとしたものだらう、夕日に輝く劍の切先をふりかへり〳〵登つて行く雪の上に、小さな人間の感情と餘りに隔絕した山の偉大さにおしつぶされた自分の姿は、何んとみじめなものだつた事だらう。

思ひ出

——平藏の頭にて——　　磯野計藏

その晩の雷鳥の御馳走はうまかつた。宗作の奴は一人こんなものうまくもないてな顔をして居たが、あとは皆大喜びで食べた。もつとも、宗作も難かしい顔をして居たが結局皆より一番餘計食つたから、結構うまかつたのだらう。彼は弟の兵治とは違つて越中の案内によくある、人付きの至極悪いたちで、唯向ひ合つて居ては正直な所おつかない親爺だ。唯獵の話となれば恐しく熱を上げる。蠟燭の火に照らされて黒光する大きな柱に寄掛つて話出す彼の話を聞いて居ると、人間と云ふよりはけだものの様な感じがして來たのを思出す。翌日御前谷を下つて居た時でもさうだ。一の越からザラメになつた雪の上を各々樂しみながら大きなボーゲンを畫いて下つて行つた時の事だ。急に宗作の連れた二匹の犬が吠えだしたと見るや雪を蹴散らして彈丸の様に飛出した。

「いわじしだ！」

と、見れば、平（ダイラ）へ向ふ夏道が尾根を乘越すあたりに、うす茶色の變なものがモゾ〳〵して居たかと思ふと、忽ちこれも矢の様に岩を跳飛んで里部の本谷目掛けて逃出した。犬はと見れば、ボロツ切れのかたまりの轉つて行く様に逃げて行くあとを、これも又石ころの様になつて追掛けて行く。

「宗作はスバリ邊迄も追ふずら」

と云ふ彦一の足下を見れば、そこには宗作の拋り出したる頃は、はるか黒部を越えて、後立山の方にしきりに犬の吠聲がして居た。獵夫山を見ずと云ふが立山をかけ下りて雪どけの黒部を押渡り後立山へはひ上るのがほんの一時の間なのだからまつたくあきれて仕舞ふ。人間の常識では考へも及ばない彼の晴れ業を見てあいた口がふさがらなかつた。彼が犬をつれて平の小屋へ歸つて來たのはその夜十二時過ぎてからだつた。シシは持つて來なかつた。彦一は

「なあに、あれは持つて來ると分前が少くなるので何處かへ隱して來たずらよ」

と、云つて居たが、宗作はこゝで歸る事になつて居たので或は、さうだつたのかも知れない。

翌日も晴だつた。針の木も雪がすつかり腐つて居たので腹の邊迄入る雪を分けながらスキーをかついで下つた。大澤小屋の疊も何もない板敷の上で殘り少なくなつたパンをかじつて寢た。次の朝はもう雪が少くて扇澤の

出合のあたりからスキーを擔がねばならなかつた。陽は暖かいし道は長いし、つくづく途中でスキーを拋り出したくなる程だつた。然し何んと云つても山を下つて里へ出る氣持は皆の心を輕くさせ、歩く足馴にもリズムがあつた。雪の消えかゝつた下からは青いものが見えて居たし雪どけでぐちや〳〵になつた道の上にも春が感ぜられた。ふりかへつて仰げば、今越して來た白銀の山も、早やもえ出でた木々の若芽をすかして眺められた。コブシの花も二つ三つほころびかけ、あたり一面を夢の樣な香で包んで居た。そして大町からの電車の中からは例の「おかめ樣」のお祭で萬開の櫻の花の下を赤いかんざしをかざした村の娘達の行くのが見られた。

あれから、もう五年たつた。中島はこれが終つて寶川へ出掛けたのだつたが、その頃から身體を痛めたらしい。普段病氣をしない丈夫な身體だつた爲めに、かへつていけなかつたのだらう。然し自分等もその頃は中島と病氣とを一緒にして考へる事が不自然だつた位だから、中島が別に何とも思はなかつたのも無理はない。そして夏は高瀬川入で北穗、小槍、そして上高地へ來て明神、それからさらに牧場から奥又四郎へ入つて北尾根、奥穗、西穗高と、最後の夏だと云ふ譯もあつて、隨分がんばつた。清水屋でサミさんと彦一と四人で冬の鹿島鎗の事を相談した時も今思出せばとても元氣で乘氣だつた。それが二學期が初まる頃からいけなくなつて十二月に入る頃歸鄉したきり、遂に又立たなかつた。自分達は一度だつて中島の死を考へた事はなかつたし、いくら長引いても、彼の身體と精神力は必ず病氣を征服するものと信じて居た。それが突然、しかも本來の病氣はほとんど快癒しながら心臟痲痺でやられたのだから本當にあきらめられない。とすれば、それは全部彼の意志の强さと頭腦の銳さの結果と云つていゝ。おしい人間は早死すると云ふがまつたく中島等はそれだ。死方が死方だつただけ今でも中島の死と云ふ現實を自分達の心は受入れ切れないで居る。

彦一とはそれから鹿島鎗へ十月と十二月と二回、それから春に野麥を越へて乘鞍から高山へ行き、さらにその年の秋、彼の家へ遊びに行つて燕へ登つたのが最後で、その翌年の昭和七年の冬亡くなつたのだつた。酒飲みばなしによく、彼が十七の時、牧の喜作につれられて初め

て常念へ登り、それ以來山が病付きになつたと云つて居たのが、ほんのちよつとした處で突然亡つて仕舞つた。彼の家のすぐ裏に墓場があつて常念も見えれば、鹿島鎗も目の前に見える。あの小さな墓場に、彼も又靜かに眠る身となつたのだ。彼の一生が、小槍の初登攀やその他美事な經歷にも增して、量らずも最後の山となつたあの常念の救援の時の、崇高なる犧牲的精神の發露によつてより一層輝かしいものとなつた事を思ひ、それを如實に躬行した彼の意志の强さに對して、滿腔の敬意を拂ふと共に深き讃仰の念の禁じ難きものがある。

宗作とはそれ以來、會はなかつたが、最近白頭山へ行つて目覺しい働きをしたと聞いて喜んで居たのが、ほんのちよつとした處で突然亡つて仕舞つたと聞いて驚いた。それも彼程の者が地獄谷で瓦斯にやられたのだとは、あまりに氣の毒の感に耐えない。

色々の山の思出の內でも、最も樂しかつた山の一つだつたこの劍行きを追想して、自分の胸は感傷の波に浸されて居る。全てが美しく、樂しく過ぎたこの一週日の山旅はいつ迄も自分の心に瞭りと殘る事だらう。

貴くも樂いこの思出を胸に抱きつゝ、三君の靈の永久に安かならん事を祈つてこの筆をおく。

（昭和十年九月卅日）

N君の遭難に關係して

小谷部全助

昭和九月十一月初旬、鹿島槍頂上にて計らずも一遭難者を發見、最後迄此事件に關係したが、こゝに私の立場から見た當時の狀況及びいつはらぬ感情を想出す儘、卒直に記して見るのも無駄ではないと思ふ。遭難されたN君、即ち三高の內藤況三君とは生前何等の友交も無かつた。唯偶然の事だが、後で聞く處によると同年の一月八ケ

岳登山の際、赤岳鑛泉で輕く挨拶をかはしたあの三高の人が彼であつた相だし、又同じ年の夏、劍澤生活を終へての歸途、彌陀ケ原で行き違ひになつた三高のパーティにも加つて居られたと言ふのが生前に於ける僅かな關係であると云へば云へる。だがこの事以來、私は不思議に彼が生前他人であつたと云ふ氣がしない。送つて貰つた彼の遺稿等讀む內、何だか昔からの山友達だつたと云ふ氣がしてならぬ。そして此の事を想出す毎、最も敬愛する同志を永遠に失つた淋しさにくれる。

一、急報する迄

初冬の天狗の鼻の尾根。猛烈な藪の下の粉雪、冷い雪を被つた岩場等精力を濫費せしめる事は深雪のラッセルにも比すべきであつた。

其の骨を刺す二日目の野營の曉。それは朝燒のひどい、大火災を思はせる朝だつた。確保のザイルで胸を扼されて非常に寢苦しかつた爲か嫌な夢で目を覺した。何處だか人も通らぬ深山で折目正しく疊まれた學生服と制帽が置捨てゝあるので驚いて大變だとわめいた。かう云ふ夢なのだ。その後救援の時造林小舍に置き殘した彼の服が丁度夢と同じ樣で、唯場所が小舍だと云ふだけだつたのには夢知らせ等頭から馬鹿にする私も田舍の婆さんの樣にゾツとした。その時Tも何だか血みどろの姿を夢に見たと云つた。この朝燒で天候の惡化は承知し乍らも張切つて居る最中なので夢見等一向氣にも掛けず急峻な尾根を頑張り、殆ど日一杯を費した辛い逆茂木的這松漕ぎの苦鬪からやつと解放されて小舍の樣に見える四角い岩の下に辿り着いた。雪も止めぬ荒澤奧の峭壁を眺めて居る時、不圖その上方東尾根の第一岩峰上を行く人影を發見、懷しさの餘り互にヤツホーを交換したが、天候を懸念してか其の影は早くも視界を去つて了ふ。やがて天候が崩れ出して遂には雪さへ冷く頰を亂打し始めたが、その頃は岩場をすつかり終へて東尾根と合致する所の瘤に達して居たので、どんな大雪でも明日は完全に鹿島へ降れると安心して、この吹さらしの頭へ三人確保し乍ら又ビヴアーク。パラ〳〵と寢袋を鼓く吹雪が耳について仲々寢つかれなかつたが突然誰かゞ、オイ星が出たぞと叫ぶ。頭を出すと成程西南の方にポツリと光つて居る。だがこの吹雪に星の見える譯はない。燈火だ。目を凝すと更にそれが移動して居るらしい。こいつは決つと先刻の人の知

らせで冷地から俺達を助けに來るのかも知れんぞ等と冗談を云ひ乍ら寢て了つたが、勿論先刻の人が夜道を冷地の小舍へ急ぐ燈火だとは直ぐ察して居た。翌朝積雪をふるひ落して袋を出ると附近は見違える樣で昨夜不注意に散らかした儘の荷物が埋つてゝ弱つた。氣温は零下八度で前日迄と大して變らぬ。こゝから樂な尾根を輕くラツセルして北槍着。吹雪とガスで少しも見當がつかぬ。全然磁石を頼りに釣尾根へ向ふ。最底の吹溜は腰を沒するラツセルだつた。激しい吹雪なので大聲を張上げぬと通じない。暫く行くと黑部側の下から叫ぶ聲、人の聲だ。咄嗟の想像で昨夕見た人が何かの都合で吹雪を避けて野營されたのだなと思つた。飄々と吹き捲くる寒風に抵抗し乍ら細い岩稜に彼を待つたが仲々來ない。あまり寒くなつたのでもう先に行かうかと思つた頃、ガスが薄れて姿が現はれた。見た瞬間これは尋常ではないと直感した。荷物もピツケルも持たぬ。そしてゆつくりと尾根の傍を捲いて來る。途中の會話で三高の者で昨夜この登りでスリツプして着のみ着の儘吹雪中にビヴアークを爲し相當に疲れて居る事が判つた。近よると體格の大きい人だ。ぬれた樣なウインドヤツケに黑ズボンをはき、スキー手袋と軍手を片々にはめ、靴の紐は片方ほどけた儘だ。最初は、大した事は無いと思つて儘かに殘つたパン等上げたりしていたはつたが、その內にどうも樣子がおかしい。大變。全身凍傷にやられかけたらしい。よく觀ると話工合等ヨボ〳〵の老人の樣に舌にもつれて不明瞭だし、又固く立つたきり少しもくつろいで坐らない。顏色は惡く、片頬には打撲らしい紫色の斑痕がある。膝頭はガク〳〵と震え、時々默想でもするかの樣に暫く目を閉ぢる。かくなる上は一刻も裕餘ならぬ。私達の着物と換えさせ樣と考へたが、こんな寒い吹雪中ではそれも無理だ。そうだ萬難を排しても冷地の小舍へ連れて行く事だ。其處で完全な手當をすれば大丈夫だ。早速アンザイレンして出發。だが彼の足は凝結したかの樣に一歩も出ない。足場の好い處で確保して早く來いと怒鳴り乍ら幾分引き氣味にしたが駄目だ。その內彼は急に體の重心を失つて斜めに倒れかゝり、私は思はず引込まれ相な重いショックを肩に受けた。そこでピツケルを貸して上げたがしつかり握る事が出來ないらしい。他の二人は彼の後ろから色々手を盡して助けたが非常に狹い岩稜でうまく行かぬ。その間も酷烈な吹雪

は容赦なく私達を打ちさいなみ、少さな人間共の力をあざ笑ふ。そして時刻もどん〳〵空しく經過する。未だ南槍の惡い登りに掛らぬ此處で既にこんな調子ではとても冷池迄搬ぶ事は不可能だ。その時、不圖昨夜吹雪中の野營に寢袋だけで割合によく休めた事を思出し、咄嗟に一策が浮んだ。それは私達の寢袋を重ね合せて彼を入れ、風陰に確保して私達三人は冷池の小舍へ行き、一人は更に鹿島迄降りて應援を求め、殘る二人で翌朝再び此處へ保護材料を運び應援を待つと云ふのである。この場合こうする以外道はない。即刻實行に移り、事の次第を彼に話すと矢張り瞑目した儘うなづいたので直ちに寢袋に這入つて貰はうと出したが片足を入れたきりで後は仲々うまく體を動かさない。その時、靴の儘でよいかと聞いたので構はぬと言ふと、その儘横になつて了つた。私達は力を併せて彼を寢袋に入れると傍の岩角に捨繩を掛け、細引を三重にして確保し信州側に置いた。そして少しでも體力を保つ樣にと幾つかの角砂糖を口に含ましめ、最後に彼の名を聞くと、例の舌のもつれた聲で、それでも明瞭に答へ、後は何を云つても讒言の樣に名前と本籍を呟いて居た。明朝こそ食料等を持つて來る事を約し、又確信もして別れたがとう〳〵これが彼の生涯の最後の會話となつて了つた。そして南槍を越え、吹付ける雪粒で目も開けられぬ國境尾根をひた走りに冷池の小舍へ駈け込んだ、だが、つい此間迄居たと云ふ番人はもう降りて居ない。暗い陰氣な小舍に這入つて先づ一抹の不安が頭をもたげる。食料を探せ。到る所見たが僅かの梅干を除く他米粒一つ見當らないのだ。あゝ。心の底で若しやと恐れて居た事が現實になつて了つた。問題は食料なのだ。種池迄行つて見やうかとも思つたが、應援の必要もあり、確實性のある鹿島へ降る事に決め、重い物を小舍に殘して走り降る。國境に近い信州側の夏路は既に積雪の爲判然しない。新築の冷澤小舍で闇に追ひ付かれ、居合せた大工の一人を案內に鹿島へ飛ばし、電報その他の手配を狩野氏に依賴して倒れる樣に寢入つて了つた。

二、遺骸引降し迄

その翌る八日の朝、今日こそはと痛む關節を伸ばして起きる。山麓の此邊にも尙執念深い雪がちらつき、霜の樣に大地を粧つて居る。是が非でも現場迄行かねばならぬにも拘らず應援は仲々來ぬ。氣が焦つて仕方がない。

漸く晝近くなつて、大町の巡査部長が人夫衆をつれて自動車で來た。今からでは迚も現場迄は行けぬがせめて冷池迄登つて呉れる樣に話したが人夫共は降雪を嫌つて承知しない。寸時を爭ふ時に全く賴母しい落付方である。そして、遭難救援に禁物の絶望の豫想をもつて萬事に處し、家族の方を遺族呼ばりして居る。餘りの誠意なさに私は一番駄辯る櫻井順一と論じたが因より始まらない。結局この日は冷澤小舍泊りだ。その內三高からの救援隊も到着したので總ての狀況をお話しして其後は專ら其の指揮に働く事に心を決めた。それから無情な雪は毎日々々冷く降り續き、冷澤も二尺餘の積雪に包まれて了つた。

そして十日。雪の小止みに乘じて長ざくを輪樏で頑張つたが胸迄も達する新雪は容易に一行の登行を許さず、各人汗みどろのラツセルにも拘らず遲々として齒がゆい極みであつた。此處でも大町の人夫のだらしなさを見て心中隱かでなかつた。まるで客を案內する普通の登山の氣だ。如何に疲れたとは言へ、又遲いとは云へ今迄調子よく大勢友代して進んで來たのだから、この調子では暗くなつても冷池到着は可能なのに、一寸した雪崩に怖けたか登行の調和を破つて先づ下山の悲鳴をあげたのは彼等であつた。そして尙懸命にラツセルを續けて吾々を眺め乍ら一步も續かず後の方でポカンと突立つて居る有樣だ。到々この擧は失敗して了つた。文句のついでだが小舍に於ける彼等のエゴな態度だ。疲れ切つた吾々に慰めの言葉をかけぬだけなら、反つて世辭を知らぬ山男として床しくさへ思ふが、自分達だけで火を占領し、飯や汁を占領して貪り食し、僅かにその餘を申譯的に吾々へ出す無禮。その上寒い夜ともなれば彼等はいち早くも布團を占領して暖く寢て了ふのだ。お陰で私はあの吹さらしの尾根の野營よりも寒い思でふるへ明かした事もあつた。今少し人夫の訓育と云ふ事を特に大町の其の筋の人にお願ひする次第だ。

それからも降雪はしつゝこく續き、この擧でつけたラツセル道もすつかり元通りに埋つて了ひ、吾々は淚を飲んで待機と云ふ事になつた。そして急報してから六日目、漸く晴天に廻り逢ひこの間の深雪の惡闘を夢の樣に考へ乍らよく緊つた長ざくの雪上を春の樣な日を浴びて樂にスキーで登り、遂に冷池の小舍に這入る事が出來た。國境尾根に出る頃、天候は再び崩れ出し、暗々たる劍の

方面からは雪を交へた寒風が忽ち熱した肌をつき、やがてすつかり衣更へを濟した立派な鹿島槍の姿を灰色にぼかし、あたりは又もや蒙々たる吹雪の世界になつて了た。冷の小舎はもう半ば雪に埋つて了ひ積雪の急増に一驚する。もう斯うなつては如何してもN君の生命は斷念せざるを得ない。あゝ天は何故にかうも酷い試練を與へたのだらう。ぢつとして居ると堪らなくなる心痛に、私は小舎の近所でスキーの練習等して一時なりとも無想の時を欲した。吹雪に明け、吹雪に暮れ、遂に三日目の十六日。連日吾々を惱した荒天もからりと晴れて懷しい紺青の空を迎ぐ事が出來た。それは零下十八度の痛い様な朝だつた。氷雪の瓔珞に輝くタンネの林が悲しい犧牲者を迎える花輪だとすれば、ふんわりと夢の様な雲海に浮ぶ銀嶺劍、立山のモルゲンロートは眞に淨土もかくやと思はれる程に美しい光景であつた。山を限りなく愛し乍ら、山ならぬ他所で痛ましい最後を遂げる者すら多いのに、かくも壯嚴な山の殿堂で天に召される魂は所詮モータルな人間として此の上なく幸福なのではなからうか。南槍から州側には意外に厚く吹溜りが出來、此間とはまるで地形が違ふ様に感ぜられたが、堪(カシ)とでも言ふのだらうか、私はまるで吸寄せられた様にかゞんで儘かに露出して居る岩角に抱き付き、これだ、これらしいぞ、と叫びて居る。三尺、四尺と人夫が掘り下げる雪の下から先づスキー帽が現はれ、やがて痛ましい遺骸が半ば寢袋からはみ出して現はれた。頑丈な六本の細引きがブツツリと切れてる事から推察すると、厚く吹溜つた雪層のずり落ちたものと思はれる。生きて居る様な血色の顏には些かの苦痛の影も見えず、平和な眠を續けて居る様な優しい表情さへ浮べて居るかに見えた。N君。約束を果し得なかつた非力の私を許して呉れ。悲歎にくれて居られた御尊父、令兄の方々を想つて思はず胸にこみ上げるものがあつた。やがて遺骸は人夫等の協力によつて南槍に引上げられ、スキーで急造したソリに載せられて行く。純白の國境尾根に二條の跡をつけて靜々と進むこの悲壯なマーチから離れて、私は暫く、夕陽に

映えた南槍を包み切れぬ感慨に打たれて白痴の様に見つめて立つた……。

劍の怪奇なスカイラインは間もなく金光に隈どられ、そして赤に、やがて薄墨に沈んで行くのであつた。

追悼

故宮川雄二郎君登山經歷

昭和四年四月　東京商科大學豫科入學

十二月　野澤温泉スキー合宿（山岳部の合宿へ參加）

同　五年四月　一橋山岳部入部

四月　鹽山――丸川峠――大菩薩嶺――多摩川――氷川

七月　大町――烏帽子岳――野口五郎――槍ケ岳――上高地

十月　上高地滯在（燒岳、霞澤岳）

十二月　信濃追分――八風山――物見山――神津牧場――内山峠――荒船山――初谷鑛泉――小諸

同　六年三月　野澤温泉スキー合宿

五月　日光志津小舍――太郎山――戰場ケ原

七月　千垣――立山温泉――室堂――雄山――劍澤――池ノ平――仙人尾根――宇奈月

九月　小淵澤――權現岳――赤岳――夏澤峠――本澤温泉――小海

十二月　野澤溫泉スキー合宿
昭和七年四月　學部へ
四月　富士吉田――五合目小舍（七合目迄至る）
五月　日光湯元――金精峠――白根温泉――鎌田――宇重田峠――山崎――武尊山――沼田
十月　淺間山
十一月　大岳より馬頭刈尾根
同八年五月　茅野――瀧ノ湯――蓼科山――大河原峠――瀧ノ湯
七月　三ツ峠岩登練習
七月　中房――燕岳――槍ケ岳――穗高縱走――上高地
七月　上高地滯在、平湯より高山へ
七月　日原――仙元峠――川乘山
十月　五色温泉スキー合宿
十二月　北海道へ（十勝岳、定山溪より脇方へ、ニセコ等）
同九年一月　野澤溫泉スキー合宿
三月　大町――針ノ木峠――立山――劍岳――富山
七月　千葉縣御宿海岸にて、游泳中不慮の死に遭遇す。（廿八日午後四時頃、享年廿二歳）
八月

失はれし友

——宮川君を思ひて——

堀岡清

墨堤の感激と興奮とから早くもさめて、二人は思を既に遠い山々に馳せてゐた。

「二日續くね」

「アヽ」

「試驗もすぐだね。今の間に行き度いね。明日から晴れないかなあ」

「何處か當があるのかい」

「八ツへ行かうと思つてゐるんだが一人なんだ」

「豫定は？」

「今夜立つて、明日は權現の小舍、明後日は本澤温泉」

「小淵澤からだね、アイゼンやピツケルなど要らないんだらう」

「あゝ未だ要らないさ」

「俺も行かうかなあ」

……

「家の方は大丈夫なのかい？」

「家の方はなんでもないんだが……」

「そんなら一緒に行かうよ」

……

「では十一時五十六分新宿發だつたね」

「一、二等待合室で會ほう」

かうして吾妻橋を渡り終つた時に、二人の八ケ岳行は決つたのだつた。Kの遭難から二ケ月後の九月十九日の夕方對抗レースの豫選の終つた時だつた。

昨夜の小雨にしつとり濡れた小淵澤の驛に降り立つた二人の行手には、八ケ岳が澄切つた青空に聳え立つて居

た。南アルプスの山々を背にしてゆるやかな草原の裾野を「來てよかつた〳〵」と二人は言ひ知れぬ喜びにひたりつゝ、小躍りして歩いて行つたのだつた。二、三時間後は聲も出なくなる程水不足で苦しむのを露知らずに。

一歩行つては休み、二歩行つては休みしつゝふら〳〵になつてやうやく編笠の避難小舎に辿り着いた二人は、罐詰の空罐に溜つてゐた赤黄色の雨水で紅茶を作り、幾杯も〳〵むしやぶり飲んだのだつた。何時までも忘れ得ぬその味。だが然し、それを語り合へる友はもう居ないのだ。權現の小舎で寒さに震えながら寢たのも、赤岳の登りで大地震に驚かされたのも、柔かい横岳の草原も、冷い本澤の温泉も、今は自分一人切りの思出になつてしまつたのだ。

忌憚なく言へば、君は決して山に強い方ではなかつた。その爲か記錄的な大きな登山をやらうと言ふ樣な氣持はなかつた樣である。なだらかな山稜を辿る時に、美しいお花畑の中を行く時に、柔かい下草の森を分ける時に、深い落葉の木立を歩む時に、君の眞面目が見い出せるのであつた。君は多くの人々に「貴公子然」といふ言葉で云ひ表はされてゐるが、正にその通りである。短い日足に急ぐでもなし、小舎に着いてもせか〳〵働くでなし、悠容せまらざる所に君の君らしさがうかがはれるのである。上高地のテントで口の悪い連中にリユツクの中の釣の本を見附けられて尚悠々と糸を垂れてゐた君の姿は未だ我々の記憶に鮮かである。

山に入つて飲んだり、食つたりする時程賑かな樂しい時はない。此の時だけは流石の貴公子も完全な山男に還光されてゐた。「俺の飯あるかい」とのぞき込む、大阪訛りの一言は何時迄も我々の耳をはなれないのである。又十勝では此んな事もあつた。「宮川も隨分食ふね」と誰かに言はれると、食ふ事がさも罪惡と見られたかの樣に、むきになつて辯解したり、例のマンジユウ事件で、一杯食はされていさゝかてれながらも手を出す事丈は忘れてゐなかつたのだつた。

貴公子と言はれる程君の體は華奢であつた。それかあらぬか零下三十度の十勝ではうつかり耳をやいてしまつたが、それが緣で只一度きりの北海道行にも拘らず、彼の印象は北海道の人々の間に深く殘されてゐるのである。勝岳莊のストーブを圍みながら、

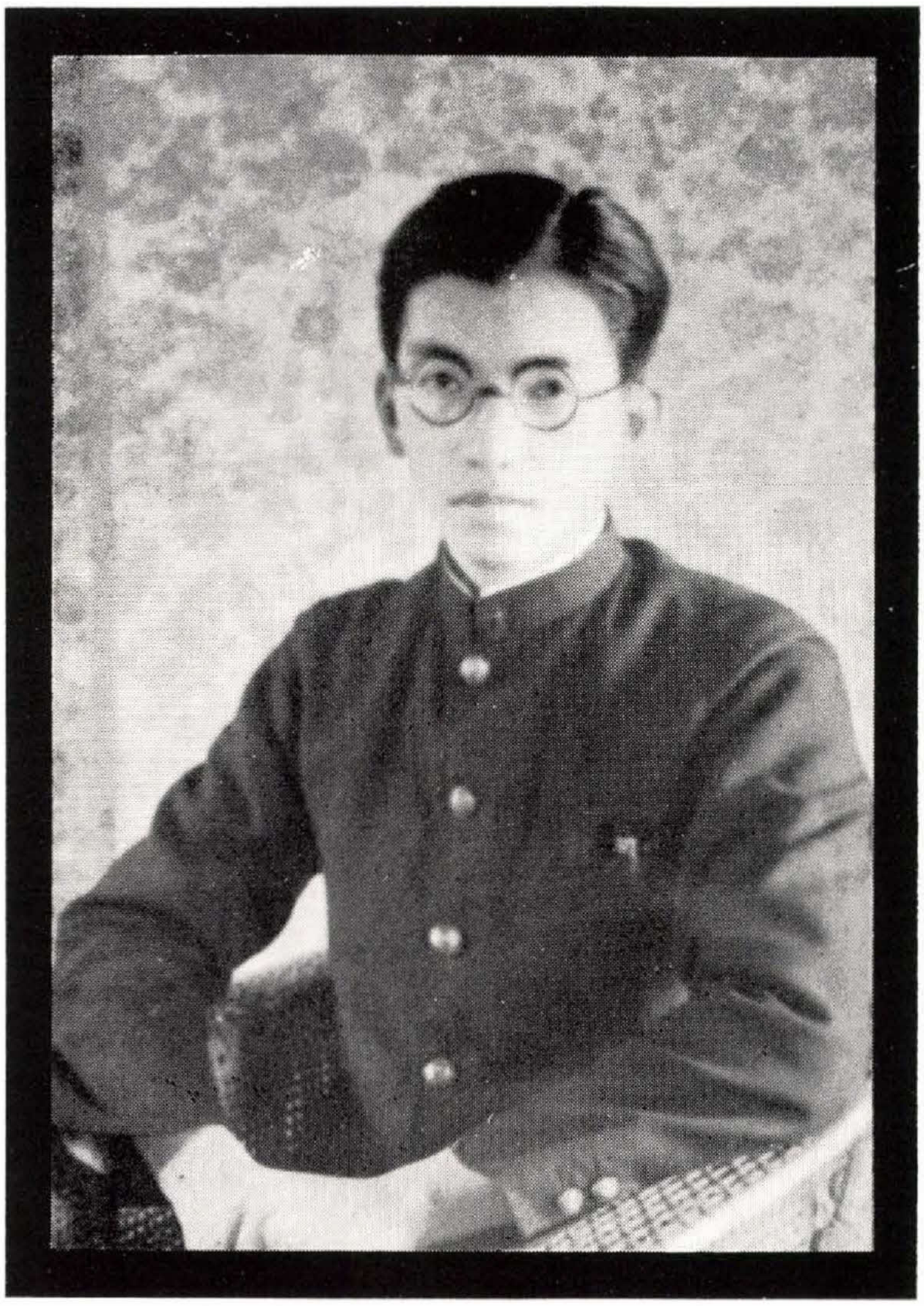
「犬が耳をなくしたら大變だね」（宮川のアダナは、コリ

いーだつた）と0先輩に一本やられて、悄げかへつてゐた君の姿も今は君をめぐる思出話になつてしまつたのだ。

何と言はうと君は山が好きだつた事には相違がない。未完成であつた君に就いての全ての思出は、山が好きであつたと云ふ一言に盡きるであらう。君は今滋賀縣の故郷に安住の地を得てゐると聞く。願はくば君のその地が楢や櫟に圍まれた靜かな丘の上にあつて、朝な夕な思ひ出の山々の望み得る所であることを。

（一九三四・一一・七　八ケ岳のよく見える南より歸りたる日に）

（故宮川雄二郎君追悼錄「落葉」より轉載）



故宮川雄二郎君

錄　記

1934 . 7——1935 . 8

昭和九年（一九三四）　　杉浦　亮　他三名

突阻山

八、三　晴時々濃霧　近幌驛（前四、四〇）――登山口――防火線の終り（五、一五）――小サナ澤（五、二五――五、三五）――高山植物監視小舍（五、五〇――六、一〇）――山頂、三角點（六、四〇――七、三〇）――南へ縱走する――最南端のピーク（八、一五――九、一〇）――防火線――驛（一〇、〇〇）

突阻山は南樺太の略々中央東海岸にあつて、山稜は南北に約二米で三角點に達し、側にすぐ一岩峰あり。突阻ジャンダルムとも稱すべきか。三角點から北へ下ること二〇〇米にてトタン作りの堅牢な小舍がある。山稜は三角點から南へ縱走して居り、非常に瘠せた岩ばかりの尾根で小規模ながら奥穗からジャンダルムへの尾根に似た處もある。岩は非常にもろい。海岸からは烈風がガスを吹きつけて非常に寒い。

尾根を縱走する附近一帶高山植物がベツトリ。その數、百數十種數に於ても種類に於ても全島一、否全國一とも云へるだらう。尾根は大體五ツのピークよりなる。最南端のピークからは直下の澤に沿ひて下る。すぐ防火線に出る。汽車の時間に間に合はなかつた爲大急ぎで下る。このコースは丁度突阻山を北から登つて南走し最南端を下りたもので、相當の速さで歩いたから時間から見ると非常に短いコースに見えるが普通に登ればもう少し時間を要するであらう。

大雪山

増山清太郎

九、二〇　小雨　層雲峽――黒岳石室

一汽車おくれて増山兄來らる。

九、二一　雪　滯在

九、二二　曇　層雲峽へ下る。

（先輩）、堀岡　清

豊田忠巍

昭和九年（一九三四）

藏王山

七、二八　曇　大河原——遠刈田——峨々温泉

七、二九　小雨　峨々温泉——刈田岳——遠刈田——大河原

連日の雨天にクサツて居たが、二十八日一寸日光が照り出したので出發した。峨々温泉に至る頃又々雨となつた。翌日は例の通り梅雨氣味。刈田岳の頂上では展望全くきかず、而も雨と强風の爲寒氣きびしく停滯を許さず急ぎ遠刈田へと山を下る。

東北朝日連峰

齋藤正治、他三名

八、一七　晴　新發田（六、二二）——越後金丸驛（九、二五）——赤芝橋（九、四五）——尻無澤（一一、四〇）——五味澤（四、三〇）——百畝畑（九、四五——一〇、〇〇）——南寒江山（一〇、三〇——一一、〇〇）——北寒江山——狐穴小舍場（一二、〇〇——一、三〇）——以東岳（三、一五三〇）——大鳥池畔中ノ澤（四、五〇——五、一五）——大鳥池用水工事事務所（五、三〇）

八、一八　晴後霧　小舍（七、三〇）——大玉澤（一〇、一五——一一、五五——九、二五）——角ナラ澤出合渡場（八、一〇——一、四〇）——蛇引ノ清水場附近（一二、二〇——一、四〇）——尾根ニ出ル（二、〇五）——平岩山（四、二〇——五、〇〇）——大朝日岳（六、〇五——六、二〇）——大朝日神社コンクリート小舍（六、二五）

針生から角ナラ澤まで針金と丸太で出來た危げな一本釣橋を四つ渡る。角ナラ澤附近にも針生同樣のシ、小舍がある。大玉澤出合で荒川の清流に分れ清水場まで恐しい急坂を攀ぢる。これから水がない。尾根に出たら霧にまかれる。大朝日の小舍では水がなく中岳との鞍部までとりに行く、夜中獸の鳴聲らしいものに惱まされた。

八、一九　晴時々霧　小舍（七、〇〇）——中岳（七、三〇）——西朝日岳（八、三〇——九、〇〇）——龍門山（九、三〇）——百畝畑（九、四五——一〇、〇〇）——南寒江山（一〇、三〇——一一、〇〇）——北寒江山——狐穴小舍場（一二、〇〇——一、三〇）——以東岳（三、一五三〇）——大鳥池畔中ノ澤（四、五〇——五、一五）——大鳥池用水工事事務所（五、三〇）

赤芝の釣橋で小國本村に行く自動車を下り、德網迄荒川沿ひ五里の坦々たる道を汗だくで辿る。德網附近より振返へると、屏風を廻らした如く連つた飯豊連嶺が夕陽に映えて美しい。針生小舍では茅葺の感じのよい獵師小舍である。

れて底も見せず絶えず霧を上げて來る。狐穴ではいゝ氣持で伸びた。小舍は破損して使へない。以東岳中腹より見下した大鳥池は陰鬱そのものである。急な降りを終つて舟で對岸に渡る。目下鶴岡方面への用水工事中で人夫が百人餘も入つてをり小舍使へず監督笠原氏の好意により事務所に泊る。

八、二〇　曇　七ツ瀧往復　事務所（九、一〇）——冷水澤（一〇、〇〇）——茶畑山（一一、三五——一二、一〇）——繁岡（二、〇五——二、二〇）——荒澤（二、五五）——上田澤（三、四〇——四、三〇）——（自動車）——鶴岡＝新發田

池で泳いだり、大鳥川落口にある七ツ瀧を見に行つたりのんびり出發した。池からは工事の爲め、冷水澤に出て茶畑山の左腹を捲き皿澗澤に出る坦々たる道がつけられて、困難な徒渉と籔に苦しんだ大鳥川下りも夢となつた。駈ける樣にして下り日沒頃鶴岡に着いた。

昭和十年（一九三五）

藏王山

堀岡　清、小林重吉

三、二一　曇　山形（六、四七）——山ノ上（八、〇〇）——高湯（九、三〇）

山ノ上迄は自動車、後はだら〳〵登りで高湯に着く。雨が降つたと見えて雪は惡い。午後コーボルトヒユッテ近く迄遊びに行く。

三、二二　晴後曇　高湯（八、三〇）——コーボルトヒユッテ（九、三〇）——藏王地藏岳（一一、三〇）——ヒユッテ（一、〇〇）——高湯（二、〇〇）

有名な藏王の樹氷は當時雪が降らなかつた爲殆んど見られなかつた。藏王からの下りは變化あるスロープで練習には好適だと思ふ。

三、二三　曇　高湯（一、三〇）——山ノ上（三、〇〇）＝山形（四、〇〇）

午前八時半龍山へ行く豫定で出發したが雪が少い爲途中にて引かへす。

尙今度は東鐵のスキーツーアを利用したのであるが、利用方法如何では少しも不便はない。（小林）

飯豐山

齋藤正治、林　俊介、鷹野雄一、人夫（長者原）渡邊善三郎

四、一〇——四、一六

詳細は紀文中の「檜山澤入り四月の飯豐山」に在り。

昭和九年（一九三四）

上越國境・日光方面

齋藤正治、小柳二郎、人夫（戸倉）
荻原豐（富士見峠まで）

四、九　晴　上野（九、〇五）——沼田（一二、二二）——鎌田（二、二〇）——越本（四、〇〇）——戸倉玉城屋（五、二〇）
四、一〇　晴後曇　戸倉、七、三〇）——十二平（八、一〇）——硫黄澤橋（八、二〇——八、四〇）——田代原（一〇、〇〇——一〇、五〇）——富士見峠（一二、二〇——一、四五）——八木澤——檜枝岐小舍（三、三〇——三、四五）——尾瀬ヶ原東電社宅（四、〇五）
四、一一　晴時々曇（C九度）　社宅（一〇、一五）——至佛山裾（一一、四五）——狢澤右側稜——至佛山頂（二、一五）——二、五〇）——狢澤ニテ遊ブ（三、一〇——三、五〇）——山裾（四、〇〇）——社宅（五、三五）
四、一二　曇（C一〇度）　社宅（一一、〇〇）——景鶴澤左側稜（一一、二〇——景鶴山左肩デポ（一、一五）——頂上（一、二〇——二、三〇——デポ（二、四〇）——與作岳（三、二〇）——社宅四、三〇）
四、一三　雨後雪（C零下一度）　休養
四、一四　雪後晴（C零下四度）　社宅（一〇、三〇）——燧岳中腹（一一、三五——一二、一〇）——燧岳頂（一、二五）——柴安嵓鞍部中食（一、四〇——二、一〇）——柴安嵓——噴火口附近（三、〇〇——三、二〇）——沼尻（四、〇五）——越本（四、〇〇）——沼田（一二、二二）——鎌田（二、二〇）——戸倉（五、二〇）
四、一五　快晴　（C六度）　社宅（六、二〇——三〇）——景鶴澤鞍部（八、〇〇）——大白澤山前峯（九、〇〇——一〇、〇〇）——白澤山——三角山越後側（九、五〇——一〇）——平岳（一一、〇〇）——一二、三〇）——肩（一二、三五——一、一五）——白澤山（一、三〇）——三角山（二、一五）——景鶴鞍部（三、三〇）——景鶴澤——社宅（四、一〇）
四、一六　雪　（C六度）　社宅（一一、二〇）——日砂（一、二〇——一、四〇）——尾瀬沼畔長藏小舍（二、一五）
四、一七　雪後晴　小舍（七、三〇）——三平峠（八、一〇）——冬路澤——出合（八、三〇）——大清水（九、四〇）——山神社（一一、〇〇）——戸倉（一二、〇〇——一二、三〇）——鎌田（二、二〇）——沼田——東京

玉城屋の勸めで十日には人夫を傭ふ。戸倉の直ぐ裏手からスキーがはけた。田代原で伸びてから夏路を通らず馬迫池を左に見て硫黄澤をわたり荷鞍山側に取付いて富士見峠に登つた。晴天續きの爲め雪質惡く、シールも要らない位であつた。峠で又伸びて人夫を歸し、惡い雪をかこち乍ら下る。檜枝岐小舍はすつかり雪に埋れてゐた。眞白な至佛、景鶴、原は一丈餘の積雪である。只見川の雪橋を渡ると社宅である。訪ふ人稀な雪の高原に只見川の觀測をして暮してゐる荻原親子三人は喜んで迎へてくれた。之より

六日間此處に泊つて白銀の山々を歩いたのである。

至佛に登つた日も景鶴を極めた日も暖い日で雪質惡く、登りが容易な割に降りは滑らなかつた。十三日には平ケ岳を志して前夜早く就寢したが、夜半星の出てゐた空は夜明前に雨となつた。十三日の金曜日。夕方からナデクボ澤に入つた。頂上附近は素晴しい粉雪となり、素晴らしくよく滑る。十四日には晝頃から晴れさうなので荻原氏と三人で燧に向つた。姐嵓と三角點の鞍部に出る澤を登り、赤田代鑛泉よりの夏路に合した。降りは急斜面をトラバースして柴安嵓に到りそれから等高數字のある尾根をたつて途中から笹デクボ澤に入つた。頂上附近は素晴しい粉雪であつた。十五日には憧れの平ケ岳に今年度の初シュプールを印し得た。景鶴鞍部邊から大白澤山をこえるまで小雪が舞つて廻り道をしたりして手間取つた。國境の尾根は越後側に大きな雪庇を出してゐた。平ケ岳頂上から魚沼三山、利根水源の山々等の壯觀をほしいまゝにした。降りは白澤山まで直滑降一本の快走を味ひ、景鶴澤の降りも素晴しい速度で一氣に社宅に歸りついた。

雪と天候に惠れた山行、親切な厚いもてなし、炬燵を圍んでの愉快な談笑、レコードをきいたり、歌を唱つたり、カレーの御馳走になつたりした懷しい社宅を後に、降る雪の中を十六日長藏小舍に行つた。長藏では半日炬燵で伸びた。夜半よりの吹雪の中を十七日朝三平峠から冬路の澤の粉雪に雪煙を上げて降り、雪漸く消えた戸倉の里に眞黒な顏を輝し乍ら雪の尾瀨と別れたのである。（齋藤）

奥日光

高原龍雄、他一名

七、一四　小雨　雷門驛（七、五五）——日光（一〇、一五）——（バス及びケーブルカー）——中宮祠（一二、〇〇）——（一、三〇）

七、一五　曇後小雨　滯在

菖蒲ケ濱でボート漕ぎと、魚釣りで一日を過す。

七、一六　霧後小雨　菖蒲ケ濱（九、〇〇）——戰場ケ原——湯本（一二、〇〇）——金精峠（二、三〇）——清水（三、一〇）——菅沼、山の家（三、三〇）——丸沼温泉（四、三〇）

七、一七　晴後曇　丸沼温泉（八、〇〇）——大尻沼（八、二〇）——白根温泉（一〇、二〇）——東小川（一二、〇〇）——須賀川（三、〇〇）

七、一八　雨　須賀川（九、〇〇）——（バス）——沼田（一一、五五）——歸京

戰場ケ原は湯川に沿ふて歩いたのだが、湯瀧に至るまでの景色は此の旅で一番美しいと思つた。この道は龍頭の瀧から本道と分れてゐる小徑を登るのである。途中にある白樺の美林、赤い山つつぢ、赤や紫の花菖蒲、名も知れぬ高山植物等は私達の眼をたのしませ、不順な天候をつぐなつてあまりあつた。

奥日光より尾瀬

原　鐵三郎

八、三　晴時々雨　上野(五、三三)——日光(八、五一)——(バス)——馬返(九、三〇)——(ケーブル)——中宮祠(一〇、二〇——一〇、二五)——(バス)——湯本(一一、二〇——一二、五〇)——菅沼、山の家(二、〇〇)

天氣は良いが雲と雷が氣になる。明智平の展望は、よかった。

八、四　晴時々曇　山の家(八、〇〇)——湯本(一〇、〇〇——一〇、三〇)——前白根山(一一、五〇)——奥白根山(二、〇〇——二、三〇)——血の池地獄(五、〇〇)——山の家(六、三〇)

八、五　快晴　山の家(八、三〇)——丸沼温泉(九、三〇)——四郎峠(一二、三〇)——根羽澤鑛泉(二、三〇)

八、六　晴　鑛泉、七、三〇)——三平峠(一〇、〇〇)——長藏小舍(一一、一〇——一一、二〇)——沼尻(一二、〇五——燧岳(二、〇〇——二、三〇)——尾瀬ヶ原温泉(四、三〇)——平滑瀧(五、〇〇——五、一〇)——温泉(五、五〇)——檜枝岐小舍(六、一〇)——長藏小舍(七、〇五)

今日は内容豊富で精一杯の登行だつた。

八、七　曇時々雨　小舍(八、三〇)——三平峠(九、二〇)——根羽澤鑛泉(一一、三〇——一二、一〇)——丸沼温泉(二、四〇)——菅沼、山の家(三、〇〇)

バスに間に合はず、菅沼泊りときめてしまふ。

八、八　山の家——丸沼——沼田(一一、三〇)——歸京

三國峠、赤澤山

柿原謙一

一一、三　晴後曇　後閑——法師——三國峠——法師

一一、四　晴　法師——赤澤林道——四萬

赤澤山の紅葉よく、上越の山々が美しく見えた。

昭和十年(一九三五)

赤城山

小林重吉、塚本駿

二、九　曇　上野(一二、二〇)——赤城旅館(五、三〇)

箕輪よりスキーをはいて登行可能、然し雪は餘り良くはなかつた。

二、一〇　晴後曇　旅館(九、〇〇)——地藏岳(一〇、〇〇)——長藏小舍館(一一、〇〇)——沼尻(一二、〇五——燧岳(二、〇〇——二、三〇)——尾瀬ヶ原温泉(四、三〇)——箕輪(三、三〇)

氣温非常に上昇し雪はベタベタになる。地藏岳はブッシュ多くスキーには好適でない。但し沼尻ゲレンデは惡くはなかつた。

(小林)

苗場山と神樂峰

林　俊介、鷹野雄一、岩崎利一

三、三〇　曇　上野(一一、三〇)夜行

三、三一　小雪　湯澤(五、一二)——芝原峠——八木澤——外ノ

川（一二、〇〇）

附近は完全な粉雪で快適な滑降に樂しんだ。

四、一　曇小雪　外ノ川（七、〇〇）――慈惠ヒュッテ（八、一五）――一〇、三〇）――苗場山頂上（一、三〇）――神樂峯（三、一五）――慈惠ヒュッテ（四、〇〇――五、〇〇）――外ノ川（五、三〇）

今日も氣温低く粉雪。神樂より苗場までは尾根通しに行く。雪はしまつてゐて登攀は樂だつたが、眺望は全然なかつた。

四、二　吹雪　外ノ川（一一、〇〇）――慈惠ヒュッテ（一二、〇〇）

慈惠の小舍へ引越す。外ノ川は商賣氣がありすぎる。

四、三　吹雪　慈惠ヒュッテ（九、〇〇）――神樂峰（一一、〇〇）――慈惠ヒュッテ（一二、三〇）

再び苗場へ向つたが、やはり霧深きため戻る。夜になつて晴れる。

四、四　曇　慈惠ヒュッテ（一二、〇〇）――湯澤（三、三〇）

一寸日が照つた爲、ザラメ化して滑らぬ雪に苦勞して下山する。即日歸京す。（林）

赤城山

新羅二郎

四、二八　曇雨　上野（八、五五）――前橋（一二、〇〇）――大沼湖畔（一、三〇）

前橋からハイヤーで麓まで。二大沼湖畔は所々未だ雪が殘つて居た。雪解けの道がとても惡く其の上雨が降り出して弱つた。

四、二九　雨曇　大沼（後三、〇〇）――前橋（六、三〇）

終日雨、結局何處へも行かず、唯雨の中を大沼にボートを浮かべて薄氷を破りながら漕いだのみ。

谷川岳（新入部員歡迎登山）

林　俊介、小柳二郎、柿原謙一、望月達夫、鷹野雄一、森川眞三郎、鷲崎雄四郎、佐々木誠、西野博、原鐵三郎、（以下新入生）日江井正己、齋藤明智、毛塚由太郎、大塚武、鈴木惣兵衛、奥山忠敎、秦良平

五、四　薄晴　上野（一一、三〇）夜行

五、五　晴時々曇　湯檜曾――土合（四、四〇）――朝食（五、三〇――六、〇〇）――尾根へ取付ク澤下（七、〇〇）――マチガ澤トノ尾根（九、〇〇）――頂上（トマの耳）（一〇、二〇――一一、三〇此間、鷹野、望月、森川はオキの耳迄往復）――天神峠（一、五〇――二、三〇）――谷川温泉（五、〇〇）

豫想より殘雪が多く、その上に數日前の降雪で、新雪が二、三尺積り、四月上旬の如き狀態を呈して居た。西黑澤の奥の枝澤には、暖い太陽にてらされて小さな表層雪崩がかなり多く出た。僕

達の登つた澤にも、三、四見ることが出來た。頂上直下及び天神峠附近はゾムメルシーに好適、他はザラメになりきらなくて、長スキーでなければ面白く無い。笠、朝日、それから至佛方面の眺望は素晴しかつた。頂上では少し雪が舞つた。（望月）

高原龍雄、原鐵三郎

日光白根山

七、二七　晴　上野——日光——湯本温泉板屋
七、二八　晴　湯本（八、三〇）——追分（八、四〇）——白根澤（九、四〇——一〇、〇〇）——天狗平（一一、〇〇）——前白根山頂（一一、一五）——奥白根山頂（三、〇〇——三、三〇）——大日如來小屋（四、〇〇）——血の池（四、三〇）——菅沼山の家（六、〇〇）——丸沼温泉（六、四〇）
七、二九　晴　丸沼温泉ホテル滞在
七、三〇　晴　丸沼温泉——沼田——上野

上信國境方面

林　俊介、柿原謙一

昭和九年（一九三四）

神津牧場

一二、一五　晴　上野——輕井澤（一一、二〇）——和美峠——初鳥谷（二、三〇）——高立——牧場事務所（四、三五）
一二、一六　晴　事務所（九、〇〇）——小舍場——荒船山（一二、一〇）——黑田（二、三〇）——物見山（四、〇〇）——事務所（五、〇〇）
一二、一七　晴　事務所（八、〇〇）——輕井澤（三、三〇）——上發地——輕井澤（三、三〇）——八風山（一〇、四五——一一、三〇）——上發地——輕井澤（三、三〇）——關山驛（六、四〇——八、〇〇）——關温泉（一〇、一五）

冬枯れの、訪れる者なき牧場の、身に泌む風はひたぶるに柵によれる吾が胸を打つ。（柿原）

昭和十年（一九三五）

澁峠越え

三、一一　晴後吹雪　輕井澤——草津温泉驛（七、〇〇）——香草温泉（一一、〇〇）——草津（四、三〇）
三、一二　快晴　草津——香草温泉（一〇、三〇）——横手山頂（二、三〇——三、四〇）——熊の湯（四、三〇）

雪質良好。途中にて天候變じ吹雪の爲退歸へさる。

三、一三　雪　熊の湯（九、一〇）——丸池ヒュッテ（一二、〇〇）——上林温泉（二、〇〇）

天氣良けれど横手山頂は烈風で氣温低し。眺望は蓋し壓巻なり

三、一四　晴後雪　上林——木島——野澤温泉

原　鐵三郎

神津牧場

四、二八　晴後小雨　輕井澤（四、〇〇）——八風山（九、〇〇——一〇、四五）——一

内田素彦

一〇、〇〇)——物見山(一一、〇〇)——牧場(一二、〇〇—一一、〇〇)——市野萱(三、〇〇)——下仁田(五、〇〇)

神津牧場

林　俊介、小柳二郎

五、六　晴　下仁田(六、三〇)——市ノ萱(一二、〇〇——〇、三〇)——牧場事務所(二、三〇)——スキー小舍

五、七　晴　牧場(九、四〇)——香坂峠(一一、〇〇)——八風山(一二、〇〇——〇、三〇)——上發地(一、三〇)——輕井澤

(三、〇〇)

林、柿原、小柳の三人は谷川岳で歡迎登山の一行と別れ國境尾根縱走の上三國峠に出る豫定なりしも、五日の午後の惡天候等に阻まれ、その中二人は遂に神津牧場行と軟化す。軟化したら天氣は好變せり。五日の夜は下仁田郊外神社境内にてオカン、六日の夜は牧場スキー小舍にて假泊。(小柳)

神津牧場

松浦靜雄

五、一八　晴　上野(一〇、五五)夜行

五、一九　晴　輕井澤(四、〇〇)——上發地(五、三〇)——八風山(九、〇〇)——牧場(一一、〇〇——三、〇〇)——市野萱(四、三〇)——下仁田(五、一〇)

上發地より道を間違へ二時間ばかりうろつく。八風山よりの眺望は素晴しかつた。牧場の牛乳は實に美味なり。牛は二、三頭しか放牧されて居らず。蠅多くいさゝか期待に外れた感があつた。

神津牧場

六、二五　晴　高崎(一、三〇)——下仁田——牧場

豫め豫約して置かなかつた爲、宿屋が滿員で危く野宿する處だつた。名にし負ふ牛乳風呂、あまり氣持のいゝものじやない。

六、二六　晴　牧場(九、〇〇)——物見岩——志賀峠(一〇、三〇)——八風山(一、三〇)——上發地——輕井澤(四、〇〇)

鐵道省のハイキング・コースだけあつて人が多い。八風山から淺間山がよく見えた。

東京附近及富士山方面

昭和九年(一九三四)

扇山、權現山

原　鐵三郎、岩崎利一

六、一〇　晴　鳥澤(一、三〇)——扇山(三、三〇——六、〇〇)——權現山(一一、〇〇)——大野村貯水池(二、〇〇)——四方津(三、三〇)

丹澤山塊

岩崎利一、他一名

七、一二　霧雨　新宿(九、三〇)——澁澤(一一、〇五)——塔ケ嶽(三、三〇)——丹澤山(四、四〇)

雨に惱まされつゝ、貧弱な小舍に一夜を明かした。

七、一三　曇時々雨　丹澤山小舍（六、〇〇）――蛭ヶ嶽（七、三〇）――焼山（一〇、四〇）――長野（一二、〇〇）――前戸（一、〇〇）――八王子（三、三〇）――歸京

惡天氣には困つたが、思ひ出深い旅だつた。

岩崎利一

景信山、陣馬山

七、一七　曇時々雨　新宿（七、三〇）――高尾山（一〇、一〇）――景信山――（一二、一〇）――萩の丸（一、三〇）――陣馬山往復、出發（二、四〇）――與瀬（三、五〇）――新宿

何等見晴らしの無い日、殆ど寒い位に霧が掛つて居る日ではあつたが、萩の丸附近から望んだ霧の中の陣馬は忘れ難いものであつた。

榎本直司、他三名

富士及五湖

八、六　曇　新宿（一一、五五）夜行

八、七　晴　甲府――（身延線）――久那土――本栖湖

八、八　晴　本栖湖――精進湖――西湖――河口湖畔長濱

八、九　曇　長濱――富士吉田――中ノ茶屋

八、一〇　曇　中ノ茶屋――馬返――富士山頂上――須走――（自動車）――御殿場

久那土から峠へ向ふ道は割合に良い。本栖迄に三つ程峠があるが二つはトンネルが出來てゐるので樂である。

富士山

八、八　晴　吉田――馬返――五合目――頂上――須走口より下山――六合目――馬返――須走村――御殿場

富士山

八、一五　晴　新宿（二、三〇）――大月――富士吉田――馬返――五合目小舍（九、一〇）

八、一六　晴夕立　五合目（二、三五）――八合目小舍――頂上（一〇、〇〇）――觀測所――銀明水――七合八勺小舍――太郎坊――御殿場――歸京

森脇芳之、他一名

棒ノ嶺より川乘山

九、二四　晴後曇　軍畑（七、〇〇）――高水山（八、四〇）――棒ノ嶺（一二、二〇――一、〇〇）――獅子口（三、三五）――川乘山（四、三〇）――棚澤（六、一〇）――歸京

岩崎利一

高尾山

一〇、一三　快晴　淺川（一一、〇〇）――高尾山――小佛城跡（二、一〇）――日影澤小屋――淺川

小谷部全助、森脇芳之

高尾山

一〇、二八　晴　高尾山――小佛峠――景信山――與瀬

堀岡清

三ツ峠

一一、八　晴　大月═══小沼──達磨石──頂上──往路を戻る──小沼──大月　　佐々木　誠

岩殿山

一一、二四　雨　新宿（一一、五五）夜行　　小谷部全助、塚本駿、湯田坂哲、鷹野雄一

一一、二五　晴　大月（八、三〇）──岩殿山（一〇、〇〇）──二、〇〇）──大月（四、三〇）──歸京

岩殿と云つても岩登りに行つた譯ではないんで、部員の懇親旅行の積りだつたのだが、前日の天氣豫報が雨だつたせいか來會者四人と云ふ淋しさ、でも翌日は案に相違した小春日和で頂上からは富士の美しい姿も眺められた。（鷹）

武州大岳山

一二、一六　晴　御岳橋（一、〇〇）──御岳山──大岳山（五、四〇）　　小谷部全助

一二、一七　晴　大嶽頂上往復──御岳橋

大菩薩峠

昭和十年（一九三五）

二、六　晴風強し　鹽山（四、二〇）──番屋（六、〇〇）──大菩薩館（八、〇〇）　粉雪で一日スキー練習。　　小谷部全助

二、七、八、九、一〇　滯在　附近散歩　南の眺絶佳。

二、一一　晴　峠往復歸京。前日來の暖氣でスキーは駄目だ。

大菩薩峠

四、九　曇後雨　鹽山（四、一〇）──（自動車）──番屋（五、三〇）──長兵衛小舍（八、三〇）──大菩薩嶺（一一、三〇）──鹽山（二、〇〇）

長兵衛小舍以上は積雪一尺以上あり、ゾンメルシー可能であつた。　　小林重吉

富士山（ゾムメルシーにて）

四、一三　晴　富士吉田（四、〇〇）──馬返（七、〇〇──八、〇〇）──五合目小舍（一一、〇〇）　　小谷部全助

四、一四　快晴無風　五合目（五、〇〇）──天地境（五、三〇）──八合目（八、三〇）──吉田口頂上（九、二〇）──観測所（一〇、〇〇──一〇、三〇）──剣ケ峰頂上（一一、〇〇）──オ鉢廻リ──金明水──吉田口頂上（一一、三〇）──七合半スキーデポ（一二、三〇）──五合目小舍（一、〇〇──一、二〇）──馬返（二、〇〇）　　高原龍雄、原鐵三郎、岩崎利一

三頭山と御前山

四、二一　晴　五日市(八、一〇)——城山——本宿——弗漢瀧往復——神戸岩往復——人里(八、四〇)
秋川沿ひの道の長いこと。遂に數馬泊を繰更。
四、二二　晴　人里　九、〇〇)——數馬——小河内峠(一一、三〇)
——三頭山往復(二、〇〇)——御前山(五、三〇)——氷川
(七、二〇)

三頭山と御前山

四、二二　晴　五日市(前日一一、三〇)——本宿(一、三〇——二、
〇〇)——數馬(五、〇〇——八、三〇)——三頭山(二、〇〇)
——小河内峠(一一、三〇——二、〇〇)——御前山——
氷川

林　俊介、森川眞三郎

十六日の月光の中を馳ける如く數馬に宿る先發隊を追ふ。相當の强行であつた。

小佛峠、景信山

四、二八　晴　淺川(九、〇〇)——小佛峠(一〇、三〇)——景信山
(一一、〇〇)——與瀬(二、〇〇)

日江井正巳、齋藤明智

大菩薩峠

五、四　晴　新宿(一〇、〇〇)——御嶽——氷川——小河内——
小菅村(八、〇〇)

大野惠司、他一名

五、五　雨後晴　小菅村(一一、〇〇)——白糸瀧——大菩薩(七、
〇〇)

五、六　晴　大菩薩嶺(一〇、〇〇)——雲峯寺——鹽山(五、〇〇)

大　岳

五、一九　晴　御嶽驛——御嶽——大嶽——鋸山——氷川——御
嶽

森脇芳之

富士山

五、二五　曇　富士吉田(後八、三〇)——馬返——五合小舍　前
〇、四〇)

森脇芳之、小谷部全助、塚本駿、和田榮達

五、二六　晴　五合小舍(七、〇〇)——七合五勺(一〇、三〇——
一一、三〇)——吉田口頂上(一、〇〇——一、三〇)——馬返
(五、〇〇)——吉田

六合を落として打寄せてゐる雲海は登るに連れて追掛けて來るが、やがて再び元の汀へと追返されて居た。頂上へ向けては雲一つない、雪は七合下から大澤傳ひに頂上迄續いてをり、其の尻を小さなデブリで結んでゐた。燕澤でたまりかねてゾムメル・シーで道草を喰ふ。其處から上はゾムメル丈肩にシャツ一枚で登る。頂上は典型的フイルム・クラストの上を和風が吹いてゐた。小憩の後絶頂より八合へ向けて一氣に下る。七合五勺で荷を採つて後

は雪の終迄、快的の連續だ。麓では鶯が鳴いてゐた。（森脇）

三ツ峠岩登練習

小谷部全助、鷹野雄一、新羅二郎、松浦靜雄、谷ケ崎龍二

六、二　晴　小沼（三、三〇）——岩場下（六、三〇）——岩登練習——頂上茶屋（九、〇〇）——二、〇〇）——一一、〇〇）——母の白瀧（一、〇〇）——舟津

殆ど連續に登つた爲、皆アゴを出す。なつかしい富士の殘雪を眺め乍ら十分休養し、張切つて練習する。至る所面白いルートをとる事が出來る。（小谷部）

小金澤山、大菩薩嶺

小柳二郎

六、八　曇　立川發（午後三、〇〇）——初狩（五、〇〇）——上眞木（五、三〇）——桑西（七、〇〇）——大峠小舍（九、三〇）

大峠迄の道は所謂木馬道で歩き難い事夥しく、然も峠には伐採製材の小舍が櫛比して、胸の中に描いてゐた靜寂なる峠の面影は無殘にも眩ゆきランプの光にかき消されて終つた。小さな小舍は南アルプスを想はせる。

六、九　晴　大峠小舍（七、四五）——赤屋ノ丸北肩（八、三〇）——黑岳三角點（九、三五）——九、四五）——クルミ澤の頭（一〇、五〇）——牛奥ノ雁ガ腹摺（一一、三〇——一一、四五）——雨澤の頭（一、〇〇）——狼平（二、二〇）——石丸峠（二、四〇）——熊澤山（三、一〇）——大菩薩峠（三、二〇——三、三〇）——フルコンバ小舍（四、〇〇）

晝過ぎには峠に着くだらうと高をくゝつてゐた所、意外に長つたらしい縱走路で、針葉樹の密林に見通しきかず、路を失つては何度もヤブくゞりさせられたが、時折ヒヨツコリ現はれるカヤトがとても嬉しく寢ころんでふかした煙草の味は忘れられない。人影の無い峠でとつおいつ思案の末、フルコンバへ下つて了つた。小舍では水源池測量の三人に世話になつた。

六、一〇　晴　フルコンバ（七、三〇）——峠（八、〇〇）——大菩薩嶺（八、四五——一〇、〇〇）——長兵衞小舍下鑛泉（一一、〇〇——一二、〇〇）——嵯峨鹽鑛泉（二、〇〇——三、二〇）——初鹿野（五、〇〇）

「牛ノ寢」か、日向澤を氷川へ下る筈だつた豫定を變更して、日川沿ひの道を南へ下つて初鹿野へ出た。

三ツ峠岩登練習

吉澤一郎（先輩）、柿原謙一、望月達夫、小林重吉、鷲崎雄四郎、榎本直司、佐々木誠、岩崎利一、大塚武、齋藤明智、秦良平、內田素彦

六、二三　曇　小沼（三、三〇）——達磨石の茶屋（五、〇〇——六、〇〇）——岩場（七、三〇）——岩登練習——頂上（九、三〇）——茶屋（九、四〇——一二、〇〇）——白糸の瀧（一、四〇）

——古屋（二、二〇）——小沼（二、四〇）

梅雨期に入つた天候は終日曇つて居たが、時々薄日がさして、カン〳〵てらされるよりよかつた。始めての人達が多かつたので岩登の練習は相當收穫があつたと思ふ。一般的なルートでテラス迄登りそれからは右にまいて例の細いチムニーをぬけて頂上に行つた。此のチムニーの少し右はもつと簡單である。一般のルートより岩壁に向つて右方及び、チムニーの上方にては、同じく左方により困難なルートが求められて練習にはいゝ。歸へりは尾根を南行し途中より東に降りて白糸の瀧を樹間にかいま見つつ古屋に下つた。（望月）

大岳山

七、七　曇　御嶽（一〇、〇〇）——大岳山（一、〇〇）——鋸岳鞍部——神戸岩（三、三〇）——本宿（五、〇〇）——五日市

林俊介

富士山

七、二八　晴　新宿——吉田——八合目小舍

七、二九　晴　八合目——頂上——須走口——御殿場

毛塚由太郎

仙元峠、川乘山

八、一六　雨　氷川（八、五〇）——倉澤（一一、〇〇）——一杯水造林小舍（一、二〇）——仙元峠——蕎麥粒山（四、〇〇）——川乘山（六、二〇）——棚澤（九、二〇）

一日中絶え間無しの豪雨。あの立派な自動車道さへ落盤の危險に瀕した位。小舍からの道は峠の下を巻いてゐる事を知らぬと、一寸迷ふ。

八、一七　曇　棚澤——御嶽——東京

始めて奥多摩に泊る。じつと落着いて見れば、多摩川の沿岸にも美しい所が多いことを感ずる。

岩崎利一、他一名

富士山

八、二四　晴　新宿——吉田——七合目小舍

八、二五　暴風雨　七合目——頂上——須走口——御殿場

内田素彦、他一名

秩父方面

昭和九年（一九三四）

雲取山より三峰へ

七、二〇　晴　氷川（八、五〇）——七ツ石山（五、〇〇）——甚助小舍（六、二〇）

晴れてはゐたが、全く霧の旅となつてしまつた。

七、二一　晴　甚助小舍（六、〇〇）——雲取小舍（七、三〇）——雲取山頂（七、五四）——武州雲取小舍（九、一〇）——白岩小舍（一〇、五〇）——三峰（二、三〇）——大輪（四、二八）——歸

岩崎利一、他一名

京

霧は晴れて雨神山、和名倉山等の山々が美しかつた。

森川眞三郎

奥秩父山小舍生活

八、五　晴　鹽山（四、一二）——廣瀬（一〇、三〇）手塚旅館
八、六　晴　廣瀬（七、〇〇）——ナメラ澤出合（一、〇〇）——雁坂峠（二、〇〇）

荷は重いし、暑つかつたし、急ぐ旅でもないので道草を食つて行く。峠上の假小舍に野營と洒落る。

八、七　晴後曇　野營地（七、三〇）——鈎橋小舍（一二、〇〇）

小舍は相當立派で番人の居ない秩父の小舍の中では、最上の部類に屬するものだ。午後は小舍内の整理。

八、八　曇

午後からブドウ澤附近の樣子を偵察方々岩魚釣に出たが、さつぱりかゝらない。此の邊の澤は何處でも歩けるらしい。金山澤からはワナグラ山（白石山）へ登れそうである。暗い谷間に明るい焚火が何時迄も〳〵輝いて淡い聯想が浮んでは消えて行つた。話し相手のないわびしさも、久方振りにたつた一人になれた嬉しさを消す程ではない。大島さんも云つて居る。「獨りで山を歩く者にとつて焚火は最も無口で而も陽氣な伴侶である。心の淋しい時には火を燃せ、其の陽氣な顏を見つめよ。」と。

八、九　曇夕立　小舍（九、〇〇）——金山澤出合（一〇、〇〇）——一、七〇〇米附近（二、〇〇）——三、〇〇）——小舍（五、〇〇）

金山澤は案外惡く通過困難の場所は立木の多い尾根へそれたりした。此の邊は全くの原始林で鉈目一ツ發見出來ない。夕立が來たので小舍へもどる。

八、一〇　曇　小舍（九、〇〇）——古禮澤——古澤山（〇、三〇）——一、〇〇）——雁峠（二、〇〇）——小舍（四、〇〇）

古禮澤はひどいブツシュで非常に骨が折れた。曇で風が涼しかつたから樂であつたが、カン〳〵照らされたらたまつたものではない。此邊は演習林の連中が入つた跡が多少有るので氣は樂だ。間違ひなく古禮の肩へ出られる。だがボロ〳〵な岩には閉口した。

八、一一　曇後晴　小舍（六、三〇）——豆燒澤出合（八、〇〇）——高平（八、四〇）——川又（一〇、〇〇）——一二、〇〇）——鈎橋小舍

副食物と菓子を仕入れに、久し振りで村に出た。長閉な高平の印象、炭燒の煙は幾條も〳〵眞直に上つて薄霞の空に何時の間にか消えて行く。女性的なふくよかな曲線を描いた秩父特有の山波が左から右から前から後から迫つて來る。

八、一二　晴　小舍（八、〇〇）——水晶谷（一〇、〇〇）——雁坂峠（一二、〇〇）——〇、三〇）——西破風小舍（三、〇〇）——木賊山（四、三〇）——甲武信小舍（五、〇〇）

今年から甲武信小舎に番人が入つたと云ふ事を聞くし、甲武信三寶、十文字峠を貫ねる國境線に新道が出來たと云ふので出掛る。秩父も此の二、三年また開けた。そして何時かは川端下あたりの密林も伐り取られ白樺は皆な裸になる事だらう。

八、一三　晴夕立　甲武信小舎(六、〇〇)——甲武信岳(六、二〇〇)——小舎——西破風小舎(七、三〇)——雁坂峠(一〇、三〇)——雁峠(一二、〇〇——一、〇〇)——釣橋小舎(三、〇〇)

甲武信からの眺望は秩父でも有數である。十文字への新道は防火線程の廣さでズーツと三寶山へ續いて居る。

破風小舎は水が遠い。

八、一四　晴夕立　薪作りと洗濯に午前中を、岩魚釣に午後を過す。

八、一五　晴夕立　午後から瀧澤へ這入つたが手強い。無理に行けば行けさうだが、氣乘りがしないので止めた。

八、一六　曇　小舎(七、〇〇)——槇ノ澤——仙波のタル(一〇〇)——ワナグラ山(一一、三〇——一二、〇〇)——釣橋小舎(三、三〇)

槇ノ澤も相當荒れ、荒凉として神秘の影を宿して居る。仙波のタルからは更に惣小屋谷へ道が入つて居る。惣小屋もこの釣橋小屋と共に秩父で代表的の澤の小屋である。岩魚釣りには最良い。ワナグラは平凡。唯雲取と甲神山の眺望が眞新しい氣分を與へる。

八、一七　晴　澤には涼風が立つて秋の訪れがほのめいてる。凝つと窓に倚つて流れの音を聞いてゐると何時までも此處に埋れて居たい樣な氣がする。それが夕方になると猛烈な歸心に驅られ始めた。

八、一八　晴　小舎(八、〇〇)——笠取小舎(一一、〇〇)——雁峠(一二、〇〇——一、〇〇)——釣橋小舎(三、〇〇)

神社(二、〇〇)——釣橋小舎(四、〇〇)

涼風立つて高原の秋を思はせる。笠取小舎は相當損んでゐる。水は林道の到る所にある。

八、一九　曇　小舎(六、〇〇)——雁峠(八、〇〇)——將監峠(一〇、〇〇)——大洞タル小舎(一二、〇〇——二、〇〇)——雲取小舎(四、〇〇——四、三〇)——雲取山(五、〇〇)——武州雲取小舎(五、二〇)

武州小舎の番人が冬も居て、食料と薪は充分用意しておくとの事。雪は餘り良く無いだらうが、スキーが可能だと思ふ。

八、二〇　晴　小舎(五、三〇)——頂上(六、〇〇——七、〇〇)——鷹巢山(九、三〇)——氷川(一二、〇〇——二、四〇)——

歸京

雲取山より將監峠へ

八、二九　晴　氷川(九、〇〇)——七ッ石山(五、〇〇)——甚助小

岩崎利一、他一名

舍(六、二〇)

八、三〇　晴　小舍(七、一〇)——雲取小舍(八、〇〇)——雲取山頂往復、發(九、三〇)——大洞山(一二、二〇)——大ダル小舍(一、二〇)——將監小舍(二、四五)

八、三一　曇　小舍(七、〇〇)——一ノ瀨(八、三〇)——柳澤峠——(一一、〇〇)——雲峰寺(一、一〇)——鹽山——歸京

森川眞三郎

雲取山より唐松谷へ

九、二二　晴　氷川(一〇、一〇)——六ッ石(一二、二〇)——雲取山(六、〇〇)——六、三〇)——武州雲取小舍(七、〇〇)

雲取の景色はいつもながら良い。遠く甲武信の邊りが眞赤に燃えて、雁坂、將監から大洞へかけての國境線が浮き上つて見える。

九、二三　曇　小舍(五、三〇)——雲取(六、〇〇——六、三〇)——小雲取(七、二〇)——唐松谷を下る——日原川出合(一〇、三〇)——日原(一二、〇——一二、三〇)——氷川(二、〇〇)

唐松谷は陰惨である。踏跡がかすかに殘つて居る。日原の山葵取だけが時折訪れるのみである。

釜澤、金峰、信州峠

齋藤正治、林俊介

一〇、一六　雨　國立發(一二、〇〇)

一〇、一七　雨　鹽山(四、二〇)——上荻原——廣瀨(一〇、三〇——一二、〇〇)——二股(一、〇五——一、三五)——麹岩小舍(六、二〇)

舍(四、〇〇)

終日雨に降られる。廣瀨の林道事務所で晝食をする。二股より先は倒木になやまされ、麹岩小舍泊りとなる。

一〇、一八　晴　小舍(八、四五)——廢屋(九、四五)——釜澤小舍(一〇、一〇——一〇、二〇)——兩門ノ瀧(二、〇〇——二、三五)——露營(五、三〇)

先日の暴風の爲山荒れ甚だしく、遂に釜澤で露營。月と星は夜明けまで二人を守つて呉れた。

一〇、一九　晴　露營地(八、三五)——ミヅシノ頭(一一、三〇)——甲武信嶽(一一、五五——一二、〇〇)——ミヅシノ頭(一二、二〇——一二、五五)——富士見ノ頭——龍門ノ頭(二、一五)——東股ノ頭(三、〇〇)——黄蓮尾根ノ鞍部(三、二〇——三、三〇)——國師岳(五、三〇——五、四〇)——岩小舍(六、四五)

鷄冠山の谷に入ることを恐れすぎて、踏跡を失し、甲武信のガレも惡憎霧にかくれて見えず、攀ぢ登つた峯はミヅシの頭であつた。空身で甲武信に往復。甲武信より國師まで相變らず倒木になやまさる。國師の上で日が暮れ、良い道を馳け下つたのが運のつき。梓川の岩小舍につくまで道の違つたことに氣がつかなかつた。甲武信の樹氷と國師の雪は思はぬ美觀であつた。

一〇、二〇　晴　岩小舍(六、三〇)——國師岳(七、三〇——八、〇五)——大弛小舍(九、一〇——一一、一五)——二三四〇M

ノ鞍部（一一、五〇）——朝日岳（一二、三〇）——金峯山（一、三五）——二、二五）——大日岩（三、四〇——三、五五）——大日小舎（四、二〇——四、三〇）——富士見平（五、〇五——五、一五）——松平牧場（六、一〇）——黒森（六、五〇）

岩小舎は冷くて眠れず。國師の上の展望は美しかつた。大弛で朝食をする。朝日附近は倒木が多い。富士見平で日は暮れて、松平牧場を訪ねたが既に人無く、止むなく月の光の中を黒森まであゆむ。

一〇、二一　黒森（九、三〇）——信州峠（一〇、四五——一一、〇〇）——原牧場事務所（一一、三五——一二、〇〇）——御所平（一、四〇）——（自動車）——海ノ口（二、一〇）——小海——（二、五七）——小諸（四、一二）——上野（九、一五）

折から中秋の十三夜、宿で蕎麥とお團子を御馳走して呉れた。中央線へ出ず、信州峠を越えて千曲川へ向ふ。一年前にあつた原牧場の白樺も今日は既に無く炭燒の煙のみたゞよふ。甲信線の開通も間近かである。千曲の谷は美しい。心ゆくまで紅葉に酔つた五日間の旅である。（林）

石塔尾根

一〇、一九　曇時々晴　鹽山（四、二〇）——廣瀬——二俣（二、〇〇）——西澤七ツ釜ノ少シ下手（一〇、〇〇）——尾根へ出ル（一一、一五）——二八六、四米突ノ手前ノ峯（二、三〇）——二俣（四、三〇——六、〇〇）——鹽山（一一、五〇）

鷹野雄一

十九日試驗後の休暇を利用して秩父の紅葉を見んものと笛吹川を溯る。翌朝、二俣から西澤に入つて此の溯行を企てたが、二時間半も行く頃左岸を搦んで降り口がわからず、簡單に諦めて尾根へ出る。西澤、東澤の紅葉を見下す此の尾根の漫歩は素晴しい。廿日の夜は、二俣へ泊る積りが折りからの月明に誘はれて思はず鹽山迄で歩いて仕舞つた。

七ツ石山、雲取山

一〇、二〇　晴後曇　氷川（九、〇〇）——鴨澤——七ツ石小屋（四、四〇）

一〇、二一　晴　小屋（五、四五）——七ツ石——雲取山（七、三五）——白岩山（一〇、二〇）——地藏峠——三峰神社（二、二〇）——上野

廿日、小屋に着いた頃は霧が深く十三夜のお月さんも眺められぬかと案じたが、深夜には月光が爐ばたにさし込んでゐた。廿一日黎明に見た富士と紅葉と白樺の對照は美しかつた。

原　鐵三郎、岩崎利一

金峰山

一〇、二〇　晴　新宿發（夜行）
一〇、二一　晴　甲府――天神森（四、三〇）――御嶽昇仙峽（六、四〇）――猫坂峠（八、四〇）――黑平（一二、三〇）――炭燒小舍（三、三〇）
一〇、二二　晴　炭燒小舍（七、三〇）――御室（九、〇〇）――金峰山頂（一、五〇――二、四五）――大日小舍（五、一五）――金山（九、三〇）――增富（一二、一〇）
一〇、二三　曇　增富――歸京

十文字越え

柿原謙一、岩崎利一、森川眞三郎

一一、二二　晴　上野發（一一、五〇）夜行
一一、二三　晴　海の口（七、三〇）――御所平（一〇、〇〇）――大深山（一一、〇〇）――自動車――梓山（一二、〇〇――一二、四〇）――十文字小舍（五、〇〇）
一一、二四　晴後曇　小舍（八、四〇）――三里の觀音（一一、〇〇）――ノゾキ岩（一二、〇〇）――栃本（二、五〇――三、〇〇）――落合（五、〇〇――三峯口
海の口から御所平までの間の八ヶ嶽の新雪は素晴しかつた梓山まで一時間トラックに乘つて走つたのは愉快だつた。
柿原だけ栃本に殘る。
一一、二五　晴　栃本――二瀨――三峯神社――大輪――三峯口
雲取宜敷く相見え申候。

昭和十年（一九三五）

武甲山

岩崎利一

一一、三　晴　池袋（七、〇〇）――飯能――（自動車）――名郷（九、二〇）――妻坂峠（一一、一〇――一一、四〇）――武甲山（一一、二〇）――妻坂峠――名郷

白岩、雲取山

柿原謙一　他二名

一一、一八　曇後晴　上野（四、一五）――三峯口驛――大輪（八、一〇）――三峰神社社務所（一一、〇〇）
淸淨の瀧も氷りて音なく、明き月の中、神さびし檜は堅く眠る。秩父町の灯は山峽に浮く不知火の如く、雪をかむる妙法ケ嶽は月明に靑い。社務所の廣瀨氏は親切な人――神酒もて迎えて呉れた。
一一、一九　曇　社務所（八、〇〇）――お經平（一〇、三〇――一一、三〇）――白岩小舍（一、〇〇――二、二〇）――武州雲取小舍（五、一五）
平岩より前白岩にかゝる頃、險惡な空は遂に吹雪き出した。雲取、將監、和名倉全く見えず、樅、栂の森に逆捲く雪と、澤を吹荒ぶ物凄い風の音。ともすれば鈍り勝なる心を勵まし、寢り床、武州雲取小舍に入る。深夜三時に至り仙人が悄然と戸を敲いた。下山してゐた彼は私達の登りしを聞き、暖房の世話せんとして夜

九時に三峯を發したと云ふ。頑迷固牢の彼に私は、此の時、始めて人間味あるを知つた。

一、二〇　快晴　小舍(八、五〇)——雲取三角點(七、四〇——八、三〇)——小舍(八、五〇)——白岩山——三峰神社(一、四〇)

昨日の荒天に比し、今日は又秋晴れの如く美し。奥秩父主峯の彼方に南、八ツ、北が浮ぶ。上越國境の山々又一望の中。淺間が煙を引く。雨神好し。

附記　三日間のさゝやかな經驗乍ら、秩父の冬は輪カンが最も好く、アイゼンは四本にて充分であつた事を附記します。

大塚武

三峰より雲取山

六、一　快晴　上野(五、一五)═三峰口(八、三五)═大輪(九、〇五)——三峰神社(一〇、四五——一一、二〇)——地藏峠(一、〇〇)——前白岩(二、五五)——白岩小舍(三、一〇——三、二五)——武州雲取小舍(五、〇五)

三峰神社への道を初夏の暑さにあへぎ〳〵登る。昨夜の睡眠不足がたゝつて地藏峠から上下の烈しい尾根道が非常に苦しい。然し展望は絶佳、前面の和名倉山をとりまいて奥秩父の連峰は一片の雲も止めず全容を綠の衣に託して山を行く者の眼を樂しませてくれる。既に雪の無い尾根道は白樺の根本を埋て高山植物が可憐な姿を表して居た。武州雲取小舍は風呂もわくし、燃料も豊富、三食附一泊九十錢は驚く程安い。

六、二　晴　武州雲取小舍(六、〇〇)——雲取山頂——(六、一〇——六、三〇)——七ツ石山(七、二五——七、五〇)——六ツ石山(一一、〇〇——一一、五〇)——巢山腹(九、三〇)——六ツ石山(一一、〇〇——一一、五〇)——氷川(一、一五)

朝燒がして一寸俄雨が來る。雲取山頂の眺めは素晴しい。南アルプス、富士、上越の山々が山頂を殘雪に染めて春霞に幾分不鮮明ではあるがそれでも期待に背かず大觀を横へて居る。それから は防火線のドライブ、ウエイの様な處を七ツ石、鷹ノ巢、六ツ石を越へて一路氷川へ。

柿原謙一、岩崎利一

破風、甲武信嶽

六、一　晴　鹽山驛(四、一〇)═番屋(四、三五)——柳澤峠(六、三〇——七、〇〇)——落合——犬切峠(九、四〇)——將監峠(一、〇〇——一、三〇)——笠取小舍(五、三〇)

六、二　晴　小舍(六、三〇)——雁坂峠(一〇、〇〇——一二、〇〇)——西破風(二、一〇)——甲武信小舍(四、二〇)

六、三　晴後曇　小舍(五、三〇)——甲武信嶽(六、〇〇——七、〇〇)——眞ノ澤——柳小舍(一〇、三〇)——栃本(四、〇〇——四、三〇)——大輪(七、三〇)═三峯口驛═秩父驛

鹽山驛に下車すれば、町は未だ眠つてゐる。タクシーを敲き起

して番屋迄。

南はモルゲン、ロート大菩薩を訪れる人々と別れ、柳澤峠に近づけば、富士は崇き姿もて、若葉の上に聳え、空に流れる一面の藍は、汗ばむ身に初夏を教える。三瀬から將監へ牛王院平の草原に身を横たへれば、茲は未だ春、わか草萠えんとして未だに萠えず。熊杉の葉を飾る笠取の小舎に入る。

傾斜なす瀧川谷に臨む雁峠の上は、牧歌的な春の香に澱み勝なる快い氣持が湧く。風は無く綿雲浮び、遙か遙か天地の合さるあたり、白々と山脈をひく南連峰。雁坂峠に二時間の憩ひを持つて急峻な破風を靜かに登る。霧起る木賊の絶巓、今宵の安住を求めて甲武信小舎へ。

石塔尾根に白雲浮ぶ。對峙する國師、金峯。深き谷なす東澤、信州澤。眞ノ澤には密雲覆つて兩神獨り雲表に浮ぶ——山々はいま明けんとす、こゝ甲武信ケ嶽の初夏の朝。眞ノ澤に下れば、倒木多きも大した困難なく、案じた雪も早や溶けて、石楠花と鶯に微笑を擴げて心地よき山行の日が終る。足は栃本へと柳小舎を離れる。

（柿原）

雁坂峠より和名倉山へ

八、二六　晴後小雨　秩父驛（六、二〇）═三峰口驛（六、四五）═落合（七、三〇）——栃本（一〇、一〇）——一〇、四五）—

小林重吉、柿原謙一

—瀧川谷道ト雁坂舊道分岐點ニテ晝飯（一二、〇〇—一二、三五）——突出峠（三、二〇）——孫四郎峠（五、〇〇）——雁坂峠（五、四〇）——雁坂小舍（五、四五）

八、二七　暴風氣味小雨　小舍（九、一五）——笠取小舍——山ノ神（一、四〇）——武州將監小舍（二、〇〇）

八、二八　風强ク霧雨　小舍（七、二〇）——奥仙波山（八、〇〇）—和名倉山（九、二〇——九、三〇）——一五五五米三角點（一〇、三〇）——大洞谷トノ出合ニテ晝飯（一一、四五——一二、一五）——三峰神社（二、〇〇——五、〇〇）——大輪（六、二〇）═三峰口驛（七、〇七）═歸京

期待して登つたのに、丁度颱風の奴が本州を通過せんとしてゐた時だつたので、連日雨に降られて閉口した。殊に秩父に初めて足を踏み入れた小林には氣の毒だつた。然し雁坂峠から雁峠への徑は、時々打開く御花畑が、攻勢的な、そして雨を含む風にも負けず、微笑み交す美しい植物を飾つて吳れてゐるので、霧の旅を懷しい想出あるものとしたのである。將監から和名倉山への徑は平坦な樂な登りである。そして針葉樹とカヤトの織りなす美しい透明な感じを與えるペイサージュ。ただ大洞谷への降り徑は、途中より熊笹を切開いた直後故、轉ばぬ樣に心懸けねばならない。

此の二泊の旅、何れも今年夏建てられたばかりの新しい小舍泊りで、氣分が好かつた。風雨のためコースを變更したのは殘念だ

つたが、秋迄お預けすることにして歸途三峰神社々務所でノビる。夕方下山、小林直ちに歸京、柿原秩父にて下車す。（柿原）

八ケ岳・美ケ原方面

昭和九年（一九三四）

美ケ原行

西野　博、他六名

七、一七　雨　新宿發（一一、四五）夜行
七、一八　雨　下諏訪（六、〇〇）——扉峠口（一〇、〇〇）——茶臼山（一二、三〇）——扉峠（一、〇〇）——濃霧にて道を失ふ——營林署小舍（七、〇〇）
扉峠附近にて濃霧の爲めに道を迷ひ、濡れねづみになつて、やつと小舍に落付く。この時しみじみ小舍の有難さを覺ゆ。
七、一九　快晴　營林署小舍（一〇、〇〇）——扉峠口（一二、三〇）——下諏訪（二、〇〇）

昭和十年（一九三五）

八ケ岳

西野　博、他六名

七、二〇　曇後晴　小淵澤——清里村（八、三〇）——美ケ森（天幕）
七、二一　曇後晴　滯在
七、二二　曇　滯在
七、二三　晴　美ケ森（八、一〇）——赤岳八合目（四、一五）——赤岳頂上（五、五〇）——赤岳頂上小舍（六、三〇）
七、二四　晴　頂上小舍（七、〇〇）——横岳（七、二〇）——硫黄岳（八、三〇）——夏澤峠（九、三〇）——稻子牧場（二、三〇）——本澤温泉（一〇、〇〇）——松原湖（四、〇〇）
七、二五　晴　松原湖畔へ天幕を張る
七、二六　晴　松原湖（二、〇〇）——稻子澁ノ湯（二、三〇）
同行者中に事故ありたる爲、稻子にて尙時間の餘裕ありたれど一泊す。
七、二七　晴　稻子澁ノ湯（五、三〇）——笹沼（八、〇〇）——白駒池（八、一〇）——澁の湯（一二、一〇）——茅野（三、〇〇）——上諏訪（七、三〇）
稻子より天狗岳を越へんとせしも道を間違へ白駒池へ出て了つた。一行と別れて獨り乘鞍へと向へど時間の都合上、上諏訪へ泊る。

八ケ岳

大野惠司

八、四　晴　小諸——松原湖
八、五　晴　松原湖（一〇、〇〇）——稻子岳澁鑛泉——本澤温泉（四、三〇）
八、六　晴　本澤温泉滯在。
八、七　晴　温泉（五、三〇）——夏澤峠——硫黄岳——横岳——

赤岳（一一、〇〇）——本澤温泉——松原湖（七、〇〇）

松原湖から稲子部落を通つて往には舊道を辿つて行つた。此道は幽邃で誠に深山と云ふ感じに富んでゐる。本澤から硫黄岳の岩壁へ直接取ついて登る道があるとの事であつたが、今は餘り登る人は無いらしい。歸路は本澤から松原迄新道を下つたが、途中の八ツ高原の風色はまたなく美しい。私にとつて云はゞ女性的とも云ふ可き此の高原の景觀が最も印象的であつた。

北アルプス

昭和九年（一九三四）

針ノ木峠、立山、劔行

中島　孚、宮川雄二郎、小橋謙三

七、五　快晴　大町——（自動車）——大出（一〇、四五）——瀧ノ小舍（一二、四五）——一、一〇）——白澤出合（二、〇〇——二、一〇）——大澤小舍（六、三〇）

例に依つて大町の對山館で悠々と準備す。初日の割に扇澤までの一同元氣。扇澤より小橋脚の痙攣に弱り、大澤小舍に薄暮着。針ノ木雪渓は小舍の下方數町の後立山からの澤邊りまで續いてゐた。

七、六　快晴　大澤小舍（七、三〇）——針ノ木峠（一一、五〇）——一、三〇）——南澤出合（五、二〇）——天幕地（七、〇〇）

小橋前日の脚の痙攣に前途を斷念せんとしたが、快晴と他の二名の激勵に出發。針ノ木峠からの眺望絶品。中島針ノ木岳途中迄登る。針ノ木谷は雪どけの水で增水し橋は殆どなし。數ケ所ガレたる所あり。平ノ小舍手前にて日暗くなりかけたので幕營す。

七、七　快晴　天幕地——平ノ小舍（一一、〇〇——一、三〇）——日電小舍（三、一〇——三、三〇）——御前谷（四、二〇）——天幕地（四、三〇）

平の渡しの橋は雪の爲落ちて無し。籠の渡しに大分暇どつた。平ノ小舍で晝食を採りながら內藏ノ助澤の樣子を聞いたら、雪が多いから行けるだらうが、未だ今年は誰も這入つた者が無いとの事。御前谷の出合から少し行つた所の河原に、とてつも無い十坪許りの砂地を發見。天幕を其處にはつて岩魚を釣る。この釣杆は遠く東京から宮川の持參せるもの。こんな愉快なキャンプは之までやつた事がない。

七、八　快晴　天幕地（八、〇〇）——丸山谷（八、三〇）——內藏ノ助澤出合（九、三〇——一二、三〇）——丸山谷——日電小舍——平ノ小舍（五、一〇）

平ノ小舍の親爺に聞いては來たんだが、同じ樣な澤が澤山落ち込んで居るので、決定を見るまで相當暇取り中島は下流にそれらしきもありと偵察の結果推定したが、丁度日電の人夫が來て初めて確定。登りに餘り左をからみ過ぎた故もあつて、難場に出合し

縦行に危険を感じて退く事にした。張切つて居た中島もパーティの爲に同意。

七、九　曇後大雨　平（一〇、〇〇）――刈安峠（一一、一〇）――五色ケ原（一〇、〇〇）――五色小舎（二、三五）

早朝雷雨あり。起きてみると霧小便の天氣に出發を見合せたが晴れ相なので十時頃兎に角出發。立山に向ふ。霧は再びまいて來て五色ケ原で道を失ひ、大鷲岳の近くまでさまよつた。小舎に入つて十分もせぬに大雨到る。

七、一〇　雨　滞在

七、一一　曇　滞在

終日、晝となく夜となく大雨、それに風も相當なもの。一同大いにくさる。

七、一三　曇後晴　小舎（七、三〇）――獅子ケ岳（九、〇〇）――淨土（一一、〇〇）――室堂（一二、〇〇）――劍澤三田平（三、三〇）

今日は雨でも立山温泉まで降り様とて朝霧の五色ケ原發足。佐良峠に至る頃、霧次第にはれて何とも云へずスガ〳〵しい氣持。一同氣を良くしてソレと許り立山、劍へ向ふ。室堂に着き晝食すその時、小橋脚のマメを氣にして、劍行を斷念する事にしたので宮川、中島は天幕、小舎に至り劍澤生活ザイル等を室堂にのこし雷鳥澤より三田平の七、一四　快晴　班に合す。

小橋この日彌陀ケ原、藤橋經由富山に下山。過日の豪雨の爲列車不通となり宇奈月に泊る。（中島）

後立山縦走

小谷部全助、塚本駿、佐々木誠、他三名（但し白馬まで）

七、六　晴　大町――二俣（九、三〇）――猿倉（一一、〇〇）――村營小舎（五、二〇）――白馬館（六、〇〇）

七、七　晴　白馬頂上往復　小舎發（八、三〇）――鑓岳（一〇、二〇）――一一、〇〇）――唐松岳小舎（三、一〇）

七、八　晴　小舎發（六、四〇）――白岳（八、〇五）――五龍岳（九、〇〇）――八峰キレット（一一、五〇）――鹿島槍南峯（二、二〇）――冷池小舎（四、一〇）

七、九　曇後雨　小舎發（八、〇〇）――爺ケ岳（九、〇〇）――種池（九、三〇）――岩小舎澤岳（一〇、三〇）――鳴澤岳（一二、〇〇）――スバリ南峯（三、〇〇）――針ノ木岳（三、三〇）――針ノ木小舎（四、三〇――五、四〇）――平ノ小舎（九、〇〇）

七、一〇、一一　豪雨　滞在

七、一二　雨　五色ケ原へ、濃霧と雨の爲、小舎の位置判らず、再び平へ歸へる。

七、一三　曇　平發（八、五〇）――刈安峠（九、五〇――一〇、〇〇）――ザラ峠（一一、一五）――獅子岳（一二、三五）――龍王山（一、四〇――二、〇〇）――一ノ越（二、一五）――大汝山（二、〇〇）――別山神社（四、三〇）――劍澤小舎（五、〇

○）

以下三名共、劔澤生活のパーティへ加はる。

冷小舍出發の日から例の豪雨が始まり針ノ木谷の降りは相當辛かつた。黑部の渡りは橋が壞れて又昔の籠渡しである。眞暗闇でのこの藝當は實に冷々した。（小）

劔　澤　行

望月達夫、小林重吉、鷲崎雄四郎

七、七　晴　上野發（八、五〇）夜行

七、八　晴　富山（六、三九）——千垣（九、一〇——九、四〇）——藤橋（一二、〇〇——一、一〇）——稱名小舍（五、四五）

山の樣な荷物を整理してゐたので千垣、藤橋間のエンヂンに間に合はず、暑い中を重い荷に苦しめられて歩いたので、豫定した弘法までは行けず、稱名でノビる。

七、九　曇驟雨後風雨　稱名（六、一五）——弘法（八、一〇——八、三〇）——追分（九、〇〇——九、三〇）——鏡石小舍（一一、三〇——一、三〇）——雷鳥澤下（三、四〇）——別山乘越小舍（五、一〇）

稱名より、弘法に登る道は、昔と變つてすつかり良くなつた。今年は殘雪が多く、追分を過ぎる頃から、處々に、殘り、鏡石からは殆どベツタリと云つてもいゝ位。鏡石で天氣險惡な爲前進を餘ツ程あきらめ樣としたが、霧の中を無理して行く。雷鳥澤にかゝる頃から大粒の雨で、小舍に入つた時はヘソまでぬれてゐた。

七、一〇、一一、一二　風雨强し、乘越小舍に滯在。

三日間も降られて大いにくさる。怠屈まぎれに、小舍に居た間左衛門と話したりする。

七、一三　晴はじめる、ガス　乘越小舍（八、〇〇）——劔澤小舍（八、三〇）

やつと晴れて來たので午前中荷物をまとめて劔澤を滑り下りる以下劔澤生活班に合す。（望）

池谷溯行

（惡天候ニ由リ中止）　堀岡　清、鷹野雄一

七、八　晴　上市（六、四五——一〇、〇〇）——（自動車）——極樂寺——折戸（一二、〇〇——一、〇〇）——伊折（二、三〇——三、四五）——小又川發電所（五、三〇）

七、九　雨　滯在

七、一〇　風雨　滯在

七、一一　風雨　滯在

七、一二　風雨　滯在

七、一三　風雨　滯在

七、一四　晴後曇　小又川（九、五〇）——小又川溯行大日越ヘヲ企テタガ中止——伊折（一、一〇）——折戸（二、一五——二、四〇）——極樂寺（四、〇〇）——（自動車）——上市——千垣（六、一〇）

七、一五　曇　千垣（七、〇〇）——藤橋——弘法——鏡石（六、〇

〇）

七、一六　雨　鏡石（七、三〇）——別山乗越——三田平商大天幕

九日よりの雨は數十年來の豪雨とやらで、各河川の増水甚だしく翌十日には早くも、立山縦走を終へ、これ吾々はおめ〳〵數日間のバンバ島滞在を餘儀なくされて仕舞つた。十四日頃になつて漸く天氣は回復の徴を見せだしたが、如何にするも、増水せる立山川と、小又川の橋は共に激流にさらはれて居た小谷部、塚本、佐々木の三名急ぐ吾々としては、罷むを得ず計畫を抛棄し、幸ひ比較的早く架せられた小又川の假橋を渡り、彌陀ケ原經由で劍澤に入る。

（鷹野）

劍澤生活

七、一三　晴はじめる、ガス　劍岳へ、望月、小林、鷲崎、劍澤小舍（九、三〇）——劍岳頂上（一一、五〇——一二、三〇）——平藏を下る——平藏の出合（一、三〇——一、四〇）——劍澤小舍（二、三〇）

望月達夫、小林重吉、鷲崎雄四郎、中島孚、宮川雄二郎、小谷部全助、塚本駿、佐々木誠、堀岡清、鷹野雄一、（以上到着順）

午前八時半、別山乗越に降り込められてた、望月、小林、鷲崎の三名劍澤に來る。テントの來るまで仕方なく小舍に入る事にした。十三日の金曜を、氣にする者ありて、普通のルートで劍へ、と自重する。午後三時半頃雨の爲、內藏助行を斷念した中島、宮川の兩名五色ケ原より來る。午後五時頃、後立山縦走を終へ、これも平ノ小舍で降り込められて居た小谷部、塚本、佐々木の三名一氣にガン張つて來り、急に賑かになる。

七、一四　晴　八峰行、望月、小谷部、小林、鷲崎

小舍發（七、〇〇）——長次郎谷出谷（七、三〇）——六峰——七峰——八峰間のコル（九、〇〇——九、三〇）——六峰——七峰——八峰下の雪渓（長次郎谷）（二、三〇——二、五〇）——長次郎谷出合（四、〇〇）——小舍（五、〇〇）

八峰も以前よりは踏跡が、より明瞭になつて樂だ。從て普通のルートでは全然面白味はない。歸路は長次郎の熊岩から右へ入つた雪渓を下つだのだが、既にクレヴアスがあいてゐた。

劍岳へ、（普通のルートで）中島、宮川、佐々木

塚本は小舍にのび、一寸鶴ケ御前の方へ遊びに行く。宮川が下山するので、中島、佐々木は室堂まで送つて行く。ついでに、來る時、室堂に置いて來たテント（三人用）を持參して歸へる。早速張つて中島、望月、鷲崎入幕。他は小舍泊り。

七、一五　曇時々晴　源次郎尾根へ、小谷部、中島

テント發（九、三〇）——長次郎出合（九、五〇）——長次郎谷に入る——源次郎尾根第二峰下（一一、〇〇）——劍岳頂上（一、三〇——二、五〇）——軍隊劍——三田平テント（五、〇〇）

望月、塚本、小林、鷲崎、佐々木のびる。夕刻物貨來り直ちにテント、二ツ（六人用、五人用）を張り、今までのを物置とする。

七、一六　雨　前夜より降り始めた雨は一同を憂鬱にする。午後四時半頃、池谷溯行を放棄せる堀岡、鷹野、彌陀ケ原經由にて入幕。

七、一七　晴　八峰行　（A）堀岡、小林、鷹野

（B）小谷部、中島

三田平（七、四〇）——長次郎岩小舎（八、五〇）——第三峰（一〇、四〇）——一一、三〇）——五、六峰のコル（一、二〇——一、三〇）——第六峰（二、一五）——第八峰（二、五〇）——劔頂上（四、三〇——五、〇〇）——劔澤小舎（六、一〇）——テント

岩小舎より右の雪渓を登り、途中から左に草付をまいてフェース登攀。A、Bの二組に分れてアンザイレン。Aは右手雪渓寄りのクラック、Bは第三峰直下のフェースを登り、三峰上にて合流。歸途、小谷部平藏をグリセード。他は尾根より歸幕。

早月尾根の上部、望月、鷲崎、佐々木、塚本、テント發——早月尾根分岐點（一〇、〇〇）——蟹の螯（八、〇〇）——蟹の螯の一ツ西のピーク——（もどる）——劍頂上（一二、三〇）——一、三〇）——平藏のツメ（一、五〇——二、一〇）——平藏谷出合（二、三〇）——テント（三、一〇）

早月尾根も思つたより馬鹿々々しいのでいゝかげんで切り上げて頂上でノビて歸へる。夕刻から又天氣がくづれ出した。

七、一八　雨　皆で小舍へ遊びに行つて、アヅキを食つたりして意屈をしのぐ。

七、一九　雨後止ム　昨日と同じ様な生活。小止みに乘じて、ゾムメルシーをたのしむ。

七、二〇　晴時々曇　テント地（九、三〇）——別山乘越（一〇、〇〇——一〇、三〇）——鏡石（一二、五〇——一、三〇）——弘法（三、〇〇——三、三〇）——稱名（四、三〇）——藤橋（六、三〇）

天候が餘りにも不順なので、それに食糧もそろ〳〵終りに近づいたので、豫定した東大谷も三ノ窓附近もやれず、唯トレイニングのみで九名の者はすご〳〵劔澤をあとにした。

七、二一　薄日　藤橋——千垣——歸京（望）

槍より燕へ

森脇芳之

七、一七　曇　新宿發（一〇、四五）夜行

七、一八　雨後曇　松本（六、二九）——島々（七、一五）——奈川渡前川渡間徒歩點——澤渡（九、二〇）——中湯（一一、〇五）——上高地温泉ホテル（一、二八）

連日の豪雨の爲、松本より上高地までの自動車路は諸處崩壞し澤渡までしか行かず、しかも途中前川渡附近で徒歩連絡をなす。

七、一九　小雨後快晴　上高地滯在。

七、二〇　快晴　上高地（六、五〇）――一ノ俣小舎（一一、〇〇―一一、〇〇）――槍澤小舎――大槍小舎（三、四五）

七、二一　曇雨　大槍小舎滞在

七、二二　曇雨風　大槍小舎（八、一〇）――肩小舎（九、三〇）――大槍小舎（一一、〇五――一一、三〇）――西岳小舎（一、四〇――二、四五）――燕山荘（六、〇〇）――中房温泉（七、二〇）

殺生小舎で、西野、原等に遇ふ。

七、二三　曇時々小雨　中房温泉滞在

七、二四　小雨後曇　温泉（一〇、五〇）――一ノ瀬（一二、四五――三、〇〇）――有明（三、五八）――松本――歸京

燕槍縱走

西野　博、他六名

七、一九　快晴　松本（三、〇〇）――有明（四、〇〇）――有明温泉（六、〇〇）

七、二〇　曇　有明温泉（七、〇〇）――中房――燕山荘（三、〇〇）

七、二一　小雨　燕山荘（八、〇〇）――大天井岳――西岳小舎――殺生小舎（五、〇〇）

七、二二　風雨　殺生小舎（一〇、〇〇）――上高地清水屋（五、〇〇）

七、二三　雨　上高地（七、〇〇）――德本峠（一一、〇〇）――島々――松本（七、〇〇）

燕、槍縱走

原　鐵三郎

七、一九　新宿發（一〇、四五）夜行

七、二〇　晴風强　松本（六、二四）――（バス）――一ノ瀬（九、〇〇）――合戰小舎――燕山荘（四、〇〇）

七、二一　霧雨、强風　燕山荘（八、〇〇）――蛙岩――西岳小舎（一二、三〇――一、三〇）――殺生小舎（四、三〇）

西岳小舎へ向ふ途中、西野君の一行に遇ふ。惡天候なので眺望はきかず、殺生小舎が見えた時はうれしかつた。

七、二二　暴風雨　殺生小舎（一〇、三〇）――一俣――上高地清水屋（四、〇〇）

西野君の一行と一緒に上高地へ下る。上高地は雨に煙つて居たが、よき印象をのこした、

七、二三　曇　清水屋（一一、一五）――鮹止（四、〇〇）――島々（七、〇〇）――有明（七、〇〇――八、一〇）――信濃坂下――中房温泉――合戰小舎――燕山荘（一一、三〇）――西岳小舎（一、四〇――二、四五）――殺生小舎――蛙岩――西岳小舎（一二、三〇）――一ノ瀬（一二、四五――三、〇〇）――有明（三、五八）――松本――歸京

期待した德本峠の穗高も霧の中。峠からの下りは長かつた。

鹿島槍ケ岳

望月達夫、鷹野雄一

一〇、三〇　晴　新宿發（一一、五五）夜行

一〇、三一　晴後曇　大町（九、四〇）――バス――簗場（一〇、三〇――一一、〇〇）――黑澤峠（一二、〇五――一二、三〇）―

―鹿島川出合（一、一〇―一、三〇）―鹿島造林小舎（二、三〇）

黒澤峠から見た鹿島槍の東面は魅惑的だ。東尾根と、アヲ澤の上部とがよく觀察出來る。鹿島槍、爺子岳共に新雪は殆ど見られない。鹿島川邊の樹木は紅葉して長閑な氣持を與へて呉れる。今日は造林小舎泊りときまつたので、秋色を滿喫し乍らノビて行く。

一一、一　曇後雨　造林小舎（一一、〇〇）―冷池ノ小舎（五、〇〇）

天候が思はしくないので兎も角冷池まで行く事にしてゆつくり出發した。二俣から上は長ザクを行かず赤岩尾根（長ザク、中岩間の尾根）の新道を登る。霧の間から時々鹿島槍から東尾根への山稜が見られたが、ソボ〳〵降る雨の中をヒタ登りに登つた。夜に入つて烈風となり雨も多くなつた。

一一、二　霙後晴、烈風　小舎（一二、〇〇）―布引ノ頭（一、〇〇―一、二〇）―南槍（二、〇〇）―布引（二、三〇―三、〇〇）―小舎（三、三〇）

午前中烈風に交つて飛んで居た霙も晝近くやんで、鹿島槍は美しく化粧されてゐた。午後南槍まで往復する。布引の頭附近から上は黒部側よりの烈風に相當なやまされた。

一一、三　晴、烈風　小舎（八、三〇）―二俣（一一、〇〇）―造林小舎（一二、〇〇―二、三〇）―鹿島村―大町（五、四〇）

晴れては居たが、雲行きが良くないし、それに望月は日數に制限があるので東尾根は斷念して下つた。午後空は亦惡くなる。造林小舎では昨夜出發した、小谷部、森脇のパーテイと一緒に行動する事になり望月一人秋たけなはの鹿島の村をブラついて大町までの美しい道を歩いて行つた。（望）

鹿島槍天狗尾根

小谷部全助、森脇芳之、鷹野雄一

一一、二　晴　新宿發（一〇、四五）夜行（小谷部、森脇　出發）

一一、三　快晴後少雨　築場（九、三〇）―黒澤峠（一一、〇〇）―林道（一二、〇〇）―鹿島造林小舎（一、〇〇）

造林小舎で先着の望月、鷹野の兩名と落合ふ。望月は午後歸京し、鷹野は僕等のパーテイに加入した。

一一、四　快晴　小舎（八、一〇）―荒澤出合（九、三〇）―瀧（一〇、四〇）―瀧通過（左岸四〇米をまく）（一一、二〇）―雪渓（一、〇〇―二、〇〇）―二俣（三、三〇）―シユルンド（四、〇〇）―ビヴアーク（五、三〇）

此の時未だ鷹野は東尾根をやる豫定で一人少し下方にビヴアークするが、荒澤をつめる豫定の小谷部、森脇もシユルンドが大きく通過不能なので天狗尾根に行くことに決し翌日から三人又一緒に行動した。

一一、五　快晴　鷹野登り着く（九、三〇）―ビヴアーク發（一

〇、〇〇）——天狗尾根の末端（三、〇〇）ビヴアーク

一一、六　晴後吹雪　ビヴアーク（九、〇〇）——小舍岩（三、〇〇）——第一フエース上（三、三〇）——第二フエース（四、〇〇）——ジヤンクシヨシ（五、一〇）ビヴアーク

最低溫度〇ー∞。

一一、七　終日吹雪　ビヴアーク發（八、〇〇）——北槍（八、四五爲（九、四〇——一二、二〇）——南北のコル（九、三〇）——三高遭難者の舍（三、〇〇——四、〇〇）——西俣スキー小舍（五、三〇）——鹿島部落（八、二〇）

天狗尾根は以上で終つたが、遭難者の爲三人共滯在することゝなつた。

（天狗尾根については紀文を參照せられたし）

鹿島槍遭難三高生引おろし迄の經過概略

一一、六　晴後吹雪（前揭、天狗尾根の記錄參照）

午後三時頃、吾々が天狗尾根の小舍岩に來た時分、遙か左手の東尾根第一岩峰上を行く一人の登山者の姿を見て、互ひにヤツホーをかはしたが、餘程急いでると見えて該登山者はどん〳〵登つて行つて姿をかくしてしまつた。吾々は荒澤の頭でビヴアークしたが、その後凡ど眞暗になつてから、南、北槍のコルの邊りで該登山者の電燈が見え、又ヤツホーをかはす。（該登山者とは勿論三高の內藤況三君）

一一、七　吹雪　吾々は、前進を續け北槍を經て南槍とのコル附近に來た時、妙な所にエツホーを聞く。南槍へ向ふと眞近に聲あり。多分昨日の登山者だと思つて尾根上で待つ。午前九時四十分頃。「何處の學校だ」とか「此の間登つた商大の方でせう」とか色々な事を聞く。中々暇取つてやうやく吹雪中に姿を現はしたのを見ると、彼はピツケルも持たず、濡れたウインドヤツケにぶるぶる震えてゐる仕末。早速殘り僅かな食糧（吾々は此の登攀に豫定より遙かに多い日數を費した爲）を與へ出發せんとしたが、足の重心も定らず、狹い雪稜上をふらふらしてゐる有樣だ。アンザイレンしても無理であつた。吹雪は一層烈しく、時間も既に晝を廻つたので。吾々は兎も角、冷小舍まで行つて食糧を探し、それから救助しなければ、このまゝでは全滅かも知れぬと思ひ、意を決して、ザイルを解き自分のと鷹野のとのシュラフザツクを出して、二重にしてその中に彼を入れ岩角にジツヘルして、三人で其處を立つた。前夜吹雪中のビヴアークに際し吾々三人は、各自の寢袋で、充分の睡眠がとれた。急ぎ冷小舍に來てみたが、食糧は皆無、重いものを小舍にのこし、急ぎ鹿島へと下り、西俣スキー小舍迄一時間、其處から大工を案內させて夜道を鹿島村に至り狩野治喜衛氏方に入る。三高への電報、人夫其他の手配を狩野氏へ依賴した。

一一、八　吹雪　鹿島發（一二、三〇）——造林小舍（一、三〇）——

三、〇〇)——西俣スキー小舎(四、〇〇)　人夫かり集めその他で案外暇取つたさうで隨分遲れて警官及び人夫連到着。

一一、九　吹雪　大町の人夫共は登山困難を訴へて動かぬ。遭難者の事を思つて心ばかりいらだつたが何とも致し方ない。細野重雄氏を始め三高、京大の方達到着。夜は寢具足らず寒くて弱つて居る。

一一、一〇　吹雪　細野氏を始め人夫衆合計十二名程小止みに乘じて出發、商大パーテイの任務は現場案内にある爲、僕だけ殘り森脇、鷹野は黑澤を越えて歸京す。新雪四尺乃至、五尺で意外の困難を伴ひ遲々として進まぬ。その内吹雪も猛烈になり遂に冷小舍を斷念して引返す。スキー小舍には遭難者の兄君が來て居られた。

一一、一一　雪　打續く惡天候に登頂斷念、大町對山館へ一先づ戻る。三高生徒主事及び遭難者の父君が來て居られ且救援のスキー隊も到着して居た。

一一、一二　半晴　有明の大和由松も加はり、スキー隊と共に再び西俣スキー小舍へ。小舍附近積雪二尺餘。

一一、一三　晴後雪　小舍發(五、三〇)——國境尾根(二、二〇)——冷池小舍(二、四〇)

今度は學生は皆スキー、大町の人夫は輪樏をはき登路として同じく長ザクをとる。ブツシュを越すと雪は急に緊り數限りないキックターンを繰返し案外樂に登つて了つた。劍方面は險惡な空模樣で今にも吹雪さうだ。果して冷小舍に這入るか這入らぬ中にやつて來た。附近は驚く程積雪が增加し、小舍の南面は殆ど埋まつて居る。

一一、一四　吹雪　零下一三度　滯在　せめて位置だけでも明かにして置かうと六名程で吹雪中を出發したが猛吹雪に擊退されて戻る。雪まみれになつたついでに小舍附近でスキーを練習する。

一一、一五　零下一八度　吹雪　食料を儉約して滯在。

一一、一六　零下一五度　快晴　小舍發(九、三〇)——南槍(一一、三〇)——發掘作業(一二、一五——二、二〇)——南槍布引(四、〇五)——冷小舍(五、一五)

オレンヂ色の霧もやがて晴れて凄い程白い劍立山の連山が現はれる。眞白な雪に包まれた樹立を縫つて南槍へと進む。普段なら歌でも歌ひ乍ら感激驚喜し合ふ所だが、これは又何と悲壯な行進なのだらう。仰げば遙か目指す死の銀嶺は濃い青空にしきりと雪煙をあげて居る。南槍頂上でアイゼンにはきかへ難場を下る。現場は驚く程雪が溜つて前の時とは餘程趣が變つて居たが、都合よく確保して置いた岩の頭を發見、直ちに無慘な凍死體を發掘、大勢で引あげ、急造のソリで冷小舍へ收容した。その夜は心からの祈禱を濟せ折から上つた食料で充分體を養つて寢る。外は月光で不氣味に明るい。月光下の立山はまるで大理石の彫刻だ。

一一、一七　零下一四度　快晴　大和と二人傳令となり八、〇五

小舍發。雪の狀態絶好で西俣スキー小舍迄たつた一時間半で滑降して了ふ。長ザクは雪の狀態と雪崩に注意すれば登降共鹿島槍への絶好のルートだ。一二、三〇、遺骸と共に本隊到着。直ちに鹿島へ運び村の御堂に安置す。學校の方の親切な御取計らひでその夜は對山館で館を休ませて貰ふ。

一一、一八　快晴　今朝早く遺骸は火葬場に送られ遺族の方達はお骨拾ひに行かれる。時間の都合で慌しく會食を爲し諸氏に別れ大和と二人で大町を發車。淋しい心を窓外の景色に慰めつゝ感慨無量で歸京する。（小谷部記）

穗高

小林重吉、遠藤竹雄、鷲崎雄四郎、
奥原守（案内）

一一、三　晴後雪　松本——島々——（自動車）——上高地——徳澤小舍（三、〇〇）

奥原守と島々驛で一緒に成り、バイヤーで上高地に向つた、五千尺で二時間程のびて樂に牧場に着いた。

一一、四　快晴　徳澤小舍（七、四〇）——横尾谷岩小舍（九、三〇）——池の平（一二、〇〇——一二、二〇）——穗高小舍（四、〇〇）

池ノ平で慶應の方達が九人程降りて來るのに出合ふ。

一一、五　快晴　穗高小舍（八、〇〇）——奥穗頂上（九、〇〇——九、三〇）——前穗頂上（一一、〇〇——一二、〇〇）——奥穗（一二、四五）——小舍（三、三〇）

昨夜寒さの爲二、三時間しか睡れなかつたので皆睡眠不足だ。何しろ奥の炬燵のある部屋は未だ慶應の人達が頑張つてゐるので吾々は上條孫人と一緒の同志社の人達と二階へ寢たため寢袋だけでは可なり寒かつた。然し好天候に惠まれて皆元氣に動いた。奥穗の登りは雪が氷つてゐるのと岩に二、三分の氷が張つてゐたのとに依り稍注意を要したが其他はアイゼンを利かせて樂に行けた前穗から上高地側は涸澤側に比して雪がずつと少なかつた。

一一、六　曇　小舍發（九、〇〇）——北穗飛驒側第四尾根迄——池ノ平（一、〇〇）——横尾出合（二、三〇）——徳澤小舍（三、三〇）

涸澤岳の下をまいて北穗との鞍部に荷物を置いて北穗に向つた所が飛驒側の夏路に附いた雪がカチカチに氷つてゐたゝめアイゼンを置いてきた吾々は豫定以上の時間を喰つてしまひ頂上を目の前に見て殘念ながら引返さゞるを得なかつた。天候が後に惡化してきたので大急ぎで牧場に下つた。

一一、七　雨後雪　牧場（一一、〇〇）——上高地——（自動車）——島々——松本

天氣が良かつたら徳本を越す積りだつたが雨が强かつたので軟新雪の下が氷つてゐるため頗る滑り易く涸澤の上部稍難行す。
横尾谷出合より新雪一、二寸、次第に深く池ノ平附近は約五、六寸の新雪あり。

化した。此の日穂高小舍から降りてきた中畠政太郎の話に依ると穂高では一尺以上の新雪が降つたさうである。（小）

鹿島槍ケ岳東尾根

一二、二二　曇　新宿（一〇、四五）夜行

一二、二三　雨　大町（七、三〇）――鹿島（三、〇〇）

小谷部全助、鷲野雄一

松本へ着いた時、邊りの山に雪が見えぬので驚いたが、大町へ來て見ると、雪どころかどしや降りの雨だ。道がぬかつて、鹿島迄自動車は行かぬとの事なので、罷むなく馬を雇つて荷を運ばせる。

一二、二四　曇　鹿島（七、二〇）――大川澤出合（八、二〇）――幕營地（一二、三〇）

鹿島にも雪は全然ない。今日はポーターとして、鹿島の狩野治喜衛、川上八百吉を雇ひ、幕營地迄荷を上げる。尾根へとつゝいてからも雪少なく、輪螺を用ひたのは餘程上部へ行つてからだつた。天幕は一の澤頭下約百米の地點。積雪二尺餘。

一二、二五　雪　最低　C－8。　天幕滯在

天幕保護の爲め、木の枝や葉で掛小屋を作る。此の小屋は非常に有効だつたと思ふ。此の日夜に入つてから多少吹雪氣味。

一二、二六　晴後曇　最低　C－11。　天幕（八、三〇）――一の澤頭（四、三〇）――二二〇〇米突圈（五、三〇）――朝食ヲ採ル（六、五〇――七、二〇）――岩峰下（九、三〇）――三ノ澤へ入ル（一一、〇〇）――引返へス（一一、三〇）――一ノ澤ノ頭（一、三〇）――天幕（二、〇〇）

一時半起床。上天氣に氣をよくし、月光を踏んで出掛ける。二二〇〇米突圈迄は　昨日のラッセルで、豫定より一時間も早かつたが、此處より先は、新なラッセルに相當手間取つて仕舞つた。岩峰へ續く最後の登りで食事を採る頃、漸く爺の頂がローゼに染まる。之より岩峰迄は、急傾斜な脊尾根の連續に過ぎないが、ラッセルは相變らず樂でない。九時半、アンザイレンして岩峰へとついたが、ホールドが少ない上に氷があるので、非常に手間取る而も、仰いだ岩の先端からは頻りに妙な雪が飛び始めたので、遂に諦めて岩峰を卷き、三の澤を登る事にする。乍併、既にジャンクション邊はかすんで仕舞ひ、吹雪の前兆が來始めたので、之も中途で諦め無理は止さうと、北槍迄行かずに引き返へしてしまつた。

一二、二八　曇後雪　最低　C－10。　天幕（二、三〇）――野營地（六、〇〇）

重荷と、新雪と、ブッシュに惱まされ、それに遲く出掛けたのがたゝつて、思はぬ處に野營して仕舞う。

一二、二九　雪　野營地（九、三〇）——大川澤出合（一一、〇〇）——鹿島（一、〇〇）

一二、三〇　雪後晴　鹿島（七、三〇）——（馬ソリ）——大町（九、〇〇）

尙、此の行に關する詳細は、紀文欄を參照して戴き度い。

（鷹野）

乘鞍岳

森脇芳之、塚本駿、榎本直司、森川眞三郎、他二名

一二、二四　曇　松本——大野川（三、三〇）——番所（四、三〇）——鈴蘭小舍（五、二〇）

鈴蘭小舍迄積雪なく、霜溶けのドロンコの道をスキーを擔いで歩く。

一二、二五　曇後吹雪　鈴蘭小舍（七、四〇）——冷泉小舍（一一、〇〇）——乘鞍スキー小舍泊

鈴蘭小舍から卅分位登つた所から積雪あり。スキー小舍上の澤でスキー練習中、一人足首を捻挫す。

一二、二六　快晴　小舍（八、〇〇）——位ケ原——肩小舍（一〇、〇〇）——頂上（一一、二〇）——肩小舍（一二、〇〇）——スキー小舍（二、〇〇）

おそく迄小舍の附近にてスキー練習。

一二、二七　晴後曇　小舍（九、〇〇）位ケ原——肩小舍（一〇、〇〇）——一一、三〇）——スキー小舍（一二、一五）

榎本及び足を捻挫せし者下山す。

一二、二八　晴後雪　スキー練習。位ケ原迄二度往復す。

一二、二九　快晴　スキー練習。位ケ原迄三度往復す。

新雪一尺五寸、富士見嶽の東面にワボが二つ出て居た。

一二、三〇　快晴　スキー小舍（九、〇〇）——冷泉小舍——鈴蘭小舍（一〇、三〇）——一一、一〇——一二、三〇）——番所（一一、三〇）——前川渡——奈川渡——歸京

冷泉小舍にて小林等一行に遇ふ。奈川渡迄スキーをはく。來た時、スキーを擔ひだ事を思ふと、感慨無量なり。（森脇）

乘鞍岳

小林重吉、遠藤竹雄、他一名

一二、二八　晴　野澤温泉（九、〇〇）福島屋一泊

〇〇）——大野川（四、〇〇）——松本（一、二四——三、〇〇）——大野川（三、三〇）——番所（四、三〇）——前川渡——奈川渡——歸京

野澤の雪不足にくさつた吾々は、乘鞍の豊富な粉雪を夢み、合宿に別れをつげた。然し大野川迄來たが雪が殆どなく、冷泉近くまでスキーをかつがねばならぬと聞いて、少なからず落膽した。

一二、二九　晴　大野川（九、〇〇）——冷泉小舍（二、三〇）——鈴蘭小舍（一一、一五）——一二、三〇）——スキー小舍（二、〇〇）

朝起きると面目一新、あたりは白銀の世界と變つてゐたので一

同大喜び。前夜よりの新雪一尺餘、この爲大野川より直ちにスキーにて登行する。冷泉附近の森林帶は完全な粉雪、實に氣持が良い。前以て申込んでおいたので冷泉小舍の一室を占領する。

一二、三〇　晴　冷泉小舍(九、〇〇)——肩ノ小舍(一一、〇〇)——乘鞍頂上往復——冷泉小舍(三、〇〇)——鈴蘭小舍(四、三〇)

快晴に惠まれて小舍を出發したが、位ケ原に至る頃風强く、寒氣が可なり酷しく成る。頂上からの尾根は雪煙を吹いて美しい。頂上には烈風の爲、一分と止まれず、直ちに降る。肩の小舍より上はアイゼン使用。北アルプスの眺めは素晴しかつた。

一二、三一　曇　鈴蘭小舍(八、〇〇)——奈川渡——(自動車)——松本　(小林)

唐松小舍附近

増山清太郎(先輩)、堀岡清、齋藤正治、人夫、大谷喜榮(四谷)

一二、二九　雪　四谷白馬館(一〇、〇〇)——一二、三〇)——細野(一、三〇——二、三〇)——黒菱シーヒュッテ(七、三〇)

しん〳〵と雪降る。大谷の來るを待つて腰を上げたのが午過ぎ積雪意外に少く、黒菱小舍への澤道は埋つてゐずブッシュに惱まされた。愈々登りにかゝる邊で夕闇に迫付かれたが氣温高く呑氣に登つた。小舍では超滿員で眠れなかつた。

一二、三〇　快晴强風　黒菱ヒュッテ(八、四五)——八方山肩(一〇、四五——一一、四五)——唐松小舍(四、四五)

早朝はガスだつた。誰も出掛けない。だが薄いと見込みをつけたのが見事適中して、上の平に登つた頃カラリと霽れ、雪煙をあげてゐる鹿島槍、五龍が立派だつた。八方山附近まで素晴らしいスロープが大波の樣にうねつて續き、ブツ飛ばしたい衝動に駈られる。下の樺邊で輪樏に穿きかへ、スキーを背負ひ、痩尾根を强風に煽られ乍ら登り、國境尾根に出れば、黒部を距てゝ暮れ行く淨白の劍を一瞥して唐松小舍に入つた。强風の故か小舍は半分も露出してゐる。一行四人限りで伸々と寢た。

一二、三一　曇後雪　唐松小舍(九、〇〇)——大黒岳手前肩(一〇、三〇——一一、〇〇)——五龍岳(一二、三〇)——五龍岳、白岳鞍部附近(一、〇〇——一二、三〇)——小舍(四、三〇)

朝劍の上にかゝつた蠍の樣な雲がいけなかつた。午後は吹かれるのを覺悟の上、五龍へ、雪少く夏路が處々露出し、牛首の下りも五龍の上りも平凡。唯大黒岳附近は流石に潛つた。白岳を過ぎた頃雪が舞ひ出した。劍が隱れる鹿島槍が吹き出す、と殆ど瞬時の差だつた。M氏調子惡しく引返す。遠見尾根を登つた人々と頂上附近で遇ふ。尾根では相當吹かれた。でも風のある割合に温かく歸途は存外渉つた。小舍に歸れば獨人外數パーテーが殖え混雜する。

昭和十年

一、一　風雪　滯在

早朝、獨人の話聲に夢を破られる。雜煮を祝つて終日ごろ〳〵してゐた。マイナス十三度で標高の割に氣温は高い。

一、二　小雪　滯在

午近く鹿島槍を終へたり及T來り、其後續々と登つて小舍は滿員となる。

一、三　無風快晴　唐松小舍（八、二〇）——唐松岳（九、〇〇）——不歸第三峰（一〇、〇〇）——最低鞍部（一二、〇〇——一二、三〇）——第三峰（二、三〇——三、〇〇）——小舍（四、〇〇）

素晴らしいモルゲンロートに籠城を餘儀なくされてゐた人々は陸續として五龍へ。僕等のみ不歸（カヘラズ）の險へ。眞正面に見る劍の大觀は既に定評あるものであるが、今更乍ら眼を瞠らずには居られない。此の好晴に何人かを其頂上にのせてゐる事であらう。最低鞍部より數へて第三峰まで痩尾根で所謂不歸の險である。夏路は下の方を捲いてゐるが小雪庇の出てゐる痩せたリッヂを通るのである。第二峰第一峰とアブザイレンすれば最低鞍部であつて、此處から白馬へは樂らしい。歸途は第一峰の十五米餘の登りに苦勞した。午後尾根に風がつき、雪煙をあげる立山連峰のシルエットが美しい。小舍は今日の快晴に黑菱、細野よりの登山者で超滿員夏山もかくやと思はれる程の混雜で不快だつた。明日晴天ならば遠見尾根を下る豫定。

一、四　雪　唐松小舍（九、〇〇）——黑菱（一一、三〇——三、二〇）——細野スキー小舍（四、三〇——五、〇〇）——四谷白馬館（六、〇〇）

夜半起きたが眞暗、驀て風が出て雪だ。諦めて八方尾根を下る、上のカンバの下よりスキーをつける。展望きかぬ爲め、晴れたら素晴らしいだらう。斜面をスキーを流したり、不自由勝ちに滑降せねばならなかつた。黑菱では〇達に會ひ、暫く遊んだ後、ブッシュの多い澤道にスキーを曵つて、日暮れて降る雪の中を四谷は白馬館に旅裝を解いたのであつた。（齋藤）

八方尾根、五龍岳

昭和十年

一二、三〇　雪後晴　四ツ谷（一、二五）——細野（二、五〇）

一、一　曇後雪夜ニ入ツテ晴、滯在　小谷部全助、鷹野雄一

稍々へばつてゐたので細野でのびる。

一二、三一　晴後雪　細野（一〇、四〇）——黑菱（一、四〇）

此の邊一帶、スキーの享樂にはもつてこいの所。小舍の一段上の平など、若し僕等の小舍を建てるんだとしたら、素晴しい候補地だと言へやう。

一、二　雪　黑菱（六、四〇）——八方山（七、四〇）——唐松小舍（一〇、三〇）

風は無かつたが、ひどい霧だつた。唐松の小舍では、先輩增山氏及び堀岡、齋藤の一行に會ふ。此處で彼等に會ふ事は、大體前か

ら判つてはゐたんだが、何んだか偶然の様な氣がして妙に嬉しかつた。

一、三　快晴　小舍（六、三〇）——白岳（九、〇〇）——五龍岳（一〇、〇〇）——一一、〇〇——小舍（一、三〇——三、二〇）此ノ間ニ小谷部、唐松岳往復——黒菱（五、〇〇）

天氣が馬鹿によかつたので、今迄小舍に閉込められてゐた連中がどつと押出し、今日の五龍は相當賑かでした。不歸へ行つた堀岡一行の歸りが遲いので、一足先に黒菱へ下る。

一、四　雪　黒菱（三、二〇）——細野（四、三〇——五、〇〇）——白馬館（六、〇〇）

堀岡達を待つて一緒に四ツ谷へ。

一、五　小雪　四ツ谷——松本

齋藤、小谷部は落倉へ、小生は増山、堀岡兩氏と歸京す。（鷹野）

昭和十年（一九三五）

神ノ田圃、栂池附近

一、五　小雪　後晴　四谷白馬館（一一、〇〇）——落倉スキー小舍（一二、〇〇）

齋藤正治、小谷部全助、小柳二郎

馬橇で出掛ける。新田でM、H、Tと別れる。此日BKは神ノ田圃往復する。

一、六　無風快晴　落倉（七、三〇）——御殿場（九、三〇——一〇、〇〇）——神ノ田圃早大ヒュッテ（一一、〇〇——一二、三〇）——天狗原（一、三〇——二、四〇）——ヒュッテ（三、一〇）

未明起床、白馬往復の豫定。手間取つたのと、嚴冬には珍らしい暖かさに汗を催す位ですつかり惰れて、乘鞍の斜面を上りかけて戻る。到る處緩急好スロープが展開し、後立山一帶が一望の中に收められ、設備はよし、感じのいゝ小舍である。ヒュッテに泊めて戴く。

一、七　晴、强風　早大ヒュッテ（八、三〇）——天狗原（九、四五）——乘鞍岳（一〇、四五——一一、〇〇）——栂池（一二、〇〇——一、〇〇）——神田圃（一、二〇——二、〇〇）——落倉（三、四五——四、〇〇）——森上——四谷——松本——淺間温泉

晴れてはゐるが尾根には雪煙あがる。ヒュッテ、乘鞍の斜面にジツグザツグを印しつゝ登つたが、頂上邊で諦めて引返し、其儘下山の途につく。天狗原より强風に抗しつゝ歸京（齋藤）

一、八　晴　淺間温泉——松本——歸京

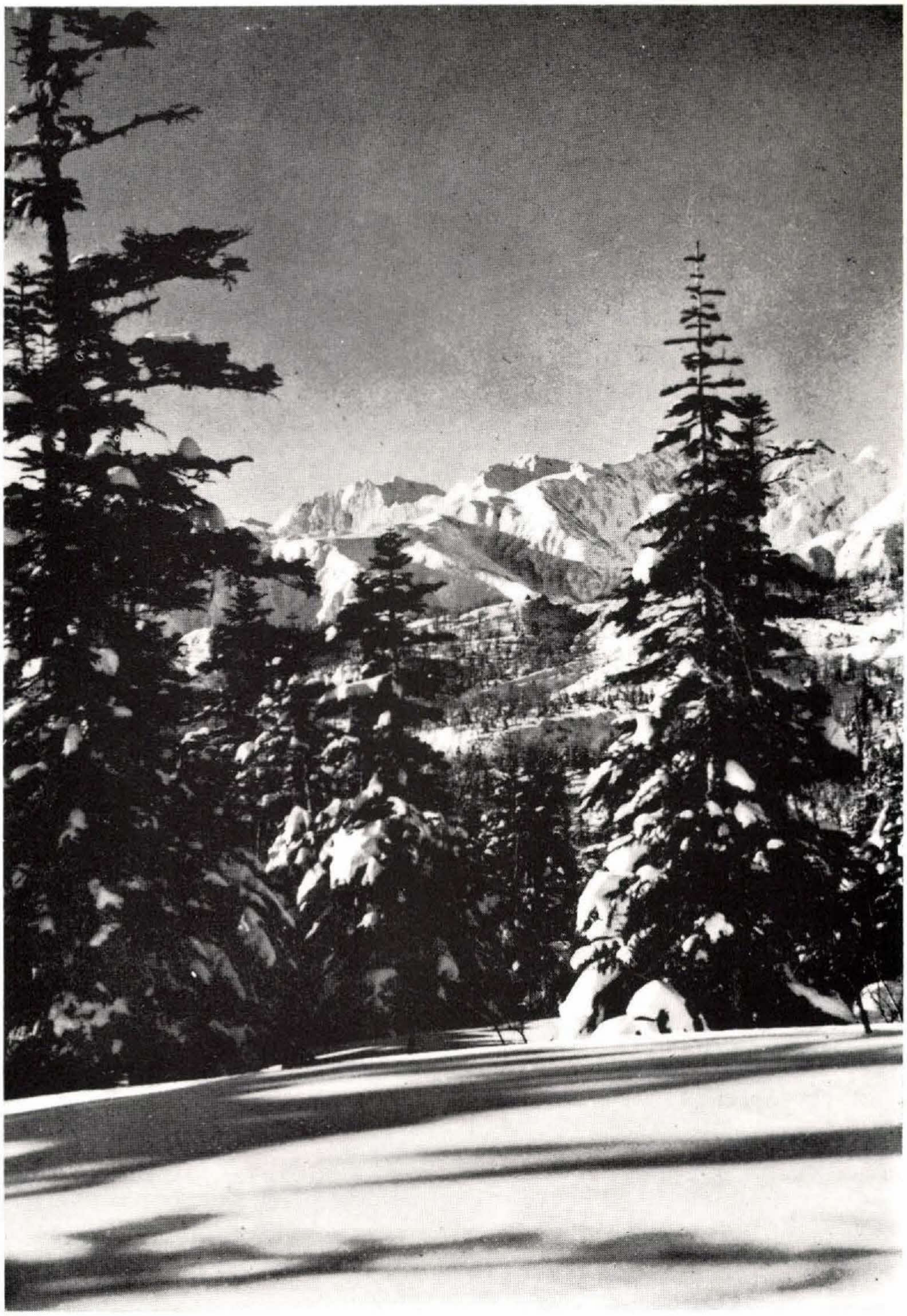
森川眞三郎

唐松岳、五龍岳

三、一六　晴　新宿發（夜行）

三、一七　晴　松本（六、三〇）——四ツ谷（一〇、〇〇——一一、〇〇）——黒菱小舍（二、〇〇）

午後はスキー練習、氣温上昇し雪質は稍緩み良好なり。（一1°）



神ノ田圃よりの後立山　　小谷部全助

三、一八　午前吹雪　午後曇、風　スキー練習（－3°）
三、一九　快晴　黒菱（七、〇〇）――八方三角點（八、〇〇）――上樺から二ッ目のピークの岩陰をシー・デポとする（一〇、二〇――一〇、四〇）――唐松小舎（一一、一〇――一一、三〇）――唐松岳（一一、四五）――唐松小舎（一二、〇〇）
（－13°）
三、二〇　吹雪　滯在（－3°）
三、二一　吹雪　滯在　早朝は青空見ゆ。五龍への出發の準備を整へた。併し六時半頃より劍に雲懸ると見る間に天候は怪しくなって七時には完全な吹雪模様となって了った。（－5°）
三、二二　晴強風　午後曇　小舎（七、二〇）――白岳（八、四〇）――五龍岳（一一、三〇）――唐松小舎（三、一〇）（－21°）

今日も天候は上乘ではなかったが、永い滯在に飽きて遂々小舎を飛出した。（小舎に泊り合せた日大山岳部員二名も同行さる。）風は容捨なく吹付け輕い粉雪は吹雪狀の雪煙となって吾々を苦しめた。其の上氣溫はグッと下って、白岳では零下一八度を示し、五龍では二〇度を越へて居た。白岳の邊りは腰まで沒するラッセルに苦勞した。（終日輪樏は用ひずアイゼンを付け通しだった。）五龍の上り、雪の急傾斜は表層粉雪雪崩の危險が充分あった。歸途は霧の爲、雪庇に細心の注意を要した。牛首は殆んど岩が露出して居た。
三、二三　晴　小舎（八、三〇）――シー・デポ（九、〇〇）――黒菱小舎（スキー練習）（一〇、三〇）――五、〇〇）――細野（六、〇〇）――中村　實方泊り。

八方尾根及び黒菱では快適なスキーが出來た。小舎の上の斜面は多少ベトついて居たが直ぐ下の澤は完全な粉雪であった。八方尾根から見た鹿島槍や、明け方の白馬、杓子は素晴らしいものだ。
三、二四　雪　細野（六、四〇）――四ッ谷（七、一三）　歸京

白馬岳

森川眞三郎、岩崎利一、原鐵三郎、中村彌兵衛（人夫）

四、二六　曇　新宿（一〇、四五）夜行
四、二七　曇　四ッ谷（九、三〇）――猿倉小舎（三、〇〇）
附近でスキー練習、雪質ザラメ。
四、二八　曇時々雨　小舎（四、〇〇――一一、三〇）――頂上（一一、三〇）――大雪渓上（七、三〇）――葱平――頂上小舎（一一、〇〇――一二、三〇）
杓池ヒュッテ（三、〇〇）――發電所（九、〇〇）――森上
四、二九　曇　ヒュッテ（七、三〇）――四ッ谷（一〇、三〇）

頂上小舎は殆んど全部を雪の上にあらはして居る。白馬岳の頂上からの展望は霧の爲全く駄目であった。大雪渓の方は雪が殆んど夏の狀態。所々デブリが大きく出てゐる。雨は小降りの方であったが不氣味である。スキーはザラメ雪の爲に相當快適で一氣に

小蓮華の尾根から栂池まで下つてしまつた。其の間の眺望は流石北の山であると思はせる。栂池には鐵道省の團體で七十人許りが一杯つまつて居て非常な賑やかさ。餘りスキーが面白くないので翌日下る。其後一日にして猛烈な吹雪とのこと。新聞で見てあの元氣な人々の中の一人が此の世から去つたことを思つて暗然となつた。（岩崎）

カクネ里より鹿島槍登攀

小谷部全助

六、六　晴　神城（一〇、〇〇）——高ケ入スキー小舍（一〇、四〇）——一一、〇〇——小遠見山（四、三〇）

遠見尾根は近年、路の手入をされず猛烈な籔に辟易した。途中濕地の印ある廣場は水あり露營に適して居るが時間があるので小遠見迄頑張り頂上三角點傍へ天幕を張る。この濕地の邊から籔がひどくなり初める。

六、七　曇　天幕發（八、三〇）——大遠見（九、一〇）——白岳下——（一一、〇〇）——シラタケの雪渓下降——二俣（一二、〇〇）——カクネ里偵察。

相變らずひどい籔だが大遠見から暫く行くと一面の雪となり樂になる。二俣の少し下流の右岸に庇狀に突出た岩あり、その下は乾燥して六、七名泊れる好い場所なり。

六、八　晴　雲霧多し　二俣（五、〇〇）——カクネ里雪渓のツメ（一〇、〇〇）——築場驛（九、三〇）

昨日、寢袋、天幕等を二俣へ殘して登つたのである。林道から上流は相當惡く增水でもすれば溯行不能になる恐れあり。だが普段は徒渉さへ厭はなければ案じた程の事もなく簡單である。

六、一〇　晴後夕立模樣　造林小舍（七、〇〇）——黑澤峠（九、〇〇）——築場驛（九、三〇）

（カクネ里に關しては紀文欄を參照せられたし。）

頂上（一一、五〇）——釣尾根（一二、〇〇——一二、三〇）——笹喰の雪渓下降——冷澤スキー小舍（二、一五——二、三〇）——鹿島造林小舍（三、三〇）

岩壁下に一ケ所避難に適した岩小舍あり。上迄のし上つた雪渓の爲、大分岩の惡場が省けて居る、とりつきの約十米餘り程アンサウンドの岩を登ると細い木の生えた殆ど垂直の惡場となり所々オーバーハングで木が無ければ絶對不可能である。枝を賴りの懸垂に腕がクタ〳〵となつて了つた。再びこの方面からカクネへ降る氣が無くなり、釣尾根からの急な雪渓に誘惑され一氣にグリセードで滑降する。冷澤二俣の少し上迄雪渓は續いて居た。

六、九　晴　造林小舍（六、〇〇）——大川澤溯行合（六、三〇）——林道終點（八、〇〇）——大川澤溯行——二俣泊場（九、五〇——一一、〇〇）——歸還——林道（一二、四〇）——休憩し乍ら——造林小舍（三、四〇）

昨日、寢袋、天幕等を二俣へ殘して登つたので其等を取りに行つたのである。林道から上流は相當惡く增水でもすれば溯行不能になる恐れあり。だが普段は徒渉さへ厭はなければ案じた程の事もなく簡單である。

六、一〇　晴後夕立模樣　造林小舍（七、〇〇）——築場驛（九、三〇）

（カクネ里に關しては紀文欄を參照せられたし。）

白馬岳

小林重吉、塚本駿

六、一三　晴　信濃四谷（九、四〇）——二股（一二、三〇）——猿倉（二、〇〇）

白馬尻小舎に滞在してゾムメル・シーを樂しむ豫定だつたが、同小舎は季節外は毀されてあると途中で聞いたので止むを得ず猿倉スキー小舎に泊る。尙白馬館經營にかゝる白馬溫泉小舎その他夏期以外使用に堪へざるものがあるから注意を要する。

六、一四　晴　猿倉發（七、〇〇）——雪渓出合（八、〇〇——ねぶか平（一一、三〇）——猿倉（五、〇〇）——村營小舎（一二、五〇）——白馬頂上（一、三〇）——猿倉（五、〇〇）

白馬尻あたりからは一面の雪でゾンメル、シーには好適、未だ雪渓の波もあまりなかつた。

六、一五　晴　猿倉（九、〇〇）——二股（一〇、四五——一一、〇〇）——四谷（一二、〇〇）——松本——歸京

後立山縱走

林俊介

六、一九　曇　新宿（一〇、四五）——六、四五）——大町（七、五〇——鹿島川（一一、四〇）——六、四五）——黒澤峠（一一、〇〇）——四五）——大冷澤スキー小舎（二、〇〇）

重き荷に、つゝじ咲き亂れる黒澤峠への登りで苦しめられた。

鹿島川は徒渉。布引、鹿島槍附近の眺めは絶佳。大川、大冷澤出合に到る頃より雲出初め、スキー小舎に着くまでの僅かの間に全く山を包んでしまつた。

六、二一　雨　大冷澤小舎（六、〇〇）——出合（六、一〇）——尾根道——國境線（一一、三〇）——冷池小舎（〇、一〇）

四時半。起きて見れば雨。大冷澤、西澤の出合のデブリもあと僅か。尾根に取付けば雨愈々激しく　視野は全く絶たれて、唯々急坂を攀ぢ登る。全身ずぶぬれになつて小舎に着く。

六、二二　雨　冷池小舎（一一、〇〇）——鹿島槍ケ岳頂上（〇、二〇——〇、四〇）——冷池小舎（一、二〇）

夜通し降つた雨は明るくなつても止まず。風の弱まつた晝過ぎ鹿島槍頂上へ往復する。雪多く、簡單に行けた。雷鳥がたくさん居た。

六、二三　晴　夕方より雨となる。冷池小舎（五、三〇）——南槍頂上（七、二〇——七、四〇）——鞍部（八、二〇）——キレット小舎（九、一五——九、三〇）——五龍岳（二、三〇——三、〇〇）——白岳の横（三、四〇）——大黒ノ頭（四、二〇）——牛首ノ頭附近にて墜落（六、〇〇）——大黒ノ洞より少し上露營（八、〇〇）

四時半。ふと寒さに目覺れば　劍が窓外に赤紫にもえてゐる。小舎の外へ出れば、見える、見える、爺、立山、劍、猫又、又後ろに鹿島槍が聳えてゐる。八ケ岳も雲海の上に浮ぶ。この快晴を

利用して　一氣に縦走せんと決心した。南槍の降りも夏は容易、北槍は西側を巻き、キレットへ眞直に降る。北壁と呼ばるゝカクネ里の奥壁が僅かに上部を雲海の上に出してゐる。カクネ里は全く見えない。キレットは容易に通れる。五龍の登りにかゝる頃より霧かゝりしばしば　道を失し苦しむ。五龍よりの急斜を東北へ降れば　あとは坦々たる踏跡傳ひ。牛首の最後の登りに至る頃は全く疲れて十歩行つては一休みの狀態。遂にスリップして一夜を澤の中で明かさなければならなくなつた。暮れてから風雨募る。

六、二四　雨　露營地（三、三〇）――唐松小舍（六、〇〇――九、〇〇）――八方山（一〇、三〇）――細野　二、〇〇）

眼鏡なき身は盲同然。リュックも見えず、ピッケルのみ片手に八方尾根側へ巻き、傾斜のゆるさうな雪渓を求めて雨の中を登る。小舍にたどりつき　殘飯を食べ　着物を乾かす。八方尾根も　晴天ならば何でもない所だが　この風雨の中を、四度の近視で歩くのは相當にさびしかつた。意外に多い殘雪も　その苦痛を愈々大ならしめた。八方山のあたりより牛道に入り、やつと人心地つく中村實の家で休む。

負傷の手當の爲と餘病の起るのを恐れて、同夜東京へ向ふ。幸にして事なくすみ六月卅日再びリュック等を探がしに信州へ這入る。

七、一・雨　細野（一一、〇〇）――黒菱スキー小舍（一、三〇）――八方池（二、五〇）――唐松小舍（四、四〇）

丸山與兵衞と共に再度雨の中、八方尾根を登る。荷が少きため樂に行けた。夜に入つても風と雨は止まなかつた。

七、二　雨　滯在

雨と風と霧甚だしきため一日中寢て居た。七時頃より晴れ上る

七、三　晴　唐松小舍（六、〇〇）――露營地（七、〇〇――七、一〇）――唐松小舍（九、二〇――一〇、〇〇）――不歸ノ險（一一、二〇）――天狗岳頂上（二、一五）――白馬鑓ケ岳（三、三〇――三、四〇）――白馬頂上小舍（四、三〇）

眼鏡と荷を捜しに大黒ノ洞へ降る。共に雪の割目の際に引つかゝつてゐた。時間があるので與兵衞を伴ひ白馬頂上小舍へ向ふ。不歸ノ險も天狗の大降りも樂だつた。小舍に實が居て、三人で祝杯を上げた。劍が良く見えてゐた。小舍に泊る。

七、三　晴　頂上小舍（七、〇〇）――白馬尻（九、〇〇）――二俣（一一、一〇――一二、二〇）――細野（一二、四五）

頂上より白山、能登、佐渡、妙高、八ツ、上越、富士までの大觀を享樂。北アルプスの連峰は指呼の中にある。降りは大急ぎで晝に細野に着いた。

前穗高

小谷部全助

七、一〇　薄曇　上高地天幕（七、四〇）――岳川――前穗頂上（二、二〇――一、二〇）――奥穗への途中より涸澤へグリセ

ード横尾岩小舎(三、四〇)——河童橋(六、三〇)

烏帽子、槍縦走

森脇芳之、佐々木誠、和田榮達、他二名

七、一一　曇後晴　大町(八、三〇)═笹平(九、一五)——葛温泉(一〇、〇〇—一〇、三〇)——三ノ澤橋(一一、〇〇)——不動瀧(一一、二〇)——濁小舎(一一、三〇—二、三〇)——濁澤との分岐點(三、〇五)

七、一二　晴後霧　分岐點(六、一五)——二二〇〇米突三角點(九、三〇—一〇、一〇)——烏帽子小舎(一二、〇五)——烏帽子岳(一一、〇〇)——烏帽子小舎(二、四〇—三、四〇)——三ツ岳(四、五〇)——野口五郎岳(六、四五)——水晶小舎(九、四〇)

七、一三　風雨　滯在。黒岳寄の雪渓でグリセード練習。

七、一四　霧後曇　水晶小舎(八、二〇)——鷲羽岳(九、五〇)——三俣蓮華小舎(一〇、三〇—一二、一〇)——双六池小舎(二、二〇)

七、一五　風雨　滯在。

七、一六　霧雨　双六小舎(一一、〇〇)——樅澤岳(一一、二五)—硫黄澤乘越(一一、四五)——槍ノ肩(一、二〇)——大槍小舎(二、〇〇)

七、一七　曇　大槍小舎(八、三〇)——一ノ俣(一〇、一〇)——

上高地(〇、三〇)

殆んど霧の旅で見通しが利かない爲詰らぬ所で迷つたりして時間を隨分喰つた。烏帽子岳の東側に羚羊が一匹居た。割に殘雪が多かつた三ツ岳附近はスキーの良い練習地になるだらう。展望を目あての此の縦走路は天氣が惡い時には全く下らない。(森脇)

高瀬　入り

小林重吉、鷹野雄一

七、一二　晴　大町(八、三〇)═笹平(九、〇〇——九、三〇)—葛温泉(一〇、一五——一〇、三〇)——濁——湯股温泉小舎(四、三〇)

笹平迄は自動車、それから湯股迄は一日行程で樂。

七、一三　曇少雨　湯股小舎(一〇、三〇)——天上澤出合(一一、四五——一二、一五)——天上澤乘越——殺生小舎(五、三〇)

朝眼を覺ますと相當の豪雨、これでは出發出來ないと思つてゐる中小止みになつたので遲く出かけた。然し途中から又雨で豫定してきた北鎌尾根も諦めて、天上澤乘越へ拔けてしまつた。殺生小舎に來ると上高地から上つて來てゐた小谷部、岩崎に遇ひ一緒に行動する事になつた。(小林)

殺生小舎滯在

小谷部全助、岩崎利一、鷹野雄一、
小林重吉

七、一二　晴後曇　上高地天幕（八、〇〇）——一ノ俣（〇、三〇）——大槍小舍——殺生小舍（五、三〇）

ゾムメルシーが小舍にあつたので直に泊ることにする。グリセードも練習した。

七、一三　雨　一日中冷雨降りしきり小舍に滯在。

夕方、小林、鷹野の兩名高瀨より天上澤乘越を經て來り合す。

七、一四　曇後晴　殺生小舍（〇、三〇）——大槍小舍の上（一、〇〇）——引返す——殺生（二、〇〇——二、三〇）

大槍正面のガレを攀る——大槍東鎌尾根近くの壁を登る——大槍頂上（四、〇〇）——小槍ザッテル（四、三〇）——小槍登攀——殺生小舍（七、〇〇）

大槍の殺生小舍正面に見える岩壁はアンザイレンして登る。相當面白い。小槍は南面を登る。トップの小谷部はチムニーに入つたが、あとは全部リッヂに沿ふた普通のルート。アンカレッヂより上もリッヂ通りに登る。時々霧が晴れて日が射したが、寒かつた。

七、一五　雨　殺生小舍（二、〇〇）——一ノ俣四、三〇（——四、四五）——上高地天幕（七、〇〇）

燕、槍班の連中と共に下る、大槍小舍から下は曇だつた。（岩）

小柳二郎、柿原謙一、森川眞三郎、日江井正巳、毛塚由太郎、齋藤明智
秦良平、內田素彥、他一名

燕槍縱走

七、一二　曇　新宿（一〇、四五）

林、塚本兩君の厚い見送りを受け、元氣に出發。

七、一三　小雨　松本（六、五〇）——合戰小舍（四、二〇——七、二〇）——一ノ瀨（八、二〇——九、二〇）——燕山莊（六、一五）

大きな荷を負ふてゐた內田が大變にヘバッた爲め、時間を馬鹿に要したものゝ、氣强く頑張つて吳れたのは嬉しかつた。此の日チームワークの取れなかつたことは、荷の少い連中が速足で進むことばかり考へた爲で、リーダーとしては失敗に終つた。燕山莊前の焚火は、嬉しい想出である。

七、一四　小雨後晴　小舍（七、四五）——燕嶽（八、一〇——八、二五）——小舍（八、五五）——蛙岩（九、一五）——大天井喜作新道——（一〇、五〇）——西岳小舍（三、一五）——殺生小舍（六、〇〇）

時々烏帽子や野口五郎が顏を出す外、霧の旅が續く。天候をかこち乍ら、東鎌尾根にかゝつた頃、高瀨谿谷から烏帽子方面が心快く晴れ、北鎌尾根の峭立するのを眺め得た。然し終日槍は顏を出さず、皆腐る。殺生小舍で小谷部、小林、鷹野、岩崎に遭ひ、夜遲く迄快談する。夜月明の中に槍の姿を仰ぐ。寒い。

七、一五　曇時々雨　小舍（一〇、〇〇）——肩小舍（一〇、三

〇)——槍三角點(一一、一〇——一五)——肩小舍(一一、三五——四五)——殺生小舍(一二、〇〇)——晝飯——小舍(一二、〇〇)——一ノ俣(五、〇〇)——上高地(七、一五)

霧深く、小雨降る。嫌氣のさした運中が、小舍を出たのは十時全く霧の旅で、槍に登つたと言ふにすぎなかつた。槍澤を渡る風の、攻勢的なのが小氣味よく、殺生で晝飯をした後、一同上高地に向ふ。大槍小舍上の小さな岩場で岩登りの練習をし、グン〳〵と槍澤を下り、四時間で上高地迄急行した。

想へば全く霧の旅、霧の登行に終つたが、霧雨の中を歩くことは、決して捨てたものでないことを覺えるだけでも新人生の人には、好い經驗だと思ふ。人數が多いため、兎角統制を缺いたことは柿原、森川の責任である。責任者となる者の心構への重大な事を痛感した。(柿原)

圍衛谷を下り天上澤を上る

吉澤一郎、近藤恒雄(以上先輩)、望月達夫、他一名、下川隆夫(案內)

七、一七　曇　新宿發(一〇、四五)夜行

七、一八　晴時々曇驟雨　松本——有明(七、三〇——八、〇五)——信濃坂(一〇、二五)——中房(一一、一五)「奥の瀧」の下なり、直ぐ滑あり左手をまく——ザイルを用ひ(アップザイレン)二五米突一杯の壁を下りて懸垂のまゝ河水の中に入る。上下の瀧と瀧との間をからくも徒渉して對岸へ(四、四〇——五、一五)此處は圍衛の大瀧の眞上なり——右手をまく、貯水池再び見ゆ(五、二五)——北燕鞍部(八、一五)——コール澤へ下る尾根の鞍部(八、四五——九、一五)兎澤を下る——兎澤、圍衛本谷との出合(九、四五——一〇、〇〇)(本谷五段ノ瀧その上にあり)——河水に沿ひて行く——右手より平滑澤出合ふ(一〇、二〇)——小瀧二ツを右にまく、澤右より出合ふ(一〇、三五)——出合の瀧上(一〇、四〇)左をからみ越す——二俣の瀧(一〇、四五——一一、〇〇)——大材木のかゝつた瀧(一一、二〇)左をからむ——直ぐに七〇米突位の大瀧「中ノ大瀧」の上にて紅茶を沸かし中食(一一、三五——一二、二〇)——左手をからむ。ザイルを用ひて岩の割目を上り小尾根に出る(一二、五五)——この小尾根を直にからみ連續せる瀧の上をへづつて、枝澤より河原「小廣河原」に出る(一、五五)——此度は右手をからむ。この附近にて高瀬川邊の貯水池見ゆ(二、三五)五〇米突位の瀧の上なり——ザイルを用ひて下る(三、〇〇)大材木の引かゝれる「簾の瀧」の下なり——直ぐ瀧數段あり、右手をからむ(二、四〇)——一枚岩の如き處を下りて河原に出る(四、一五)「奥の瀧」の下なり、直ぐ滑あり左手をまく——ザイルを用ひ(アップザイレン)二五米突一杯の壁を下りて懸垂のまゝ河水の中に入る。上下の瀧と瀧との間をからくも徒渉して對岸へ(四、四〇——五、一五)此處は圍衛の大瀧の眞上なり——右手をまく、貯水池再び見ゆ(五、二五)

——屏風澤の近くの岩場に沿ひザイルを用ひて河原に下る（六、〇〇——六、三五）三〇米と二〇米のザイルを共に用ひる——この上にて園衛は三〇米突の大瀧となり川九里澤にて休み出發（七、〇〇）——高瀬川出合（七、一五）——湯股温泉小舍（七、二五）

園衛谷は通つて居る人が餘りない狀態なので、相當の覺悟はあつたが、燕から六、七時間もあれば充分下り得ると思ひ、午後は休養し樣と考へて居たのが大違ひ。瀧は大小合せたら三十は充分あるだらう。（詳細は雜記中の「園衛谷」を見られたし。）

七、二〇　晴後曇　湯股温泉小舍（六、〇五）——發電事務所の前を通り崖をヘツルとすぐ釣橋、渡ると右手に出合神社あり——中東澤の對岸（六、四〇）——大鎌澤（六、五五——七、〇〇）——釣橋により左岸へ（七、五〇）——赤がれを經て槍の見える處で飯（九、四五——一〇、四〇）——赤がれの澤を登り北鎌の支稜に取つかんとす。百米突登ると中央に大岩あり槍見ゆ（一一、〇〇）——右へまはる、澤二分す。右を進む（一一、二五）——澤床は岩をなし傾斜をます。ザイルをガリーをさけ草付に移る（一二、五用ふ（一二、〇〇）——支稜の尾根（一、一〇）——藪、這松をくゞり二〇五）——三、三〇）——引きかへす、往路の藪をくゞり途中にて登りし澤より一つ北側の澤へ下る——雪渓（六、〇五）——露營地（七、三〇）

天上澤が廣々とひろがるあたりにて午飯をとり、それより少しもどつて、赤いガラ〳〵の澤より北鎌に取付く前記大岩がある附近に雪渓あり。澤が二分するあたりは急で、雪渓續く。左するものは、吾等のとりたる右よりも更に惡く、上方は、オーバーハング狀をなす。右方は階段狀の岩場をなす。浮き石多く落石の危險非常にあり。支稜の尾根より上は這松と藪くゞりの爲、精力と時間をくひ、北鎌の主稜より一歩手前にて下ることゝした。下りは藪のひどい急傾斜をザイルを用ひスベル樣にして下る。前記午飯をとつた處に焚火をもやしてビヴアークす。

七、二一　曇時々雨　露營地（七、〇五）——天上澤乘越（九、一五——九、二〇）——殺生小舍（一〇、一五——一〇、三〇）——槍澤小舍（一二、〇〇——一、〇〇）——上高地玄文澤ベースキャンプ（六、一五）

天上澤乘越にて殺生に用ありし爲、小生と T 君とは、殺生へ吉澤、近藤、兩氏と下川とはすぐ槍澤小舍に下つた。槍澤では、先輩一行と、小生等より一足先に殺生より下りし七名のものが合流し、十二名の大部隊で上高地入りをした。（望月）

槍、穗高　原鐵三郎、高原龍雄、新羅二郎、松浦靜雄

七、一八　晴　玄文澤天幕（八、〇〇）——一俣——殺生小舎
前日までの雨が晴れて氣持がいゝ。大槍小舎の下でグリセード練習。遭難した早大生の二死體に行き合ひ弔意を表す。
七、一九　晴　殺生——大槍——南岳——北穗高——涸澤岳——穗高小舎
四人とも穗高は始めてなのでかなり緊張した。體の調子の惡くなつた者が出來て豫定より後れて了つた。雷鳥の子供が可愛いかつた。小舎には小谷部氏等の先着者が居て賑かだつた。
七、二〇　晴霧　穗高小舎（九、〇〇）——横尾谷——上高地
殘念だつたが、依然體の調子惡き者ありし爲、涸澤から下りて了ふ。（新羅）

明神より前穗高

七、一八　曇後晴　玄文澤テント——明神（七、三〇）——鷲野雄一、鷲崎雄四郎
明神本岳（第一峰）——前穗との鞍部（一、一五——一、三〇）——前穗頂上（七、〇〇）
穗高縱走の森川のパーティと前穗まで一緒に行く。前穗への岳川林道を右側即ち明神より横切る二番目のガレ澤を登る。登りきつた處は第三、第四峰の鞍部であつた。（明神本岳を第一峰とし南に數へて。）途中小雨に見舞はれて様子を見てゐたり、右手の尾根へそれて猛烈な藪を文字通り泳いだり、休むと岩登りの練習だと言つて近所の岩へ五人が一人々々へつゝいたりして大分時間を潰す。おまけにギャップはまくのだといつて隨分手前から一寸した踏跡らしきものに迷はされ、岳川側に二百米ばかりも下つて仕舞ひ、又々這松を漕いで苦勞する。それで恐ろしく時間を喰ひ遂々前穗頂上の一寸した石圍ひでオカンをする羽目になつた。オカンには全く惠れた夜であつたが、それでも寒いのでうるさ方が五人でみじめにも賑やかなコンパみたいなことをやつて過す。
普通に行けばオカンの必要は勿論ない。
七、一九　快晴　前穗——岳川林道——上高地
明けるのを待ちかねて森川等と別れ、空腹をかゝへながらも西糸屋のカツ丼につられて飛ぶやうに下山。（鷲崎）

明神より穗高縱走

森川眞三郎、榎本直司、岩崎利一
七、一八　曇後晴　玄文澤テント——明神——前穗高
此の日の行動は前のパーティと全然同一なり。
七、一九　晴　前穗頂上（七、〇〇）——奥穗（八、三〇——九、〇〇）——穗高小舎（九、三〇——一〇、三〇）——北穗（一、〇〇）——南岳小舎（六、〇〇）
前穗頂上に於けるモルゲン・ロートの素晴らしさ。昨夜來の空腹と寒さを一時に忘れさせるものがある。上高地から同行した鷹野、鷲崎と別れ奥穗へ向ふ。岩崎は都合あつて涸澤より下山。南岳を登り切つた頃、横尾本谷北穗寄りの邊りに遭難者あり、榎本

のみ槍に向ひ森川は少し引き返へし大キレット附近にて遭難者に附添ひ一夜を明かす。

七、二〇　曇　肩の小舎(一〇、〇〇)——槍ケ岳(一一、〇〇)——殺生小舎(二、〇〇)

槍澤より小柳、柿原、小林他二名來り槍に登る。此の頃森川キレットより來り合し、遭難者救助手配等なす。霧が多い上に連日のビヴアークの爲疲勞烈しく小槍登攀は斷念した。

七、二一　曇少雨　殺生(一〇、三〇)——槍澤小舎——(一二、〇〇——一、〇〇)——上高地テント(六、一五)　(森川)

前穂高

齋藤明智、毛塚由太郎、日江井正己
内田素彦

七、一九　晴　上高地天幕(七、二〇)——岳川——前穂高頂上(一、〇〇——一、三〇)——上高地(六、三〇)

快晴に惠まれて、新人のみのパーテイ故元氣一ぱいに登る。頂上から常念、蝶の一脈が實に美しく望まれた。歸路に一寸不注意だつたので、頂上直下で道を迷ひ思はぬ時間を浪費してしまつた

疊岩

森脇芳之、佐々木誠

七、一九　晴霧多し　上高地天幕(八、〇〇)——疊岩直下(一〇、四〇——一一、〇〇)——疊岩登攀——縦走路(三、五〇)——ジャンダルム(四、三〇)——奥穂高(六、〇〇)——穂高小舎(六、二〇)

疊岩より奥穂へ

小谷部全助、和田榮達、他一名

七、一九　晴霧多し　天幕(八、〇〇)——疊岩下(一〇、四〇——一一、〇〇)——疊岩登攀——縦走路(三、五〇)——ジャンダルム(四、三〇)——奥穂高(六、〇〇)——穂高小舎(六、二〇)

七、二〇　霧深し、和田、他一名涸澤より上高地へ。小谷部北穂迄散歩の後、奥穂、前穂間の雪渓を直に岳穂へ降る。穂高小舎(三、二〇)——河童橋着(六、一五)

天狗澤傍から疊を目指して登ると暫くは平凡な岩場が續くがやがて傾斜五、六十度滑かな純逆層の非常に特徴のある岩となりホールドの全然無い、困難な岩を右に左に避け乍ら登るのは實に面白い。或る所では本當に疊の様な逆層の一枚岩を細い溝に指を入れて辛くも體を支え乍ら登ることはい所もあつた。大體二百米位で草付になり右に行つて疊岩東尾根へ取付き大した凄い所もなく縦走路に出られた。疊岩は取付から、上に向つて大體右へ右へと急な所を行かなければ面白くない。(小)

常念、蝶、大瀧山

内田素彦

七、二一　晴後小雨　上高地天幕(九、二〇)——一ノ俣(一〇、三〇——一一、三〇)——常念小舎(四、三〇)

七、二二　晴　常念小舍（四、〇〇）——常念岳（四、四〇）——五、三〇〇——七、三〇）——再び頂上（八、〇〇——九、〇〇）——蝶ケ岳（〇、三〇——一、〇〇）——大瀧山（二、三〇——三、三〇）——徳澤牧場（五、三〇）——上高地天幕（八、〇〇）

非常な快晴に惠まれて終始穗高を右に眺め乍ら全く愉快な山歩きであつた。

大瀧、蝶、常念岳

望月達夫、榎本直司、岩崎利一

七、二三　晴、夕立　上高地ベース・キャンプ（八、一五）——西糸屋にて朝食（八、三〇——九、〇五）——一番目の丸木橋にて中食（一一、三〇——一二、三〇——道が澤より離れる處（二、〇五）——大瀧小舍（四、一〇）

大瀧小舍は大瀧山三角點の直ぐ近くにある。此の邊一帶は公園として勿論アルプス的景觀は求められない。

七、二四　晴　大瀧小舍（六、三〇）——蝶ケ岳（八、二五——九、〇〇）——常念岳（一二、〇〇——一、三〇）——常念小舍（二、〇〇——二、三〇）——一ノ澤の小舍（五、一五）——塚原部落（七、一〇——七、三〇）——柏矢町驛（八、一五）

昨夜心配した空模樣も好轉して、稀に見る日本晴。勿論前面の穗高連峰をはじめ遠くは劔、立山より御岳に至る迄北アルプスの雄峰を一峰の中に眺め乍ら道の良い尾根を歩いた。常念山脈はこの眺望の爲にのみ作られた樣なものだ。穗高が此處位美しく見える處はないだらう。餘りのびて、、、歩いたので時間がなくなり常念小舍よりの下りは大急ぎ。殊に一ノ澤の小舍（一ノ澤が大きく東南に屈曲する邊りにあり）を過ぎる頃からは超スピードにて下つた爲、松本にて夕食を鮑腹食ふ時間が、わずかにあつた。それ以前空腹をかゝへて烏川橋を渡つた處　塚原部落の坂付きにある一軒の氷屋に飛びこんでのんだ氷水の味と白瓜をきざんで出してくれた其處の內儀の厚情とは忘るゝ可らざるものであつた。陽もとつぷり暮れた頃　塚原より柏矢町の驛迄の一里は隨分長く感ぜられた。（望月）

涸澤生活

小林重吉、小柳二郎、森川眞三郎、鷲崎雄四郎、佐々木誠

七、二三　晴一時雨　上高地天幕（九、〇〇）——西糸屋——牧場（一二、一五——一二、四〇）——橫尾出合（一、四〇）——涸澤池ノ平（五、三〇）

西糸屋で食糧を買入れ、六人用テントを持つて出發した。途中橫尾で驟雨に會ひ心配したが池ノ平に着いた時は止み、直ぐテントも張れた。池ノ平に着いた時、上條孫人が雪渓でスリップして怪我をした學生を擔いでくるのに會ひ、又一方飛驒の人夫の死體の入つて居るテントを見て、あまり良い氣がしなかつた。

七、二四　晴　ジャンダルム行

池ノ平（九、三〇）――穂高小舎、一一、一〇――一二、〇〇）――奥穂頂上（一一、三〇）――ロバの耳――ジャンダルム（一一、三〇）――奥穂――穂高小舎（四、〇〇）――天幕（五、〇〇）

奥穂へ着く頃から霧が相當出て來て眺望きかず。奥穂からジャンダルム迄は、樂すぎる道である。

七、二五　快晴　北尾根行

池ノ平（九、三〇）――北尾根　六、七　峰間のコル（一〇、三〇）――五峰（一一、三〇）――四峰（一二、一〇――一二、三〇）――三峰――前穂頂上（一、三〇――二、三〇）――直下の雪渓――天幕（三、四〇）

鷲崎一人テントに殘り四人で行く。自分と森川とはアイゼンを持つて來なかつたので雪の少い六、七峰間のコルに取つき、他の二人は五、六峰間の雪渓を登つて後で一緒になつた。二人づゝのパーティに分かれ、落石を用心した。四峰三峰の登りも路を避けなければ面白くない。ザイルは全然使用しなかつた。

七、二六　晴　池ノ平（一二、一〇）――横尾出合（一、一〇）――牧場（二、二五――三、一〇）――上高地天幕（五、〇〇）

天氣がなんだか下り坂らしかつたので下りてしまつたが、池ノ平滯在中は實に氣持が良かつた。（小林）

乗鞍岳

内田素彦

七、二五　快晴　上高地天幕（八、三〇）――自動車――澤渡（九、三〇）――白骨温泉（一一、〇〇）――白骨小舎（九、三〇）――冷泉小舎（一一、一〇）――頂上（一二、三〇――一、〇〇）――肩ノ小舎（一一、三〇――二、〇〇）――冷泉小舎（二、四五）――白骨（四、二〇――四、四〇）――澤渡（五、五〇）――松本

荷が相當にあつたので平湯に下りたいのを涙をのんで白骨から往復する。登りには御老人の同行を賴れたので大分のんびり行つた。元來この山はアルプス中で最ものんびりしたものゝ一つだ。

錫杖烏帽子岩

齋藤正治、小谷部全助

七、二五　晴　天幕（一〇、二〇）――中尾峠（一一、四〇――一二、二〇）――中尾（一、四〇――二、五〇）――槍見温泉（三、〇〇――四、〇〇）――錫杖澤出合（五、三〇）――錫杖澤岩小舎（六、二〇）

錫杖澤出合はクリヤ谷を登つて第二本目の丸木橋から五、六分上流にあり、前衛岩峰たる三本歯が聳立して見える。其處から急な澤を一寸登れば岩小舎だ。

七、二六　晴　岩小舎（七、〇〇）――北澤右岸より中岳へ――烏帽子岩東肩（一〇、一〇――一一、〇〇）――烏帽子岩登攀――再び東肩（一二、二〇――二、四〇）――北澤の瀧を下り――岩小舎（五、一〇）

錫杖は中尾峠邊から見ると笠、抜戸の威容に壓されて一向映えぬが、その懐に喰込むと忽ち現れる凄い岩峰に一驚する。その上感じの好い岩小舎もあるし、本當の岩黨には、天幕村の涸澤なんかより、ずつと好ましい。烏帽子の西肩からチムニーを登る積りで居たが、岩に馴れたパーティが得られず中止。樂な東側を登る。ハーケン等による完全な確保がなければトップの技量も相當長縮する様な所だ。下りは水がないので北澤奥のチムニー狀の瀧をアブザイレンで降つたが最も下の瀧を下る時はビレイイングピン無くハーケンを打つ。

鷹野雄一

天狗岩東面

七、二六　晴　午後山上ハ霧　上高地天幕——河童橋（一〇、〇〇）——天狗岩東稜下（一、三〇）——左下へトラバース（二、一〇）——左の小雪渓（二、四〇）——畫寢（三、三〇）——四、三〇）——河童橋（六、三〇）——天幕

リツヂ通り上まで登るつもりだつたが、グラ〳〵の靴鋲に二、三度不安を感じ、こわくなつて下りてしまつた。併しリツヂ通りでは少し烈し過ぎた。涸澤は非常に雪多く岩小舎も未だ使えぬ程だ。今年は雪が少いからゾムメルシーなんか持つて行つても損だなんて知つたかぶりした奴（誰だ？）をトタンになぐり度くなつた。

齋藤正治、小谷部全助

穗高の裾を廻る旅

七、二七　快晴　錫杖岩小舎（九、〇〇）——槍見温泉で大いに伸びる（一〇、〇〇）——小鍋谷（三、〇〇）——瀧谷（六、〇〇）——槍平（六、四〇）——槍肩の小舎（一二、〇〇）——槍肩（一二、四〇）——小槍登攀——肩（二、〇〇）——河童橋（七、〇〇）

小槍は此間南面のクラックとリツヂを通つたので今度は東側から第一のアンカレッヂ迄登る。將にリツヂへ出んとする所の下向きの足場は、丸々とすり減つた鋲靴なので一寸こわかつた。

上高地天幕日誌

七、九　薄曇　小谷部全助單身到着。先日の豪雨で自動車全通せず、荷運びに一寸苦勞する。清水屋の商大テントを藏つて置く所がわからず取敢へず二人用と六人用とを玄文澤に張る。仕事を終つて附近をぶらつく。時期が早い爲か未だ靜かで氣持が好い。

七、一〇　晴　山は雲の中、誰も來そうにないので一人で前穗へ涸澤へグリセードで大廻りをして天幕へ歸る。足馴しにしては少し烈し過ぎた。涸澤は非常に雪多く岩小舎も未だ使えぬ程だ。今年は雪が少いからゾムメルシーなんか持つて行つても損だなんて知つたかぶりした奴（誰だ？）をトタンになぐり度くなつた。

七、一一　晴　鷲崎雄四郎、岩崎利一の二名入幕。西糸屋の者を手傳はせて例の大テントを張る。種々仕事を終へてぶら

〳〵散歩する。

七、一二　晴　小谷部　岩崎の二名槍へ。鷲崎燒岳へ。夕方より曇り出す。

七、一三　小雨　鷲崎只一人天幕に閉じこもり大いに退屈す。

七、一四　曇　原鐵三郎、高原龍雄の二名入幕して明神池へ散歩鷲崎明神澤の入口邊りへ。

七、一五　曇少雨　鷲崎、高原、吉城屋邊りまで散歩。小谷部、岩崎、高瀬入りの鷹野雄一、小林重吉、及び燕班柿原謙一、天上澤よりの柳二郎、森川眞三郎、秦良平、齋藤明智、日江井正巳、毛塚由太郎、内田素彦、部員外一名、以上殺生小舍にて合流してゾロ〳〵と入幕。又新羅二郎、松浦靜雄の兩名德本越にて到着。天幕は果然賑やかとなり、皆夕飯に酔つぱらふ。

七、一六　曇後雨　待望の快晴に惠まれず一同クサる。夜、雷鳴と共に賑やかに騒ぐ。

七、一七　雨　秦及び部員外一名歸京、烏帽子、槍班森脇芳之、他部員外二名、及び榎本直司入幕

和田榮達、佐々木誠久し振りに明朗な日光を浴び一同張

七、一八　晴　山は霧多し　森川、榎本、岩崎の五名は明神より穗高原、原の四名は穗高縱走の爲槍へ。切る。鷹野、鷲崎、日江井は燒岳へ。柿原、小柳、小林、高へ。新羅、松浦、齋藤、毛塚、内田、

佐々木は霞澤へ。うるさ連中がすつかり出拂つた後、天幕の大整理を行ふ。先輩クマさんの令妹二名入幕。

七、一九　快晴後霧多し　柿原、小林はクマさんの令妹を連れて槍へ。小谷部、和田他一名疊岩登攀、穗高小舍へ。森脇、佐々木疊岩往復。日江井鷲崎明神澤の入口邊りまで往復。前穗頂上で昨夜一晩オカンして鷹野、鷲崎（岳川より）岩崎（涸澤經由）歸幕。森川、榎本は穗高縱走を續ける。テントが整然として居るのは全く氣持がよい。

七、二〇　晴霧多し　午前中テントへ孫人が遊びに來て話しこんでいつた。午後、穗高小舍より新羅、松浦、原、高原、涸澤を經て歸幕。日江井歸京、北穗の頂上で先輩の一行を待ちくたびれて小谷部單身岳川より歸幕。先輩來らざるも明日歸京者多き爲、豫定の如くビールをぬいてコンパを開催。大騒ぎを演ず。

七、二一　晴後小雨　鷲崎、佐々木、岩崎は霞澤へ。内田一人常念へ。池はノビたり。齋藤、毛塚、高原、原、新羅、松浦他部員外二名歸京。東京齒科醫專の先生が訪れ、先日穗高で同校生徒遭難の際非常に森川の世話になつたさうでその禮を言つて歸へられた。夕刻、先輩吉澤一郎、近藤恒雄の兩氏及吉澤氏の親類のT氏、望月達夫、案内下川隆雄の五名天上澤乘越をこへ槍澤小舍にて殺生より下りし柿原、小柳、小林、森川、榎本及吉澤氏令妹二人と合流し合計十二名の大部隊となつて入幕。夜は先輩の御馳走でおそく迄面

白く語り飲む。法大山岳部の岡田氏等訪ねて來られた。

七、二二　快晴　クマさん、T氏小柳、柿原、小林、森川、榎本、岩崎等炎暑をついて燒岳へ。コンちやん、森脇、望月、小谷部、和田、鷹野、驚崎、帝國ホテルの食堂でノビ、河童橋の邊へ納涼行。三時半の車で、クマさん、同令妹等T氏コンちやん、柿原、森脇、和田引上げる。急に靜かになつたが夜、骨拔きに又小コンパをやる。內田、常念、大瀧より歸幕。

七、二三　快晴　驟雨模様、午前中望月、榎本、岩崎の三名、常念を經て歸京。小柳、小林、森川、佐々木、驚崎の五名涸澤生活に出發、齋藤正治入幕。好い天氣なので一日附近でのびる。夜、温泉ホテルの寶子をカラカツて大いにしからる。T君大いにショげたり。

七、二四　快晴　皆が居る時は嫌な天氣で歸へつてから良いとは又皮肉な。或は部員の中に罪深き御仁が居たのかも知れぬ齋藤、小谷部、鷹野から霞澤へ、小谷部强あんまりのびたので申譯的に午後か尻の骨を打つ。人間並になつた。

七、二五　快晴　內田天幕を引上げて一人乘鞍へ。小谷部、齋藤錫杖岳へ出發。鷹野中尾峠迄一緒に行つたが昨夜の夢見(?)を氣にしてには・・かに變心歸幕。然し一人天幕番をするには恨めしい樣な日本晴だ。

七、二六　快晴午後山上霧深し　鷹野天狗岩へ。午後涸澤より小柳、小林、佐々木、驚崎、森川歸幕。皆、意氣軒昂たり。

七、二七　晴　一同のびる。午後部員外二名入幕。

七、二八　快晴　森川腹を一寸こはして歸京。夜、小谷部、齋藤槍平より歸幕。明日引上なので一同ビールの滿を引いて最後のコンパ

七、二九　快晴　一同天幕をたゝみ、懷しい思出の上高地を後に松本へ下る。テントは修繕の爲東京へ運ぶ事とする。

乘鞍岳

七、二八　晴　上諏訪(九、四〇)——松本（一、四五)——白骨温泉(三、〇〇)　今夏の上高地天幕生活は參加總員三十三名（內譯部員廿三名、部先輩二名、部員外學生五名、他三名）と云ふ空前の賑やかさ。テントの前に山と積上げたビールの空罐は道行く人々の目を驚かすものがあつた。（責任者　小谷部）

七、二九　晴　白骨(九、一〇)——湯川交叉點（九、五〇)——乘鞍林道(一〇、三〇)——冷泉小舍(一一、三〇)——乘鞍肩ノ小舍(一、三〇)——頂上(二、〇〇)——權現地——肩ノ小舍(六、〇〇)　西野　博　澤渡

七、三〇　晴　肩小舍(七、二〇)——平湯(二、三〇)

七、三一　晴　平湯(九、〇〇)——安房峠——中の湯——上高地(一、二〇)——松本

內藏之助、劔、黑部行

齋藤正治、他三名

八、一〇　晴後雨　新發田——直江津——松本——信濃大町——(自動車)——大夜半猛雨飯田屋に泊る。

八、一一　雨　松本(七、二五)——瀧の小舍(一〇、四〇)——一二、二〇)——出(八、三〇)——瀧の小舍(一〇、四〇)——一二、二〇)——白澤(一二、五〇)——一、一〇)——大澤村營小舍(四、五〇)

豪雨の豫報があつたので大出から傘をさして歩いたがそれらしいものに遇はなかつた。白澤出合で毒蟲に射され、腕が大根見たいに腫れ上つた。

八、一二　晴雲多し　大澤(七、〇〇)——針の木雪渓(七、二五)——針の木峠(九、四〇)——一一、〇五)——紫丁場(一一、五五——一、〇〇)——黑部川右岸(五、二五)——籠渡し——平左岸幕營(六、〇〇)

荷が重過ぎるので峠の上まで人夫を一人傭ふ。懸念した針の木谷も水量少く徒渉僅か三回、大して濡らさずに濟んだ。黑部川の河原に天幕を張つた。

八、一三　快晴　平(八、二〇)——御前谷(一一、一五)——御山谷(一〇、〇〇)——一〇、三〇)——丸山谷(一一、五五——一二、一〇)——內藏之助谷落口(一二、二〇——一、一〇)——榛の木平の小舍往復——內藏之助谷(二、一〇——二、四〇)——溯行——河原露營(六、三五)

朝の出發も遲かつたし、美しい黑部川を右に左に道草を食ひ、榛の木平の小舍まで駄足を運んだ爲めに、豫定狂ひ、內藏之助谷の右岸を溯行する。ブツシュや、陣竹の猛烈な藪を潛つたり、河原を歩いたり、時々踏跡らしいものを發見しても、直き見失ひ、左に高く搦み過ぎては河原に下り等して案外時間を食ひ日沒の爲め、河原に下りて露營を餘儀なくされた。でも皎々たる滿月の下氣持よくごろ寢した。

八、一四　晴後雨　露營地(七、〇〇)——瀧(八、三〇)——內藏之助平の一角(九、三〇)——九、五〇)——晝食(一一、〇〇——一二、四五)——雪渓(一、一五——一、三〇)——雪渓上部(二、四五——三、一五)——眞砂岳、富士の折立鞍部(四、四七——五、二〇)——大汝山(六、〇五——六、二〇)——雄山神社(六、三〇——六、五五)——一ノ越(七、二〇)——立山室堂(八、三〇)

早朝より藪潛りを開始、兩側の岩壁が盡き、立山と谷の上部が見えてホツとしたが、平の野營地たる草原に導くべき溝川見當らず、水量略等しい二股となり本流を定めるに迷つた。こゝで晝食を採る頃から黑雲頻りに空を蔽ひ、左を溯れば直ちに再び合した。此の附近に小流左より注ぎ、野營地を暗示したが天候と時間の都合上立寄らず、其儘本流を登る。雪渓の入口附近でM陷沒し驚く。所謂「雪瀧」の急峻な斜面には、眞劍に三本爪を利かせた。終ると內藏之助のカールまで緩斜面、左に捲いて尾根に出た。眺望皆

無。一の越邊より闇と霧深く、道を求めるに苦しんだ。
八、一五　雨　室堂（一二、四〇）――雷鳥澤（一、三〇――一、四五）――別山乘越小舎（三、一五――三、四〇）――劔澤小舎（四、〇〇）

朝地獄谷に行き、猛雨に遇ふ。同行のH兄、家事の爲めに劔を割愛新潟に歸る。劔澤では、大澤以來後になり先になりした慶應のT氏と大町の櫻井一雄に再會す。
八、一六　濃霧　滯在　ゾムメルシーを樂しむ。
八、一七　晴後小雨　源次郎尾根
劔澤小舎（七、三〇）――長次郎谷出合（八、一〇――八、二〇、〇〇）――第一峰（一〇、四五――一一、一七）――第二峰（一一、四五――一二、五五）――鞍部（一、一〇――一、三〇）――劔頂上（二、〇〇――二、四〇）――平藏谷を下る（三、四〇――劔澤出合（五、一五）――小舎（六、三〇）

ザイルの都合上、慶應の人達と同行する。長次郎谷を十數分登り、二番目の澤に取付く。第一峰邊よりガス深くなり。二五米下の展望を恣まゝにする。二股から三窓の雪渓が立派で誘惑する。
八、二〇　晴　池の平（六、四七）――仙人山乘越し（七、一〇）――

連日の天候にクサリ早朝劔頂上に立つ。久し振りの好晴と絶佳
池の平幕營（四、〇〇）
仙人湯の澤出合（八、三〇――八　四〇）――左岸の林道（九、三〇）――日電水平路（一一、一五――一一、五〇）――十字峽（一、三〇――二、一〇）――仙人谷（三、四〇――三、五〇）――阿曾原谷日電テント（四、二〇）

乘越しより赤旗により左の澤を下つた。仙人谷は歩きよいが、矢張り所々雪渓が切れたり薄くなつたりしてゐた。赤旗により左
八、一八　晴後霧　八ツ峰へ。
劔澤小舎（八、〇〇）――長次郎谷（八、三〇）――熊ノ岩手前（一〇、〇〇）――八ツ峰五、六峰のコル（一〇、二〇――一〇、四〇）――第六峰手前（一一、一五――一一、四五）――六峰（一一、五〇）――第八峰（一二、三〇――一二、四〇――二、二五）――長次郎谷――劔澤出合（三、一五――三、四〇）――劔澤小舎（四、〇〇）

朝よかつたので八峰全部を終へて劔頂上に出る積りであつたが長次郎で水を探したりして時間を食ひ、五、六峰コル邊よりガス深くなる。ガスの濃いのにクサリ、三窓もやめ、ゆつくり伸びて長次郎を滑る。天幕は風が强かつた。
八、一九　快晴　三田平（五、一〇）――劔頂上（七、一〇――八、二五）――小舎（九、五五――一二、〇五）――眞砂澤出合（一二、四五――一、一〇）――劔澤二股（二、一〇――二、三五）

岸に分入ると林道が切開かれ釣橋の上に出る。日電の水平路は實に立派で樂過ぎる位だ。黒部の廊下の壁と水の色はすつかり僕等を有頂天にさせた。日電の人達の好意により空いてゐる天幕を開放して戴いた。立派な温泉にも浸る。

八、二一　晴　阿曾原（八、〇〇）——折尾谷（九、二五）——志合谷手前、水平路と分れて下る（九、五五）——櫓の平（一一、三〇）——猿飛（一二、三五——一、〇〇）——小屋の平電軌乘場（一、五〇）——鐘釣温泉（二、一〇——三、四七）——宇奈月（四、一五）

志合谷の手前で水平路と分れ、急坂を黒部の磧近く下る。これより小屋の平まで汗を絞りつゝ歩く。日電の工事は實に大したものである。電氣軌道に乘り途中鐘釣で一浴して宇奈月温泉で旅裝を解いた。

カクネ里生活

八、二三　晴　築場（二、二〇）——黒澤峠（三、三〇——三、五〇）
鹿島造林小舍（六、〇〇）

八、二四　晴後小雨　造林小舍（九、四〇）——荒澤出合（一〇、三〇——一〇、五〇）——林道終點（一、〇〇——一、三〇）——二俣下流二丁餘の河原にて野營（六、〇〇）

八、二五　雨　野營地（六、五〇）——二俣岩小舍（八、〇〇）

八、二六　曇後雨　カクネ里偵察。
小谷部全助、森川眞三郎、鷹野雄一

八、二七　晴後曇　岩小舍附近散歩。

八、二八　曇後雨　岩小舍（六、〇〇）——カクネ里奥壁直下（八、三〇——八、五〇）——第七ルートの尾根登攀——第二岩峰下にてザイルを解く（一一、二〇）——國境（一二、二〇）——北槍頂上（一、〇〇）——キレット小舍（二、〇〇）

小谷部、鷹野兩名にて行く。森川一人岩小舍で留守番。
キレット小舍に着いて暫く後豪雨の爲宿泊。

八、二九　暴風雨　小舍滯在、

八、三〇　霧後晴　キレット小舍（一、〇〇）——カクネ里——岩小舍（四、四〇）

八、三一　曇後雨　岩小舍（七、〇〇）——カクネ里——キレット小舍（一、三〇）
澤出合（九、二〇）——カクネ里——キレット小舍を引上げる。
天氣依然として惡き爲、二俣の岩小舍（一、三〇）

九、一　曇後雨　キレット小舍（七、〇〇）——北槍（九、〇〇）——東尾根第二岩峰下（一〇、二〇——一〇、四〇）——同岩峰登攀——岩峰上（一一、一五）——北槍（一二、〇〇）——南槍（一二、三〇）——冷池小舍（一、五〇——三、三〇）——冷澤小舍（五、〇〇——五、二〇）——造林小舍（六、一〇——六、二〇）——鹿島（七、三〇）

九、二　雨　鹿島（八、三〇）——大町（一〇、五〇）——歸京

相當の登攀をなすべく張切つて來たのだが連日の惡天候ですつかりしよげて了つた。雨の日は徒然なる儘に立派なカマドを岩小

舎へ設けたり、カクネ里への道を切開いたりして過したが結局最後迄雨で毎日出掛けて歸る時は大低グショぬれだ。廿八日は森川を岩小舎に殘して鷹野と（7）を登つて見たが面白いクレツテライはほんの下部だけ、後は簡單。雨の中を北槍迄往復してキレツト小舎へ行くと丁度番人と入違ひになつた。天候は益々惡化して暴風雨になつたので止むなく泊る。夜半は猛烈に荒れて朝迄續き翌日を滯在。卅日やゝ好くなつたので霧の中をキレツト澤へ下り我家の樣な岩小舎へ着くと、森川は僕達がてつきり遭難した物と思つて書置して救援處置をとらうと出發せんとして居た所だつた。大川澤を下る積りだつたと言つてたが增水の甚だしいこの澤を降つたら或ひはミイラになつたかも知れないと三人顏見合せて大笑ひした。非常な增水で大川澤は駄目なので鹿島槍越えして歸らうと、次の日はキレツト小舎泊、翌る九月一日、曇つて而も遠望の利く嬉な日だつたが出發。北槍から東尾根へ遊びに行き第二岩峰を登つてる內にクサつてしと〳〵と赤岩尾根から下山。鹿島の治喜衛さんの所へ泊る。相變らず素朴な親切が此上なく僕達を嬉しくさせる。今春おぢいさんが亡くなられた由謹んで哀悼の意を表して來た。（小谷部）

劍より藥師岳、藥師澤、有峰

八、二五　上野（八、五五）夜行發
　　林　俊介、岩崎利一
八、二六　晴　富山（六、五〇——七、四五）——千垣（九、〇〇）——藤橋（九、三〇——一〇、〇〇）——稱名ホテル（二、三〇）
　上野から急行で行つたものは、富山驛からすぐに南富山へ向はないと、折角の急行も意味がなくなる。藤橋までトロに乘る。それから二里たらずの道に一日かゝるほど荷は重かつた。
八、二七　晴　ホテル（七、三〇）——稱名小舎（七、四〇）——彌陀ケ原（一〇、三五）——弘法小舎（一〇、五〇——一二、〇〇）——追分小舎（一、〇〇——一、一五）——鏡石天狗平小舎（五、〇〇）
　尾根までの登り道は良い。鏡石小舎はなくなつて、その少し上に天狗平小舎が新築された。冬にも良い小舎である。
八、二八　曇　夜雨となる。小舎（七、〇〇）——地獄谷（八、二〇——八、三〇）——雷鳥澤下（九、〇〇）——劍御前小舎（一二、〇〇）
　地獄谷の道は近い。宗作の死んだ所には危險と言ふ立札と柵があつた。四人の兄弟の中三人までが、山で、言はゞ人のためにつくして死んでゐるのは何の因果なのだらう。
八、二九　暴風雨　滯在
八、三〇　雨　夕方晴れる。小舎（八、〇〇）——劍御前（九、〇〇）——鞍部（九、四〇）——平藏ノ頭頂上（一一、〇〇——一一、三〇）——劍岳頂上（一二、四五——一、〇〇）——劍澤小舎（四、〇〇——四、一五）——劍御前小舎（五、三〇）
雨中劍へ登る。劍御前の尾根道を採り、霧の中を進む。岩場と

なつてから、登り口分らず、つまらぬ所で一苦勞する。頂上でも唯ケルンと祠を見たゞけ。劍澤小舍に休んでゐるころから山は晴れ始めた。源次郎も明日の快晴を保證して呉れた。

八、三一　曇、後雨　小舍（七、三〇）――大汝山頂（九、四五――一〇、〇五）――雄山神社（一〇、二五――一〇、四五）――一ノ越（一一、一〇――一一、五〇）――淨土山（〇、三〇）――淨土第一峰下（一、一〇）――ザラ峠（三、一〇）――五色小舍（三、四〇）

皆の保證に反して意外にも曇つてしまつた。荷は未だ相當に重く、大汝への登り、雄山からの降り、いづれも苦しい。淨土から雨となつてしまつた。淨土は一ノ越から行つて、第一峰は地圖の様に右を卷くが、第二峰は左を卷く新道が切られてゐる。ザラ峠への降り道も、もとのより東の方に切り直されてゐる。

九、一　曇小雨　小舍（八、一〇）――奥大瀉山（八、四〇――八、五〇）――越中澤岳（一一、〇〇）――スゴウの頭（一二、三〇）――スゴウ乘越（一、〇〇）――スゴウ小舍（一、四〇）

越中澤岳までは割に樂だつたが、スゴウの頭を越えなければならないのには、うんざりしてしまふ。この日、雨中にも拘らず、劍、立山、鹿島槍、針ノ木、燕、槍、藥師など、遠近の山々は皆望みえられる妙な天氣であつた。スゴウ小舍の場所は山日記のそれとは場所が全く異つてゐる。既に小舍番は引上げてゐた。こゝまで來てやつと山へ來た様な氣がした。劍御前と言ひ五色と言ひ小舍番の話してゐることはいつも金のことばかり、これが北アルプスなのかも知れない。

九、二　雨　滯在

九、三　曇　小舍（七、〇〇）――藥師岳北峰（一〇、〇〇――一〇、五〇）――藥師岳頂上（一二、〇〇――一二、一〇）――藥師澤を降る――右俣中俣出合（四、三〇）露營

薄日指す藥師の廣い尾根を、今は紅葉して赤に黃にだんだらに染る高山植物を踏みながらの氣持よき登り、そして東に開く二つの見事な藥師のカール。藥師には北アルプス的な――劍、穗高的なところはない。寧ろ南アルプスの悠大さと、秩父の靜けさとを併せ持つ山である。山麓には多くの濕原を抱いてゐる。

藥師澤は頂上の南の源流から下つた。約四時間半で出合に着いた。瀧も滑もない。明るい谷である。夜シュラーフザリクだけで寢たところ、いつのまにかびつしよりぬれる程雨が降つてゐた。

九、四　雨　右俣中俣出合露營地（一〇、〇〇）――藥師澤黑部本谷出合（一一、一〇）――避難小舍（一一、二五）

こう毎日雨では何ともしようがないので有峰へ引上げるつもりで荷をまとめてゐたところへ、平の遠山が來て小舍と道を敎へてくれたので、今夜は其處へ泊つて岩魚でも釣つて食べようと思つた。道は仲々良い。出合の橋は殘骸もない。而し水量は少く徒涉も容易である。この出合から下流右岸に小舍は見える。劍御前と言ひ五色と言ひ小舍番の話してゐることはいつも金のことばかり、これが北アルプスなのかも知れない。

近い岩魚で舌鼓を打つた。

九、五　小舍（七、三〇）——出合（七、三〇）——左俣（九、〇〇）——太郎兵衛平小舍（一一、〇〇）——一二、〇〇）——道を迷ひ小舍に戻る（一一、三〇）——有峰（五、〇〇）——眞川（三、〇〇）——眞川峠（三、三〇）

雲の平行きは斷念して有峰へ向ふ。歩道は明瞭に切られてゐる。道は小舍から行けば藥師澤黑部本谷との出合までは左岸を出合では本谷を横切つて藥師澤と本谷との間の細い尾根を登り濕原を通り森林に入る。再び濕原に出れば藥師澤左俣は近い。左俣を横切り中俣の左岸を行きやがて河原に降る。ガレに突當りこゝで右側に渡る。橋脚のみある。こゝからしばらく道は不明瞭となるが、大體のところ川と平行して右岸を行く。川が又二分するところで右より入る澤を横切り正面の尾根へ取付く。こゝから太郎兵衛平まで、道は尾根の上を屈曲しつゝ登る。小舍は地圖の場所でなく、太郎山の山の字と至有峰の至との字を結ぶ線と縱走路との交る點あたりである。上ノ岳小舍は全く誤りで、今は太郎兵衛平の小舍となつて、以前より北へ移つたのである。こゝから有峰までは大體地圖通り、併し藥師澤の道よりも惡い。

有峰は今は全く廢村である。やがては全部落水の底となると言はれてゐるが、今は登山宿が一軒殘つてゐるだけ、他は全く無人である。山の上から見下すとき點在して見える家も、一歩村へ入ればどこにあるやら少しも見當つかない位に、すゝきが脊より二三尺も高く密生してゐる。うかうかと人の居るつもりで有峰へ來るとひどい目にあふかも知れない。尤も、盆地の入口の橋のあたりには發電工事の人夫小舍もあり、又その外にも人夫のたまりはあるから場所さへ分れば何とかなるだらう。兎に角有峰も昔話で聞く有峰と全く異ることに注意する必要がある。

九、六　曇　有峰（八、〇〇）——第二の釣橋（一〇、三〇）——發電工事事務所あり——第二の釣橋（一一、一〇）——大谷（一、二〇）——第三の釣橋（一〇、三〇）——眞谷（三、〇〇）水電取入口事務所あり——千垣驛（六、〇〇）

有峰から千垣までの和田川沿ひの道は長い。全く長い。六里半七時間と言つても空身でなくてはこうは早く歩けない。たつぷり一日行程である。有峰の盆地の出口に一寸した峠みたいな登りがある。美しい白樺の間から今は滅びてしまつた有峰の里が見える何とも言へぬ氣がした。

×　×　×　×

相當に長期に亘つたこの旅も雨に降られ通しで終つた。實際山に入つてから出るまで、山中で日光に當つたことはなかつた。惠まれない旅ではあつたが、氣の合つた二人であつたればこそ、終りまで樂しく旅することができたのだと信ずる。着てゐるものは何から何までいぶされて、白い所がない位、そして藥師澤では水たまりみたいな所で寢て、夜中の雨でびつしより濡れてしまつたことなどの、つらいこともあつた。しかし黑部の太つた大岩魚を

ふんだんに焼いて食べたその喜びと共に、いづれも皆私の生涯の嬉しい思ひ出となるにちがひない。（林）

南アルプス

昭和九年（一九三四）

白峰三山、赤石、悪澤岳　森川眞三郎、榎本直司、他一名（人夫）名取久平、清水福永

七、一一　曇　新宿發（一一、五五）夜行

七、一二　曇後雨　甲府（四、四三）——六、〇〇）——乗合にて——有野（六、四〇）——大曾利（九、五〇）——〇、三〇）——夜叉神峠（三、三〇）——鮎差（四、三〇）

大曾利で人夫を伴ふ。名取久平も大分年を取つて居るし、永いコースでもあるので、清水福永と云ふ若者を伴ふ事にした。此の日は蝮平小舎まで行き度かつたが、重荷と、ドシヤ降りの爲に鮎差の假小舎に泊ることゝする。此の小舎は全く一時的のものである。

七、一三　雨曇　滞在。

吊尾根に遠慮して一日中雨を眺め乍ら暮した。明日を考慮して早く寝る。

七、一四　晴時々霧　小舎（五、〇〇）——荒川出合（六、〇〇）——吊尾根取附き（六、三〇）——池（九、二〇）——一〇、〇〇）—北岳頂上（四、〇〇）——北岳小舎（四、三〇）

數日に亘る豪雨に野呂川の増水は物凄い程で、荒川出合の假橋も危ぶまれたが幸に流されないで在つた。一〇、二〇六〇米邊にある池は久平の言に依ると殆ど年中水があるとの事である。

此の日は偶然にも遭難者の死體に接して了つた。場所は北岳登路が最後のピークにかゝる所で、丁度三、一〇〇米附近のガレタ處である。昨日の雨でやられたらしい。右足の打傷、及び一、二間下方に杖の落ちて居た事から、多分雨中あせつて北岳小舎に向ふ途中、此處で足を滑らせ墜落、歩行不能となり遂に凍えたものと推定される。埋葬するに一介の土なく、火葬するに薪木も無いと云ふ仕末に、唯默禱を捧げるの外に手のつけ様がなかつた。折から北岳は霧深く、自らの危險も感じて逃れる様に小舎に急いだ。

七、一五　晴後曇　小舎（七、〇〇）——間ノ岳（九、五〇）——一、一五）——農鳥小舎（〇、三〇）——一、五〇）——西農鳥（二、三〇）——農鳥岳頂上（三、〇〇）——三、五〇）——農鳥小舎（五、〇〇）

天候が悪く熊ノ平野營不可能と見て、明日の強行を覺悟の上、ゆつくり出發する。霧が猛烈な勢で尾根を吹飛ばして居た。今年は殘雪多く間ノ岳附近では處々で痛快なグリセードが出來た。

七、一六　雨霧　小舎滞在。

終日降つたり止んだりして居たが、午後から晴間を見て間ノ岳

の雪渓へ遊びに行く。歸路は霧にまかれて苦勞した。

七、一七　晴　小舍（五、一〇）——間ノ岳（六、一五）——三峰山（六、四五）——熊ノ平（七、二〇——七、三五）——新蛇抜（九、三〇——一〇、二〇）——鹽見岳（一二、〇〇——〇、五〇）

三伏小舍（三、三〇）

今年東股雪投澤の少し下手に小舍が出來て、農鳥から三伏へ出る人は其處で一泊するのが普通で、さもなければ熊ノ平に野營しなければならない。最初、農鳥小舍から等高線に沿ふて間ノ岳の横腹を巻いて直接熊ノ平へ出る筈の所、濃霧にまかれ間ノ岳頂上にルートを取つた。熊ノ平から鹽見岳までは踏跡が甚だ不明瞭である。新蛇抜の下のガレは通過するのに一時間以上もかゝつた。三伏には百人位も收容出來る立派な小舍が出來た。番人も居て、風呂にも入れる。今日は久し振りに素晴らしい眺望だつた。

七、一八　曇後豪雨　小舍（五、四五）——小河内岳（六、一五）——高山裏（一〇、一〇——一〇、一六）——荒川前岳（〇、三〇——〇、〇〇）

朝から霧が立込めて居たが三伏から一時間も行つて尾根に出た頃から豪雨となつた。道が確かなのに安心して引返さずに前進した。高山裏へ着いた時は臍までぬれてしまつた。三伏から約五時間、途中雨の中の立つたまゝの晝食時間六分を除けば、凡どノーストップで荒川小舍まで來た譯だ。夜は餘分の食料を全部出して祝宴？をあげた。外は物凄い風である。

甲斐駒ケ岳

七、一九　晴　新宿（一一、五五）夜行

七、二〇　曇時々雨　韮崎——台ケ原（六、一〇——一一、二〇）——屏風小舍（一二、四〇）——七丈小舍（一、三〇——二、一〇）——笹ノ平（一〇、二〇）

天氣惡化の爲、小舍に一泊す。頂上をきはめず。

遠藤竹雄

七、二一　曇時々雨　七丈小舎(五、〇〇)——駒頂上(六、三〇)——摩利支天(七、四〇)——地獄谷——七丈小舎(九、二〇)——屏風小舎(九、四〇)——尾白渓谷を下る——噴水ノ瀧(一二、一〇)——途中道を失ふ——台ケ原(五、四〇)——韮崎——歸京

鳳凰山

齋藤正治、小柳二郎

七、二〇　曇　韮崎(五、〇六)——祖母石(六、〇〇)——鷹ノ田(八、一五——八、三〇)——鳥居峠(九、一五——九、三〇)——青木鑛泉(一一、一〇——一、一五)——南精進瀧(三、三〇)——白糸ノ瀧附近(六、〇〇)——五色瀧(七、〇〇)——北御室小舎(七、三〇)

重荷と暑熱と急坂にへばる。大崩壊邊で小柳を見失ふ。約一時間おくれる。ドンドコ澤はいやな澤である。

七、二一　曇後雨　小舎(八、〇〇)——賽ノ磧(九、四五——一〇、一〇)——高嶺(一二、〇〇——一、〇〇)——白鳳峠(二、三〇——三、〇〇)——野呂川(五、一〇)——廣河原小舎(五、三〇)

高嶺の登りにかゝる邊より小柳膝の痛みを訴へ、時間遲れる。白鳳峠で雨となり駈け降りて廣河原に到り又迎へに行く。廣河原小舎は北岳遭難者の死體運搬の爲め登つた芦安の人夫と北岳より降つた高千穂の連中で滿員であつた。

七、二二　雨　滯在。

人夫は豪雨の中を下山したが、又北御室よりニパーテイ來り、滿員となる。

七、二三　雨後曇　小舎(八、三〇)——野呂川徒渉左岸(九、二〇)——斷崖(一〇、四〇——一二、二〇)——小舎(一、五〇)

天候は惡し、膝痛癒へず、白峰を抛棄して、芦安へ下山すべく野呂川の磧を下つたが、斷崖に遇ひ約一時間半道を求めて得られず空しく戻る。

七、二四　雨　小舎(一一、三〇)——野呂川徒渉左岸(一二、一五)——斷崖(一、三〇——二、〇〇)——嘉助澤(四、〇〇——四、二〇)——ゴトゴト澤(六、一〇)——須場尾根(八、〇〇——八、一五)——深澤(九、一〇)——五葉尾根小舎(九、四〇)

食料拂底の爲め豪雨の中を奈良田の人夫を連れた高千穂の人達と共に野呂川の濁流を涉り、芦安へ向ふ。迷ひ易い磧道を終へて五葉尾根の登りにかゝる邊より雨と空腹の爲め各自離れる。小舎で夜半過ぎ迄待つたが大部分は露營したらしく、小舎は僕等と人夫と四人のみ、

七、二五　曇、煙霧　小舎(一一、三五)——三五)——夜叉神峠分岐點(一一、三〇——六、〇〇)——韮崎(七、〇〇)

皆の揃ふを待つて出發する。眺望皆無であつた。(齋藤)

甲斐駒ケ岳、鋸岳

森川眞三郎、榎本直司

一〇、二〇　晴　新宿發（一〇、四五）夜行
一〇、二一　晴　日野春（三、三四）——柳澤（四、三〇）——駒ケ岳神社（五、四〇）——六、〇〇）——黒戸山の尾根のガレ（九、三〇）——戻る——道に出る（一〇、〇〇）——尾根（一一、〇〇）——笹平（一一、三〇——一二、三〇）——刀利天（二、一〇）——二、四〇）——五合小舍（三、二〇）
一〇、二二　晴　五合小舍（八、三〇）——七合小舍（一〇、〇〇——一一、〇〇）——鳥居（一一、四〇——一二、〇〇）——駒頂上（一、三〇——四、二〇）——六合小舍（五、二〇）
一〇、二三　曇　六合小舍（六、三〇）——三ッ頭（七、〇〇）——第二高點のピーク（七、三〇）——ギャップの底（一一、〇〇）——中岳（一一、三〇）——第一高點（一二、三〇）——編笠岳（二、〇〇）——横岳峠（三、三〇——三、四五）——釜無澤（四、二〇）——四、三〇）——武智鑛泉
一〇、二四　曇雨　鑛泉（一一、〇〇）——富士見（一二、〇〇——一、〇五）——歸京

廿三日相變らずの上天氣。道は尾根傳ひに三ッ頭山へとのびてゐる。此の邊北斜面の林中は新雪で一面に白い。遙か下を流れる釜無の支流は紅葉した木々に蔽はれ流れの音が聞えるだけである。やがて第二高點が見え出した。急な石溪を登つて尾根へ出る。第一高點がすぐ手のとゞく樣な處に見えその右には北の山々が雲の上に白い。灌木の茂つた西北斜面を下りる。雪が深い。クラストした上はアイゼンの必要を感じる。スリップし相で危い。下には中ノ澤が大きな地獄の口を開けて居る。七十米ばかり下つてギャップをのぞいてみるとフエイスは直立して所々オーバーハングして居る。ザイルを持たない僕等には下りられ相もない。更に五十米ばかり下つてやつとギャップから出る急なクーロアールの直下へ出た。見上げると秋晴れの空がギャップの上からのぞいてゐる。其の間隙は二人が並ぶ事が出來ない程である。一杯雪がつまつてゐる。ピッケルも持つて來なかつたので、仕方なくジャックナイフで一歩一歩ステップを切り乍ら登る。岩は皆氷が附いてゝ手掛りがないので危險だ。午後に近い日ざしは薄氷を非常に剝げやすくして居る。もう十五、六米で鞍部と云ふ處で森川の足場が急に剝れた。十米ばかりスリップしたが、幸ひテラス樣の地點で止る事が出來た。ギャップの底へは十一時着。休む暇もなく直ぐルートを求めた。森川が眞直ぐに登つてみたが五米ばかり登るともう其上はオーバーハングにぶつかつて何處へも避けられない。やつと登り得る處を發見。が此處も岩がもろいので非常に注意を要する。中岳、小ギャップを經て第一高點へ。小ギャップは見た程手惡くない。此の邊小規模乍ら面白い岩場が相當にある。ザイルは三十米で大概間に合ふと思ふ。第一高點より踏跡を求めて編笠經由、橫岳峠より釜無川へ下つた。何處かゆとりのある明るい谷だ。ランタンの光で澤歩きはおぼつかない。武智鑛泉まではとても長

かつた。此の途中に岩小舎がある。（榎）

甲斐駒、仙丈、赤薙澤　堀岡　清、林　俊介、高原龍雄、岩崎利一

一一、二　晴　新宿發（一〇、四五）——（自動車）——柳澤（三、〇〇）—一一、三　晴　韮崎（二、五八）——（自動車）——尾根（一二、〇〇）——黒戸山（三、〇〇）——五合小舎——七丈小舎（五、二五）

柳澤で一眠りする。七丈小舎には十三人の相客があつた。

一一、四　晴　小舎（八、〇〇）——駒ケ岳（一〇、三〇）——一二、〇〇）——六方石——駒津峰——仙水峠——北澤長衛小舎（四、三〇）

稀なる快晴にめぐまれて、頂上でのびる。北の雪が眼を惹く。仙水峠は氣持が良い。

一一、五　晴　小舎（八、〇〇）——小仙丈岳——仙丈岳（一一、三〇）——一、三〇）——小仙丈岳——小舎（四、〇〇）

空身で仙丈へ行く。北岳が白く輝く。仙丈に雪はない。

一一、六　曇後吹雪　小舎（七、三〇）——仙水峠（九、〇〇）——栗澤山——淺夜峰（一二、三〇）——早川尾根小舎（三、三〇）

堀岡一人北澤峠を越えて伊那へ向ふ。栗澤山にかゝる頃より雲行き惡くなる。早川尾根小舎は割に良い。暗くなつてから吹雪となる。

昭和十年（一九三五）

甘利山　原　鐵三郎、高原龍雄

六、一五　晴　新宿發（一〇、四五）夜行

六、一六　曇後晴　韮崎（三、〇〇）——甘睡荘（三、三〇）——（五、三〇）——甘利山頂（七、二〇）——甘睡荘（一、〇〇）——韮崎（二、〇〇）

山頂は濃霧にて展望きかず、又鈴蘭も殆どなく甚だ殘念であつた。

北岳バットレス

六、一九　晴時々曇　小谷部全助、鷹野雄一、森川眞三郎
居峠(八、三〇)═祖母石(六、〇〇)──鳥
韮崎(五、三〇)──青木鑛泉(九、四〇)──一一、四〇)──
北御室小舎(五、一〇)
ドンドコ澤の急坂は重荷の爲に意外に暇取つた。
六、二〇　曇　霧深し　小舎(一〇、一〇)──地藏オペリスク下
(一一、一〇)──一一、五〇)──白鳳峠(一、三〇)──廣河
原小舎(四、〇〇)──大樺小舎(六、〇〇)
六、二一　雨、霧　滯在。
六、二二　曇、濃霧　午前中バットレス直下の岩小舎邊りまで偵
察に行く。
六、二三　晴後曇　小舎(六、三〇)──岩小舎(七、〇〇)──雪渓
の奥、岩壁直下(八、〇〇──八、三〇)(アイゼンを取り、輕
裝してルートを觀察する。結局第三尾根を取ることに決
定。)──中央の大殘雪(一一、三〇──一一、四五)──急
な小リッヂ終り(一、三〇)──岩棚(食事)(二、〇〇──二、
二〇)──北岳頂上(二、五〇──三、二〇)──吊尾根より
大樺澤分岐點(三、五〇──四、〇〇)──大樺小舎(五、〇
〇)
六、二四　豪雨　小舎(八、〇〇)──廣河原小舎(九、一〇──九、
四〇)──白鳳峠(一二、〇〇)──北御室小舎(二、〇〇)─
─青木鑛泉(三、三〇──五、四〇)──祖母石(七、三〇)─
─韮崎(九、三〇)

昭和九年(一九三四)

木曾駒連峰

八、三一　晴　須原(九、〇〇)──水電取入口(一一、〇〇)──
百川合流點小舎(一一、五〇)──ケサ澤分岐點小舎(一、五
〇)──滑川合流點野營(五、〇〇)
九、一　雨　野營(六、三〇)──二俣(七、二〇)──引返へし點
(九、二〇)──ケサ澤の小舎(二、〇〇)
登り口が見附からず、ケサ澤をつめ、引返へす。雨烈し。
九、二　晴後雨　小舎發(七、〇〇)──滑川小舎(八、四〇)──北
澤出合(一〇、〇〇)──北澤三角點(一、〇〇──一、一〇)
(二、四〇)──スリ鉢小舎(三、一〇)
九、三　雨後晴　滯在。
九、四　晴　小舎發(七、〇〇)──尾根(七、一五──八、一五)─
─空木岳(九、一五──一〇、〇〇)──檜王峰(二、四〇)──木曾殿越(三、〇〇──
(一一、〇〇)──檜王峰(二、四〇)──木曾殿越(三、〇〇──
三、三〇)──二七一一米三角點(四、〇〇──二六八〇米三角點
、三〇)──宮田小舎(六、一五)──駒頂上──木曾小舎(六

(雜記中の「北岳バットレス行」を見られたし。)

中央アルプス

、四〇）

九、五　曇　頂上發（八、〇〇）――五合目小舍（九、二〇）――河原着（一〇、一〇）――社務所（一一、五〇）――上松（一、三〇）――歸京

伊那川本流とケサ澤との合流點に人夫小舍あり。此處から本流を經て倉本へ通ずる道ありと。更に滑り澤（フクドオチ）の出合三角洲の一寸本澤寄りに掛小舍あり。以上共に冬期宿泊可能。

近畿方面

比叡山

昭和九年（一九三四）

一一、二三　晴　京都―八瀬―四明岳―比叡山―坂本―大津―京都

秋晴れの叡山に紅葉を探る。比良其他遠く近くの山々の眺めも亦良し。

森脇芳之

湯ノ山越え

一一、二四　晴　柘植（五、三〇）――日野（六、一八）――音羽（六、四〇）――七、三〇）――大河原（九、三〇）――湯ノ山越え（二、〇〇）――湯ノ山溫泉（三、〇〇）――四、五〇）――名古屋（五、二五）

林　俊介

鈴鹿山脈の中央部武平峠を越える。大河原は田舍びた快い部落である。松尾川の水源は明るい谷をなす。峠近くは炭燒道で迷ひ易い。雨乞山、御在所山、鎌ケ岳等へは尾根通しの良い切開がある。湯ノ山の湯はぬるい。

中國及四國方面

窓ケ岳

昭和九年（一九三四）

七、七　快晴　廣島（一、四〇）――古江――山田――原田――平岩――中地――魚切（四、三〇）――窓ケ岳（五、三〇）――五、

森脇芳之

六甲、摩耶山

八、二六　曇　芦屋―苦樂園―寒天小舍―六甲天幕村。

八、二七　晴　六甲―摩耶山―二十渉―布引―神戸。

小谷部全助

比叡山

四五）——魚切（六、一〇）——五日市——廣島

昭和十年（一九三五）

石鎚山

森脇芳之、他一名

八、二二　晴　古河（午後六、一五）——里川——行者堂——成就社——（八、一〇）

左手に山川のせゝらぎを聞きつゝしつとりした山道を、蚯蚓の時折光るのを眺めつゝ寢靜まつた成就社へと辿り着く、頭の上には滿天の星が笑つてゐた。

八、二三　快晴　成就社（六、三〇）——一ノ鎖——二ノ鎖舍（九、〇〇——九、一五）——三ノ鎖——頂上（九、五五——一〇、一五）——天狗岳——三面河渓合點（二、〇〇——二、四〇）——龜腹岩——關門（三、一五）——三ツ崎（四、三〇）

目覺むれば秋を思はせる空の色。石鎚は信仰の山だ。森の上に岩肌を見せてゐる。頂上から時節を少し外れた法師の法螺の音がヨーデルの如く流れてくる。鎖場は思つた以上詰らなかつた。ホールドが殆んど磨滅してゐた。虻が馬鹿に多い。頂上から西冠岳を經て二ノ森へ續く線は大菩薩をしのばせる。麓は霞に包まれ其の後方に瀬戸の内海が見える。土佐は曇つてゐた。面河へ下る道から振返へる石鎚は寫眞に見る臺灣の山々の姿があつた。天氣は朝からじわ〳〵暑かつた。

伯耆大山

森脇芳之、他一名

八、三〇　曇　大山寺部落（八、〇〇）——金門——二俣——右俣——尾根道（一〇、四五）——三角點（一一、一〇）——劍ケ峰（〇、四〇）——寶珠山尾根——大山寺（二、一〇）

天氣ははつきりしない。金門から賽の磧を辿り、右俣に入つて一番右手の澤をつめる。小さい瀧を越へて水流に沿つて登る中に斜面に三米ばかりの瀧壺の様な穴が口を開けてゐる。その穴の右手を搦んでつめに、殘雪のあるガラ場を過ぎると第二の瀧がある。高さは低いがホールドが少い。それを越すと所々に中休みのテラスを持つたホールドの多い岩場が三段に續いてをり、その上は緩い第二のガラ場となる。それをつめきると三角點から四丁ばかり下の登山道の尾根に出る。三角點附近には這松と見間違ふ様なキャラの木が一面に生え、三俣蓮華附近を歩いてゐる様な氣分に誘はれる。三角點から細い尾根續きを劍ケ峰へ辿り一休みして本谷奥の北絶壁を眺め乍ら大山寺へと下つて行く。麓の方は雲が幾分切れたのか日の光が遠い彼方を照らして居た。颱風の殘りが未だ續いて居るのだ。

スキー練習

昭和九年（一九三四）

關と燕溫泉

柿原謙一、林　俊介

一二、一七　晴　輕井澤――關山――關溫泉
一二、一八　雪　スキー練習。
一二、一九　晴　スキー練習。
一二、二〇　雪　クロフ尾根へ行く。未だ雪少し。
一二、二一　曇　關溫泉――燕溫泉
一二、二二　晴　燕溫泉――關――關山――野澤溫泉合宿へ。

冬季スキー合宿日記

（野澤溫泉、酒屋旅館）

期日　十二月廿日――廿九日

一二、二〇　晴　先發者(1)岩崎利一、唯一人午前九時到着。第一ゲレンデにて練習する。積雪少し。

一二、二一　晴　岩崎一人、第一ゲレンデで滑る。

一二、二二　晴　岩崎一人、第一ゲレンデで滑る。相變らず晴天にて少量の積雪變化なし。夕刻六時半(2)林俊介、(3)柿原謙一の二名到着す。

一二、二三　晴後雨　今日より正式の合宿とす。昨夜東京發本日朝當地着豫定の一行來らず。その中御大堀岡兄より電報來る。野澤雪少なき爲關溫泉に行く由。

林、岩崎の兩名午後五時五〇分關へ出發。柿原一人午後二時半歸京。

△野澤雪少なき爲、關溫泉中村屋にて合宿をなす。

本日午後二時到着者左の如し。

(4)堀岡清、(5)小林重吉、(6)新羅二郎、(7)高原龍雄、(8)原鐵三郎、(以上部員)(9)板垣禮作、(10)北野進、(11)江夏喜兵衛、(12)青木二郎、(13)和田榮達、(14)稻葉薫、(15)松尾正朔、(16)齋藤文一、(17)吉田貞一、(18)藤森信太郎、(19)澤田仁、(20)大谷恭一、(21)川島稔、(22)今井一郎、(23)菊地泰一郎、(24)西田定治、(以上部員外)

午後十一時半、林、岩崎の兩名關へ到着

一二、二四　雪　コンデイション良好。

午前中、裏のゲレンデにて練習。

午後、上級者は尾根スキー場へ。

初級者は五最及澤スキー場へ。

一二、二五　曇後雪　午前中、十一名燕へ。習。午後堀岡、小林、板垣、北野、江夏、青木、齋藤、の七名は野澤溫泉へ。吉田歸京。一同五最迄見送る。滯在者十五名なり。

一二、二六　雪　夜の積雪一尺餘。

午前中ゲレンデにて、初心者に全制動のコーチ。

新羅、岩崎、高原、松尾、澤田、大谷、今井、藤森、菊地西田、川島の十二名は午後一時十五分中村屋發、野澤へ向ふ。林、嚴父重體の電報あり、急ぎ歸京の途につく。

和田、稻葉の兩名居殘る。關溫泉の合宿を今日で解散す。

×　×　×

野澤溫泉

一二、二五　午前十時（25）遠藤竹雄、野澤へ到着。ゲレンデに雪少し。上ノ平にて一尺五寸。

午後七時半　堀岡、北野、齋藤、青木、江夏、板垣の七名、關より來る。夕方より降雪。

雪祭を行ふ。靈驗あらたかなり。

一二、二六　積雪ゲレンデにて一尺。

一同、上ノ平まで登る。

午後七時半、關を引上げて新羅、高原、岩崎、原、藤森、澤田川島、今井、菊地、大谷、西田、松尾の十二名到着。（26）青木欣司（部員外）新たに參加。

一二、二七　晴後雪　關より十二名來りし爲、野澤合宿俄然活氣を呈し、愉快なり。總員二十三名。豫科、專門部の體操科の教師十名を合せ、日本晴のゲレンデを超えて、上ノ平の小舍迄登る。熟練者數名毛無山へ向ひしも、積雪量不充分でプツシュ多き爲、途中にて引き返へす。夜七時頃より大コムパを行ふ。體操科の教師二名御出席。御寄贈のビールに滿を引き、各自々己紹介等行ひ、又先生方のスキーについての御感想等伺ひ、九時頃迄樂しむ。

一二、二八　晴　昨夜の中に四、五寸の雪が積る。

早朝、堀岡兄急用の爲め歸京。小林、遠藤、板垣の三名は乘鞍岳へ向ふ。

大部分はゲレンデにて滑り、上ノ平迄登りし者二名のみ。一同稍々上達の感あり。夕方、北野、齋藤、長谷川、高原　澤田の五名歸京す。後に殘りし者十二名、いさゝか寂漠の感を呈す。

一二、二九　曇　合宿最終日。十時頃よりゲレンデに出て、クリスチヤニアの練習。上ノ平迄は一人登りしのみ。雪質惡かりしとか。そろ〳〵里心のついた者出て來て、歸京をまちこがれる。

午後江夏君により記念撮影行はる。藤森、青木（二）の兩名は居殘り、他の十名は六時半出發。一路歸京の途に上り、野澤溫泉スキー合宿こゝに終了す。

今冬は　近年に稀らしく積雪量が少なくて、初めての人達には殊に氣の毒であつたが、上達者の多くなつた事、又體操科教師方のスキー及當山岳部主催のスキー合宿に多大の認識と理解とを得られた事は最大の收穫であつた。

（林、堀岡、新羅）

池ノ平　　森脇芳之、塚本駿、榎本直司、森川眞三郎、他二名

一二、二一　晴　上野發（夜行）

一二、二二　曇後快晴　田口——池ノ平溫泉——茅場ゲレンデ——一本松ゲレンデ——池ノ平泊

積雪なく一本松ゲレンデ迄、腐り乍らスキーを擔ぐ。茅場の上部は幾分良かつたが、其他の所はブツシュの切口が未だ露出して

居て不快だつた。が一同元氣で練習した。

一二、二三　雨　池ノ平泊。

一二、二四　雪　一本松グレンデ――池ノ平溫泉――田口

積雪三糎位になつたが、雪量思はしからず。爲に乘鞍岳へ移る事にした。（森脇）

燕　溫　泉

原　鐵三郎、清水慶一

一、六　晴　關山――一軒茶屋――五最茶屋――關溫泉（一、三〇）――燕溫泉（三、〇〇）

一、七　晴　燕溫泉――關溫泉（四、〇〇）――一軒茶屋（五、〇〇）――關山（五、三〇）

歸り道で日が暮れてあやふく道をまちがへさうになつた。吹雪がなくて幸ひであつた。景色は絶景である。

鹿澤、菅平

小谷部全助

一、八　快晴　松本（八、二七）――田中驛（一、二〇）――横堰（三、〇〇）――地藏峠（六、〇〇）――鹿澤溫泉（六、三〇）

一、九　快晴　溫泉發（九、三〇）――地藏峠（一〇、〇〇）――湯ノ丸山（一一、三〇）――角間峠――溫泉（一、〇〇）

一、一〇　雪後曇　鹿澤發（一一、〇〇）――新鹿澤（一二、〇〇――一三、〇〇）――鳥居峠（四、〇〇）――菅平口（五、三〇）――菅平（七、〇〇）

一、一一　快晴　菅平（九、〇〇）――猫岳（一〇、四〇）――日本ダボスゲレンデ（一一、五〇）――菅平（三、三〇）――菅平口（四、三〇）

霧　ケ　峰

森脇芳之、小林重吉、塚本駿、岩崎利一、小谷部全助、他部員外六名

一、一九　曇小雪　上諏訪（七、〇〇）――清水橋（八、二〇）――練習――池のクルミ（一、三〇）――車山（三、〇〇）――カボッチョ小舍（三、三〇）

月明に絶好の夜間スキーを味ふ。

一、二〇　快晴　カボッチョ登山、清水橋發（四、〇〇）

霧　ケ　峰（先輩學生懇親スキー行）

中川孫一、近藤恒雄（以上先輩）、堀岡清、林俊介、望月達夫、小谷部全助、塚本駿、豊田忠巍、鷹野雄一、森川眞三郎、原鐵三郎、岩崎利一、高原龍雄、新羅二郎

一、二五　晴　新宿發（一一、五五）夜行

此の夜、送別會の終了後、先發隊、林、望月、小谷部、塚本、森川の五名は富士に向け出發する。

一、二六　晴　富士吉田――馬返（五、三〇）――

月(一、一〇——二、三〇)——甲府(四、三〇——八、三〇)——上諏訪(一〇、四〇)

曉の富士に月光がさして、青の光の様な神秘的な光景に魅せられたものゝ、馬返に着いて附近の鈴原（新らしく出來たもの）や唐松、白樺の三ゲレンデにて滑る。雪質が極度に惡くて、先輩連が來るには餘り如何かと思つたので此處は止めにした。富士に登る仕度もして來たが、天候も思はしくないので引き返し、大月で後發の連中に霧ケ峰へ行く旨の電報を打ち、時間があつたので五名は甲府で下車。先輩丸茂平造氏を訪問。八時三十分、甲府で後發の連中と落合ひ、一同十四名賑やかに深更、上諏訪の「たかの湯」に泊る。

一、二七　晴　上諏訪（八、二〇）——霧ケ峰（九、三〇——三、三〇）——上諏訪（四、三〇——五、〇〇）——歸京

霧ケ峰の雪質は幾分古かつたが、良い方で、終日面白く滑つた丁度丸茂先輩とも一緒になり、久方振りの顏振れに此度の懇親スキー行は大成功だつた。この唯先輩の連中が、一寸少なかつた。この種のスキー行なりは、屢々行ひ度いものである。（望）

高尾山スキー

森脇芳之、小谷部全助

二、三　雪　淺川（一、三〇）——高尾山

小佛への尾根道が面白く滑れる。パラフイン絶對必要。

菅平鹿澤　　原鐵三郎、岩崎利一

二、六　上野發夜行

二、七　雪　菅平（八、二〇）

附近のゲレンデにて滑る。雪質割合に良好。

二、八　曇　菅平——猫岳小舍——八合目尾根（一、三〇）——菅平

相當な風のため引返へす。

二、九　快晴　菅平——猫岳——ダボス——菅平口——鳥居峠——新鹿澤（六、〇〇）

相當快的な滑降であつた。

二、一〇　曇　新鹿澤（一〇、〇〇）——鹿澤——地藏峠（二、〇〇）——新張——田中

霧ケ峰　　原鐵三郎、清水慶一、他三名

三、六　新宿發夜行

三、七　快晴　ヒユッテ霧ケ峰着（一〇、一〇）

三、八　晴　附近で練習

三、九　晴　車山附近まで登行、雪質硬し。

三、一〇　雪　午前中練習、午後歸京、雪質は軟雪

春季スキー合宿　　（野澤温泉、酒屋旅館）

（參加者）塚本駿、小林重吉、森脇芳之、小

谷部全助、岩崎利一、高原龍雄、原鐵三郎、部員外十名

三、一〇　雨　雨中ゲレンデにて練習、ザラメで技術がよく出來て面白い。
三、一一　小雪　上ノ平往復、樺小舎以上雪質よし。
三、一二　晴　ゲレンデにて練習。
三、一三　小雪　霧の中を毛無登山。
三、一四　晴後雪　牛首經由毛無登山。
三、一五　晴　新雪のゲレンデにて基本練習。
三、一六　雨　練習。
三、一七　晴　一同引上ぐ。（小谷部）

藪原スキー場

三、一七　晴　藪原（二、五〇〇）——バス——スキー場（四、〇〇）
三、一八　小雪　スキー場發（九、〇〇）——奥峰山頂（一〇、〇〇）
藪原驛（二、三〇）

小谷部全助

わざ〳〵東京から出掛けて行く程感心した所ではないが、奥峰山は眺望、滑降路等優秀である。御嶽、木曾駒が好い。

奥日光

三、一八　ゲレンデにて遊ぶ。粉雪で時々吹雪が來る。金精峠は雪崩の危險で登行禁止であつた。

遠藤竹雄、他二名

菅平

三、二二　出發（夜行）
三、二三　晴　二四、二五（共に吹雪）連日スキー練習。
三、二六　吹雪　菅平（八、〇〇）——猫岳頂上（一一、〇〇）——歸路中腹にて晝食——菅平（二、三〇）
吹雪の爲、菅平から見て中央に見える澤を上下する。
三、二七　朝歸京

榎本直司

奥日光

三、二六　晴後吹雪　淺草雷門——日光驛——馬返——中宮祠——湯元（八、三〇）——涸沼（一〇、三〇）——山王峠（一一、〇〇）——光徳沼（一二、〇〇）——龍頭ゲレンデ（二、三〇）——湯元（六、〇〇）
涸沼より山王峠への登りは立て板を登る様で一汗かいた。龍頭ゲレンデは雪質が極めて惡かつたが山王峠の下り及び刈込切込附近の雪は極上である。
三、二〇　山王峠廻り
三、二一　山王峠廻り、此の日友達二人來る。
三、二二　吹雪　歸京
三月、東京の附近で最も雪質の良いのは奥日光だらうと思ふ。日歸りには山王峠廻りは手頃で、中級者向きである。

原鐵三郎、他二名

（之までバスとケーブル）中宮祠――湯元温泉（四、三〇）
（スキーにて。）
吹雪で戦場ケ原を通る時はつらかつた。雪は量質共に良。
三、二七　吹雪　第一ゲレンデにて滑る。午後燕へ行く。スキー破損。
三、二八　晴時々曇　練習。
三、二九　快晴　第三ゲレンデまでツーアす。
三、三〇　曇後晴　湯元――中宮祠スキー。中宮祠――日光――雷門。

榛名山

岩崎利一

三、二八　上野――澁川――伊香保
三、二九　曇　伊香保――榛名山麓――湖畔――伊香保
昨夜珍らしく雪が降つた。早速スキーを持出して湖畔スキー場といふので滑る。雪はあまりよくない。
三、三〇　曇　伊香保――澁川――湯澤

關溫泉

新羅二郎

三、二八　上野（一〇、五〇）――關温泉（一〇、〇〇）
三、二九　曇雪　關山驛（七、四五）――關温泉（一〇、〇〇）
積雪二米、雪質悪し、ゲレンデにて滑る。午後より吹雪となり氣温下る。
三、三〇　曇雪　終日ゲレンデにて滑る人少し。
三、三一　曇雪　上のゲレンデに登る。氣溫相當下る、
冬期には此の逆コースが面白いとの事である。殊に鷲ケ峰ゲレンデから男女倉への滑行は中級者向きである。然し和田峠への登りは相當難業である。
四、一一　風が非常に強いので大石峠廻りの豫定を取止め午後歸京す。

以　上

山小屋

中島の事から

オンちやん事中島嘉一郎君が死んでからもう一年位になるんぢやないかな、此の間久振りに槍澤を下つて神河内に出た時に元氣な現役連中が愉快相にあの德澤附近の林道を人の分までのリユツクサツクを脊負つて行くのを見、又小谷部や森川達が殺生小屋から西糸屋まで四、五貫の荷を脊負ひ乍ら四時間で走つたなんて話を聞くと其の昔中島や金田手塚合計二十何名の連中を連れて燕槍を縱走した時の事がマザ〳〵と浮んで來る。其の時連れた案内が矢張り下川だつたから其の頃の事が餘計思ひ出されてならなかつた。あの時もよく歩いた、一俣邊りから遲れる奴は勝手に遲れさせて走つたものだ。德澤も吉城屋も眼にうつらず一目散に神河内に飛び込んだ、後から最後まで續いたものは中島、横倉、金田、手塚の四人位だつたと記憶する。中島はあれからずつと山へ登つてゐた、色も黑かつた、元氣もよかつた、餘り有難くないオンちやんなんて渾名も貰ふ樣になつた、それからよく屁もたれた。トンちやんと二人でリーダーになつて三峠へ行つた頃の寫眞を見ると中島など實にまだ紅顏の美少年、宇佐美などは巷の餓鬼大將然としてゐるがあの中島があんな病氣で死んだなんて全く信じられない氣がする。野澤のコンパの時なんかに漫談とも何ともつかないあの浪花節が出て來る、あれが出る時彼は最も愉快な氣分に居たらしい。「おい中島、水を持つて來いよ」なんていふと「チッエッずるいな、」と云ひ乍らも米を研いだり水を持つて來たりして吳れた。全く可憐な大學生であつた。

× × ×

中島と同期位の連中は妙に一家の御主人になり納まつてるのが多い、毎月の針葉樹會にも顏が出せぬ程忙しいらしい、お忙しいのも誠に結構だと思ふがタマには損にも得にもならぬ話をやつてなごやかな幾時間かを過す位の元氣は出して貰ひ度いものと思ふ。

× × ×

話は前後するが今年の玄文澤のテントを見て學校の山岳部も盛んになつたものだとツク〳〵感心した事であつた、名前や渾名こそ變れ氣分は矢張り昔の儘だ、さうだ、其の昔俺達が神河内の地廻りをやつてゐた時分にはあんなに澤山は居なかつた、岩登りだつてせい〳〵人の歩いた跡を登つたりぶらさがつたりしてゐただけなんだからあれから見ると實際隔世の感がある。之なら何處の山岳部と顏を合せたつてさうひけをとる樣な事もないだろう。然し一面から考へると山から山へ、峠から峰へと暢氣に彷徨い歩るく「山の旅」的の人達が割合少い樣に見受けるのは何だか淋しい氣持ちもする。部報に「針葉樹」と名を付けたのは確か秩父を歩るくあの氣分を出す爲めであつたと記憶する。確かにあの頃の山岳部には秩父の秋を語り合ふ人達が多

かつた。物凄い岩登りが山登りぢやないなんて事は決していゝ
もしない、唯私はその反面に於て釣べ落しの陽がのぞく三ノ瀬
邊りの秋に心を寄せる人達がもう少しあつてもいゝ樣に思ふの
だ。

×　×　×

それから此の頃はどうも一人で行く人が多くなつた樣だ、之
は自分一個の意見としては餘りやつて貰い度くないと思ふ、遠
く西にゲオルク、ウインクラーの例を引くまでもなく、近くは
三高の内藤さんの樣に相當以上の經驗を持つてゐても不慮の災
難といふものは起り得るものなのだ。内藤さんは幸運（？）に
も吾が商大のパーテイに見つけられて及ぶだけの事はして貰つ
て死んで行つた。然し私はあの「あのねえあのねえ内藤況三」
といふ言葉を半ば囈言の樣に洩らしてゐたといふ事を聞いてそ
の憐らしい最後をどう御同情していゝかわからない。古都に居
ます御兩親や兄妹の事などが相馬燈の樣にクル〳〵と眼の前に
浮んで來て、さぞも一度都へ歸つて苦しかつた山での出來事な
どを皆に語りきかせられたらなどゝ考へた事であらうと泌々氣
の毒に思へてならない。私なども總てを忘れて山へ這入つて行
く積りでは居ても煩腦のあさましさには矢張り幼い子供達の事
は決して腦裏を離れさす事は出來ないでゐる。子を持つて知る
親心などゝ古臭い文句を出す迄もなく實際親達はどんなに子供
の上の事を考へてゐるか、今年神河内に居る時榎本の所へ兩親
から「アメガフツタラヤドヤヘトマレ」と電報が來た、之が本
當の親心ではないのだらうか。二人で行つたつて三人で行つた
つてやられる時はやられるのだと云つて了へばそれまでだが强
ちさうとも云へない所を見れば山へ行く時は出來るなら複數で
出かけて貰い度いものと思ふ。内藤氏の場合だつてあれが若し
二人だつたらあんな悲慘な結果に終らずに濟んだかも知れない
ではないか。兎に角山の恐ろしい事は百も承知の部員諸士の事
だ、よく此の邊の所を考へて欲しいと思ふ。（クマ）

或る山男の想ひ

山男にとつては、自分の力では及ばないと思つてゐる、山が
あるときの方が樂しいのではあるまいか、のほゝんと山に始め
て入つて穗高や劍を征服してしまつては。唯單に山を知らない
巷の人の土產話になるかも知れないが、その人の將來の山行き
に山への憧れとか、山を崇め尊ぶ心などがなくなつてしまひは
しないだらうか。

◇

一度位ひは自分の生死を全く自分の意志の力の及ばない山の
靈に委ねてみたい。

◇

山では階級も權利もない。しかし經驗者を尊敬するのは床し
い登山者だ。弱い者を助けるのも亦登山者の義務だ。所有する

一切のものはすべて共有物である。人にむやみと荷を押付けたり、自分の持荷をへらして來たり、人に預けた食糧を勝手に一人で食べてしまつたり、親しいからと言つて先輩を人前で人夫扱ひにするなど、皆登山者として恥づべき行爲である様に思はれる。

◇

部員が多すぎると言ふ、去年の方がおちついてゐて氣持が良かつたと言ふ、それが事實としたら、一體全體誰がその責任を負ふのだらう。

◇

山に行くとき、たとへ人が樂に行けると言つてもその人と自分の山の經驗を良く考へてから行く可きだ。同じ山だからと言つて、その人と同じ容易さで行けるとは限らない。

◇

自分の穗高行を人に語る約束をしたからと言つて、無理に縱走しようとした人があると云ふ。仲々爨つた偉い登山主義にちがひない。併し僕達だけは依然として、自分達の內心のための登山を續けて行く。

◇

雨だからと言つて登山を見合はすのは利口な者のすることだ。僕達はもつと進んで雨の山の味も知る必要がある。晴れた山だけが山でない。雨の山も吹雪の山も皆僕達の親しむ可き山である。（クン）

山想獨言（ヒトリゴト）

（一）山の喜び

山を味はふ色々な喜びの中で、よく晴れた春の陽をうけながら、スキーを穿いて、一面にふくよかな乙女の肌を想はせるやうな又何とも云はれない變化のある峰々を、あちこちさまよひ歩いて遙か尾根傳ひに、根氣よくキックターンを繰り返す喜びや、まるで龍の落子の背のやうなゴツ〳〵な岩角を注意深く脇目もふらずに身全體を全く緊張させて一歩々々這ふやうにして歩く中に得られる喜びや、垂直に突立つた壁にやもりか、とかげのやうにぴつたりとへばりついて頑丈な手を次々に荒々しい岩角を求めて動かし、その足をば惡絕なりツヂに一種の焦燥を以て當てがひヂリ〳〵と這ひ上りながら新しい世界を創造する喜び等は全く經驗無き者には到底得られない喜びの中の喜びだ。

（二）山の情懆

若し山に何の音も聞えなかつたらどんなに變だらう。確かに山の生活の愉快さは半分以上減じやう。

風の音、流れの音、雨の音等下界では大して氣のつかない音が山では獨特のMUSIKとして吾々の耳に入る。勿論吾々が苦境に陷つた場合はそれどころではないが山に惹かれてやつて來て

少くとも幸福を感じてゐる場合にだ。この外雪崩の音、嵐の音、山彦の感じ、郭公の囀り、エホー〳〵の呼び聲等、山の感覺を味はふ上に重要なものである。トーキーに入れられた山のシムフホニーについて見てもよく分る。

激しいアルバイトの途中一寸休んだ時等鶯、郭公等の聲、清水のせゝらぎ等が林を通して來る風の音と一緒になつて遠く近く聞えて來るのを聞くともなしにうつとりと聞いてゐると山の中の到る處に散在せる各メムバーが、指揮者無しに一大交響樂を演奏してゐるやうな氣持になる。何と云ふ偉大な音樂だらう！そして青空に浮んでゐる白い雲までリズミカルに動いてゐるやうな氣がするのだ。

雪で閉ざされた冬の山で物凄い嵐の音の中に交つて時々大きな雪崩の響がするのは確かに大オーケストラの中のドラムにそつくりだ。いやこの云ひ方は逆かも知れない。ドラムが雪崩の響きに似てゐるのか知らん。

ひどい嵐の夜等フト、「ピーアギント」の歸鄕やショパンの「木枯」等が耳に聞えて來るのは必ずしも偶然ではないと思はれる。作曲者自身の魂が遙か彼方から自然の各メムバーを指揮してるのではないか知らとさへ思はれる。

各メムバーは自分の出來るだけの力を盡して懸命に演奏してゐるやうな氣になつて仕方がない。

山は確かに音樂家である。無比の作曲家であると共に演奏者である。無比の作曲家であると共に演奏者である。山を去り都に歸つて雜音の中で暮してゐる時、今頃は山では又大音樂が始つてゐるだらうと思ふと山を戀ふ氣持がたまらなく胸に迫つて來るのも決して無理からぬ事と思ふのだ。

（新羅三郎）

△

或る年の一月の事です。彼と私とは、最近スキー場としてすつかり開けたH尾根のK小屋に滯在して居りました。此處は昔から關西の人達の多い處でしたので、其の夜も例によつて小屋の中は極めて賑かで、下の方の發聲でこそひけを取らぬ私達も、すつかり參つて早くから床の中にもぐり込んで居りました。

乍併、夜は更けてもストーブを圍んでのざわめきはいつかなれないのです。で、隣を見ますと、彼は、クー、クー、と、如果てさうもなく、私は其のざわめきが耳についてどうして眠ら何にも氣持ちよさそうに眠つてゐるではありませんか。

其の中に何んの爲めか、ざわめきが立ち上つて私達の頭の上を通りかゝりました。さう、其の時なんです。今迄、熟睡せりとばかり思つてゐた彼が、突然、小屋の隅々まで響きわたる聲で、斯う言つたのです。

「うるせえつ」

諸君、想像して下さい。確かにそれは鶴の一聲でした。

翌日、私はH尾根をたどりながら彼に言ひました。

「昨夜は凄かつたね。」

「え!?」

彼は斯う言つたきり、ふに落ちないらしいんです。諸君、お判りですか。あれは彼のネゴトなのでした。

併し、思へば僅か半年許りの間に、彼のネゴトも素晴しく進歩したものです。と云ふのは、實は其の前の年の夏、T澤に生活してゐた或る夜の事です。風雨が激しく、天幕が飛びさうな晩でしたけれど、彼は、クー、クー、と、眠つて居りました。そして不意に斯んな事を言ふんです。

「スゥー、スゥー、斯んな具合にね、スゥー」

諸君、何んだと思ひます?。恐らく彼、スキーのコーチでもしてゐる夢を見てたんでせうね。でも彼、斯んな他愛ないネゴトから、先の如き實際的なネゴトに進歩した樣に、最近山での活躍、テクニックの進歩も素晴しいものです。好漢彼、諸君彼つて誰でせう。(エチオピヤ)

天狗

ガタゴトガタゴト汽車は走り續ける。車窓の外には四國の景色が強い夏の太陽に曝らされてゐる。先刻からムズ〳〵して居た向ひ席の法螺吹助氏溜り兼ねたと見えて話掛ける。「あんた等山登りは何處かね、あゝ石槌山か、實はわしは此う云ふ者でな」傍の風呂敷包みから珠數と共に出たのは一巻の證書、表には「右の者石槌山大先達許す」とか書いてあつた。彼に取つては非常に價値のある物らしい。「あんた等靴を履いとられるが靴じや登れんで、惡い事は云はんけん草鞋に履き變へんさい。わしも足拵へさへしとつたらほんまにえゝ連れじやけん一緒にやつたげるのに相憎なあ。わしじやつたら今晩夜つぴて登つて御來光さん拜んで明日の晝迄にや歸つて來られるんじやがあんたらの足じやあ今からなら明後日になるのう。わしはな山が好きで此の石槌山へは廿年登つとるよ、其の他にも阿波の劍山、五劍山、大山、大和の大峰さん、駿河の富士山迄も登つとるよ。富士山も高い高い云ふがお頂上は此の石槌山の方が餘つ程寒いで、大體日本中の一番嶮しいちふ山を四十七お選びになつて天狗るさんが住んどられるんじや。宮島さんと同じ樣に此の石槌山にあ大天狗が居て白山、立山、石槌三山の内此の山が一番嶮しいんじや、此處さへ登れりや日本中嶮しい所無しじや。

わしが富士山へ行つた時にあ良う上に雪のある繪やなんかがあるがそんな物は一つも無かつた。ありや皆嘘でのう。雜誌やら新聞やらに谷の中へ雪が餘計あつて何んかしらん恐しげな寫眞を出しとるが、ありやな夏が暑いけん涼しうする爲めと、ケイショクを添へる爲めに書いてあるんで、一寸知らん人が見たらあゝ云ふ所が有るもんじやと考へ違ひするじやろ。」汽車が次の驛で止ると喋りたい丈喋つたとみえて吹助氏それでも「ま

あ用心して登つて來んさい」と云つてサッサと降りて行つた。都で登山のスキーのシステムのとウルサ方が騒いで居ても隅の方には此んな話が時々あると云ふ迄。未だ未だ日本は廣い。

（VANCO）

山と動物

蚤

（一）　山小屋の蚤

山小屋に蚤は附物と云つてもいゝだらう。山小屋に蚤が多いのは必ずしも小屋や寢具が汚いからばかりじやないらしい。どうも或程度の高度と溫氣とを持つてゐる地方ではいくら清潔にしても、ひとりでに蚤が湧いて來るらしい。東京の近くでは富士山の須走口附近、瀧ケ原廠舍附近等は名産地の樣である。此事は富士山で御馴染の野中到氏が裏書して居る。氏の別莊が此名産地々方にあるのだが、いくら掃除をしても、後から後からと蚤はいくらでも發生してきてとても撲滅出來ない。どんな蚤取藥を使つても一向に利目がない。仕方がないから放つてありますと云ふことである。瀧ケ原の方は軍敎で學生諸君經驗豊富でも、家でも、久しく空いて居た所な筈だ此小吸血鬼は、小屋でも、家でも、久しく空いて居た所へ最初にやつて來た人間へ猛然と襲撃して來る。所構はず猛烈に刺すのだから最初の晩は到底寢られたものじやない。其内先方も滿腹してくるし、こちらも段々免疫になるからあまりかゆくなくなる。しまいには二、三四位ムズ〳〵やつて居ても何でも無くなる。

私は一朝に十五、六匹取つた經驗がある。例の漫談ではない。不審に思ふ人はトンチヤンに照會してみたまへ。所は木曾の造林人夫小屋、時は大正十四年だ。人夫小屋の端に監督の技手の室があつてそこに、私と弟とトンチヤンと三人、隣の大部屋には越中人夫十五、六人といふ譯だつた。例の條件を備えて居ると見えて相當の蚤である。天氣のいゝ日に、莫蓙を入念に乾し、床には石油を霧吹きで丹念に吹き、寢具も充分天日に曝し、寢る前にはシーツの緣に蚤取粉の塹壕を作つて寢るのだが、襲來は依然たるものである。其内に段々免疫になつて、（ハヽア臍のまわりをかけまわつてるな）と思ひながら眠れる程に上達してきた。所が、八月の中頃になつて、越中の衆が御盆で田舍に歸つて行つた其晩から、今迄毎晩二、三匹程度の訪問だつたのが、俄に幾匹とも勘定しきれない程の猛襲となつた。無論私ばかりじやない。トンチヤンも、弟も起き上つてランプの灯をかきたてゝ蚤取である。居るの、居ないの、蟻の巢をブチこはした樣にとても取りきれたものじやない。其夜はまんじりともせず到々夜が明けた。さあ、今夜はどうしたものかと考へた揚句、スリーピングバッグに這入つて寢やうといふことになり、下の官舍から蚤除專門の白木綿の袋を借りてきて、袋の口を首のまわりできつちり締めて、これなら安心と寢につくと、首のまわりが痛痒い。氣を鎭めて樣子を窺ふと、袋の中

へ這入らうといふ蚤の大群が、首のまわりを無二無三に刺してゐるのだ。此野郎來やがつたなと思つたので、何糞と耐えたが、痒くて〳〵どうにも我慢が出來ない。到々敗けて紐を解けば、どつと中へ侵入したらしく、俄に身體中が痒くなるのを、じつとこらへて朝まで待つた。さて、明るくなつた所で、袋の中で足と頭の位置をかえ、猫が袋を被つたやうな工合にして蚤を探すと居る！　居る！　ビール樽の様な腹になつた奴が無數にピン〳〵はねて居る。袋の中だからいくらはねても逃げられる心配は毛頭ない。一匹、一匹と丹念に潰して一摘み程取つた。三人分を合せると胡麻鹽を小さな茶匙に盛つた程になつた。首の廻りを見ると赤くみゝずばれには れ上つて、恰度赤いタガをはめた様な工合だ。何で一晩のうちにこんなに殖えたのかと段々調べて見ると隣の室にとんでもないことがしてあることが判つた。といふのは越中の衆が、敷蓐をこつちの室との境の壁際に積んで歸つて行つたのだ。所で此連中、無論私等に劣らぬ蚤の飼主であつたに相違ない。一人平均三匹として五十匹近くの蚤は飼主の歸國と同時に一旦蓐に身をひそめた譯だが、さあ其晩から定食が無くなつてしまつたので、人臭い方角を慕つて食糧探索に出かけ、隣室の僕等を餌にしたのであつた。はからずも此スリーピングバッグによる新手蚤取法を發見したので此手を繰返し〳〵用ひて一週間ばかりの間に隣のは勿論、自分の室の蚤も大方とり盡した。其頃には又、こつちの身體も完全な免疫體になつて居た。

（二）蛇

人間の祖先が爬蟲類にいぢめられたからかどうかは保證の限りでないが、どうも長蟲類――蛇、とかげ、みゝず、鰻、蛔蟲、百足といふ類は餘り氣味のいゝものではない。人によつては一寸姿を見た丈で氣分が惡くなるといふ重病患者もあるが、私は好きでは無論ないが、有毒な奴でない限り手摑みにする位の事は出來る。殊に蛇、とかげを見かけた瞬間には、祖先の血が湧き立つのかどうか知らないが、猛然たる殺意を生じる。山登りの途中、蛇が道を横切つたりしたらなんでも踏んで踏みにじつて徹底的にノバして――長くなること請合である――しまわなければ承知しない。切取の土堤を行く奴には先づ杖のスイングをくれてダウンした處を例の通り片附ける。二三年前、セメントの會議で大阪に行つた時に、大阪朝日新聞社の朝日會館の入口で、一尺ばかりの小蛇を拾つた。あんな大都會の大通にどうして蛇が居たのか實に不思議である。それを俄作りの紙袋の中に封じ込んでポケットに入れて置き、會議場へ向ふ途中で偶然一緒になつた營業部長へ何喰はん顏で渡した。部長は至つて茶目氣のある人なので又何か惡戲道具を渡したな位に思つたらしく其まゝポケットに入れて會場へ行つた。向ふへ着いてから、他社の人の大勢集つてゐる前で、件の袋を開いた。自由になつた蛇はすつと鎌首を擡げた。

「君、却々精巧に出來てるね」と飽くまで玩具と思ひ込んで居る部長が手を出さうとしたトタン一尺でも蛇は蛇チョロ〳〵と紅の舌を現した。サア一大事、アット叫んで放り出したから堪らない。蛇は其邊を這ひ出したから室中の大騒動となり、ホテルのボーイが二、三人箒でヘッピリ腰で追ひまわして漸く摑へたといふ飛んだ餘興もあつた。

一尺でも此位の騒動になる。長さ一丈五尺とか、胴廻り一升樽となると立派に怪談物である。こんな奴は動物園以外では見たことはないが、チョイ〳〵御目にかゝれる凄い奴は例の蟒だ。此奴は、喰ひつかれたら百年目といふ代物だけに、銅貨色の斑點のあるあの褐色の姿からして無氣味である。木曾御料林の人夫共は、まるでみゝずかなんぞの様に簡單に摑えて、燒酎に漬けたり、蒲燒にしたりして珍重して居るが、喰べさしてくれと度々頼んでも鼻血が出るから止した方がいゝと云つて到々食はしてくれなかつた。惜しいことをしたと思つてゐる。

蛇が水を渡る姿は却々凄いものである。鎌首を擡げたまゝ、相當の水勢ももものかは、殆んど水面を滑る様に渡つてゆく處は鬼氣人に迫る。蛇が蛙を喰ふことを知らぬ人はあるまいが、稀には蠑螈が蛇を食つたり、洪水の折などには仲よく木の枝につかまつて流されてゆくさうである。山口貯水池の通水式の時の話であるが、段々池底が水浸しになるにつれて、池中に居殘された立木の枝に何十萬とも知れない穴居蟲族の避難民で眞黒になつたさうだが、此時も矢張り洪水の時と同様、蛇と蛙が仲よく一つの枝にしがみついて居たさうだ。こうゆう非常時になると、流石前世紀からの敵同志でも仲よくなると見える。すると、震災當時避難民で一杯になつて居た上野の山の中で死ぬか生きるかの切迫詰まつた瀬戸際に水トン一杯で〇〇したなんて得意になつて居る人間の方が餘程淺間しい。

一度蛇を食ふと、其臭が鼻について、次から次へと食ひ度くなつて堪らなくなるさうである。此事は小谷部君も裏書してゐる。一種の中毒症狀になるのじやないかと思はれる。酒や、煙草の様に。

臺灣では「とかげ」の皮を貼りつけたペン軸を賣つてゐる。私も臺灣土産に一本貰つたが、どうもそれを日常使ふ氣になれない。

(二三) 蟇

此奴も妖氣を帶びて居る點では蛇に劣らぬ怪物である。大きなのになると、盥位のが居るさうだがそれはジャングル映畫で御馴染の馬來地方ださうだから日本の山では大きいと云つたつて精々洗面器位だらう。私の見たのでは小さな西洋皿位あつた。それが立木の切株の腐つた奴の蔭から十幾匹といふ小蟇を引きつれてノソ〳〵這ひ出して來た時には全身の血が凍る様な思がした。こちらへ向つてくるじやなし、咬みつく譯でもないが何とも云へない凄いものだつた。後にも先にもこうゆう團體

をなしてる墓には會つた事がない。あの背中の斑點からイボの具合なんていふものはどう見てもグロテスクである。昔讀んだ本の中に信州のさる深山――そんな風の書方で地點が明瞭でないが――に主が居ると云ひ傳へられてゐる沼があつて、どんな旱魃にも涸れた事がないことお定の通りだ。所で或旱魃の夏到々此沼の水を引くことになつて其落口をブチこわした。段々水が減つてゆくと沼の眞中に大きな岩が現れてきた。所が此岩が動くらしい、はて面妖なとよく〳〵見ると沼の主稀代の大蟇だ。村人一同青くなつて逃げ下らうとしたがハーツト一息毒氣を吹きかけられたら皆殺しになる。一そやつてしまへと中に一人氣丈な獵師が居て、使慣れた獵銃の狙定めて急所と覺しき邊へズドンと一發見舞つた。蟇の妖術も飛道具には敵はぬ。岩は二、三度大きく搖れて地に伏し、夥だしい血潮は泉の如く噴き出して沼は忽ち血の池と變り、其沼の水を引いた作物は盡く枯死したと書いてあつたが、本當だとすると盥所じやない、馬來半島洗足だが赤城の大沼に一丈五尺の緋鯉が居たといふ類だらう。

蟇の肉は眞白でうまいこと赤蛙以上ださうだが喰つた事は無い。赤蛙の股肉のつけ燒はうまいものである。喰べたい方には調理法を傳授しやう。鷄のさゝ肉の樣で美味である。馬來半島の土人共は例の盥サイズの奴をロースストして、腸が鹽からの樣にドロ〳〵になつた所を、椰子の實のスプーンかなんかでしやくつて、木の實で作つた酒の肴にムシヤ〳〵やるさうだが、聞いた丈でもゾツトする。筑波山の麓にはオンバコ、車前草などゝいふ露草を喰つて育つた四、六の蟇といふのが棲んでることに「蟇の油」の方ではなつてゐるのだが實物は見た事がない。兎に角山路で、此奴に出會はした氣持といふものはあまりいゝものじやない。（孫）

木曾の行者殿

去年の秋、木曾駒を訪れたが行者がどんな事をやるかなんて、てんで知らなかつた僕は始めて彼等を見て全くおつたまげて開いた口が暫らく元通りにならなかつた。その時の行者は恐らく彼等仲間でも一流な方なのだろう。そこに屹立してる天狗さんと同じ樣な格好。白衣に白袴のもゝ立ち高く、白鉢卷、白ダスキも、りゝしいいでたちでもつて頂上に作られた玉垣の中に十數名這入り込んでやつてるのだ。手に手にハタキの樣なものを打振り〳〵何やらわめいたり、苦しさうに體をくねらせたり、慨歎に堪えぬかの樣に天をふり仰いだり、いやはや側でたつた一人見てる方がテレて來る。その內、彼等の最もいかめしい、どうやら天狗に似たのがぬつくと突然仁王立ちになるや、芝居のさむらひ口調で何やら聲高に宣言すると、大きな弧を描いて双手を天にさし上げるのだ。片手に持つたハタキが微妙に震えてバサ〳〵と鳴る。一寸の間無氣味な沈默の後、又とたんに双手を皆の方へ打ふせるとまるで一同はなぐられたかの

様にひれふすのである。そして又やおら頭をあげると又もや駒ケ岳山頂一帯、ハッ〳〵、バタ〳〵、エイヤッ、ウオー〳〵の大騒ぎだ。

大分時がたつておさまつたので近寄つてよく顔を見たが矢張り普通の人間で世間話しなんかもやつて居るので何だかホッと安心した様な氣分だつた。だがまだどうも奇妙な聲が響くので、オヤと思つて見に行くと果して玉垣のずつと東寄り、木曾駒岳頂上二九五六・三米と言ふ白ペンキの立札が傍にある小さな神社の軒先でまだ二人ばかりやつてる。ヂツと聞いてると色々な魔王や怪物のむずかしい名前が飛出してよく判らないが兎に角面白い。二人一緒に例のハッ〳〵、バタ〳〵を續けて居る内に、何思つたか一人は突然キツと脊を眞直に伸ばしてサ、、と上座に乘出すと他の一人は、あら不思議、これに向つてへ、ーツと平身低頭。

『やよ汝、近う〳〵』

『これは〳〵魔利支天王、麗はしき御尊顏を拜し、やつがれ恐悦至極に存じ奉りソーロー。……。……。……魔神の……により……。……これにて足掛七年。若しやつがれの念願叶はゞ金の鳥居を献上仕るべく何卒……。……。』

『おゝ、かゝる天險を冒し風雨を凌ぎてよくこそ到來。余は滿足に思ふぞ。汝が殊勝なる念願叶えつかはす程に早速純金の鳥居を作れ。』（スケ）

置き忘れたパイプ

置き忘れた——と云つても、別にマロリーか誰かの様に岩場の上に忘れて來て、別のルートから取りに行つた、なんて派手な話ではない。つい二、三日前、古い「山と渓谷」をパラ〳〵とめくつて居たら、藤島敏夫氏が、「山で失つたパイプ、」と云ふ題で、名文をものして居られたから、小生も眞似せんと試みた次第である。

昨年の十月の末だつたらう、今にも降り出しさうな天氣だつたけれど、カンチャンと二人、鹿島の造林小屋を出て、冷の小屋へとぶら〳〵歩いて居た。十一時頃出發しておきながら、「早く登るのなんか若い中だよ」、とかなんとか云つて、至極のんびりと、所々の岩に腰を下しては、てんで見えもしない東尾根の方を打ち眺めて、悠然とパイプをくわへてゐたのだつた。とこころが其の夕、冷の小屋へ着いて、火をおこして、腰を下して、さてポケツトを探ると、パイプが無い。オヤと思つて、リュツクサツクのあちこちを探したが無い。幾ら探したつて、リュツクと體の他、探すところが無いんだから仕やうがない。其の時はまあどんなにがつかりした事か。夜更けの、雪まぢりの、風の音を聞きながら、手持ち不沙汰で火を見つめてゐるのも、云ふに云はれず淋しかつた。

一日置いて、二人は又同じ道を下りて居た。來た道を歸へるのは馬鹿々々しかつたけれど、落したパイプがあるかも知れないと思ふと我慢が出來た。道々目を皿の樣にして、木の根草の葉をわけて探したが、中々見つからなかつた。其の中、かなり下りてから、先へ行つたカンチャンが、突然、「あつた〳〵」と喜んでくれた。此の時の嬉しかつたのなんのつて。でもパイプ、口に一杯雨水をためて、艶もすつかりなくなつて居たけれど、それを丁寧に掃除して、何度も〳〵こすつて、ポケットに入れた時はホッとした樣な氣がした。パイプつて可愛いゝものさ。尤も最近、パイプのみならず、とかくモノに愛着を感じたがる人間？が、多くなつた樣だがね。（エチオピヤ）

山と夢

物靜かな山小舍で夢を見た。それは巨大な都會と云ふ怪物の眞只中に、廣壯なビルデイング、街路、自動車、人人人、人の波に圍まれた自分だつた。

その黑山の樣な群集の中から、一つの顏が、女とも男ともつかぬ、ものが抽象されて自分を嘲笑するのがはつきり見られた。

そしてその通りの遙か彼方に、青々とした森がそびえその後ろに雪を頂く黃金色に光る山々が地平線上に屹立してゐた。そして自分はその遠い山へ向つて走らうといくら焦つても一歩も進む事が出來なかつた。

雲の峰

彼は夏に成ると入道雲を眺めるのが好きだつた。それは彼が日本にゐる限りは夢にさへも見る事の出來ぬ、アルプスやヒマラヤの影像を想はせて呉れるからだつた。

彼は飽く事なく、家の窓からも、海岸の砂山の上からもその雲の峰を見入つた。

その形は或る時はマツターホルンを思はし、又或る時はエヴエレストの如く、カンチエンヂユンガの如く想像出來た。

そして彼が素晴しいと思つた三角錐の鋭い頂が、見る見る間にモンブランの樣に上が圓く崩れて行つた。

そして薄青く下の方で輝いてゐる處は氷河の流れを想はせた。そして夏の雲は次々に新しい峰を創り、氷壁を香はし、アルプホルンの如き鳴音をかすかに響かして、夕闇の中に消えて行くのだつた。

高きと低きと

彼は高きを愛するが故に低きを愛した。困難なる緊張さを愛するが故に、平易なる閑寂さを愛した。

記錄的の相違こそあれ、あらゆる登山はその眞摯なる氣持に於て同一の尊さを有することを覺つた。

かく覺りし時、彼は始めて滿足することが出來た。（鮫鰊）

殺生小舍の親爺

この夏の上高地生活の中で、妙に印象の深いのは殺生小舍の親爺だ。まず彼の顏だが、全く何とも言はれない好い顏をしてゐる。俗ツ氣と言ふものが微塵も見られない太つちよの、赤らの顏の、そして朗らかであり乍ら妙に落着いた顏なんだ。おまけに物に動じそうもない容貌は、魁偉な體軀と相俟つて、一層の親しさを感じさせる。と言つたからとて、彼は決して現場監督のソレ的な格好ぢやない。親分氣が一枚加つて、何となく槍澤の主とでも言ひたくなる。彼の商賣氣質の唯一の現れは、泊る人間毎に、大瀧山の宣傳をする以外には見當らない。泊る人間は、必ず泊賃を拂ひ、決して俺は損をせぬと一人決めをしてるんだから、精々大瀧山小舍の宣傳でもして秋に備えんとの勇ましい心組みらしい。此の夏商大の連中こゝに泊り、支拂額相當なもの、彼の對遇又極めて可。姓は中村、名は清三郎となん。

清水屋の小僧

も一つ印象の深いものに清水屋の小僧君がある。何でも風呂の修繕をしてるとかで風呂が臨いから外來者の入浴は御斷りするんだと云ふ清水屋の店是が出來た。そのため風呂場の忠實なる番人は、その可憐なる少年に仰渡され、忠勤なる彼は終日番付をしたのである。うつかり入浴しやうとすると大變なことになる。納所坊主が怒つた樣な面をして、彼は一歩も讓らぬ。讓らぬ爲めには、如何なる年來の得意も棒に振つて好いと云ふ程の忠義（？）を發揚する。店是を固守するこの少年の、勝ツ氣な顏は、心持よく僕の頭に、今でも浮んで來てならない。斷られるのもあの位頑迷にやられると、反つて氣持が好い。妙なもんだ。（神主）

チン思ふに

將に一橋を去らんとするに當つて、歷史と傳統を誇るこの針葉樹に、一文を投ずる事の出來たのは、チンにとつてこの上もない喜びである。

考へて見るとチンと云へるもの、甚だ奇妙な存在である。現在部で活動してゐる連中のうちで山岳部といふものを知り、その頃の部員（今の先輩）に最も早く接したのは誰あらう未だ入部滿一ケ年にもならない所のチンなのである。豫科一年の野澤の合宿では、芋川、清水、增山氏等錚々たる御連中が寡雪に氣をくさらせて、皮肉にも降り出した雪をついて、千曲川を渡つた時、たつた一人混つてゐたのがチンだつた。それに、鈴木、高瀨、清水氏等は又射擊部員として、豫科生の僕を指導されたものである。その後は、いろんな事情で好きな山にも出かける機會があまり無かつたが、冬と春のスキーだけは、缺かさなかつた。そのうちに相棒の齋藤が、お先に入部してしまつた。

本科に來てからは、堀岡氏や中島氏と初冬の富士山へ登つた

り、五色の合宿へ行つたりして居るうちに、好きな道だし、部に入つた方が萬事好都合だといふので、やつと三年になつてから正式に部員たるの資格を得たわけである。

生來の鈍い運動神經の然らしむる所が、試驗眞近に風邪氣の齋藤スロモ君も引つぱり出して出かけた程好きなスキーも一向に素人の域を脫せず岩に到つては、ほんとの一年生だ。北も南も秩父も、未だほんの嚙つたばかしだから、卒業してからも暇を作つては、せいぜい腕（？）を磨き度いと思つて居るがどうなるか、就職して見ねばわからない。在學中にもつと〳〵山へ行けばよかつたと悔んでも、今は詮方ない次第である、唯部員も著しく增し、對外的にも名聲大いに擧りつゝある時に當つて部を去らんとするのは如何にも心殘りである。（皇帝）

三千回轉ぶとスキーがうまくなるか？

「三千回轉ばねばスキーはうまくならないそうだ」とはよく聞く言葉だ、がその根據は誰も知らぬらしい、知つてたら敎へて貰ひ度いと思つてゐる。恐らく針葉樹會のメンバー見たいのが、誠しやかに唱へ出したのが喧傳されたものに相違無い。扨此の三千回だが、一體三千回轉ぶには何の位かゝるものか、そのひどいのになると、スキーを穿かない内に先づどしんと尻餅、それからは、片足穿いてホツとすると、横へどしん、兩足穿いて動き出すと、スキーの先を踏んでひつくりかへる、後を踏んでひつくりかへる、半分起き上ると復ひつくりかへる、つると滑つてひつくりかへる。初めの內は、バナナの皮を足の裏にくつゝけた樣なもんで仕末に惡い、皆樣よく御存じの通りである。こうして此の日は平均一分半に一回轉ぶとしやう、正味六時間として二四〇回、第二日目は平均三分間に一回として一二〇回第三日目以降一日平均一〇〇回見當、少し多いかも知れぬがまあ大體此んなもので間違はないだらう。そうすると一週間で八六〇回轉ぶ勘定になる。雪國の奴でない限り先づスキーに行くと言へば、一週間位が相場だ、で一シーズンを一週間の計算で行く。次の年の一週間は一時間に平均十回として一日六〇回、一週間五〇〇回と押へて間違はなからう。こう勘定すると三千回轉ぶには六シーズン、即三年間かゝる事になる。幾ら一生懸命轉んでも二年間は間違ない。此の計算は一シーズン一週間ネットの計算であるが、大概の人は出入一週間で、正味滑るのは五日間だからどう割引しても三千回轉ぶには二年間卽四シーズンはたつぷりかゝるだらう。そうすると三千回轉んだら何の位うまくなるだらうか？

今迄の經驗（？）から割り出すと先づボーゲンが兩方とも出來る樣になり、クリスチヤニヤが出來かゝる頃である。

だが此も唯轉んでゐるんでは駄目で、相當の轉び方轉ばされ方をしてゐるんでなくてはならない。云へ換へれば第一に自分で自分の轉んだ原因を探求してゐるか、何處が無理だつたかを考へながら轉んでゐるか否かと云ふ事であり、第二はその缺點を指摘するコーチを持つてゐるかどうかと言ふ事である。第一日の自分で自分の轉び方を吟味するなんて言ふのは初心者に出來よう筈がない。で結局早く澤山轉んでうまくなるには、よい轉ばされ方をさせられる事であるが此れが又六敷い事でコーチの良いのなどさうざらにあるものではない。良いコーチと言ふのはお偉いコーチと言ふ意味でもなければ、それ自身スキーのうまい人と言ふ意味でもない。理窟丈は知つてゐるが實地はまるで駄目だと言ふ樣なのは本と同じで本以外には出ない、近頃スキーの講習會と言ふのが流行してゐるが、その講習會には却つて下手に仕込む樣なコーチも居る事を忘れてはならない。凡そコーチのタイプを分けて見ると(一)理窟は相當知つてゐるがスキーがてんでなつてないといふ型(二)スキーはうまいが理窟は知らぬと言ふ型(三)スキーもうまく、理窟もしやべるが、自分のしやべつてゐる理窟と自分の滑つてゐる實際とが一致してないと言ふ型(四)理窟も實際も全くなつてないと言ふ型に分けられると思ふ。第三の型からコーチを受けてゐるのなど全く慘めなもので、言はれる通りにやれば先生の樣にうまく滑れるかと一生懸命になつてゐる。此んなのは實際罪だと思ふ。ではスキーのコーチとしては、どんな人が一番よいかと言ふと、第一に缺點を指摘し得る事第二に相當にうまい事第三に理窟も相當に知つてゐる事、まあ此の三つが揃へば立派なコーチと言へよう。此う言ふコーチに轉ばされてゐれば、三千回も轉べば、結構滑べれる樣になる事請合である。缺點を指摘すると言ふ事は惡口を言ふ事である。我々のスキーは競走の爲ではないから强制と言ふ事もない代りに互に競爭意識も少い。コーチもびし〳〵、惡口は言はぬ、餘程親しい間柄か、權威あるかでなければ、思つてゐる丈ありのまゝに惡口は言へるものではない。そうして見ると眞に役に立つコーチなど全く少い事になる。そこでその結論は、三千回轉んでもスキーはうまくならぬと言ふ事に歸する。實際三千回は愚か一萬回十萬回轉んでもまるでなつてないのが澤山居る世の中だ。安心して可なりさ。(荒)

× × ×

秋晴れの午後。部屋の窓に腰かけてパイプを燻ゆらせば、澄みきつた空の中に、煙が、薄く黑く昇つて行く。土手の芒が光つてゆれてゐる。あゝあの向ふに、氷河のかゝつた鋭い山々が見えるんだとしたら。私は、永久に、其處にさうやつて坐つてゐるだらうに。

×

雨のざん〳〵降る、風のびゆう〳〵吹く防空演習の晩。硝子戸越しに外を見る。眞暗だ。大きな杉が、薄黒い空の中に凄まじくゆれてゐる。俺は、今山に居るんぢやないか、と思ふ。

×　×

家に居る時。山を想ふのは樂しいものだ。

×　×

山で結ばれた友。だうして斯んなに、嬉しい、賴もしい人達なんだらう。お互ひに唯、山へ行くと云ふだけで知り合つたんだのに。

×　×

山へ行くにも金が要るんだ。「要するにブルヂョアは美しい」つてね。

×　×

性格が異へば、登り方も異ふさ。

×　×

靜觀的登山が惡いなんて云はないよ。

×　×

山に對する一つの主義、目的の下に統一された部と、色々な氣持で——と云つても、勿論地味に、眞面目に、——山を愛する人達の集つた部と、どつちも山岳部だね。

×　×

でも俺達は、あの美しい針葉樹を、何時迄も忘れはしないだらう。

×　×

どれがほんとの山登りだなんて、そんな馬鹿な話があるかい。

×　×

篦棒め、行きたい〳〵。行きたい所が斯んなに、斯んなにあるんだのに。でも俺は駄目なんだ。來年からは。——豫定通り行けばね。（エチオピヤ）

漫言

●よく聞く言葉だが、「重いものを背負つて、山ばかり行つて、何處がいゝんだ」。之に對して、「行き度いからだ」。と答へたい。山ばかりと言はれる程行きもしないのに、東京の親戚では山男なる異名を貰ひ、家では勿論山は非公認だ。だから遠く離れてゐるのをいゝ事にして山へ行く俺は、阿母に言はせると、親不幸の大馬鹿野郎ださうである。

●山から歸つて、「如何でした」と素人から聞かれると實に困る。「よかつたです。」と答へる。「どんな所が」。と聞かれると愈々當惑する。

●性來夢多き男。議論を好まず。山へ行く樣になつて、殊に、とりとめない夢想に耽りたがつて講義等は上の空。タンネの林、粉雪、雪煙、素晴らしい滑降……等々、而も交響樂入りだ。

立川の飛行機の爆音が雪崩の様に聞え様と言ふものだ。

●山で見た事、感じた儘を、泉の湧く如く豊富に自然に流麗な筆をすら〳〵運ばせる事が出來たらなあ、と思ふ。最近、大島さんの「僕達の造る山小屋の事を」なる遺稿を讀んで魅了されてしまつた。噫、ヒュッテが欲しいと、二三日其の事許り考へてゐた。

●春は長閑、水温む。さん〳〵と陽光を浴びて雪線漫歩と洒落れ度い。夏山の景物は、雲、瀑、岩、草花等々……夏山等と言ふ勿れ。秋は透徹した大氣に、谷を埋め、峰をめぐる錦繍の中から炭燒煙のが二すぢ、三すぢ。此世のものと思はれない。冬は、一瞬、晴れ上るガスのヴエールより覗く氷稜の飽く迄白く、冷たいのがよい……誰かの眞似をしたが、無より有は生ぜぬとか、無理はしたくないものです。

●山へ行つてはよく食ひ、よく駄洒落る。之丈けの男かもしれない。人一倍のんびりと、周章てない様に心掛ければ、スローモーション等と有難くもない寃名を被せられる。でも、食ふ事、全助、佐々木に及ばず、スローなる事凡兒・大食の比でなく、助平なる事助さんに敵はず、賑かなる事、干瓢、神主に讓り、人相悪き事、カマキリ、雄四郎の敵でない、屁を放つ事……この邊で止さう。

●喰ひ出すと止められぬもの……枝豆、鹽豆。やり始めると止められぬもの……山、スキー。

●色々な事情でオイソレと出掛けられなかつた自分。後數ケ月で卒業とは情けない。學校を出て、山へ行けぬ様な境遇に置かれたら……考へまい〳〵。聽て新雪の訪れが……諸君元氣で一緒に冬山へ出掛け様ではありませんか。（スロモ）

○

ヨハンナ・スピリ「アルプスの山の娘」を讀んだのは二月十七日の夜のことだつた。クンが好い本だからと言つて貸して呉れたので、學年試驗の準備に忙しい時だつたから二三十頁も讀んで止めやうと讀み始めたのが、五十頁、百頁と加速度的に進んで、遂に讀切つてしまつた。そして柔しいアルプスの山の娘ハイヂを中心とする透明な生活と、それを圍繞する壯嚴な山々——未だ見ぬスキスの山々とが心に畫かれてならなかつた。あんな少女が尙アルプスに居るとしたら、僕はどんなに嬉しく思ふだらう。

○

文學少年時代（こんな面（ツラ）をしてゝも、いとも勇ましい時代があつたんで）に讀んだ有島さんの「生れ出ずる惱み」を、この夏の雨の降る日に又讀んでゐた。此の時、僕は全く夢中で讀んでゐた。この中に書かれてある人間の生活とは離れて、別に冬の北海道の山々の叙述が、もうたまらなく僕を惹きつけるのだ

つた。緊張した魂からは、あゝも詩が生れるんだらうか、あんなに平明で、しかもミスティフキカールな雪の日の北國の山々の叙述を讀んだことはない。洗練された純粋な魂は、山に登らない人にも、あゝした叙述をなさしめる。あんな魂を持つて山に登つたら佳い事だらう。此の間カンちやんが藤村の「千曲川スケツチ」に感心して、信州峠から十文字、神流川方面を歩いてみたいと言つてゐたけれど、僕は北の國の山々が戀しくてならない。何時かは北海道にも行く事が出來るだらうと思つてる次第なんだが。

○

「先蹤者」を求めて家に歸つた後、机の上に立てゝ靜かに眺めてゐた。直ちに開いて中味を讀むのが何となしに惜しい様な氣がしたからだ。湯に入り、夕食を喰つた後も、尙しばらく眺めてゐた。それから恐る恐る（？）開いて、先づウインパーの傳記を讀み始めた。ミシエル・クローの寫眞などもあり、見られない人の顏が見られて嬉しかつた。

此の夏東京に殘つてゐた親愛なる彼は、上高地に來られぬので、ジットシテヰラレナイとき、此の本を讀んで山に行つた心算になつてゐたと言つてたが、僕にとつてもこの八月や九月の様に、小癪な天候の日に、こんな山友達が書齋に居るなんて、有難いことさ。だが神津牧場の大島さん。十文字峠の大島さん。その人も既に、先蹤者の中に這入つて、もう遠い所に居られる。

○

「山のアルバム」を作ることは面白いことだ。部室の本棚にあれを見てると自分の登つた山でなくても、愉快で耐らない。時々有難くないニクナメを頂戴してゐる連中が、恰も亦それを裏書きする様な格好をして寫つてゐる。一體に僕は、自分の「山のアルバム」を一生懸命に作ることを務めてゐる。何時見ても愉快に山行を偲ぶことの出來る様なアルバムを作りたい。僕のやりたいのは、クリーム地の紙に、盛り上つて來る山々の像をひそませてやることなんだ。然も山の尊嚴を失はない様に、貼りつけて置くことなんだ。一枚の山の像だつて、僕の心に生きてるんだ、繼子扱ひが出來るもんか。と言つた様な心構えで今作つてるんです。

○

山に行けぬ時はこんなことをして家の中で山を思つたり、懷しんだりする。都會に居ても山ツ子なんですナア。（神主）

山男寸言

○エベレストを目指して進む者。この登頂が實現された時、一體彼等はどうなる？

○深き思慮なくかゝるモツトーを支持する山男なら、たとへかゝる曉にも決して山を止めやう等とは言ふまい。何故？

○最も困難なるルートを選び、最も困難なるコンデイションを突破するを以つて指導精神となす者。まさか之が彼等の山に對する深奥なる理想と一致するとは思はない又思ひたくもないが如何？

○嚴冬の吹雪中丸ビルの北面でも攀ぢてた方がよかないか。

○スポーツは征服とか勝利を目指す内にその過程を樂しむを以つて理想の態度とするのではなからうか。

○登山のスポーツに似て異る所は、その上に更に自然を強く愛慕する本能的な態度を持つ點なのだ。そして之が最上位のものであり、征服とか勝負とかは附隨的な、より下段に位すべきものなのである。

○登山の態度は兎も角として、自然は征服されぬと云ふ事をよく聞くが、これはどうかと思ふ。人間も自然なりと云ふ思想が愚かな頭を混亂して居るのに相違ない。

○樂しむと言ふ言葉。人間萬事快樂追求ならざるものあらうか？　直接に間接に。たゞし之には道德による高尙、低級の尺度が存する。

○登山に於いて自然愛慕の念をもつて最上位とすと言ふと所謂靜觀派詩人は吾が意を得たりと喜ぶであらう。

○これは確かに尤もだ。あらゆる條件から完全な進歩を否定された山男として、かゝる態度は絶讃に價する。

○あらゆる條件。勿論の事、生活問題も含む。登山慾、自然愛慕の本能は確かに生存慾の下位にある事を認める。

○山でなら死んでも好いと言ふ奴、心中なんかと同樣、自然の節理への反逆兒だ。

○進歩とは何か？　よくわからないから單純に向上、或ひは一種の擴張と言つて置く。

○然らば所謂靜觀派詩人にも進歩はある。たゞしそれは主觀界、精神界のみに限定される。

○凡そ進歩のない事程健全なる人間にとつてつまらないものはない。健全なる人間はあらゆる事に對し完全な進歩を追求する。

○然らば健全なる登山家にとつて靜觀派的態度は不完全な態度ではなからうか。

○客觀界、卽ち對象の向上、擴張を彼等に望んで止まない。健全なる山男にして靜觀派詩人なる者へ。

○登山家の對象の擴張。それから精神界の進歩。後者は曰く云ひ難しで實に厄介な代物だがそれだけに眞實深い底無沼である。

○この二者を綜合した理想の態度。これを私の山に對する態度としたい。

○私はあらゆる時、あらゆる山に登つて、而かも靜觀詩人の樣に悠々とした心で、ぢつくりと山を味ひ度いのだ。

○あらゆる進歩を否定された靜觀派詩人に萬腔の同情を寄せる

と共に深く尊敬してやまない。

○又、金と暇と體力に惠まれた一部登山家を深く憐む。彼等は浮薄な流行追求や虚榮に動かされて居るのだ。

○對象擴張の手段として私はあらゆる技術の進歩を計り、併せて盛んに卑近な征服慾を滿足せしめる様な登攀を行つて居る。敢えて登攀と云ふ。

○それと共に、より屢々實力以下のルートを以つて山に溶け込む事を忘れない。

○昔は極度に恐れたアルプスの山々。今では當時、奥多摩を歩いたあの氣易さだ。そして今恐れる山々が將來かくならん事を欲して止まぬ。

○だが物は程度問題。實際として種々の條件から全部的に靜觀派詩人に還元せねばならなくなる。遙かなる理想の悲しいあきらめから。

○還元。吾々の最初の山に對する態度は、恐らく自然に對する靜觀的態度ではなかつたらうか。

○最後に言ふ。始終尤もらしい事を口先でばかり言つて實行せぬ徒輩を心から憎むと。（スパスケ）

◇

僕達が守らねばならないことと云ふものは大概理屈ではわかりきつたことゝか又は云ひ古されたことである。そしてわかりきつた事なんて云ふものは仲々實行出來るものじやない。

山岳部に於ては已れ一個人の山を完成させるのみではいけない。自分の山を完成せしめつゝあると同時に、已れは又山岳部全體の一部分として、その進歩發展の爲に盡さなければならない。

その爲には少なくも山岳部に指導精神と云ふ様なものがなくてはならない。その精神とは何によつてきめらるゝものだらうか。それは眞摯なる部員の頭の中から引き出されたものでなくてはいけない。

學校の山岳部は一年毎にメンバーが變つてゆく。常に新陳代謝してゆくのである。故に指導精神の様なものも亦幾分か變つてゆくのは當然であらう。けれ共大學山岳部は常に先輩現役の一連の結合に依り、生きた部の傳統の上に立つてはじめて有機的な活動が出來るのであつて、それ故にこそお互ひに最も良く理解し合ひ度い。だから指導精神なるものも又出來るだけ普遍性永久性あるものであつてほしい。（KANP）

報　部

部報（一九三四・七――一九三五・八）

昭和九年度

本年度の委員

代表　堀岡清
庶務　林俊介
　　望月達夫
會計　小橋謙三
記錄　森川眞三郎
圖書　望月達夫
器具　林俊介
　　堀岡清

○定例針葉樹會　七月六日　於如水會館

出席者（會員）中川、松木、村尾、近藤、磯野、金田、手塚、久保田、園山、芋川、吉澤（松）、清水、鈴木、増山

（部員）堀岡、林、豊田、鷹野、新羅、望月、鷲崎、湯田坂、佐々木、小林、森川

○定例針葉樹會　八月廿四日　於如水會館

出席者（會員）松木、村尾、近藤、金田、手塚、横倉、久保田、園山、芋川、吉澤（松）、清水、鈴木、増山

（部員）林、望月

○部員宮川雄二郎君永眠す　八月廿八日

本科三年部員宮川雄二郎君は、去る廿三日より千葉縣御宿海岸に避暑中、本日午後四時頃不幸にも游泳中溺死す。

○故宮川雄二郎君告別式　八月卅一日　於本鄉西教寺

故人の告別式は此の日午前十時より西教寺に於て執行された。林　俊介　山岳部を代表して弔詞を捧ぐ。針葉樹會、山岳部より夫々そなへられた花輪は靈前をかざつてゐた。此の日の參列者左の如し。

（針葉樹會員）村尾佥二、矢作太郎、近藤恒雄、磯野計藏、手塚晴雄、金田一郎、芋川稔一、鈴木英雄、田中秀三郎、増山清太郎の諸氏

（部長）木村惠吉郎氏

（部員）打橋壽郎、林俊介、鷹野雄一、望月達夫、森脇芳之、小林重吉、佐々木誠、岩井欣五、西野博

○夏山報告會　九月十五日　於國立部室

出席者（本科）、安達、中島、小橋、齋藤、林、（豫科）、望月、杉浦、森脇、小林、小谷部、佐々木、森川、鷲崎、榎本、原、岩崎、高原（專門部）、鷹野、木村

各班の責任者により報告が行はれ、次いで各々立ちて、感想

を述べたり等す。夏山の報告が一通り終つてから、故宮川君の告別式前後のことがらが述べられたが、これは、故人と最も近しい人達が在京せざるもの多く、從つて告別式に參列出來ず、その人達の爲になされた。

猶、當部に於て曾て用ひられた部員章は型が小さく加ふるに現在殆ど用ひられない爲、新らしくこれを作らんと云ふ意向多く、今日の會にて圖案を大體決定した。午前九時半より正午まで開き、菓子、果物もフンダンにあり盛會であつた。

○定例針葉樹會 九月十七日(月) 於如水會館

出席者(會員)中川、近藤、手塚、園山、小川、清水、吉澤、齋藤、林、望月、小谷部、森脇、鷹野(部員)小橋、(松)

別にあらたまつた話はなかつた。たゞ故宮川君の追悼錄を出そうと云ふ樣な話が出て、大體内定した。

○定期部員集會 九月二十七日 於國立部室

出席者(本科)林、(豫科)小谷部、塚本、小林、森川、岩崎、高原(專門部)豊田、鷹野、新羅

「針葉樹」第七號が出來てくるだらうと皆首を長くしてまつたが、未だなので大いにくさる。

○定期部員集會 十月四日(木) 於國立部室

出席者(本科)堀岡、齋藤、林、(豫科)望月、小谷部、森脇、森川、榎本、高原、(專門部)鷹野

秋山の計畫ほゞ決定す。今日の會も亦雜談的に流れた。豫科の試驗眞近なる爲、一年生の少いのは遺憾だつた。

今日迄に決定せるプラン左の如し。(姓名は責任者)

1| 三ツ峠岩登練習(十月廿一日)……堀岡

2 甲斐駒、仙丈(十月下旬)……林

3 秩父行A東澤(十月中旬)……齋藤、林

B西澤(十月中旬)……鷹野、新羅

4 鹿島槍A荒澤(十一月上旬)……小谷部、森脇

B東尾根(十一月上旬)……望月、鷹野

新らしく作る部員章のデザイン出來上る。皆滿足でこれに決定した。それから故宮川君の「追悼錄」を山岳部として出すことを發表す。編輯責任者は堀岡、望月の兩名。

○故宮川君御法事 十月七日(日) 於本鄕西教寺

故鄕で四十九日の佛事を執行さるゝに先立ち、此の日西教寺に於ても法會行はる。參列者左の如し。猶、豫科部員は試驗眞近なる爲參列者なし。

(針葉樹會員)中川孫一、松木謙三、村尾金二、矢作太郎、近藤恒雄、芋川稔一、鈴木英雄、田中秀三郎の諸氏、(部長)木村惠吉郎氏(部員)堀岡清、小橋謙三、打橋壽郎、伊藤文平、安達泰三、中島孚、齋藤正治、林俊介、豊田忠巍

○「針葉樹」第七號發行さる。十月十日

編輯委員等の努力せる七號出來上る。例によつて豫定よりも大へんおそくなつた。編輯後記にも記されてある如く當部沈滯期の所産であることは一見して明白であるが、これが又新らしい部員達を刺戟し、吾等の榮ある部史を汚さんことを憂へて大いに活躍する時代の近からん事を祈るものである。

○定期部員集會　十月十日(水)　於國立部室

出席者（本科）林、柿原、（豫科）小谷部、森脇、小林、望月、森川、西野、榎本

テクニツクの問題等に關しお互ひに意見の開陳あり。圖書により冬山の研究等をなす。

○先輩學生合同懇親會　十月十六日夜　於國立部室

出席者（先輩）中川孫一、松木謙三、近藤恒雄、手塚晴雄、久保田禮治、小川竹夫、增山清太郎、

（部員）堀岡　清、小橋謙三、中島孚、齋藤正治、林俊介、小谷部全助、望月達夫、鷹野雄一、新羅二郎

吉例お月見會と云ふやつ。が必ず天氣は悪い。のにもかゝはらず午後七時頃より先輩連も多くなり、近來にない盛會。磯野先輩の處から失敬してきた酒だけでは不足で、九時過御多忙中の中川さんが來てから、國立の暗闇を胃して買ひに出かけると云ふ始末、肴はスキヤキにオデンの大量。大食の山男達にもウナル程澤山あつた。豫料は試驗なるも無理して出席せる勇士二名あり。バン公は夕刻まで居たが親孝行の原因で悄然と歸る。林、齋藤は酒の香をたゞよはせて深夜秩父へ出發した。

○定例針葉樹會　十月十九日(金)　於如水會館

出席者（會員）近藤、高橋、手塚、芳川、園山、小川、清水、增山、吉澤（松）

（部員）堀岡、柿原

新らしく出來た部員章を先輩へ御披露におよぶ。

○十月廿日　針葉樹會報特別號として「故宮川雄二郎君追悼號」發行さる。

○定例針葉樹會　十一月十三日(火)　於如水會館

出席者（會員）中川、村尾、近藤、久保田、園山、芳川、高瀬、田中、鈴木、丸茂、增山、吉澤(松)

（部員）堀岡、打橋、中島、林、柿原、望月、小林、佐々木、岩崎、鷹野

久し振りで上京された高瀬進三、丸茂平造の兩先輩を歡迎する。

猶、學生連中は丁度秋の登山が一段落ついたところなので、各班の行動を概略報告した。又鹿島槍天狗鼻尾根を登つたパーティ（小谷部、森脇、鷹野）が三高山岳部員のアクシデントに遭遇した一件を、鷹野が說明し、未だ山にのこつて居る小谷部から堀岡宛に來た書信等を讀んだりした。

○定期部員集會　十一月十五日(木)　於國立部室

出席者(本科)堀岡、小橋、伊藤、齋藤、林、柿原、(豫科)望月、小林、森川、鷲崎、岩崎、高原(專門部)豊田、大野、木村、新羅

冬山及びスキー合宿等の相談をなす。

○部員懇親會　十一月十七日(土)　於國立部室

出席者(本科)堀岡、林、(豫科)望月、小林、森脇、森川、榎本、岩崎、原

此の日夕刻より集合しスキヤキ等で盃をかはす。話は自ら冬の山に飛び、口から出る歌も懐しい山の唄であつた。三高山岳部員と共に遭難地にのこつて居る小谷部のこの席に居ないことは一同の心を幾分淋しくした。

○定期總會　十一月廿二日(木)　於國立部室

出席者(本科)堀岡、打橋、小橋、中島、林、齋藤、柿原(豫科)望月、小林、森脇、小谷部、塚本、森川、榎本、鷲崎、湯田坂、佐々木、原、岩崎、高原清水、(專門部)豊田、大野、鷹野、新羅、木村

本日午後三時より總會を開く。議事左の如し。

一、山岳部規約改正ノ件

一、明年度委員ノ互選

改正規約の草案は昭和六年十一月十日より行はれてゐるもの、これが草案通り通過して新規約となる。

次に十年度委員は次の如く決定。

代表(林　俊介)　庶務(柿原謙一、鷲崎雄四郎、鷹野雄一)

會計(小林重吉、森川眞三郎)、記錄(望月達夫、岩崎利一)

圖書(小谷部全助)　器具(森脇芳之)

○定期部員集會　十二月六日(木)　於國立部室

出席者(本科)堀岡、林、柿原、(豫科)望月、小谷部、森脇、小林、塚本、森川、湯田坂、高原、岩崎、原(專門部)鷹野

豫定せる石田豫科主事をかこんでの座談會は、主事の都合により中止。冬山、スキーの合宿等の打合せをなす。今冬スキー合宿は場所(野澤溫泉)期日(十二月廿二日——卅日)に決定す。

○定例針葉樹會　十二月十四日(金)　於銀座中央亭

出席者(會員)中川、松木、村尾、矢作、近藤、芋川、園山、清水、鈴木、增山

(部員)堀岡、打橋、小橋、望月、岩崎

今年最後の定例集會を明治屋七階の中央亭に於て、晩餐を共にしつゝ一年の憶ひ出話に花を咲かせて行ふ。先輩連中の顏振れもいさゝか淋しい乍ら學生側も今晩から出發する連中もあることとゝて出席芳しからず。

○スキー合宿豫科進備會　十二月十七日(月)　於小平部室

出席者　望月、森脇、小林、塚本、湯田坂、森川、原、岩崎
其の他合宿申込者（部員外）十一名。

○冬山、スキー合宿準備會　十二月廿日（木）　於國立部室
出席者（本科）堀岡、齋藤、（豫科）森脇、小林、小谷部
遠藤、望月、森川、（專門部）豊田、鷹野、新羅、他
合宿申込者（部員外）三名
今冬の計畫中、東尾根（小谷部等）及唐松岳（堀岡等）の打合せあり。又スキー合宿の係をきめ、責任者を小林にたのんだ。今年最後の集會なので萬端遺漏なきよう、相談をなす。

○冬山報告會　一月十七日（木）　於國立部室
出席者（本科）堀岡、林、柿原、（豫科）小谷部、望月、森川、原、岩崎、高原、（專門部）鷹野、新羅、木村
努力してうつした寫眞を中心に、座談的な形式で冬山の報告をなす。堀岡の唐松小舍附近、小谷部の東尾根等で撮影した寫眞は相當優秀なものであつた。

○定例針葉樹會　一月十八日（金）　於如水會館
出席者（會員）中川、松木、村尾、近藤、金田、久保田、園山、芋川、小川、清水、鈴木、増山、吉澤（松）
（部員）堀岡、中島、小橋、打橋、齋藤、林、望月
森川、岩崎、鷹野、新羅、玉置
昭和十年第一回の例會は右の如く先輩學生多數の出席者あつて盛大に催ほされた。特別の事としては針葉樹會の委員が改められた。即ち會報編輯の園山氏のあとは芋川氏が、會計の鈴木氏のあとは吉澤（松）氏がひきうけられた。その他今冬は先輩學生共に比較的よく動いたので冬山の話に時を移し十一時過まで愉快に談笑した。來る廿七日の日曜には吉例懇親スキー行を富士山麓にて行ふ由、ほゞ決定さる。

○定期部員集會　一月廿四日（木）　於國立部室
出席者（本科）堀岡、齋藤、林、柿原、（豫科）森脇、小林、小谷部、望月、岩崎、原、（專門部）豊田、鷹野、新羅
學年試驗がボツ〳〵近づいたので計畫の發表もなく、雜談におはつてしまつた。

○卒業部員送別會　一月廿五日（金）　於新宿モナミ
出席者（卒業組）堀岡　清、中島　孚、小橋謙三、安達泰三
打橋壽郎、豊田忠巍、
（殘留組）齋藤正治、林　俊介、柿原謙一、望月達夫、杉浦　亮、小林重吉、塚本　駿、小谷部全助、森脇芳之、湯田坂哲、森川眞三郎、佐々木誠、鷲崎雄四郎、西野　博、鷹野雄一、高原龍雄、原鐵三郎
岩崎利一、新羅二郎
當部の沈滯期にあたり、犧牲的な努力を部の爲に捧げられた

諸兄を御送りする會は此の日午後六時より部員多數出席あつて盛大にもよほされた。殊に後輩のよき指導者たりし堀岡兄には皆心よりの感謝をさゝげる。

卒業組より記念品としてアルバムの寄贈あり。尚存命してゐたならば當然今夜送別される故宮川君の憶ひ出話も持出され「追悼錄」編纂の折からその題名が大體きめられた。記念撮影をなし十時半散會す。

○定期部員集會　一月卅一日(木)　於國立部室

出席者（本科）堀岡、中島、林、（豫科）小谷部、森脇、小林、塚本、岩崎、原、（專門部）鷹野、新羅

今春のスキー合宿等につき協議す。ほゞ八方尾根下の黒菱に内定した。

○定期部員集會　二月十四日(木)　於國立部室

出席者（本科）堀岡、林、（豫科）小谷部、森脇、望月、岩崎（專門部）鷹野

春期スキー合宿は最初黒菱と云ふ説も多くほゞ内定した様だつたが、矢張り從前通り野澤で行ふことに確定。春のプランの決定が二、三あつた。左の如し。

1. 春期スキー合宿（野澤酒屋）責任者（小林）
2. 白根、澁峠、發哺、野澤へ　〃　（林）
3. 黒菱スキー小舍　遠見尾根　〃　（小谷部）
4. 唐松、白馬附近

○故宮川雄二郎君追悼錄「**落葉**」發行さる　二月十五日

山を愛しつゝも　海で不慮の死に遭ひ、其の若き生命を捧げた故人の追悼錄は内容、體裁共に大體理想に近く本日出來上る。故人と最も親かりし人々によつて執筆せられた本書は、又最も良く故人の面影を語つて居るものである、宮川君も以て冥す可きであらう。

○定例針葉樹會　二月廿七日(水)　於如水會館

出席者（會員）中川、松木、矢作、吉澤、近藤、磯野、手塚、久保田、芋川、園山、小川、吉澤（松）鈴木、増山

（部員）堀岡

學年試驗直前なる爲學生の出席非常に僅少なり、今度東京に轉任となられた吉澤一郎氏を迎へ盛會であつた。吉澤氏が再び東京に來られる様になつた事は現役連中にとつても嬉しさ極みなしと云ふ處だ。

○昭和六年以來四日市にあつて病臥靜養に努められし先輩**中島嘉一郎氏**は不幸にも二月廿七日午前七時逝去さる。吾等現部員の多くは既に同氏の警欵に親しく接せざりしも、曾つて中島氏の當部に盡された大なる功績と、その輝やける登攀の數々とを思ひおこし此處に衷心より哀悼の意を表す。

猶、御遺族の方の御厚意により、故人の山岳に關する藏書一切が磯野氏の手を經て山岳部に寄贈されることゝなつた。

記して謝意を表す。

○スキー合宿豫科準備會　三月六日(水)　於小平部室

出席者(本科)林、(豫科)小谷部、森脇、小林、塚本、杉浦、望月、森川、榎本、湯田坂、原、岩崎

報ぜらるゝ處によれば、野澤の積雪が八〇センチなので一部の連中は五色の三〇〇センチにあこがれ、吾妻山塊を中心とした山小舍生活のプランを支持したが、結局懷しの野澤の方がいゝと云ふ事になり豫定の如く九日出發ときまつた。

○豫科山岳部送別會　三月六日(水)　於國立部室

出席者(卒業組)望月、小谷部、杉浦、塚本、森脇、小林、森川、榎本、西野、湯田坂、岩崎

(殘留組)鷲崎、森

此の日豫科の試驗が千秋樂をとげた夜、國立の吾等の小舍で牛鍋とオミキで賑やかに豫科の送別會を行ふ。

○臨時針葉樹會　三月廿七日(水)　於如水會館

出席者(會員)中川、矢作、吉澤、村尾、小栗、近藤、横倉、久保田、芋川、鈴木、增山

(卒業部員)堀岡、中島

(部員)林、齋藤、柿原、小林、鷹野、森川、岩崎

本年度卒業生の送別會を開き夕食を共にする。送らるゝ者の數は少なくて物足りなかつたが共に都落ちをする者なれば、別離の情更に深し。

昭和九年度以上

昭和十年度

本年度委員

代表　林　俊介

庶務　柿原　謙一

鷲崎　雄四郎

鷹野　雄一

會計　小林　重吉

森川眞三郎

記錄　望月　達夫

岩崎　利一

圖書　小谷部全助

器具　森脇　芳之

○豫科新入部員歡迎會　四月廿日(土)　於國立部室

出席者　杉浦德次郎先生

(本科)林　俊介、小谷部全助、小林重吉、森脇芳之、望月達夫(豫科)鷲崎雄四郎、森川眞三郎、榎本直司、湯田坂哲、佐々木誠、原鐵三郎、岩崎利一

高原龍雄、清水慶一(專門部)鷹野雄一、新羅二郎

(新入部員)小柳二郎(本、三)鈴木惣兵衛、齋藤明智、日江井正已、大塚　武、奥山忠敎、毛塚由太郎

秦　良平、(以上豫、一)

今年の新入部員は七名と云ふ近年にない多人數であつた。部室に一杯につまつて盛大なる歡迎會を開く。先づ林の歡迎の辭に續き杉浦先生の御挨拶があり、後一同會食して自己紹介にうつゝた。そして西に陽が傾くまで意義深い午後をすごした。

○定例針葉樹會　四月廿三日(火)　於如水會館

出席者(會員)中川、吉澤、近藤、磯野、久保田、園山、吉澤(松)
(部員)林、小柳、柿原、望月、小谷部、鷹野、森川
岩崎

先輩の顏が餘りそろはなかつた。五月十二日の國立懇親會のことがきまる。

○定期部員集會　四月卅日(火)　於國立部室

出席者(本科)柿原、林、小谷部、小林、(豫科)原、高原
齋藤、日江井、大塚、毛塚、秦、(專門部)鷹野、新羅

第一回の讀書會を開く。"A prelude to adventure"

○定期部員集會　五月二日(木)　於國立部室

出席者(本科)齋藤、小柳、林、柿原、小谷部、望月、小林
(豫科)森川、岩崎、原、日江井、秦、齋藤

新入生歡迎登山を谷川岳に於て行ふことに決す。

○先輩學生合同懇親會　五月十二日(日)　於國立部室

出席者(先輩)中川、松木、吉澤(令息同伴)、村尾、近藤
磯野夫妻、園山、吉澤(松)、増山
(學生)林、柿原、鷲野、小林、小谷部、望月、岩崎

泣き出し相な空模樣の爲か午前十時からと云ふ會が、二時間ばかり遲延し、その上牛肉を立川迄買ひにやらせるさはぎでオミキがまはり始めたのはかれこれ二時に近かつた。集まつた面々は新舊の猛者ぞろひで先づ吉澤先輩の第二世を火のつく如く泣かしめ、自家用を見事ウン轉してこられた磯野先輩の夫人の膽を冷やさしめ、近來稀なる珍事續出した。

○專門部新入部員歡迎會　五月卅一日　於國立部室

出席者(本科)林、小谷部、柿原、(專門部)鷹野、新羅、
(新入部員)松浦靜雄、大島秀雄(以上專、二)
谷ケ崎龍二、湯村信一、水永毅六(以上專、一)

午後三時より行ふ。通知が行きとゞかず、大したもてなしもしないで新らしい連中には氣の毒だつたが、新入部員がます〳〵確固になつた事は喜ばしい。

○定期部員集會　六月十日(月)　於國立部室

出席者(本科)林、柿原、森脇、望月、(豫科)森川、岩崎
高原、日江井、大塚、齋藤、秦、(專門部)鷹野、谷ケ崎

來る廿三日、三ツ峠岩登練習(新入生の爲に)のことがきめ

られた。

○定例針葉樹會　六月十四日(金)　於如水會館

出席者(會員)中川、吉澤、松木、近藤、高橋、園山、芋川

吉澤(松)、增山

(部員)林、柿原、小谷部、鷹野、望月、森川、岩崎

原、新羅、松浦、谷ケ崎、水永

小谷部のカクネ里を中心に最近の部の動きを報告す。

新顏の紹介等をなす。

○臨時總會　六月十七日(月)　於國立部室

出席者(本科)林、柿原、森脇、小林、小谷部、望月、(豫

科)鷲崎、森川、佐々木、西野、榎本、岩崎、原、

高原、鈴木、日江井、大塚、奥山、毛塚、齋藤、秦

(新入部員)內田素彦(豫、一)(專門部)鷹野、新

羅、松浦、谷ケ崎

豫算案の決定を見んとしたが、會計委員小林が登行の爲、準

備不充分の結果これは次回にゆづる。新入部員合計十名に部

員章をわたし正式の部員とす。故中島嘉一郎氏より寄贈され

た山岳書は去る五月十二日の懇親會の歸路、磯野氏宅より御

受けし整理中の處本日部室の書棚に納め、これを中島文庫と

してその扉開きを行ふ。全部で八十七册(內譯　洋書六、紀

行廿三、案內六、研究隨想廿二、機關誌類三〇)。最後に夏

山の計畫が具體的に論ぜられ、何時になく活氣を呈した。

○豫科山岳部主催　山岳寫眞登山用具展覽會

六月廿八、廿九日　於小平評議員室

夏山をひかえ一般學生への奉仕の爲に、豫科山岳部主催に

て展覽會をもよほす。本科の方にても時節柄、充分な援助は

出來ず、豫科の森川、鷲崎、榎本、岩崎、原等の諸兄の犧牲

的努力によつたものである。はじめての事故、豫定せる映畫

は準備間に合はなかつたが、山岳部の誠意は一般に認められ

充分の効果があつたことゝ思ふ。

○臨時針葉樹會　六月廿九日(土)　於元園軒

出席者(會員)中川、松木、村尾、吉澤、近藤、磯野、吉澤

(松)、鈴木、增山、堀岡

(部員)林、柿原、小谷部、森脇、杉浦、小林、望月

森川、鷹野、原、岩崎、高原、新羅、毛塚、齋藤、

日江井、內田

今春部を卒業し、遠く門司に離れた堀岡清氏の偶然の上京を

歡迎し、盛大なる集ひを開く。中川さんの歡迎の辭が暴笑の

中に終れば、堀岡氏型の如き答辭。それからは飲めよ食へと

大さわぎ。安曇節、野澤小唄に近藤氏のおどり。ならべられ

た空罎は五十本餘。後、居づまひを正し、山の話に移り、部歌

を齊唱してお開き。

○夏山相談會　七月一日(月)　於國立部室

出席者(本科)柿原、小林、小谷部、望月、他部員外三名

（豫科）鷲崎、森川、榎本、佐々木、岩崎、原、高原
鈴木、日江井、大塚、齋藤、內田、（導門部）鷹野、
新羅、松浦、谷ケ崎

各班の人員、出發期日等を決定し、器具、食糧等の微細な點に至るまで打合せをなした。各班を左に記す。（姓名は責任者）

1. 燕、槍、穗高　A班……柿原
　　B班……森川
2. 烏帽子、槍……森川
3. 北鎌尾根、小槍……森脇
4. 唐澤生活……小林、鷹野
5. 錫杖岳……小林
6. 奥又白……小谷部
7. 鋸、甲斐駒附近……鷹野
8. 尾瀨沼附近……森川
9. 奥秩父……原、高原

猶、上高地のベース・キャンプは七月八日より八月上旬迄とし、責任者を小谷部にたのみ、夏山本部を望月宅とせり。

○定例針葉樹會　七月十日(水)　於如水會館

出席者(會員)中川、松木、村尾、吉澤、芋川、園山、吉澤(松)、小川、鈴木、增山
(部員)林、望月、小林、森川、原、岩崎、毛塚

針葉樹會の方針として例會を時々近くの山に於て行ふ案が出たが、皆これに賛成した

○委員會　八月七日(水)　於澁谷林宅

(出席者)林俊介、小谷部全助、森脇芳之、望月達夫、小林重吉、鷹野雄一、森川眞三郎、岩崎利一

針葉樹第八號の編輯方針を協議す。尙編輯委員として林、柿原、小谷部、望月、小林、岩崎の六名あげらる。

閉會後皆打揃つて中野に中川先輩を訪問。先日近藤先輩を訪問せし時の如く大いに御馳走になる。

○定例針葉樹會　八月二十日(火)　於如水會館

出席者(會員)中川、村尾、吉澤、近藤、手塚、芋川、園山
吉澤(松)
(部員)林、小林、小谷部、望月、和田、鷹野、塚本
佐々木、森川、岩崎

休暇中にもかゝはらず學生側の出席者も相當あつてさながら夏山懇談會と云つたかたちだつた。今夏の寫眞等を持より愉快なる一夕をすごす。

尙針葉樹會報第六年第九號は五拾號にあたるので增大號とする由此の席上で確定された。

○委員會　八月廿一日(水)　於松原望月宅

(出席者)林、小谷部、望月、小林、鷹野、森川、岩崎

今秋發刊の豫定の針葉樹の編輯につき、根本方針を再度協議す。具體案生る。

部員名（昭和十年九月現在）齋藤正治、小柳二郎、林俊介、柿原謙一、小谷部全助、望月達夫、小林重吉、森脇芳之、大野惠司、和田榮達、鷹野雄一、新羅二郎、松浦靜雄、谷ヶ崎龍二、塚本駿、佐々木誠、西野博、湯田坂哲、榎本直司、鷲崎雄四郎、森川眞三郎、原鐵三郎、岩崎利一、高原龍雄、鈴木惣兵衛、日江井正已、大塚武、毛塚由太郎、齋藤明智、秦良平、內田素彥

◇寫眞說明

△朝映の雪稜——昭和十年一月三日、長い荒天後の快晴。唐松よりの尾根より五龍岳を撮つたもの。ピンクに染められた山々は何とも云へない。

△鹿島槍東北面——九年十一月六日午前九時頃、天狗尾根の一角から北槍を仰いだもの。薄く新雪をかぶつてすつきりした稜線が深く印象に殘つてゐる。

△鹿島槍東尾根——九年十二月廿六日、明日の登攀を助ける爲ラツセルに出掛けた際一ノ澤頭より撮したもの。輝く岩壁は時々吹捲る雪煙に芒とかすむ。

△荒澤奥壁——九年十一月四日、朝。荒澤の瀧を越して暫く行つた所から奥を仰いだもの。新雪が岩壁を一層莊重に描き出して居る。

△天狗尾根よりのカクネ里、八峰キレット——九年十一月六日寫眞の最低コルが「キレット澤2」のツメ。それから左のコルがキレット小舍のある所。更に上つても一つの切れ込みが八峰キレットである。

△六月のカクネ里——十年六月九日。午前十一時頃。北槍登攀を了へ鹿島川溯行して荷を取りに戻つた時二俣から撮つたもの

△四月の飯豐連峰——十年四月十四日朝、晴、本社小舍附近より西望。左は大日岳。中央、御西（三國）岳。右方遠くは石コロビの頭より地神へ續く尾根。手前の低い尾根がノコギリ尾根でその最低コルは檜山澤より余等の登りたる處。

△唐松小舍よりの劍——九年十二月卅日午前八時、さて出掛けの朝山へ出掛ける前の一時を小舍の前に腰を下して北岳を仰ぐ。

△大樺小舍よりの北岳——十年六月廿三日、すが〳〵しい初夏の樣かとアイゼン片手にグイと左右に扉を押開けたとたん、まぶしく目に飛び込んで來る白又白の林立。

△錫杖岳前衛ピーク——十年七月廿六日朝、錫杖岩小舍から仰ぐ。このスリーテイースは實に立派である。未だに何等のルートも開拓されて居らぬ事も張切つたクラッグスマンにとつて此上ない魅力である。

△錫杖岳東南面——十年七月廿六日。午後一時頃。烏帽子岩東肩から寫す。一見登攀の對象として考へ得ざる程に凄い。

△思ひ出——昭和五年四月十三日。平藏の頭にて。向つて右より彥一、浦松、中島、宗作の四君

△神ノ田圃よりの後立山——十年一月六日。早大ヒュッテ前から寫す。なつかしい五龍鹿島槍が白銀に輝いて數々の想出に耽らせる。

◇編輯後記◇

すべて登高は、人が視ればその人の登高行爲であり、その人にとつてはその心の登高に他ならない。登山者としての生命は眞摯なる登高心の次々と起り來るところに發展する。而してその登高心は強さ及深さの二側面を持つ。登山者たるもの、その登高心は常に強く且深いことが望ましい。

大學山岳部の年報、登山史上に於て論ぜらるべきものである。併しわれわれが今度僅か一年間の登高記錄を纏めての「針葉樹」第八號を上梓する所以は、第一に、登山者、殊に若き登山者、東京商大一橋山岳部員としての我々の登高心の發表にある。青年の時代、登高心は深さより強さに於ていや勝さる。人或ひはそれを報告書への登高を命じ、急峻な山、氷雪の山、遠き地の靈峰ヒマラヤへの登高にまで進む。記錄は知られざる中に自づとそこに生れ來るに違ひない。

登高心の發表、それは文筆の拙き我々にとつて登高より增して困難が伴ふ。もとよりこの一書、我々が山に對して抱く氣持の半ばだに表はし得てゐないけれども、かゝる意圖を以てなしたる發刊の苦しみについては何等云ふべきものを持たない。唯若しこの「針葉樹」に冗漫の無き樣に、その心のうち深く湧き起る强い登高心を十分に充す樣なもとよりその深さを排斥する所以のものでない。

我々の使命——若し聞く人ありとせば——我々は世界をもつ、登山者たる可く努力するものであると答へる。世界なる言葉の說明は、この狹き後書に於てつくさる可きものでない。賢明なる諸氏の御憫察に待つ。唯我々は附言したい。組織體としての大學山岳部の使命はその努力への快よき、明朗なる協力にある。互にその登高心を理解する親しさは次第に相伴ひ、自己の登高心を良く知つて組織としての生命もかくの如く全く心の結合に基くものである限り何等の不安に脅かされることもなく、又其處にのみ進歩が見出されると信ずる、と。（林　俊介）

共に語り合ふ裡に、强い山友達の集りである。

昭和十年十一月廿日印刷
昭和十年十一月廿五日發行

定價一圓八十錢

編輯兼發行者　林　俊介　東京市澁谷區北谷町四九
印刷者　土井儀一郎　東京市京橋區築地一ノ六
印刷所　典文社印刷所　東京市京橋區築地一ノ六
發行所　橋山岳部　東京府北多摩郡谷保村國立　東京商科大學內

編輯委員
林　俊介
望月達夫
小林重吉
柿原謙一
小谷部全助
岩崎利一

Salomethyl for Sports

健脚劑
サロメチール

脚(あし)が參(まい)つては山の興味も臺なし
です。寢る前に脚(あし)や肩や腕に擦(す)
り込んでさへ置けば疲れ知らず
に樂々と祕境の踏破ができます

殊にキヤンプや山宿では、蚤(のみ)や
蚊(か)除(よ)けともなり實に重寶です。

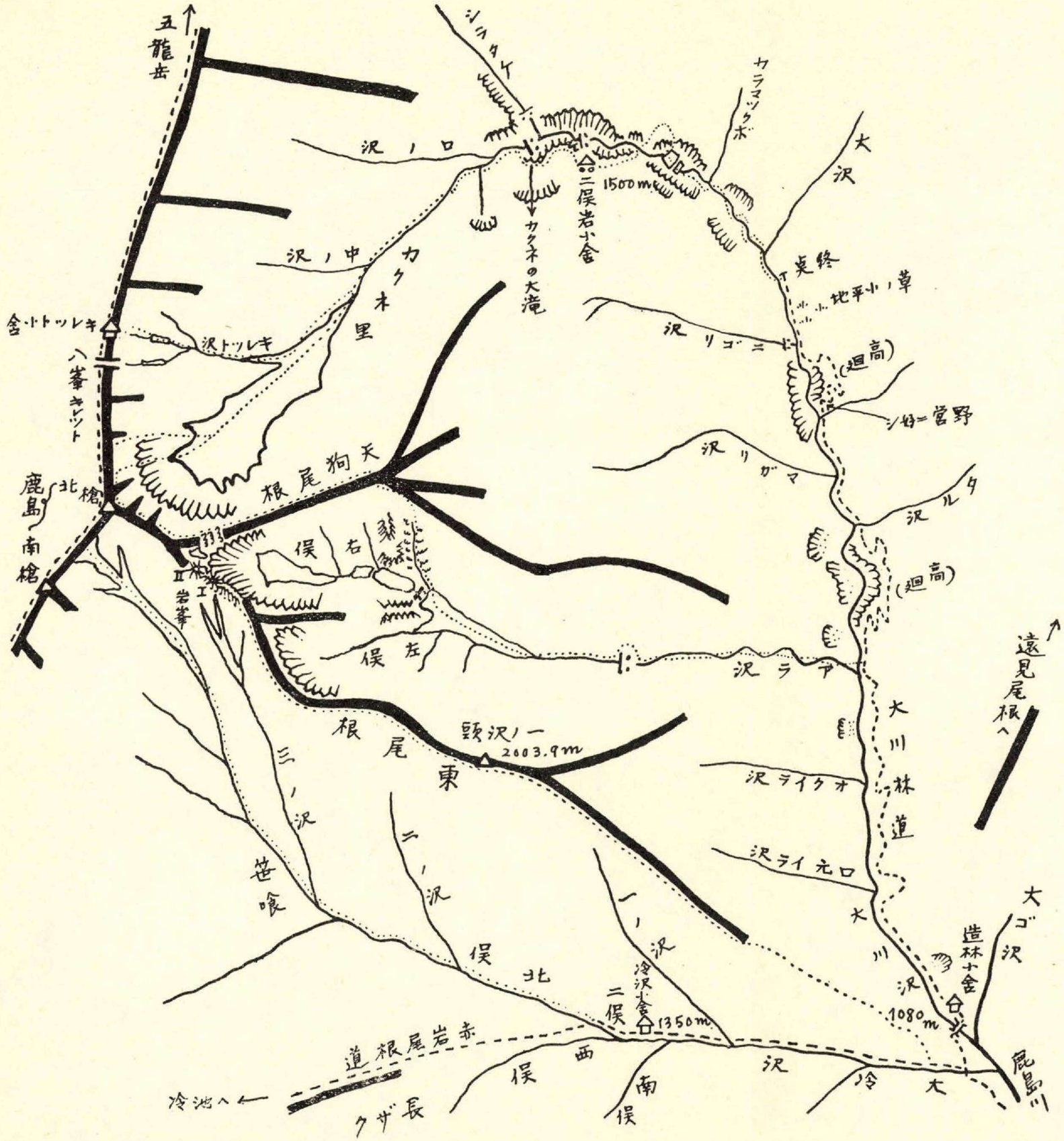
一円
五十錢
二円半
液狀 一円
藥店にあり

鹿島槍ケ岳東面概念圖

登路

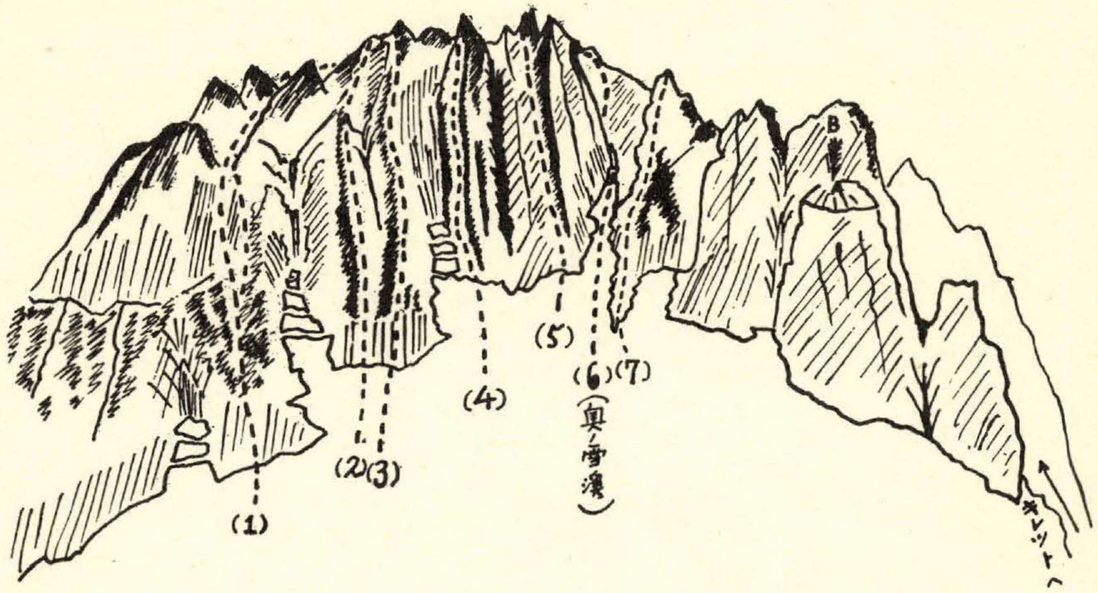
踏査路

殘雪狀態は大體八月下旬なり

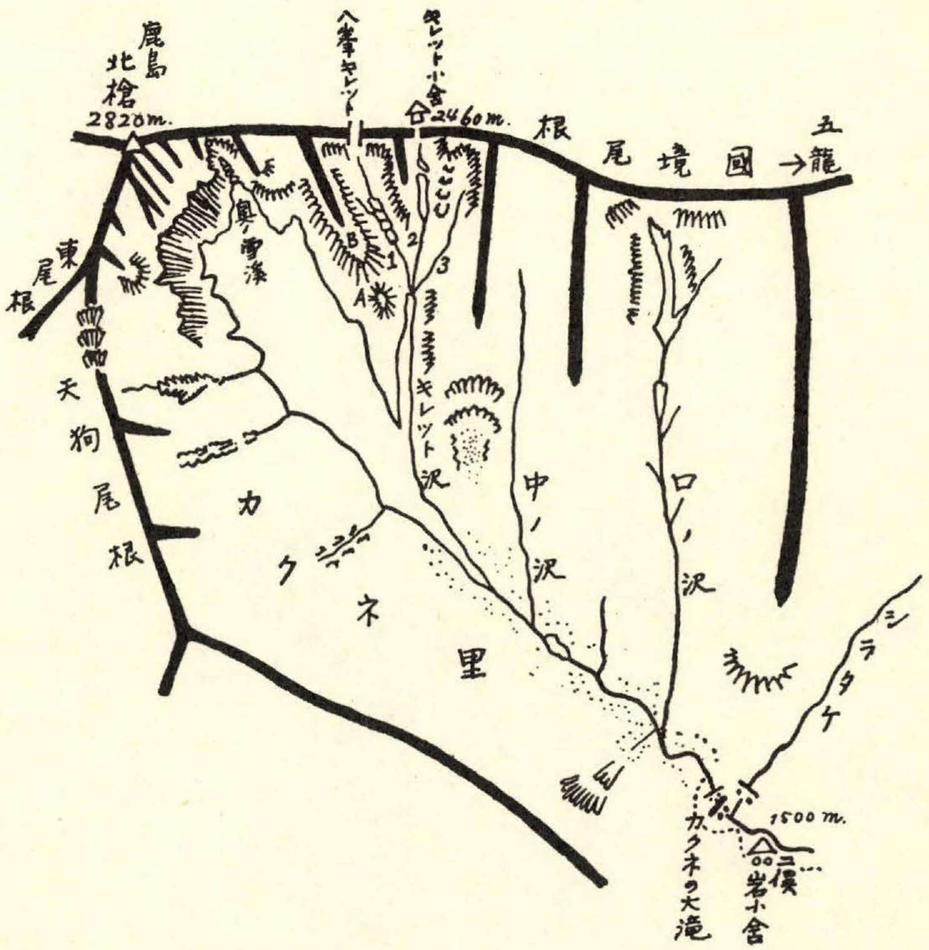


小谷部全助

カクネ里奥壁仰角圖



カクネ里附近概念圖

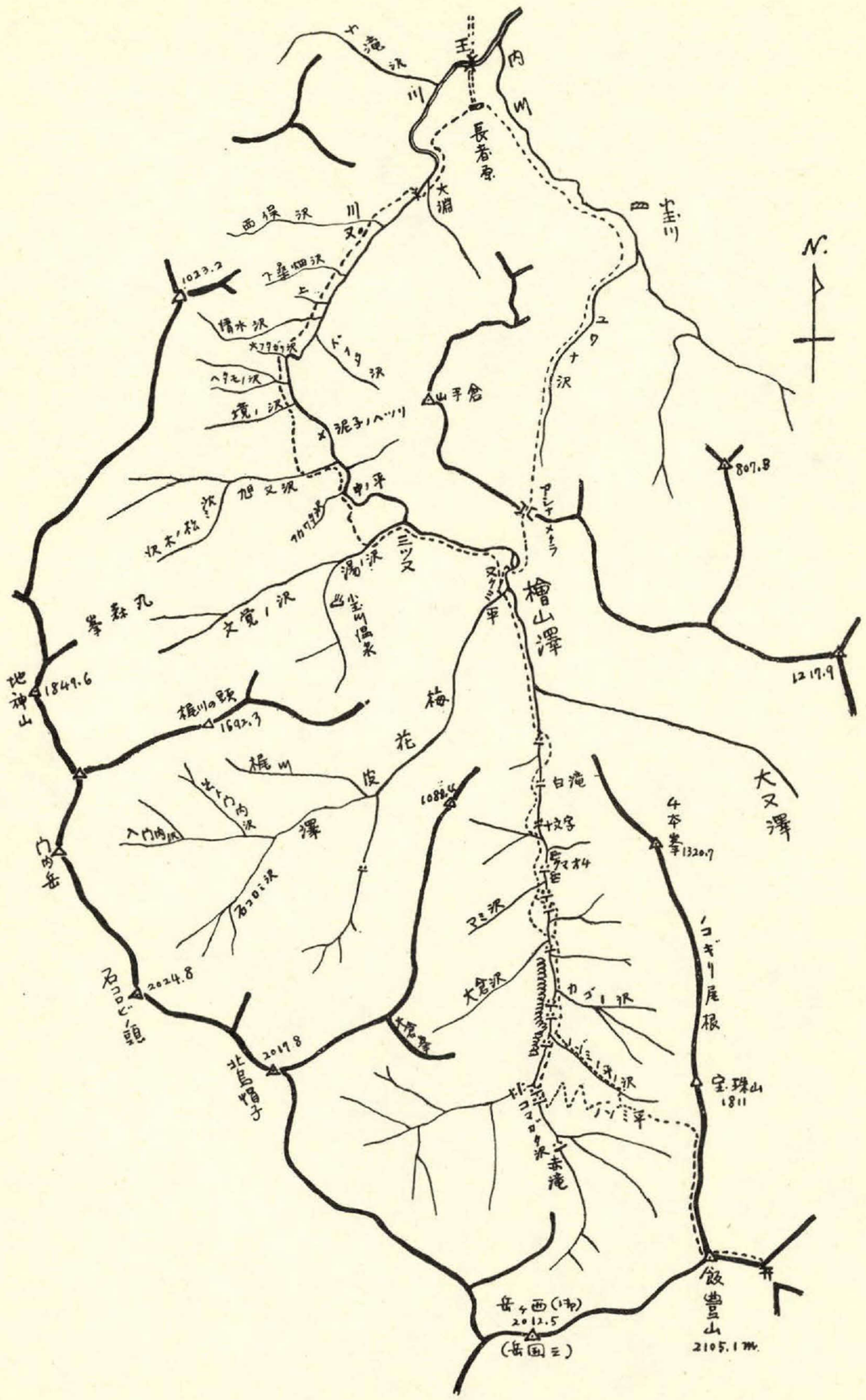


小谷部全助

殘雪狀態は共に八月頃なり

飯豊山檜山澤附近概念圖

齋藤正治
林俊介

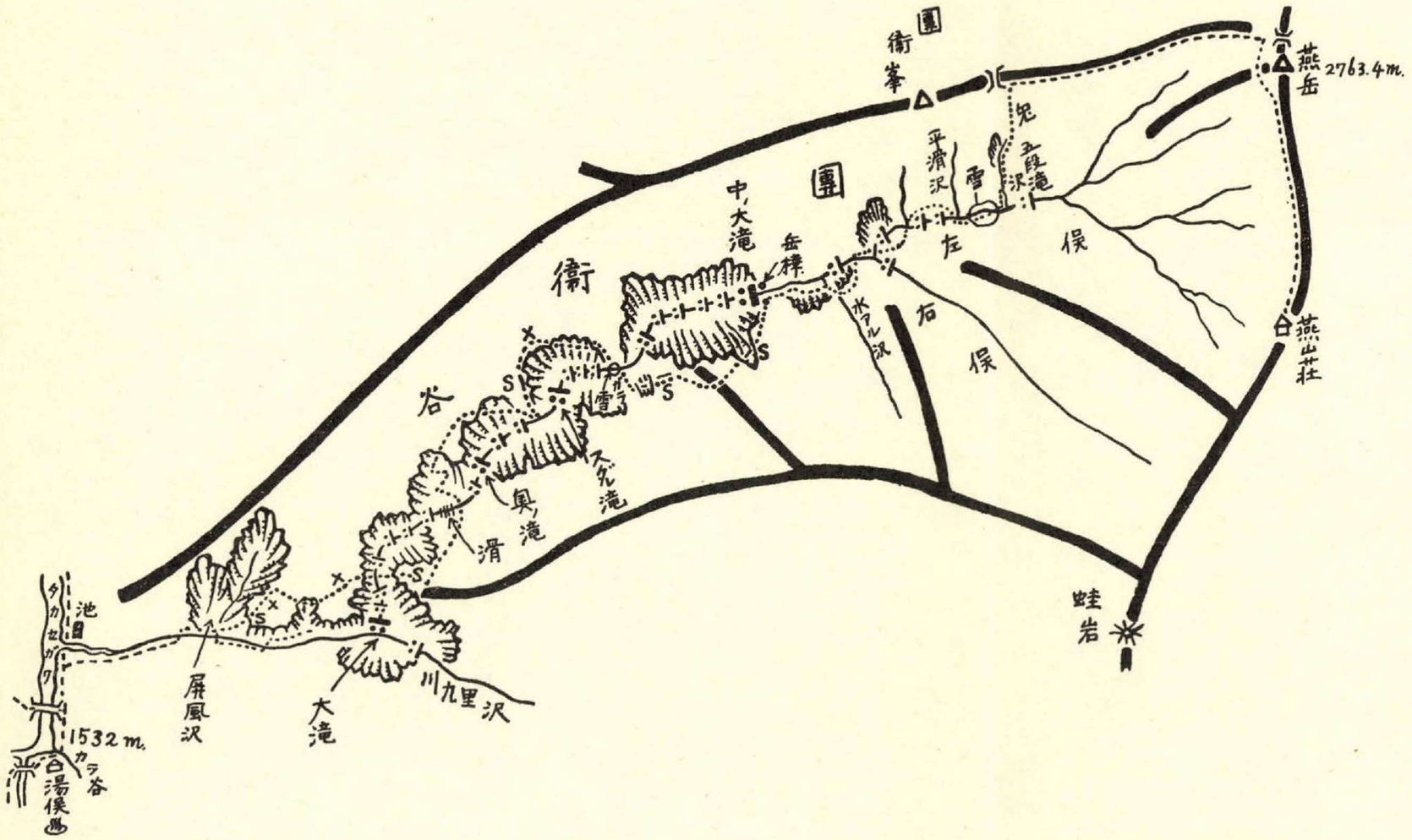


……は登降ルート

陸測五萬分一圖幅の登山路は便宜上省略す。

白瀧より上流は殘雪又はデブリに半ば埋められ瀧などは充分に知る由もなかつたが既に發表されたものを參考としそれに我々の見聞を加へて作成した。

團衛谷概念圖



……　下降ルート

S　ザイル使用個所

×　池の見えた地點

吉澤一郎

四十五年の經驗と滿足を賣る店

創業明治廿五年

福田洋服店

東京市神田區錦町三丁目二十二番地
電話神田(25)三五三一番
振替東京六九八〇番

商大生の洋服屋

今野洋服店

神田區神保町二丁目四番地
專修大學前停留場角
電話九段(33)三一八二番

粉雪の乘鞍岳へ！

皆様の御出を御待して居ります

乘鞍岳スキー小屋

齋藤安一

長野縣南安曇郡安曇村
（番所原菊屋旅館）

針葉樹バックナンバー

第五號　定價　一圓五十錢
第六號　定價　一圓八十錢
第七號　頒價　一　圓
（昭和九年十月發行）

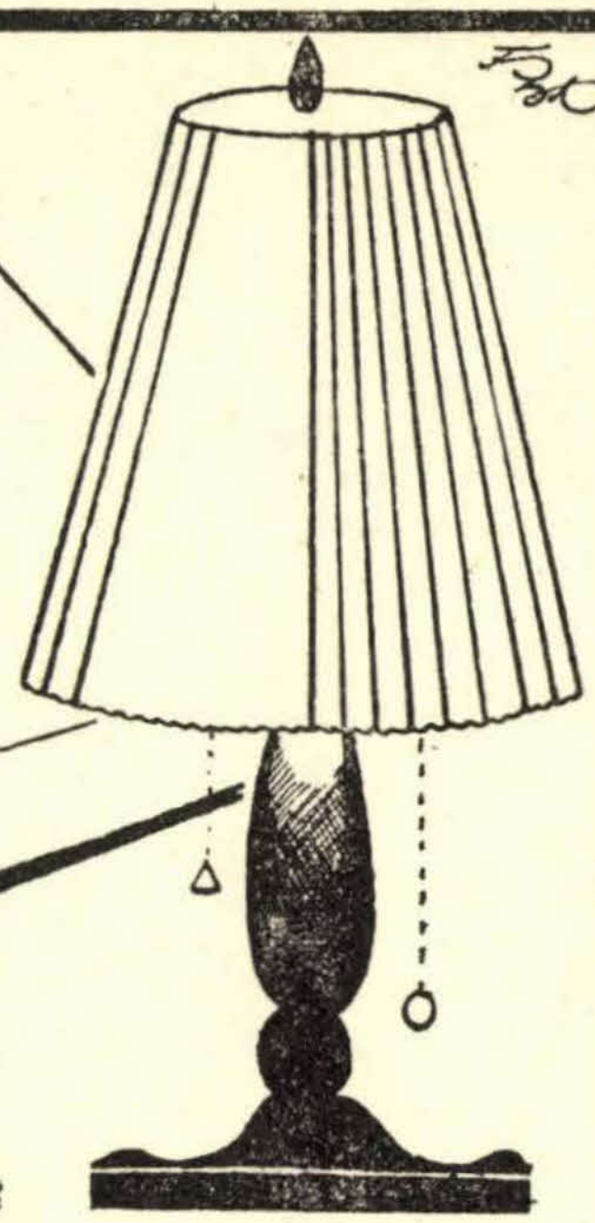
右殘部僅少ございます。御購讀下さいます方は前金にて左記へ御申込を乞ふ。尚、內容等に關しても御返事申し上げます。

東京市杉並區馬橋二ノ二三八
望　月　達　夫

洋書は三越

歐米新刊の圖書・雜誌新聞等を豊富に取揃へて陳列。何卒御用命は三越洋書部へ……

御申越により月刊バイパー送呈



三越

東京日本橋

スリパ
ルイオーザレ

スキーに

忘れてならぬもの
此の一品!!(保革油の元祖)

たゞスキー靴にすり込めば良し、完全の防水力を有し凍傷の憂ひ絶對になく、本品不斷の塗布御愛用によつて始めて妙技が自由に出來ます

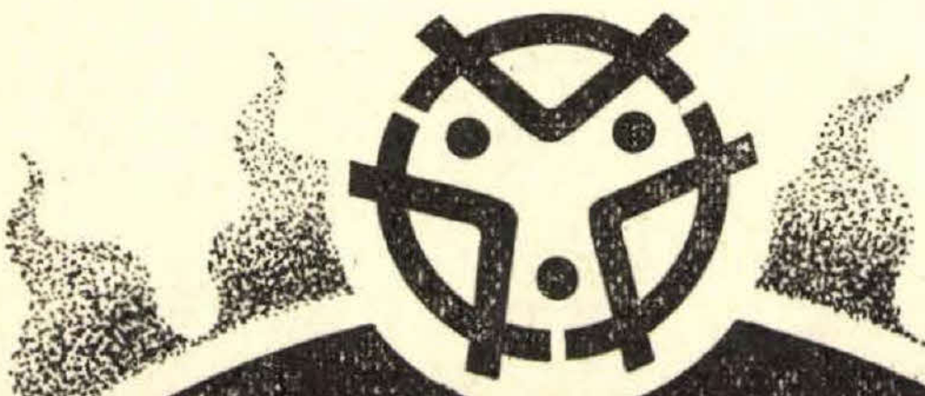
携帯使用ともに簡便のチューブ入れ　パリスレザークリームもあり
大好評！　御愛用の程を

有名靴店・運動具店にあり

(意匠登錄　第五一三八一號)

製造發賣元
東京　井上化學研究所

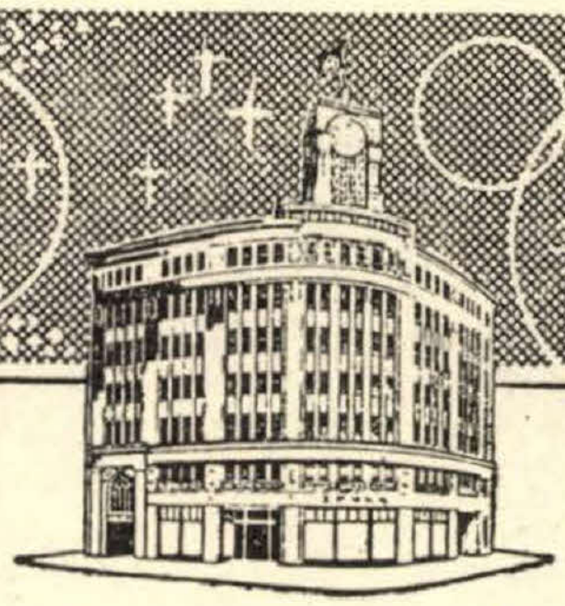
火災・海上・運送
傷害・自動車・信用
各種保険



資本金壹千萬圓

共同火災

東京銀座八丁目・東關営業部



營業品目

精工舍製各種時計
歐米各種時計
貴金屬・裝身具
ダイヤモンド・眞珠
內外各種美術工藝品
金銀器・硝子、陶漆器
照明器具・皮革製品
喫煙具・萬年筆
眼鏡及双眼鏡
寫眞機・ラヂオ
蓄音器・レコード
測量、製圖用諸器械

東京 銀座

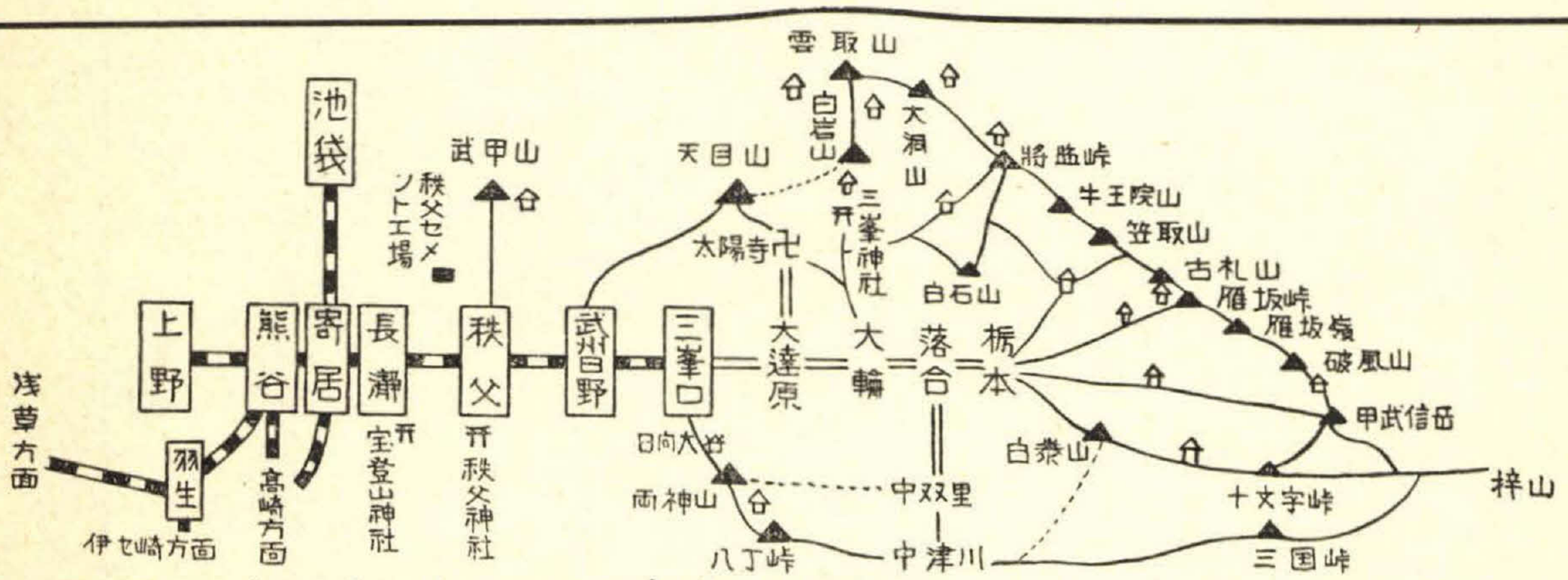
服部時計店

支店…大阪博勞町四丁目

奥秩父登山行程と所要時間案内

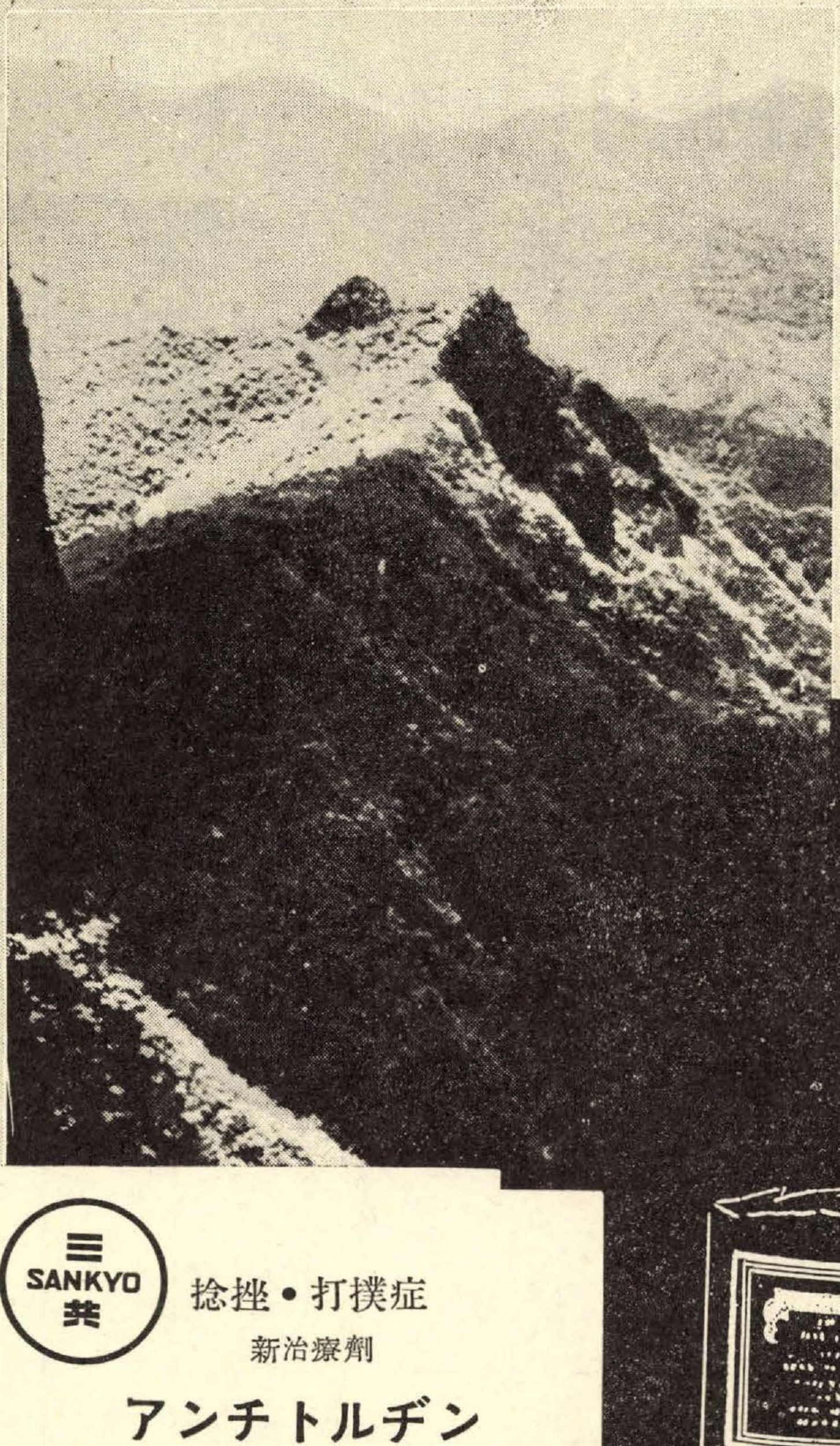
上野驛（熊谷驛に乘換）（汽車電車約三時間）—三峰口驛 自動車十五分 一里餘 大輪

大輪
- 三時間 二里半 栃本
- 一時間半 一里強 三峰山
  - 六時間 三里 白石山
    - 三時間半 三里 鴨澤
    - 四時間半 三里 將監峠
      - 四時間 二里半 氷川
      - 四時間 二里半弱 雁坂峠（東京市水源林通過）
  - 六時間 三里 武州雲取山
    - 三時間半 三里 將監峠
      - 四時間 二里半弱 雁坂峠（東京市水源林通過）
    - 三時間 一里十丁弱 雁坂峠
      - 二時間 一里半 甲武信小屋
        - 三時間半 一里半 十文字峠
        - 三時間半 一里半 十文字小屋
  - 三時間 二里半 雁坂峠
    - 二時間半 二里 廣瀬（山梨縣）
    - 三時間 二里半 落合
      - 三時間半 一里半 十文字小屋
      - 二時間甲武信小屋
  - 四時間 二里半 將監峠
    - 三時間 二里半 落合（山梨縣）
    - 五時間 二里半 甲武信小屋
      - 四時間半 三里 梓山（長野縣）
  - 五時間 二里半 將監峠
    - 三時間 二里半 落合（山梨縣）
    - 四時間半 三里 梓山（長野縣）
  - 四時間半 三里 鴨澤
    - 四時間半 二里半弱 雁坂峠（東京市水源林通過）
    - 四時間 四里 氷川
- 三時間半 一里半 中双里
  - 二時間 二里弱 中津川
    - 三時間 二里半 兩神山
      - 四時間 三里半 小森
      - 三時間 二里半 八丁峠
        - 二時間半 二里半 坂本
        - 一時間半 二里弱 梓山（長野縣）
    - 六時間 四里 三國峠
      - 四時間 二里半 十文字峠
      - 六時間 五里 新羽（群馬縣）

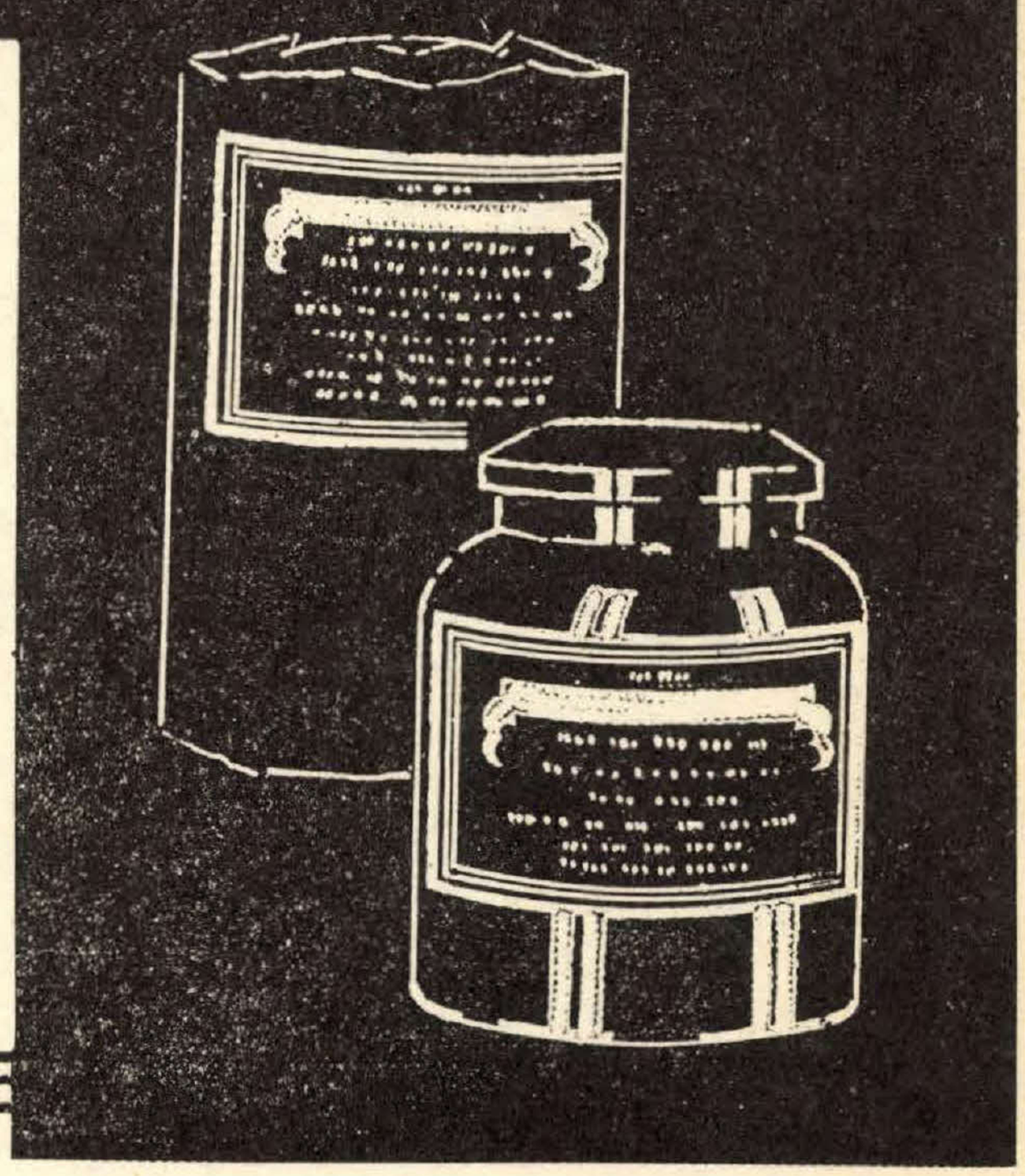


埼玉県・熊谷市・電話・熊谷・142・772番・

秩父鉄道株式会社



アンチトルヂン



三共 SANKYO

捻挫・打撲症

新治療劑

アンチトルヂン

外用塗布・無副作用性、常に即座に使用し得らる

輕度、中等度のものは一、二回の貼用にて、高度のものも數回の貼用にて良果あるを知らる。

（說明書御申越次第送呈）

東京・室町　**三共株式會社**

SKI Heil!!

新 入 荷

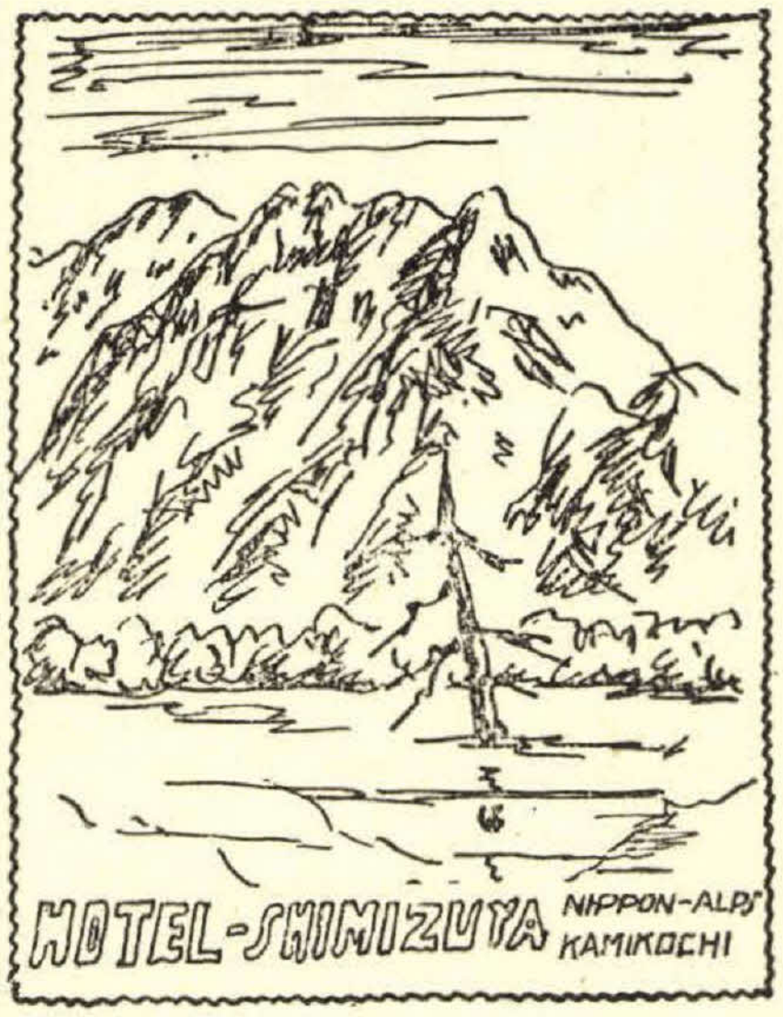
舶來アメリカンヒツコリー材

丸　型 ……¥ 20.00 ヨリ

平　型 ……¥ 18.00 ヨリ

東京牛込矢來下終點

運動用具 **玉澤** 電(牛込) 1328 4067 6358



日本アルプス

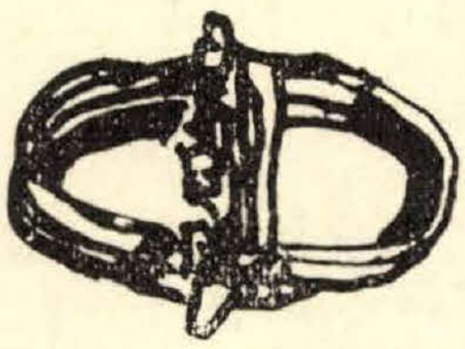
ホテル **神河内** **清水屋**

1936年

スポーツシャツ
生地
提供
特價

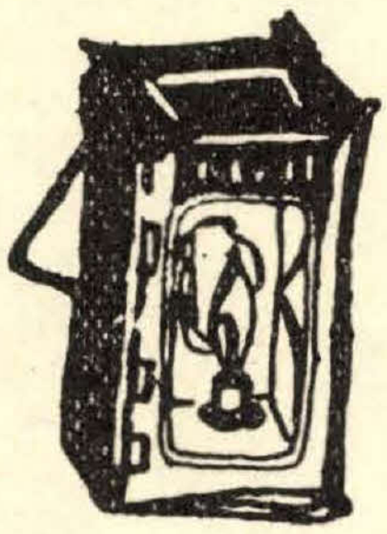
近江絹布株式會社

大阪市東區備後町三丁目
神戸市葺合區磯上通四丁目



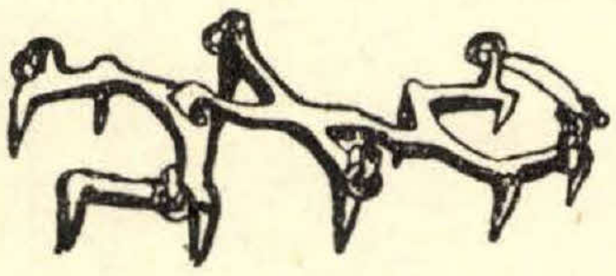
好田山莊

山とスキー具



仙臺・山內作
札幌・門田作

ピツケル・アイゼン



西岡一雄　大阪・北區・堂ビル前・大阪貯蓄銀行三階

海野治良　東京・神田・小川町・1ノ10ホワイト・ハウス

おでんなら

美そのへ

新宿三越裏

白鷹

富久娘

新宿へお出の節は

どうぞ！

商大生の

食堂

契茶室

宴會用の席も御座居ます。何卒御利用下さい。

國立富士見通

志みづ

Tea Room

Blue Bell

Kuni tachi

夏は避暑
冬はスキー

一度來た時は
忘れられません

雪の五色溫泉
理想的なスキー・ゲレンデ

吾妻山塊スキーツーアの
出發地

奥利根谷川溫泉
鐵道省指定旅館
ジャパンツーリスト
ビューローク取扱
谷川館
電話湯原二十一番
案内所用 電話湯原二十二番

水上驛ヨリ自動車ノ便アリ

山形縣板谷五色溫泉
宗川旅館
奥羽線板屋驛ヨリ卅丁

旅館こしてデビューする事になりました。何卒皆様の心の宿として可愛がつて下さい。

上高地ワンダーフホーゲル

案内人
斡旋所　**ホテル　西糸屋**

奥原英男

營業期間

上高地　五月上旬――十一月上旬
燒岳小屋　六月上旬――十月下旬

右以外の季節には島々及諏訪の方へ御訪ね下さい。

總本店　松本市外島々
支店　燒岳小屋
支店　上諏訪湖畔

八峰、源次郎尾根
三窓附近
のクレッテライ
劍澤のゾムメルシー

劍澤小屋

佐伯源次郎

日本アルプスへの出發點

松本驛前

飯田屋旅館

アルプス食堂

電話二七番
六一四番

雪の野澤溫泉

舞ひ上る粉雪搖ぐ湯煙
スキーヤーの理想鄉

飯山鐵道上境驛より三十町
雪質良好・湯量豊富

內湯

さかや旅館

電話一八番

氷雪の穂高！

北尾根へ
ジャンダルムへ
奥穂、北穂へ
一の根據地
ルプス

穂高小屋

今田重太郎

多摩陵と

景勝の

高尾山へ

東京府淺川町

高尾山ケーブルカー

新古 **山岳圖書**

山の**洋書**、各校山岳部々報其の他各種取揃へてあります。

書肆 **清水忠雄**

東京市芝區三田四丁目一

電話・三田〇六七二番

湯名の根箱

泉溫倉底

高山園

つたや旅館

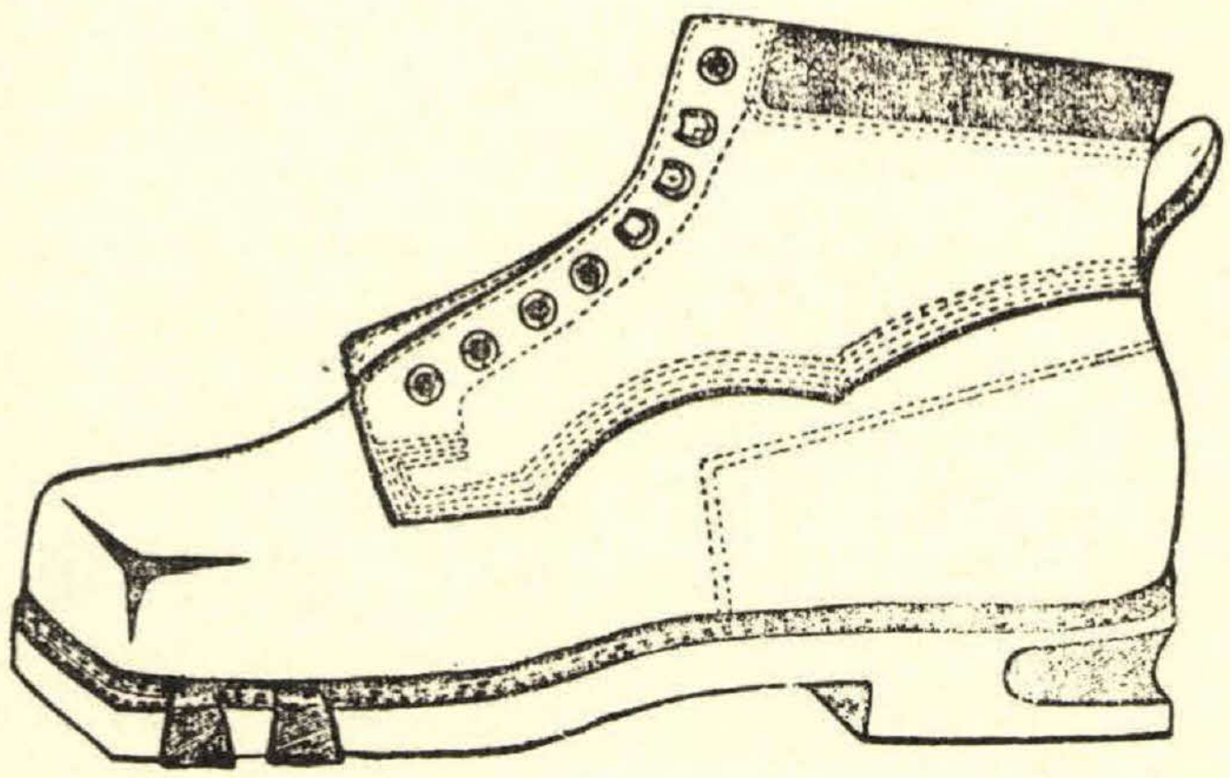
八千代橋畔

茶代謝絶

電話宮下 六四番 五七番 六三番

靴山登と靴ーキス

——呈贈錄型第次込申御——



圓五十…製革水防　　靴{ーキス／と／山登}

圓　十…製革水防

鋲鋲 ルーケンリク（一本三錢）
ニコリト（一本三錢）各豊富にあります

尚地方御注文の節は足形及足袋文數を御申越次第實費代金引換小包にて御送附申上げます

タシチヤリ皮
八圓五十錢ヨリ拾圓

用御部岳山學大各

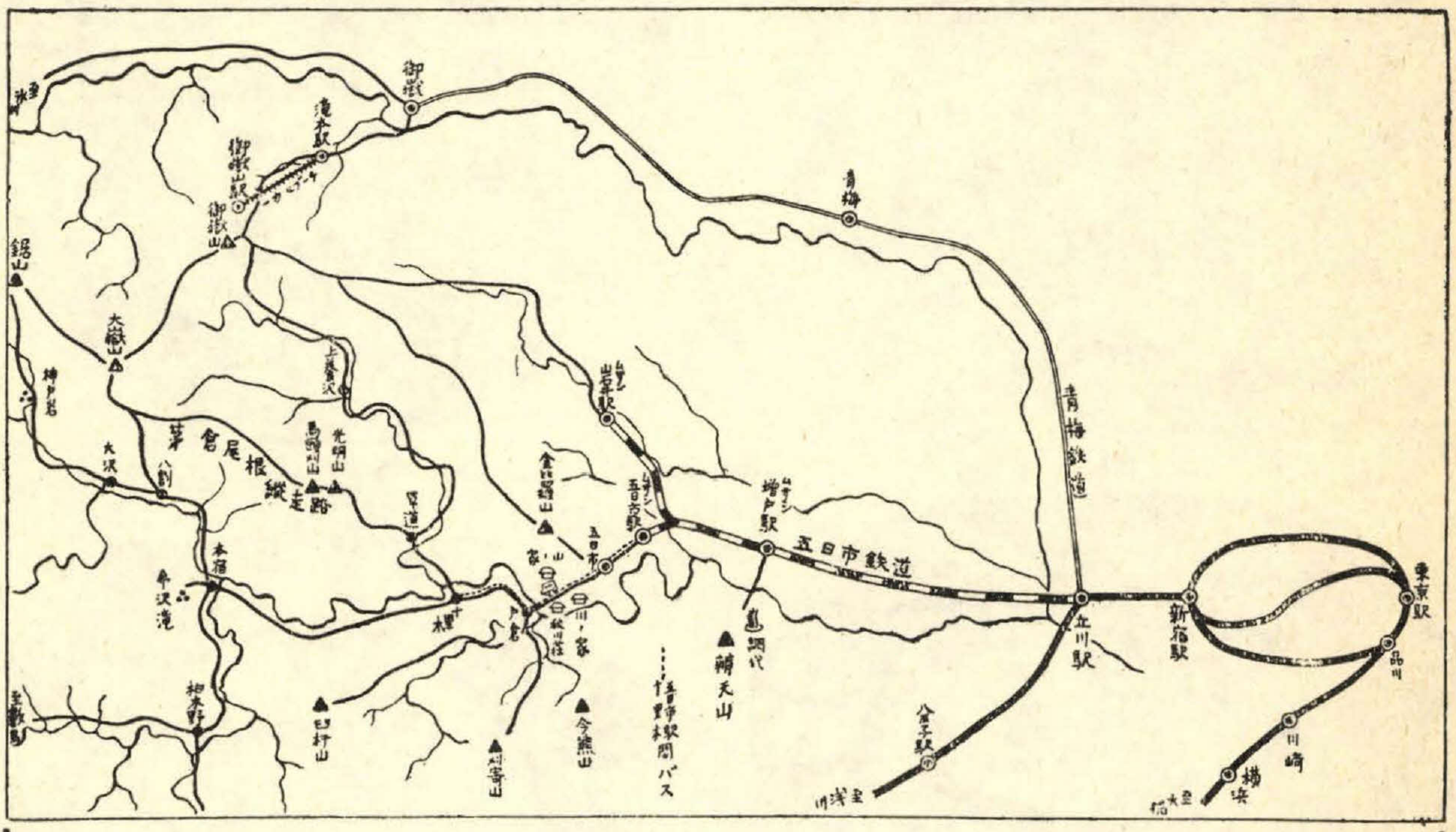
靴久布津店

通車電地番拾六町肴區込牛市京東

番〇六四一（34）込牛話電

番四八八一四京東座口替振

鐵道省指定秋川渓谷ハイキングコース略図



ハイキングコース

（イ）　發驛＝(省線)立川＝(五日市線)武藏五日市……光明山……茅倉尾根縦走……大岳……御岳神社……(青梅線)御岳＝立川＝發驛及此ノ逆コース(徒歩行程約五里　五時間)

（ロ）　武藏五日市迄（イ）＝同ジ……養澤……御岳神社以下（イ）＝同ジ(徒歩行程　約三里　三時間)

運賃割引　　省線社線共二割五分引

期　　間　　十一月中ノ各土曜日曜

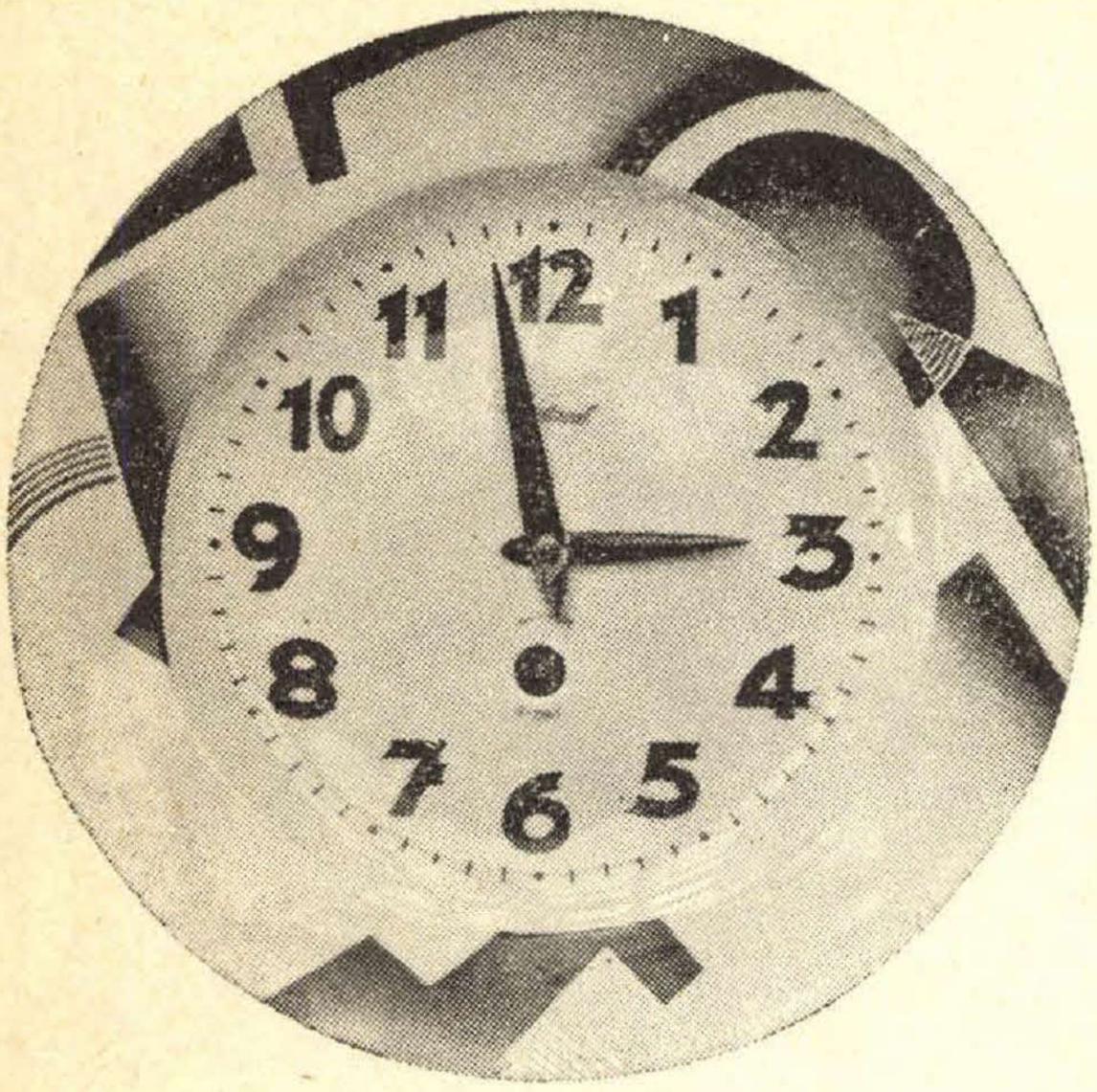
發驛ニ於テ廻遊乘車券ヲ發賣致シマス

東京府西多摩郡五日市町

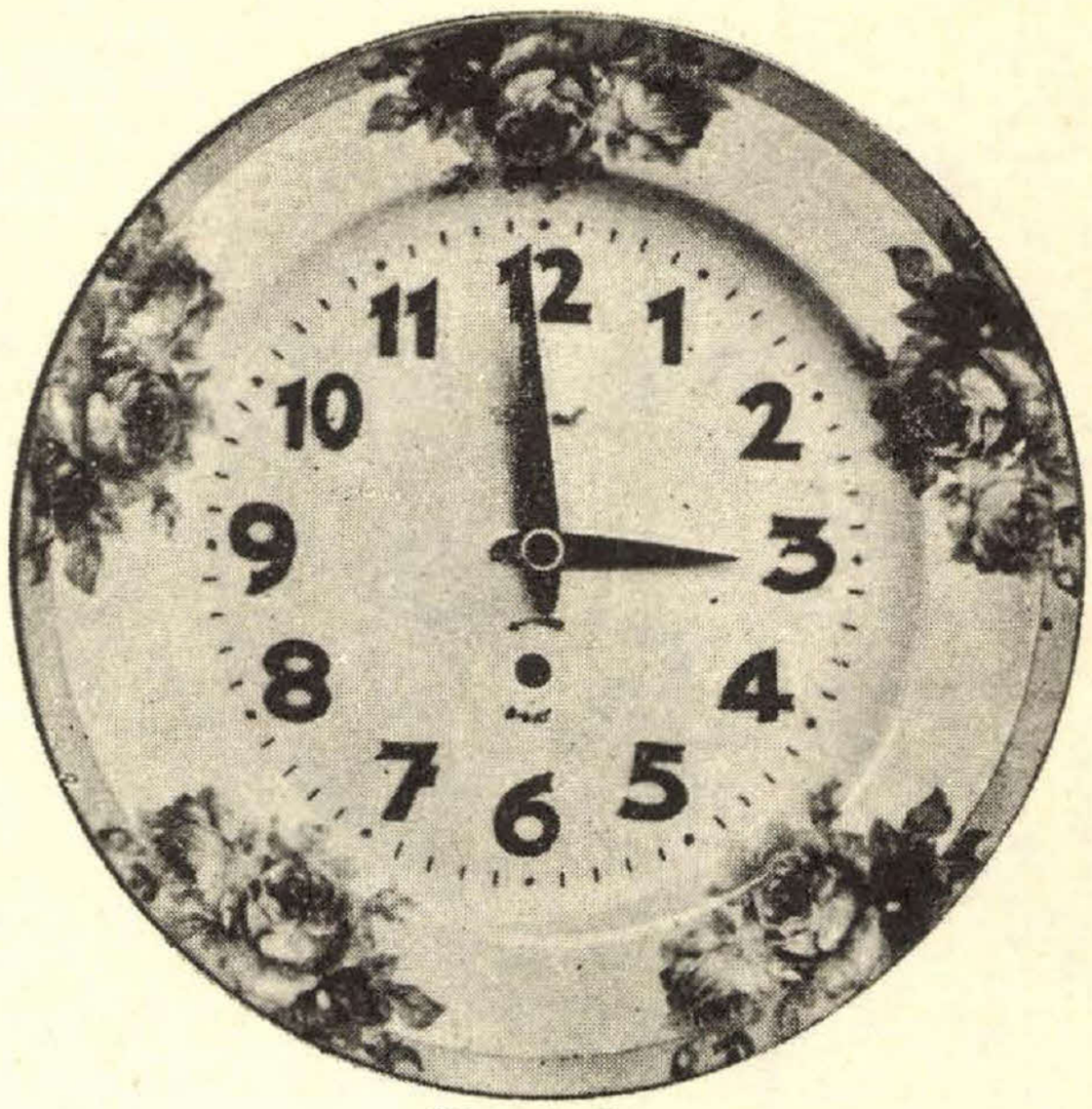
五日市鐵道株式會社

電話五日市四三番

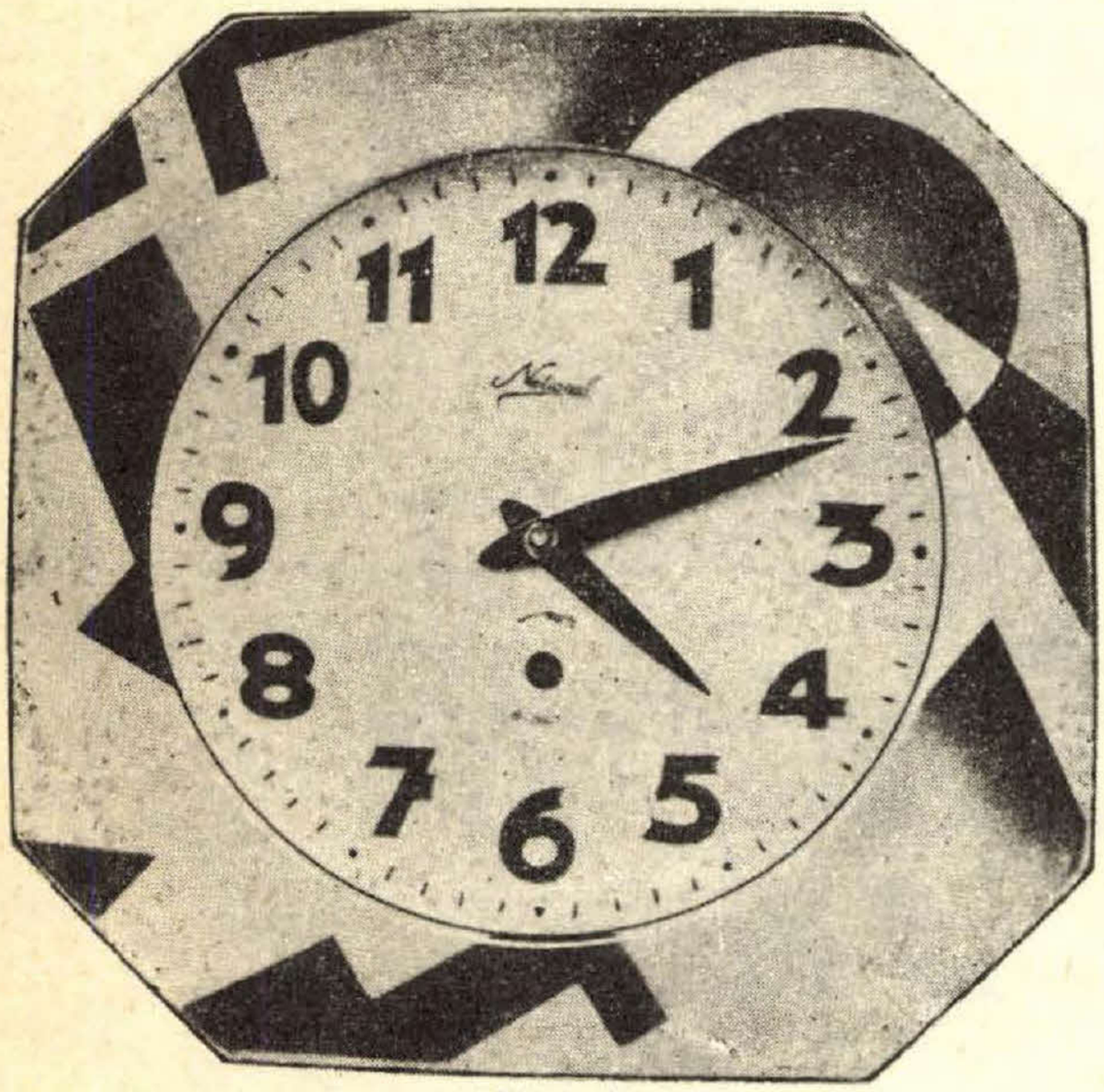
SERVICE SALE TO COMRADES OF YOSHIO OGURI-SHODAI OLD BOY



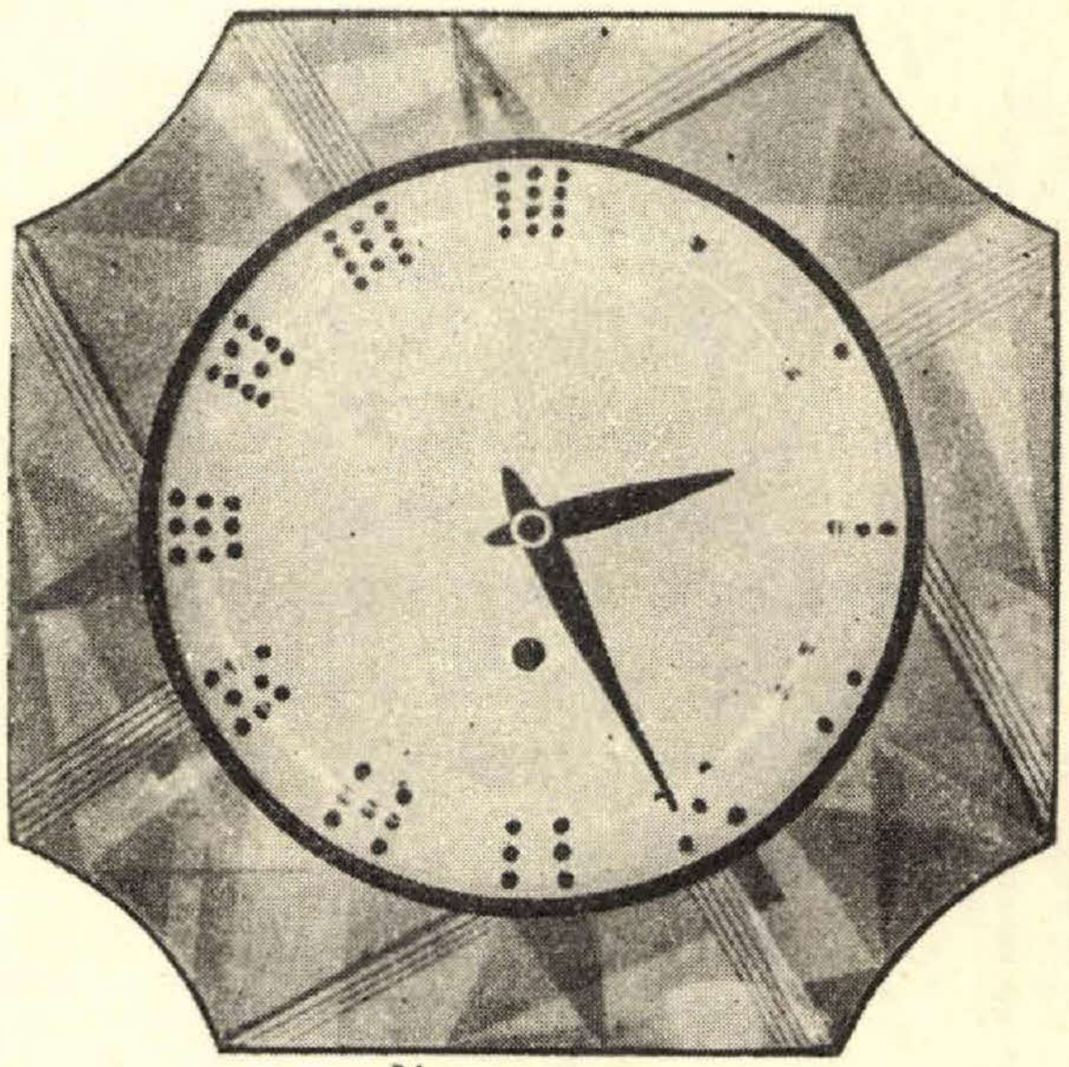
No. 514



No. 511



No. 531



No. 533

DISH CLOCK

WITH 8-DAY LEVER MOVEMENT.....PATENT No. 167645.

THE SMARTEST PRESENTS IN THE COMING SEASON

Article Nos.	Special Prices Per Piece
511	@ ¥ 4.00 Net.
514	@ ¥ 4,00 〃
531	@ ¥ 4.10 〃
533	@ ¥ 4.30 〃

WE PAY POSTAGE

OGURI CLOCK MANUFACTURING CO.

16, Shinonomecho, Nakaku, Nagoya.

山とスキー用具
そごう
神戸　省線三の宮
大阪　心齋橋

特製

月桂冠

絶對に防腐劑を含まず

一本毎に衛生試驗所證明封緘付

飲んでよし

醒て猶よし 月桂冠

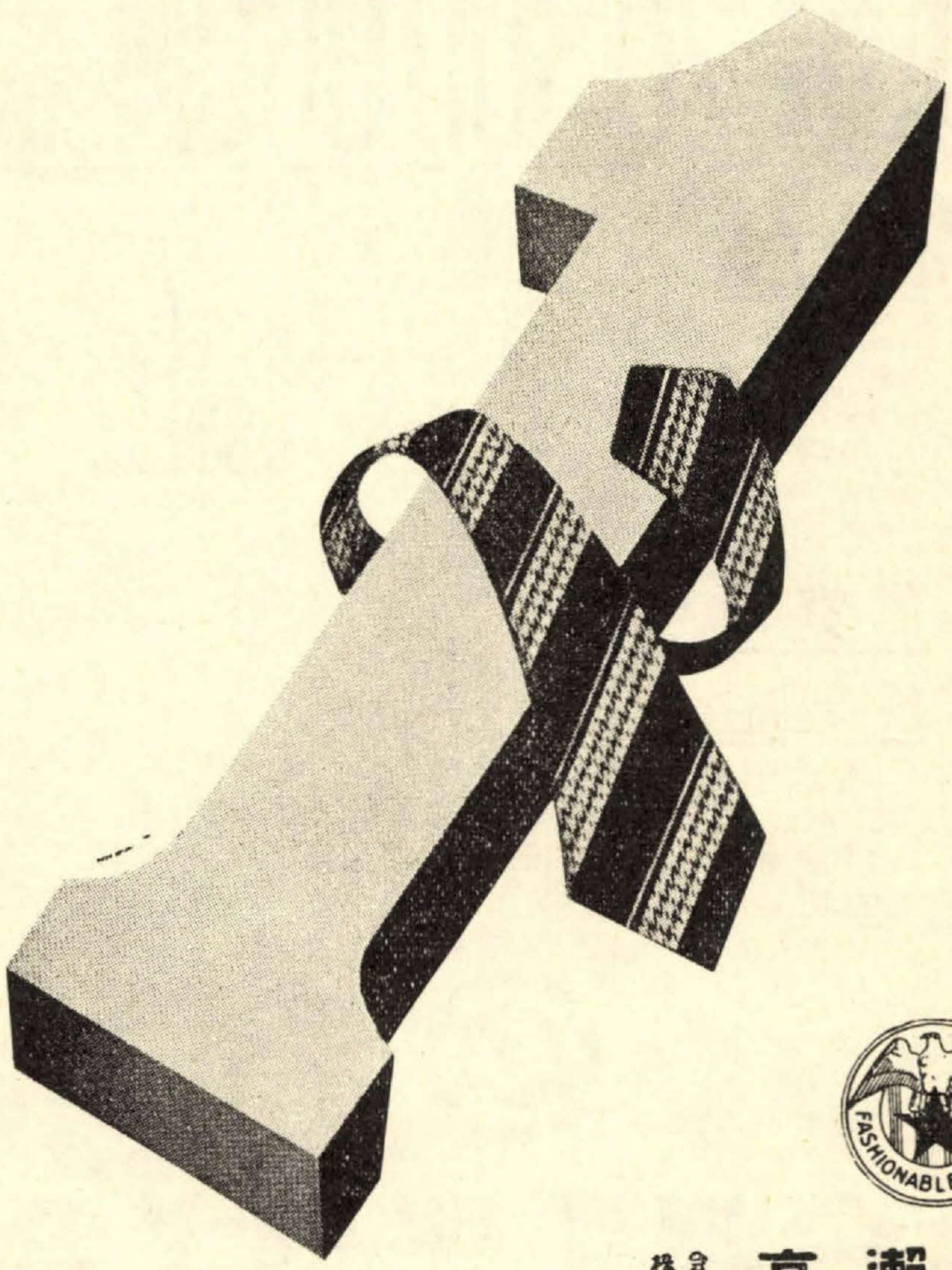
宮内省御用達 大倉恒吉商店吟釀

宮内省御用達

株式會社 明治屋 發賣

流行の第一線を行く

星鷹印オウタイ



株式会社 高瀬商店

東京 大阪

營業科目

製氷・冷藏・凍結・水産加工
魚糧・魚肥・魚油・漁港経営

資本金 20.300.000圓(拂込済)

直營工場

製氷冷藏	199	製氷能力	6.273屯(日)
		冷藏容量	32.825屯
凍結工場	23	凍結能力	350屯(日)
魚糧工場	5	製造能力	5.000屯(年)
加工工場	5		
漁港	5		

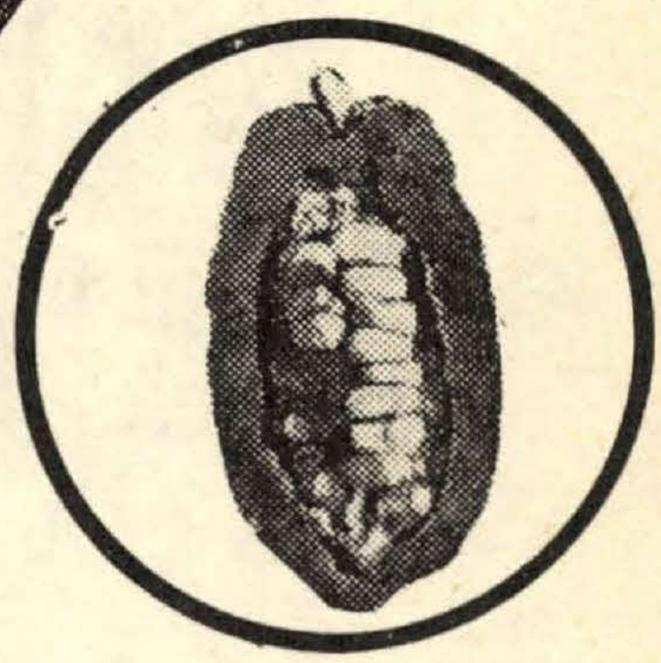
研究所 2

投資會社

製氷冷藏	113	製氷能力	1.957屯(日)
		冷藏容量	15.588屯
魚糧會社	27	製造能力	25.000屯(日)
水産其他	13		

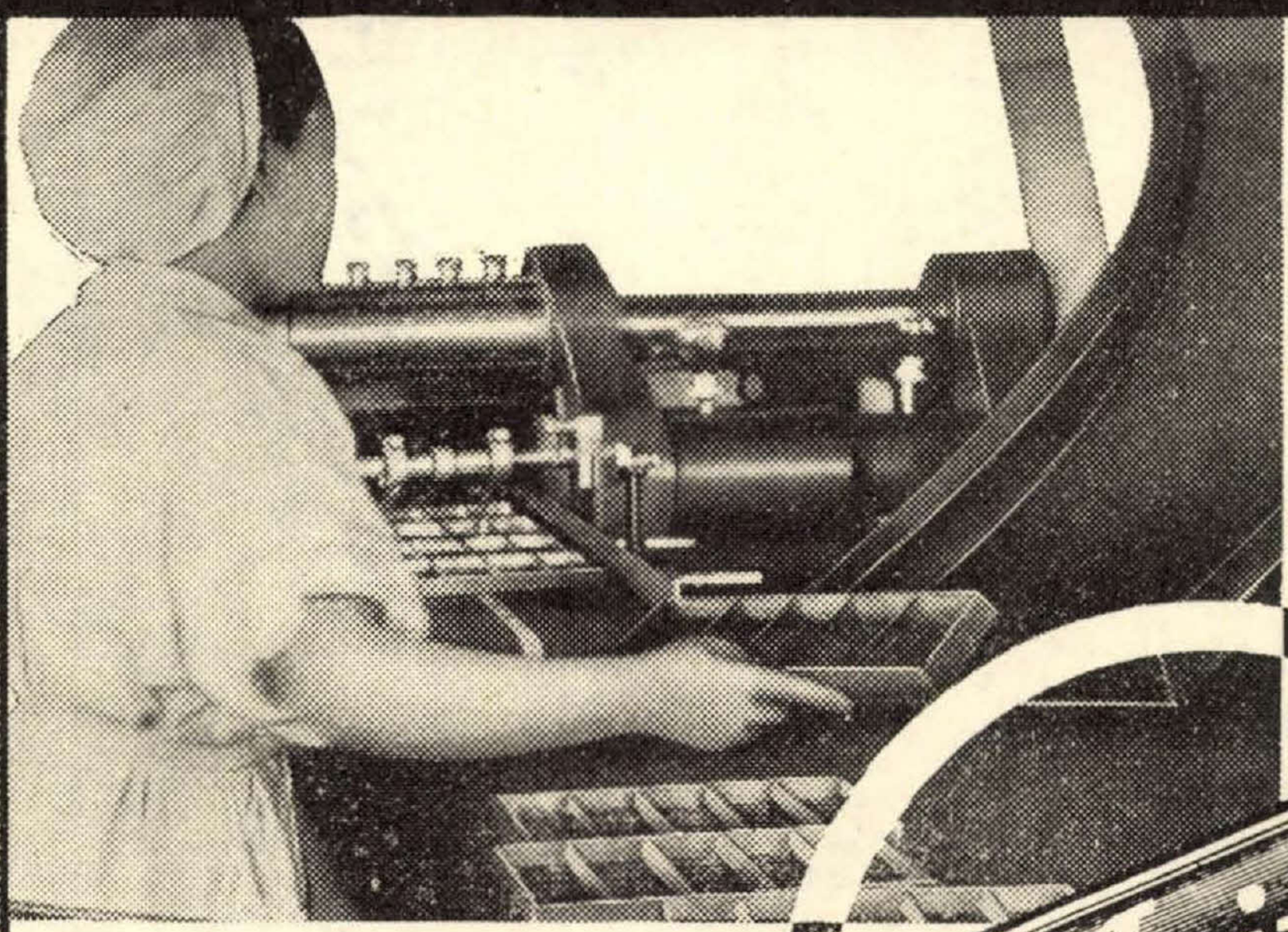
東京 丸ノ内

日本食料工業株式會社



カカオ豆の原料　チョコレート

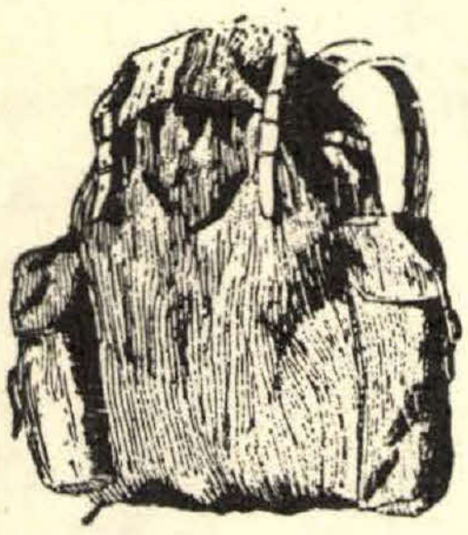
トーレコヨチ治明



優れた美味さ！
滋養豊かなる榮養！

世界最新の設備と優良な原料と熟練した技術者の手で一つ一つ丹念に作られた治明のトーレコヨチは栄養に富み味は極めて優秀です

社會式株菓製治明

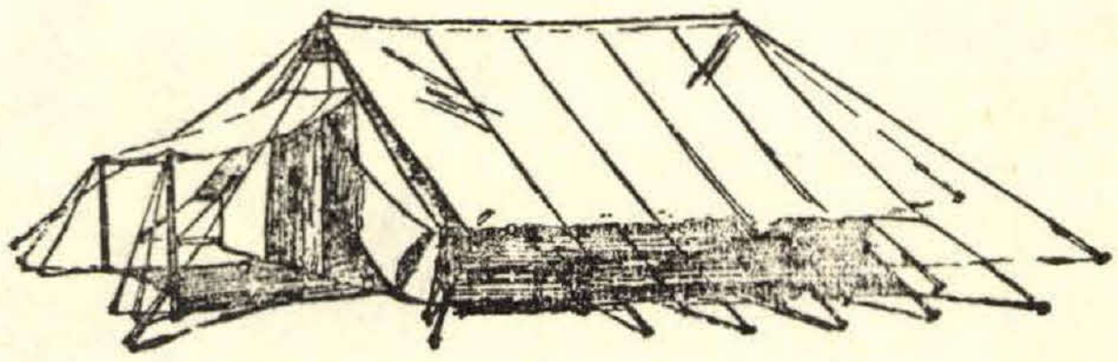


自他共に許す

片桐のテントとリユックサック

更に一層の努力と研究とを以て皆様の御期待に副ひたいと願つて居ります。

何卒御用命下さいませ。



営業品目

テント、リユックサック、スリーピングバック、スキー帽、アザラシ皮、ノールウエーバンド、アイゼンケース、ピツケル等

東京市神田區神保町三ノ一

片桐商店

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第８号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７

松竹の賀

スキー用品と附属品

スキー登山靴

競技用
山岳用
スキー

然断

他ノ追隨ヲ許サズ

（御申込次第カタログ進呈）

芳賀スキー製作所

店主 芳賀恒太郎

札幌市外圓山五丁目電車停留所前

電話三八五・振替小樽六八六〇

（東京出張所） 神田區神保町三ノ三
電話九段(33)二五五六